女性がひらく未来 日本女性会議'88北九州

平尾台の夏(小倉南区)

発刊によせて

「日本女性会議'88北九州」は、21世紀に向けて、女性の地位向上と、あらゆる分野への男女双方の参加をめざし、女性問題に関する国際的、全国的交流を進めるために、開催いたしました。

「日本女性会議」とは、〃国連婦人の十年〃を記念して日本における女性問題への取り組みを進めるために、各都市連携のもとで、毎年開催されているものです。昭和六十三年度は本市の市制二十五周年記念事業の一環として、北九州市で開催いたしました。

西日本地域で初めての開催であり、海外からのゲストや各都市を始め、多数の市内参加者をお迎えして、素晴らしい出会いの場が創出されましたことを心から嬉しく思っております。

女性問題は女性だけでなく、すべての人が共有する問題です。この出会いの場で結集された女性のエネルギーが、今後、女性の地位向上に向けて、より豊かで、より実りある深い交流へと広がっていくものと確信しております。

最後に、ご協力、ご支援いただきました多くの方々のご厚意に、心から感謝申し上げ、発刊のことばにかえさせていただきます。

日本女性会議'88北九州実行委員会

もくじ

写真で見る　日本女性会議'88北九州

記念講演　女性がひらく未来　1

記念講演　日本文学と女性　27

TALKセッション1　飛び出せ世界に、女性たち　43

TALKセッション2　働く女性の新世紀　73

TALKセッション3　家族・夫婦・セクシャリティ　111

TALKセッション4　楽しく生きよう、シルバーエイジ　149

シンポジウム　21世紀の世界をひらく女性たち　183

吉永小百合　「華の乱」を語る　239

カップルプラザ25　男のホンネ、女のホンネ　249

ファッションショー　さゆり'89春夏コレクション　273

女性21世紀展　277

資料　297

日程

6月16日（木）

●記念講演会
講　師　西武セゾングループ代表　堤　清二
テーマ　「女性がひらく未来」
会　場　九州厚生年金会館　グランドホール

11月25日（金）

●記念講演とレセプション
記念講演　18：00～19：00
講　師　朝日新聞客員編集委員　ドナルド・キーン
テーマ　「日本文学と女性」
交流パーティー　19：00～21：00
アトラクション　笠松ダンススクール、㈱井筒屋、㈱玉屋、北九州市役所女性祇園太鼓チーム、木屋瀬踊り保存会
会　場　九州厚生年金会館　日本海、玄海の間

11月26日（土）

●TALKセッション1～4　10：00～12：00
セッション1　「飛び出せ世界に、女性たち」
会　場　九州厚生年金会館　玄海の間
パネラー　角田房子、エレーヌ・ドゥ・グロート、パトリシア笠松
コーディネーター　藤本新二
セッション2　「働く女性の新世紀」
会　場　小倉北中央公民館3Fホール
パネラー　高橋久子、隈河培男、宮地六美
コーディネーター　藤岡佐規子
セッション3　「家族、夫婦、セクシャリティ」
会　場　市庁舎3F大集会室
パネラー　森崎和江、久保田誠一、篠崎正美、徐明子
コーディネーター　冨安兆子
セッション4　「楽しく生きよう、シルバーエイジ」
会　場　市立商工貿易会館　多目的ホール
パネラー　菅原真理子、アン・ラトナヤカ、フリーマン美智子
コーディネーター　保田井進

●シンポジウム「21世紀の世界をひらく女性たち」　13：00～16：30
会　場　九州厚生年金会館　グランドホール
パネラー　秋川リサ、天野祐吉、下村満子、徐明子
高橋久子、角田房子、なだいなだ
コーディネーター　菅原真理子

●吉永小百合 with 「華の乱」　17：30～21：00
会　場　九州厚生年金会館　グランドホール

11月27日（日）

●愛のメッセージ・国際女流映画祭　10：00～14：00
会　場　小倉北中央公民館3Fホール
映　画　「声なき叫び」アンヌ・ポワリエ監督（ポーランド）　10：00～12：00
「若人よ」槙坪多鶴子監督（日本）
ビデオ　「アウシュビッツの女囚」ワンダ・ヤクボフスカ監督（ポーランド）　10：00～12：20
「招待」ワンダ・ヤクボフスカ監督（ポーランド）　12：20～14：00

●カップルズプラザ25「男のホンネ、女のホンネ」　14：00～16：30

会　場　西日本総合展示場「女性21世紀展」会場
ゲスト　秋川リサ、きたやまおさむ
参加者　25に関係ある市民公募のカップル50組
司　会　堀尾正明

11月24日(木)～27日(日)　10：00～17：00

●女性21世紀展
会　場　西日本総合展示場
展示品
●広がる女性の生活空間
インテリジェントハウス、ホームオートメーション、キャプテンシステム、オフィスオートメーション、ヤングミセスのキッチン、ＯＡ喫茶室
●可能性にチャレンジ
メイドバイウーマン展、女性発明工夫展、レディスカレッジ"Promise"開催、セーフティライフ・財テク・旅行相談コーナー
●生きがい実感
介護・福祉機器、北九州女性会議ワゴンコレクション（即売）
●より美しく、より力強く
健康・美容・スポーツ機器、夢は宇宙へスペースワールド、ファッション・化粧品・装身具
●レディース of the ワールド
世界のアクセサリー・雑貨、女性のための絵本展、民俗衣装展
●女流俳句の先駆者たち
●ビデオシアター
●イベントステージ

あいさつ

北九州市長　末吉興一

五つの市の対等な合併によって誕生した北九州市は、本年、市制二十五周年を迎えました。

産業構造の転換という世界的な試練に対し「北九州ルネッサンス」を合言葉にチャレンジし、今、新たな歩みをはじめております。

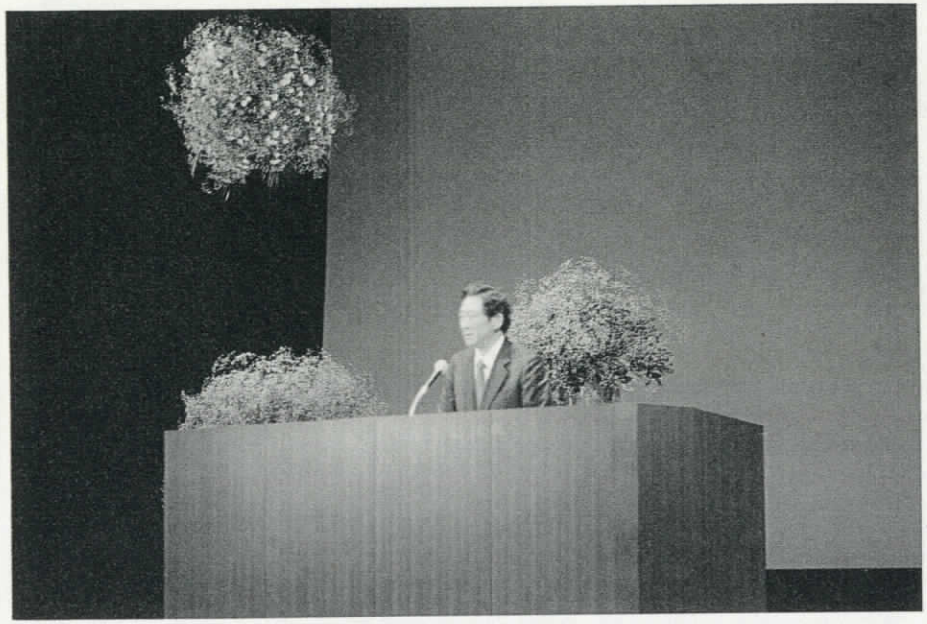
人生に例えると、二十五歳はまさに青年期の真っ只中。本年は、北九州市が二十一世紀に向けて、大きく飛躍するためのターニング・ポイントとして重要な土台づくりの年だといえます。

このような年に、記念事業の一環として、市民、企業、行政が連携し、協力し合って「日本女性会議'88北九州」を当地において開催いたしますことは、大変、有意義なことであります。

国際化、高度情報化、高齢化の進展する二十一世紀をより充実して暮らすためには、男女が平等な立場でそれぞれの能力を生かし、共に社会の発展を支える「男女共同参加型社会の形成」が必要な条件であろうと考えます。

二十一世紀に向けて女性の地位向上と、あらゆる分野への男女双方の参加を進めることを目指す本会議の成功と、全国から多数の皆様をお迎えしたこの出会いの場で、豊かで実り多い交流の輪が広がることを心から願っております。

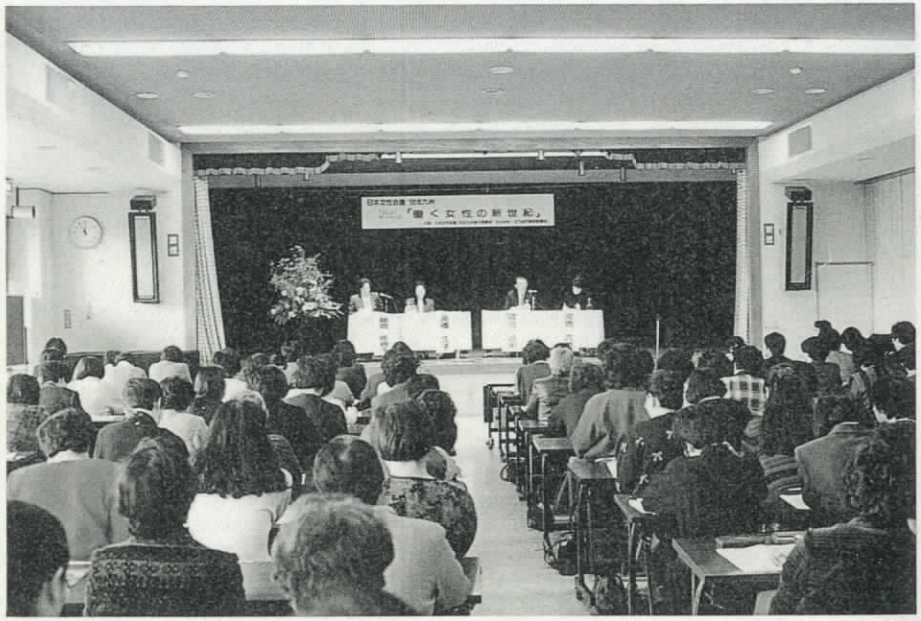
写真でみる　日本女性会議'88北九州



記念講演会

記念講演会会場風景

トークセッション「飛び出せ世界に、女性たち」



トークセッション「働く女性の新世紀」

記念講演会

交流パーティ

シンポジウム「21世紀の世界をひらく女性たち」

シンポジウム「21世紀の世界をひらく女性たち」

トークセッション「家族・夫婦・セクシャリティ」

トークセッション「楽しく生きよう、シルバーエイジ」

カップルズプラザ25会場風景

吉永小百合with「華の乱」

カップルズプラザ25会場風景

吉永小百合with「華の乱」

記念講演

女性がひらく未来

堤　清二

末吉市長　「日本女性会議'88北九州」、西日本でこのような会議をすることは初めてです。この一年間、この女性会議を中心に、市政二十五周年記念事業としていろんなことをやっていこうと計画しています。メインは十一月ですが、そのうちの一つに、この記念講演会を計画いたしました。

実行委員会の皆様が、非常に色んな知恵を絞って計画を作って下さいました。ポスター、チラシにもありますようにもう決定しております。十一月までの間、六月にどうしても西武セゾングループ代表、堤清二氏をお迎えして講演会をしたい、是非堤氏をお招きしたいということになりました。しかし、とてもお忙しい方ですから、私も皆様の熱意に動かされたものの、どのようにしたらよいか考えあぐねて、自民党県連会長麻生太郎代議士にご相談いたしましたところ、本日こうしてお忙しい日程を縫って、お迎えできることとなりました。会場溢れるばかりの皆様にお越しいただき、感謝致しております。

堤先生をお迎えできるということで、私も今、外国から帰国してすぐ駆け付けた次第です。訪ねたオーストラリアのクイーンズランド州の首府ブレスベンの市長は女性でした。非常に魅力的な女性でした。世界あちこちに女性の市長が誕生しております。女性の着実な地位向上とあわせて、これからは能力発揮の時代を迎えると思います。では堤代表のお話をお伺いしたいと思います。

堤清二氏　今日、私に与えられているテーマは「女性がひらく未来」ということですので、産業構造の再編成、景気や北九州市の経済の見通しなどの話ではなく、女性についての話なのですが、実は私共は女性の方の支持、理解なしには成り立たない業種に属しているのです。そういう点では、女性の力というものの基礎の上に立って仕事をしています。今日は女性に大きな期待を持っているということをお話ししたいと思います。

このテーマを与えられたときに、私が最初に思い出したのは、男女雇用機会均等法という法律が、

堤　清二

1927年東京都生まれ。西武百貨店、西友、パルコ、西洋環境開発等98社４研究所を擁する西武セゾングループの代表。変革の時代の中で「つかしん」などの街づくりを始め、小売業、リゾート・レジャー、クレジット・ファイナンス、外食・サービス、保険等、生活者の希求に応えた広範囲な事業の創出を目指している。文化への関心も高く、西武美術館、銀座セゾン劇場をひらくほか、詩人・作家「辻井喬」としての顔も持つ。

堤氏の個性重視、女性の感性重視の企業展開を支えている人事理念は、機会均等を基盤にした人材の育成であり、女子社員の活用のために、早くからライセンス制度、企業内保育所を取り入れたほか、最近では職能別採用方式（オーダーエントリーシステム）を実施、女子学生の人気も集めている。

いよいよ国会を通りそうになった時、「男女雇用機会均等法をどう考えたらよいか、労働界や経済界はどのような考えをもっておられるか、疑問があればそれを解説してご理解を得たい」ということで、労働省が中心になって開かれた、懇談会の席上でのことをすぐに思い出した訳です。皆様ご存知のように、この趣旨は既にＩＬＯでも承認され、女子差別撤廃条約を批准するために、日本政府は法律の成立を急いでいました。ところが驚いたことに、その席上で経済界の大変偉い方が冒頭に異議を唱えられました。「日本には日本古来の美風がある、男女平等というのはけしからん。そういうことでは私たちは経営に責任が持てない」というような発言だったのです。私は大変驚きました。五十年前でしたらそういう考え方も世の中に流行していたことは知っていますが、今、そういう意見が出るということは全く考えもしませんでした。すると、その意見を聞いていた労働運動のナショナルセンターのリーダーの方が、すかさず「そういう反動的な意見があるようだから、日本はどうも誤解をされるんだ。ＩＬＯも政府も承認してるんだからおかしいじゃないか」と言って、労働側といわゆる財界との間で議論が起こったのです。私はその議論を聞いていていよいよわからなくなってきたので、座長である日本経済新聞社の圓城寺さんに質問をしました。「どうも先程から聞いていると全く理解に苦しみます。例えば私も経営者の端くれですが、男女雇用機会均等法が決まれば、女性をどんどん管理職に登用しやすくなる。なぜならば、今、女性を管理職に登用しても、何時になったら帰らないといけないということで、会議なども勤務時間中にしなければならない。職場では色々な気を使うので、つい女性を管理職に登用することが、ためらいがちになる傾向がある。男女雇用機会均等法ができると、そういう点でも名実ともに男女同じような考え方で、登用できるから有り難いと思っていた。一方、労働組合の立場では、機会が均等になると労働市場の競争が倍になるので、組合の方が反対するのならまだ分かるが、組合の方が賛成して経済界の方が反対しているというのは、どうも世の中さかさまの議論をしてるように思います。さかさまの議論をしてるように思う私がおかしいのか、さかさまの議論をしてる皆様の方がおかしいのか、議長判定して下さい」、というような話をいたしましたら、皆笑い出して、どうも財界の方はなぜ自分が笑われているのか、わからないというようなことになりました。大変申し訳ないような雰囲気になってしまったのです。そのことを思い出しました。その時私は、まだそういうような議論が、公の席上で出されるような雰囲気が、我が国には残っているんだな、それは勉強になったな、という気にもなったわけです。

私は男女は人間としては言うまでもなく平等だと思います。しかし、男女の特質は違うということがあるかもしれません。どうもいまだに、男女の特質が違うということを全面に拡張して、人間としての平等ということを、いつのまにか無視してたというような、議論があるようで残念です。また、あってはならないだろうと思います。これは男性側にあってはならないだろうというばかりではなく、女性側にもそれを承認するということは、あってはならないだろうと思います。

「女性がひらく未来」という問題を考える前提として申し上げますと、男女というように分かれていますが、良く考えると男性にも女性性があり、また女性にも男性性があります。ついこの間私が読んだ本に、エンマ・ユングという、有名な社会心理学者の奥さんの書いた本で「内なる異性」という本がありました。副題に、「アニムスとアニマ」という名前がついていました。少し難しい話になるかと思いますが、アニマというのは男性の内部にある女性的な人格要因、アニムスというのは女性の内部にある男性的な人格要因で、人間というのはこれらがお互いに一つの人格の中でうまく調和させて生きているんだというものです。ここで示唆されるのですが、女性の問題を考えるということは男性の問題を考えるということ、言い換えれば人間の問題を考えるということだというように、ご理解いただければそれで十分だと思いますが、それを物を考える前提としておいておきたいと思います。

もう一つは男女は対立するものでも、どちらかが上に立つものでもない。それを前提とした上で「男らしさ、女らしさ」、「魅力」とか「美しさ」、俗な言葉で言えば「色気」などがあるのだと考えます。男が上に立ってもいけないし、女が上に立ってもいけません。そうしたことを前提にした上で男らしさ、女らしさを考えていかなければならないでしょう。この点が、実に我々日本人には不得手な物の考え方のようです。というのは何事でもタテの関係、上下の関係で順序づけたい、順序づけようという習慣が根強いからです。価値のタテ感覚がしばしば見られます。わかりやすいたとえを申し上げますと、亡くなった川端康成さんと湯川秀樹さんのどちらが偉いか。ご両名ともノーベル賞を受けておられます。どちらが偉いかという物の考え方、これは問題として成り立ちません。つまりどちらも偉いので、原子物理学、文学という分野の違いもあり、どちらが偉いかという問いかけ自体がおかしいのですが、そういうことを平気で言います。

例えば会社の中で、常務と専門職のトップの人とどちらが偉いか。これはどちらも偉いので、それをタテ感覚で決めてしまおうとするから、会社の中でなかなか専門職の人が育たない。今まではどっちかというと、常務とか専務というほうが偉いと思う習慣が強かった。しかし、それは機能が違うのですから、アメリカなどでは社長よりも立派な家に住んで、立派な自動車に乗っている専門職はたくさんいる訳です。これは普通のことになっています。その専門職の人が貢献してる度合いが、社長の貢献してる度合いよりも高ければ、それは当たり前なのです。それがなかなか日本人社会では認められない。「あいつは社長でもないのに立派な車に乗って、頭がおかしいのではないか」というようについ集団規制をする。すなわち、何でも物事をタテの序列で考えるという習慣は、集合的無意識の日本的特徴かもしれないと私は思います。従って、その集合的無意識、タテ感覚を否定して男女の問題を考えないと、実に妙なことになってきます。最近では女性の方が男よりも偉いという意見もかなり出てきて、男性陣が脅威を感じているということもある訳ですが、それもおかしいのではないかと私は思います。

それからもう一つ、この問題を考えていく上での前提としては、時代によって根本的に違う観点に立って、考えなければならないだろうと思います。先程の財界の方の意見などは、五十年くらい前の時点での物の考え方であり、現実的にこの問題を考えていくときには、今の時点、それから今から将来に向けた方向での時間軸で、考えていかなくてはならないでしょう。つまりそれ程世の中は変わったのです。あるいは世の中を支える社会的、経済的な条件が変わった訳ですから、そこで色々な役割分担の変化、移動なども起こってきました。女性がどんどん職業を持つようになり、女性の社会的進出ということが、一般的な傾向としてみられます。先程の男女雇用機会均等法なども、女性の職場への進出というのが、一般的な現象になったのを受けて、それを法律に映し出そうということであったと思います。

そういうことで、社会的、経済的条件が変わってきています。今後そういう方向でなお変わるでしょう。同じように日本を取り巻く国際的な関係もすっかり変わりました。もう二十年位前の話になりますが、ある有名な政治家が「いや、僕だって家内を殴ったこともあるよ」ということをうっかり新聞記者に話したら、それが英語になってアメリカに伝わり、日本はまだそんな野蛮な男が総理になっているのか、といって大変日米関係の具合が悪くなったということがありました。ご本人は、日本人の記者だけを相手に、一種の軽口をたたくというような意味で話したらしいのですが、そういう種類の軽口は許されないという社会環境の中で、それが英語で報道されますと、もともと日本人を、現実以上に野蛮な国というように見がちな他国民の間では、思いもつかないマイナスの反応を起こしたりするのです。我が国はいよいよ国際的に緊密な関係の、網の目の中に入ってきている訳ですから、そのことも男女関係に今後どんな影響を及ぼすかという点で、重要な要素として頭に入れておかなければならないでしょう。

この問題を取り巻く現実的な状況、環境、条件の変化を無視して討議すると、結論は非常に観念的あるいは抽象的なものになって分かりにくくなり、現実から遊離していくだろうと思います。ですから「女性がひらく未来」、あるいはそれと隣接しております「男性と女性との相互関係」を考える場合には、今まで申し上げた三つのことを、前提として置いておきたいと思います。

しかし、今までのような前提を申し上げると、「あぁ、やはり堤は国際派だ」と、「日本には日本のやり方があるのに、その点については全然考えようともしてないようだな」というように思われる方がいらっしゃるかと思います。その点について私は次のように考えているのです。知の変貌、即ち知識や知性、知識体系や文化というようなものを、全部含めた知の変貌ということについて、少し申し上げてみたいと思います。

というのは、今まで西欧社会を作ってきた文化の体系、知の体系、これについて実は欧米で、特にヨーロッパが先でしたが、非常な反省が起こっています。言い換えれば、「近代主義的知」についての西欧の反省と言ってもいいのですが、これは非常に深いものが起こってきています。きっかけはヒットラーの出現です。なぜ近代的知はヒットラーのようなファシズムを認めてしまったのか、あるいは、それとうらはらなスターリニズムがなぜ生まれたのか。今は少し変わり始めたようですが、ソ連社会のように人間性にとって好ましくない社会をなぜ生んでしまったのか。これはまさに西洋的知から出てきた形態ではないか。また余りにも個人主義になったせいなのか、非常に欧米社会が退廃してきています。なぜそういうふうになってしまったかという反省、これをどんどん突き詰めていくと、やはりデカルトなどに代表されている近代的な思考方法、例えば主観と客観を分けて考える、あるいは知性と情念を対立するものとして考える、あるいは霊と肉とが完全に分離されなければならないものとして考える、そういった考え方そのもの、これは言い換えれば近代的思想、近代思想、近代市民社会のイデーなのですが、ここらに原因があると思われます。それに対する深

い深刻な反省が生まれてきている訳なのです。この深刻な反省を導いたのは、レヴィ・ストロースという文化人類学を体系付けられた学者がいらっしゃいますが、あるいは言語学、あるいはそれを基礎にした構造主義哲学、そういったものでした。彼らが深刻な反省の上に立って到達したもの、それは脱中心思考でした。つまり、どんな文化、文明にも中心があって、その中心とは即ち西欧である。その中心に近くなれば近くなっただけ、その国は進歩したんだという進歩主義的な歴史観、そういったものについての決定的な自己反省が欧米社会に生まれてきており、これを脱中心思考といいます。つまり中心は世界中のいろいろな所にあるので、ヨーロッパだけが中心ではない。あるいは差異の認識、様々な文化にはそれぞれ違いがある。その一つひとつの違いをそれぞれ存在意義のあるものとして評価していこうではないかという、差異の認識の思想ということになって、知の変貌というように言われる現象が世界中を覆っているのです。我が国の指導者だけがそういうことには全然無関心で、古い感性そのままにいるというのが実情のようです。そういう人たちは、「そら見なさい、だからもうヨーロッパではだめだ。やはり我が国流の行きかたでいくべきだ。日本的なものがいい」ということを口に出したりしてきている。

そういうことでは決してないのです。例えばヨーロッパでの反省というのは、アフリカでどうして砂漠が広がったかというようなことにも及んでいるのです。北半球の温暖地帯にだけ適応されるべき農業技術を、亜熱帯地方にどんどん持ち込んだ。つまり、林を切り開いて開墾して、そこに小麦なら小麦、ビートならビートといったものを植え付ける、そうなると広い平地でやる訳ですから、大型のトラクターや農業機械を導入して非常に生産性が上がる、そういう農業技術を亜熱帯地方に持っていった訳です。ところが亜熱帯地方では、大体毎日一回スコール性の雨が降る。スコール性の雨を受けて、何万種類という樹木が混成して密林を作っている訳ですが、スコールで降った雨は互いに密生した樹木の葉に受けられて、少しづつ滴になって地表に落下していく。大変時間がかかっ

て落下していくということで、自然の生態系が保たれていたのです。しかし、その樹木を全部切って開墾して綿のようなものを植えると、スコールがくるとそれでいっぺんに地中の栄養分は、水に溶けて流れていってしまう訳です。従って、亜熱帯地方では北半球のような農業は実行に移せない。移した結果は砂漠が広がってしまった。栄養分は全部スコールで洗い流されてしまうので、次の植物が育たなくなる。そのような経験をたくさん持っており、科学技術、工業技術といえどもお国ぶりがある。お国ぶりを無視して技術を輸出すれば、必ずその国の社会に損害を与えるのだということを、良心的な技術者は考えるようになりました。

このことは、実は我が国が今世界中で孤立している、一つの大きな原因につながっています。どうして日本がこれ程世界でジャパン・バッシング、日本叩きというようなことがいわれるくらい反感をかっているかといえば、例えば我が国のビジネスマンは二言目には「我々は努力していいものを作ったんだから、それを輸出できるのは当たり前だ。あなたの国の消費者もそれを求めている。貿易のアンバランスだなんてとんでもない、あなたがたは日本が裕福になったものだから嫉んでいるのだろう」などという言い方をするのです。多量に輸出することが相手の国の経済社会にどのような影響を及ぼすか、及ぼしたかということについて全然考慮していない。「相手の国はどうなってもいい。自分の国の製品は優秀だから輸出できたのだ、どこが悪いか」というような居直り、開き直りの姿勢、これが残念ながら日本のビジネスマンの社会には非常に強いのです。その結果、スイスでは時計工業が潰れかかったり、アメリカでは家庭電気製品部門の産業はほとんど滅びました。自動車工業も危なかった。「危なかったと言っても、それはおれの知ったことではない」というのが日本のビジネスマンの言い分で、本音のようなもの。ところが、それによって失業者が増えたアメリカ社会が、どんなに歪み混乱をしたかということについては無関心。その結果、「日本はけしからん」という澎湃（ほうはい）たる世論になって世界中を覆っている。それに気づかないのは日本人

だけという、非常に困った危険な現象が出てきています。しかし、日本のビジネスマン達が、日本はけしからんと言っている人達が、西欧的な知について今までの知識体系、物の考え方について深い反省の時期に入っているということに悪乗りをして、「だから日本的なものはいいんだ」などと言いだしたら、ジャパン・バッシング、日本叩きを決定的にしてしまうだろうと私は危惧しているのです。つまり、知の体系が変わってきているということは、女性がひらくであろう未来にとっても、大きな影響を及ぼすであろうと私は思います。

次に、女性は感性に優れているけれども、論理性、客観性にはどうも劣るという意見があります。あるいは、女性は非常に真面目にこつこつと仕事をしてくるけども、大勢の人を指導するということになると、どうも男の人に比べると断然見劣りするという意見があります。それらの意見にはそれなりの経験的な裏付けはあったと思います。どういうことかというと、過去においては、女性はなかなか大勢の人を使えるような職場に進出しなかった。女工さんとしてしか採用されなかった。労働力としてしかみなされていなかったという、過去の経験がそういう世論を作ったという面もあるかもしれません。

しかし、もっと根本にはやはり知性と情念とを分離して考える、知性にとって情念はなければない方が、良いものというように見ようとする傾向、これは西欧的知でありますが、これがあったと思います。それは本当は大変不自然なことで、笑い話ですがこういう話があります。あるとても知識の豊富な女性が主婦になった。しかしその奥さんがつくる料理はどうもおいしくない。ある時、だんなさんが「ちょっと味について研究してくれないかね、どうもあんまりおいしいと僕は思わないよ」と言ったら、大変知識レベルの高い奥さんが憤然として「だってあなたは今朝、何カロリーの食事を召し上がりましたよ。動物性蛋白質は何グラム、植物性繊維は何グラム」と言って反発したというので、ご主人の方は辟易してしまい、「いやいやそれはお前の言うとおりだ。客観的にはそ

うだろうけども、どうもおいしいと思わないんだよ。」「それをおいしいと思うようにおなりなさい。おいしいと思わないのは私を愛していないからよ」（笑い）。そこのところは最後に飛躍をしたそうですが、ややおおげさにいえば、そのような知は本当の知ではないという点では、男性の方がはるかに深く病膏肓になっている。観念論で論理が一貫してると、なんだか正しいのではないかというように思い込むのは、どうも現状では日本のリーダーに非常に多い欠点のような気が私はします。

従って、西欧的な知の変貌を具体的な問題として、我々の経験に即して受け止めていくと、色々なことが見えてくる面があります。

このように少しずつ色々なことが見えてきた段階で、一つ私としては非常に気になることがあります。それは、私のもう一つの職業のほうに関わりがあるのですが、我が国で今、文学が力を失ってきているということです。最近西洋では、文学においてもそういった知性と情念の分離は、いわゆる西欧的近代的知の歪みだなどという意見が出てきているのに、我が国では大変文学が力を失ってきている。いったいどのようになってきているのだろうということが、非常に気になります。というのは何も文学に限らないのですが、美術でも音楽でも絵画でも、どうも第二次大戦後の我が国の文化芸術活動というのはあまり高い水準にはない、高い水準にある活動をしている人は、ほとんど国外へ出て活躍をされている方が多い。それはなぜだろうということが、文化現象として非常に心配な点です。

文学では、女流文学者というものがどんどん輩出しました。文学においても半数の担い手が女性になっており、これからも女性がますます活躍するだろうということと絡めて、私は現在の文学の衰退をほっておく訳にはいかない現象だろうと思うのです。その原因の一つは、社会の変貌に、作家あるいは芸術家が追い付けていないという問題があると思います。日本における近代文学というのは、社会がなかなか自分の近代的なエゴ、自我というものを認めてくれないことについての悩み、

抽象的にいうとそういうことですが、日本の社会がまだ本当に近代社会になりきっていないので、作者とおぼしき主人公が結婚問題などを持ち出すと、「お前、あそこの人は身分が違うからお母さんは絶対結婚を認めません」ということで壁にぶつかる。あるいは自分は正しいことをしていると思うのに、失業して暮らしがどんどんつらくなっていく。そのうえ奥さんは病気になり、自分には彼女ができてそれで非常に悩むとか、いわゆる日本的な自然主義リアリズムといわれるものが近代文学の土壌であったのです。しかし、それがどうやらなくなってきてしまった。短歌の世界などはそれが非常に劇的に現れており、昔の短歌というのは貧しさ、病気、色々な苦しみ、それを歌うのが短歌というように考えられていました。それが全部ではありませんが、そのように考えられていました。そういう時代の短歌歌人はこういった苦しみを歌えば、必ず読者が受け止めてくれるということを信じて疑わなかった。ところが今や、全部が全部中産階級になった訳ではないのですが、今そういう貧、病、苦といったものを歌っても、読者の方がそれを受け取ってくれない。「それなら社会保障制度を正式に申請して受けたらどうですか」ということになるので、どうも昔のように説明抜きで受け取ってくれる読者の存在を信じることができない。そこへもってきて、俵万智さんの「サラダ記念日」のようなものが出たものですから、昔ながらの歌人は「あんなのは歌ではない」などと憤慨したということがあったりしました。しかし、やはり「サラダ記念日」があれ程人口に膾炙したというのは、あのような感性で歌ってくれれば、「あっ、これは私の気持ちを本当にうまく歌ってくれた」といって読者がついてくるということを、劇的に表しているのではないかと思います。勿論、新しい文学はまだまだ完成度とか、その表現のテクニックの巧緻さ、精密さという点では色々問題があります。小説の場合でも、今度三島賞を受賞されました高橋源一郎さん、あるいは島田雅彦さん、小林恭二さん、あるいは「デイドリームビリーバー」の三田誠広さんなど、新しい感性に基づいた作家が生まれつつあります。そういった作家たちは昔の練りに練った文章作法からみれば、

荒削りであるかもしれません。しかし時代の感性を表現しているという点では確かであり、そういう点で社会の変貌に追い付けるならば、文芸復興は十分可能な段階に来ているということです。それについて忌憚無く言えば、一般論ではありますが、女流作家の感性の方が、割合近代文学のパターンにどっぷりつかっていることが多く、感性そのものを体現しているという人は、まだそれほど出ていないという気がします。ここいらは、やや女性の感性の保守性なのかという気がします。つまり、女性は感性に優れているということも、一般論で言っているのではやはり具合が悪いのであり、どれだけ今の感性というものを、体現する担い手としての女性が生まれているかどうかが、やはり問題なのではないか、そういうところを解明していくことが、文学が力を取り戻すための、文学において女性が未来をひらくための、一つの手掛かりだろうと思います。

もう一つ、文学の問題と女性の未来に関連した例を挙げたいと思います。文芸評論の小林秀雄さんが亡くなられた後のリーダーである江藤淳さんが、二十年前に「成熟と喪失―母の崩壊―」というエッセイ、評論集を出されました。これは非常にロングセラーだと見えて、最近も増刷をして、新版が出ているのを書店で私は見かけましたが、この中で、第二次大戦後、四十数年間の間に母親というものが崩壊していったこと、女性が母親という役割を、果たせなくなってきたこと、母親としての役割を果たすことを、拒否するという現象が出てきたというようなことについて、例えば小島信夫さんの「抱擁家族」という作品を土台にして論じておられます。小島信夫さんの「抱擁家族」はこの四十年くらいの間の傑作の一つです。これはある大学教授とおぼしき人の、家の中での出来事を取り扱っている訳ですが、そこで主人公の奥さんが、今でいう不倫をする訳です。主人公三輪俊介の奥さん時子にとっては、アメリカが輝かしい理想の国として映っている。アメリカ人の青年と、今日でいうところの恋愛をしてしまうんですが、その不倫を知った主人公の大学教授がそれを責められない、何か自分が悪いことをしたような気持ちに陥る、というようなことを書いてあるので、男の読者からはあまり評判が良くないかも知れませんが、そういう小説の形でもって、第二次大戦後の日本社会の根本的な変質、変貌を取り扱っている。母の崩壊というのはそこです。その一節を読み上げますと、「しかし占領が法的に終了したとき、日本人にはもう父はどこにもいなかった」父というのは戸籍上の父というだけでなく、もっと広い意味での父を含んでいます。「そこには超越的なもの、天に変わるべきものは全く不在であった」戦争が終わるまでは、この超越的なものは天皇陛下とか神様という形であったのですが、「もしその残像があれば、それは恥ずかしい敗北の記憶として躍起になって否定された」つまり、そういうものがあったから日本は負けたと思う意識が一般的にあったのです。「この過程はまさしく、農耕社会の自然＝母性が置き去りにされたものの不安と恥辱感から、懸命に破壊されたのと表裏一体をなしている」農耕社会は自然あるいは母性、そういったものの上に成り立っていた。そのために置き去りにされてしまった。置き去りにされては大変だということで、一生懸命これを壊していった。ですから先程の財界の指導者の方の「日本には日本的ないいものがあったんだ」という言い方は、その意味で言えば間違った発言ではなかったのです。ただ彼は惜しいことにそれを、男尊女卑として言ったから間違ったのではないかと私は思うのです。「今や日本人には父もなければ母もいない。そこでは人工的な環境だけが日に日に拡大されて、そこに住む人々を生きながら枯死させていくだけである」二十年前に江藤君はこのように、今日をあたかも予言していたかのごとくに指摘しています。この本がずっとロングセラーであった意味が良くわかりますが、江藤淳さんは、その他にも色々な小説を分析して、母というものが崩壊をしていった過程について触れているわけです。

私はこれを読んでまもなく、ある小学校の理事長という大役を仰せつかりました。その時、この江藤淳さんの「成熟と喪失」という本のことを思い出しました。というのは、その小学校は大変な進学校として有名でありました。その小学校の卒業生は、一流中学へほとんど入ってしまう。生徒

の数は全校で五百名くらいで、英才教育をしていましたが、進学校としてはトップクラスにランキングされていました。私は理事長を仰せつかることになったのを機に、卒業生の進路について調べてみました。すると大変驚くことを発見しました。というのは、その学校の卒業生は中学校に入るときは、ほとんどの一流校でもベストテンに三人は入っています。ところがその生徒が二年生になり三年生になると、だんだん成績が落ちていき、一流高校に入る生徒は卒業生の半分以下になる。一流高校に入った生徒のうちで、一流の大学に入るのはその四分の一以下になってしまう。それで私はその小学校の校長先生に会いまして、「本校の生徒はどういうことでしょう。毎年本当に優秀な卒業生を送ってくれてありがたいと思ってますが、どうも元気が無い。それから自発性が無い。この点はちょっと問題ではないでしょうか」という話をしました。私は教授会に問題提起をしまして、次の年度から体育の時間を週に二時間、それから図工の時間を一時間、自然観察などの自由時間を一時間作ったのです。そうしたところ大変な騒ぎがＰＴＡで起こり、私はつるしあげを受けました。「私は何も相撲とりにしたくて、うちの子供をあなたの学校に入れたんじゃない。もし体育の時間などを二時間も増やして、一流校に入れなかったら理事長さん、あなた責任をとりますか」。その時はまともに女性パワーの風圧を受けまして、こんなに怖い思いをしたことはございませんでした。しかしここで負けてはいかん、ここで教育ママなどに負けたら、全国、何百万児童に申し訳ないと思って頑張ったのです。「あなたがたはそうおっしゃいますが、一流中学へ入るのが人生の目的ではないはずです。なぜあなたがたが子供さんを一流中学へ入れたがるか、それは一流高校、一流大学へ行ってお役所とか、一流会社だとか、とにかく一流の社会人の組織に入れるためでしょう。しかしはっきりお断りしておきますけど、今あなたがたの息子さんが入る一流会社、一流組織は、あなたがたのお子さんが四十五、六歳になったころ、ほとんど八〇％は一流会社じゃなくなっていますよ。それぐらいこれからの世の中の変化は激しいのです。変化の激しい世の中で立派に生きて行くには、変化を的確に受け止めて、自分の頭で判断して進路を変えるなり、努力の仕方を変えるなりしないと駄目です。変化に強い人間を作ることが、あなたがたお子さんにとっての一番の愛情でしょう。名目だけ一流の会社に入れたからといって、友達同士話をする時は格好いいかもしれませんが、あなたがたの息子さん、お嬢さんが将来お母さんを恨むようになっても、私は責任を取りませんよ」と言って頑張った訳です。それでもなかなか女性パワーの方が強いので、理屈ではやはりかないませんでした。それで私はついに、「分かりました。私は皆さん方からお預かりした子供さんのことを思って、そのようにしたのに、皆さん方がどうしてもそれをご理解いただけないのならやむを得ません。転校なさって下さっても結構です」と言ったら、途端に教室中がシーンとなりまして、今度は一斉に私が褒められるようになったのでまたびっくりしました。その時、わたしは本当に情けなかったです。信念があってそうおっしゃっているのなら、「じゃあ転校させます」とおっしゃって下されば、敵ながらあっぱれということで、私はそのお母さんを尊敬したかもしれませんが、退学なさっても結構ですと言われたらびっくりして、つまりそういう場面に遭遇したことが、今まで平和すぎてなかったのではないかと思うのです。この場合は私立だからそれが言えましたが、おそらく国公立ですと無理でしょう。そんなことを言ったらすぐに教育委員会から呼び出しを受けて、校長として穏当性を欠くというようなことになるのではないでしょうか。これはかなり誇張して申し上げておりますが、しかし私はこれは教育の危機だと思います。教育ママの出現というのは日本の文化の危機です。

しかし、なぜ今日そういう教育ママが出現せざるを得なかったかというと、これはやはりそのお母さんだけの責任では絶対にない。御主人の責任であり、日本の社会全体の責任であるというふうに私は思います。つまりその期間、日本の経済は高度成長を続けていました。どこまで成長するかわからないというような時代の話でした。この傾向が進めば、二十一世紀の初頭には、日本経済は

世界の五〇%くらいのものを生産しているだろう、鉄鋼石の七〇%は日本が使っているのではないかといわれた時代で、そういう時代にはやはり一流校を出て、一流の企業や役所に入って、どこまでもそれが幸せの代名詞として続くであろうと思っていた。そこでは価値観が全国均一化していた訳です。幸いなことに、この七、八年、世の中の様子は少し変わって参りました。産業構造が大幅に変わる。二十一世紀になると今のままでの日本社会では絶対にあり得ない、もしかすると国際的地位も大転落をして、弱小国に転落しているかもしれないという危険性さえも生まれてきている。私は絶対にそうさせてはいけないと思っておりますが、今までの姿勢を改めなければそうなる危険性は極めて高くなる訳です。そういう気配が見えて参りましたので、やはり、一人の人間として荒波を乗り切って行ける力を、子供につけさせておかなければ、子供の将来は不安だと誰しも考え始めた。つまり全国が経済的価値観で均一化されているのではない時代になって参りました。自分の息子はどうも職人に向いているらしい、だから無理に一流大学などに入れなくても、その道で一流の人物になれれば、その方が子供にとっても幸せになるのではないだろうかという、価値の多様化ということが、ようやく社会に浸透してきたように私は思います。

私はその点では、職業というものには、全く上下の貴賤の差別というものはないと思います。よく日本の社会には貴賤の差別をつけたがる人がいますが、それはタテ感覚の悪い習慣であり、このタテ感覚というのは、明治以後、日本の社会に急に生まれてきた、歪みだというように私は考えています。江戸時代、あるいはそれ以前のものを読むと、現在あるようなタテ感覚は見られません。階級社会でしたから階級はありましたが、タテ感覚というのは見られません。おそらくそれは、百二十年位前、明治の時に大変近代化が遅れていまして、放ってほっておけば日本は植民地になる、これではいけないということで、その当時、日本の国が持っていたあらゆる知識力をとにかく江戸に集中しました。一生懸命に富国強兵、国を富まし強い軍隊を作ることに邁進した訳です。大学に

おいても、外国の進んだ科学技術、その科学技術を支える限りにおいての人文科学を、輸入するために大学制度が使われました。つまり、その頃から東京がなんとなく断然偉くて、東京以外の都市は地方だというような呼び方が定着したのです。

これは他の国には見られない現象です。例えばニューヨークでローカルペーパーというと「ニューヨークタイムズ」のことです。これは当然で、「ニューヨークタイムズ」はニューヨークで発行されている発行部数三十万部ぐらいの地方新聞、ワシントンへ行けば「ワシントンポスト」がローカルペーパーです。日本のように何百万部というような、発行部数を誇る全国紙などというのはあり得ない。全国紙であるなら、それだけの人に読んでもらうためには、よほどレベルを下げなければ読んでもらえない。そうなると赤新聞のようなことにしかならない。つまりローカルペーパーはクオリティペーパーであり、ローカルということが上下の価値観ということを全く持ってないのです。ロスアンゼルスはロスアンゼルスローカルですし、アトランタはアトランタローカルなのです。我が国だけがローカルというと、センターが偉くてローカルはその下というタテ感覚があります。これは明治維新以後の特殊現象です。その当時、我々の先輩たちが植民地化の危機を回避するために、偉大な創意性を発揮してとにかく危険を突破した、それは先祖に感謝しなければならないと思いますが、それはその時に必要だった戦術で、今やタテ感覚で東京だけが一番上だというものの考え方は、有害無益だと私は思っています。つまり価値の均質化を破って、その地方、地方に古くから伝わる文化的遺産を改めて認識し直して、その地方に根づいた文化を活発に盛上げていくならば、画一的な価値観に基づいた教育ママという存在は、あり得ないのではないだろうかと思います。

世界は大きな再編成の時代に入っています。どのような再編成の時代かと申しますと、数年前までは自由社会の国々は、アメリカがどうするかということを見て、自分の国の政策を決めても決して間違いではなかった。しかしパックスアメリカーナといわれた時代は急速に終わりつつあります。

今年、経済企画庁でまとめた「新経済五か年計画」これは表題が「世界と共に生きる日本」という表題になっています。この第一章には、パックスアメリカーナの時代が終わった今、ＩＮＦ、ＧＡＴＴに代表されるパックスアメリカーナの機構システムに替わるシステムを、世界は持たなければならないという意味のことが出てきます。そういう点では官庁エコノミストは、私達もそれに参加した訳ですが、時代の変化を的確に指摘しています。同じように社会主義社会でもパックスソビエツカヤの時代が終わりました。昨年、私は東ヨーロッパへ出掛けてポーランドやユーゴスラビア、ハンガリーを訪ねて、つくづくパックスソビエツカヤの時代が終わってきているなということを痛感しました。彼らは社会主義諸国間の経済交流、西側資本を導入する合弁会社法、そういったものを実行に移しつつあります。しかし、それをいくら実行に移したからといって、ソビエトはもはや戦車隊を出動させるということはできない状況になりました。そういう意味では、今まで世界の二大指導勢力でありましたアメリカとソビエトが、自分達の政策を変更せざるを得なくなってきている。そのことが背景にあって、レーガン大統領がモスクワを訪れたり、今度はゴルバチョフ書記長がワシントンを訪れたりといった時代に入ってきているのです。

そういう具合に、世界全体が再編成の時期に入ってきている。その中で一つだけ残念なのは、日本が国際的に孤立しつつあるということです。エコノミックアニマルの行動については、先程申し上げました。これは言い換えれば、文化を喪失した日本が犯人です。一人ひとりのビジネスマンが犯人では決してありません。ビジネスマンは一生懸命自分の仕事に忠実に働いているのですが、母体である日本社会が文化を喪失しているために、世界中からつまはじきされている。

その前の年も私は「スカンジナビア月間」というのを日本で開催することになり、その推進のメンバーということで、北欧五カ国デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、アイスランドに参りました。そこで先程と同じようなことをいわれました。「お前の国は非常に長い歴史と

深い文化的伝統を持っている国だと聞いている。ところが最近お前の国からくるリーダーは自分の国の産業のことしか言わない。良いものを作っているからもっと買えということしか言わない。どうして、いつの間に君の国はそうした野蛮な国になってしまったんだ」と言われるのです。私は「いやそんなことはない、たまたまそんな人があなたに会ったんで、日本全体は決してそんなことはない」変なもので外国へ行きますと、どういう訳か昭和ヒトケタ世代など、そういう世代なのかもしれませんが、日本はそんなに悪くないと一生懸命になって弁解をしています。これは放っとく訳にはいかないと思い、日本に帰ってきて、経済界の偉い方にお会いして、「どうもこういうことをさんざんに言われました。これは放っとく訳にはいかない問題です」と報告したのです。そしたら私の報告を受けた人が大変驚きまして、「だってあなた、野蛮人にテレビは作れませんよ」というふうにおっしゃったのです。（笑い）「ああもうこれはダメだ」と私は思いました。さすがにそういうことがしばしばあったのでしょう。ようやく文化交流を経済界としてもやらなきゃならないなあ、という空気が生まれてきましたことに、私は内心ホッとしています。

こういうことを申し上げますのは、実は文化を失った日本が、文化を取り戻すにはやはり母の復権、母親がまた新しい現代の母親として、出てきてくれなければ大変だと私は思うからです。そのことの中に、日本の未来はあるし、女性の未来も含まれていると私は思います。しかし、ここで誤解していただきたくないことは、だからといって、女性が家庭だけを守っていなければならないという訳ではないのです。古い考え方においては、母親になることは職場を捨てることを意味していました。私はそれは古い時代の物の考え方にしか過ぎないと考えます。むしろ現代においていい母親であるためには、社会人であることが必要であると思うのです。そして男性にはない感性を生かして、そこで男女が協力して、具体的な知の再編成を行う必要があると思います。母親が新しく出現するということは、消えた父親がまた戻ってくることにも通ずる訳です。そういうようなことに

ならなければ、やはり我が国の将来というものは考えられない。そういう点では今、非常に大事な時期にあるように思われます。

今日悪口を言い過ぎたかもしれませんが、先輩たちのご努力で、日本は経済的に豊かな国になって参りました。そのこと自体は大変いいことです。その経済建設にエネルギーを注ぐ余り、それ以外の点がややなおざりにされた、その弱点をつかれているのだと言うこともできると思います。従って早く自分たちの弱点に気が付いて、自分たちの弱点をカバーする努力をしなければならない。その基礎にはやはり、現代にふさわしい家庭の再建ということがなければならないでしょう。それが具体的な知というものであるでしょう。そうすることによって初めて、女性がひらく未来の姿が、見えてくるのではないかと私は考えております。これで一応私の話を終わりまして、後は会場の皆様からのご質問にお答えしたいと思います。

（「生涯学習に関してどういうご意見をお持ちですか」という質問に答えて）

大変大きな、難しい問題ですが、教育ということを考える場合、私達はいつのまにか、知識を与えられるのが教育というように、教育という言葉の中身を取るようになりました。これは先程申しましたように、先進国、西欧のものをいちはやく取り入れるということが、緊急の課題であったときに作られた教育制度ですから、知識を詰め込むことが教育というように思われていた訳です。ところが今いわれている生涯学習というのは、知識を詰め込むための教育とは、いわゆるパラダイムを変えて考えなければいけない。つまり、自分達の創意工夫を発揮しやすいような、トレーニングを受けるということが、生涯学習を考えていく場合に基礎になる。実は教育というのは本来はそういうものでした。ですから文部省の方などと議論しておりますと、教育のコンセプトをどのように作り変えていくかということが、大作業なのですとおっしゃいますが、私もそうだと思います。生涯学習というのは義務教育を終えた後、あるいは、いわゆる大学までの教育を終えた後の社会人に

なってからのエデュケーション、あるいは自己開発を手助けするための装置を、国あるいは行政がどのように手助けするかという問題ですから、その時のコンセプトは知識を与えるという教育ではなく、持っているものを引っ張り出してそれを一つの知識に再構成する、あるいは、再構成して行く必要を感じさせるような場を作るということであろうと思います。

現状では非常に多くの社会人が、自分は十分納得のいく教育を受けてこなかったという実感を持っているように思います。若い人はあれほどモーレツに受験勉強しているが、受験勉強と教育とは実は何の関係もない。受験勉強は教育とは本質的に関係のないもので、単に受験のテクニックの勉強である要素が非常に多くて、本当の学力になっていない。そこで社会人になったときに、自分は十分な教育を受けてこなかったと思ってる人は非常に多い訳です。ですから、不十分な教育しか受けられなかったという中高年齢の人に対してだけでなく、若い社会人にも学習本来の姿を与える組織が、今日大変必要ではないかと感じております。それは決してワープロの打ち方とか、プログラミングのやり方といったテクニカルなことばかりではなく、ものの考え方にまで及ぶ再教育だと思います。部分的には企業などがそれをやっていますけど、企業などがやることには限度がありますので、若い人たちが社会人になって悩む、「おまえたちの国はどうしてそんなに野蛮人の国になったのか」という場合に、言葉が通じないようなビジネスマンだったら、これは外国へ行った場合に立ち往生する訳ですから、そこで普通の、一般教養あるいは思考方法、ものの考え方等を訓練する学習施設が、変化しつつある技術を身に付けるテクニカルな学習と同じように必要だと思います。

数年前に、ある大学で一年間講座を持ちました。かなりレベルの高い大学といわれていた大学で、四百人位の学生を教えて、今の教育というのは、全く教育でないのではないかという体験を、したものですからそう申し上げるのです。そこで教えた生徒達は、私の話したことを実によくノートにとって暗記をして参りました。私は授業の最初に、「教師の言うことなんかそんなにノートを取るも

んじゃない。要点だけレジメを作っておいて、後は自分で本を読むものだ。ノートを取るのをやめなさい」と言ったのですが、やはりやめませんでした。しかたないので私はゆっくりしゃべることになりました。そこで試験をして非常に驚いたのは、私の言ったことは非常によく暗記してくる訳です。しかし応用問題を出すと驚く程できない。最高レベルの大学だったので、おそらく最高レベルの大学というのは、受験勉強により多くのエネルギーを消費した学生が入ってくるので、むしろそうでない大学の方が、オリジナリティのある学生がいるのかもしれないと思った程です。大学別に区別をするつもりはありませんが、どんどん職場に入ってオリジナリティを出している人は、一流大学の学生でない方が多い。一流大学の学生でもあまり成績は良くなかった方が、はるかに自分の頭で考える能力を持っているということが、統計的に出ているようです。

生涯学習というものは、地域地域によってもニーズはかなり違うと思います。産業構造が大きく変わるのに直面している地域では、やはり職業教育的な要素の強い生涯学習の必要性が高いと思いますし、様々なのですが、これについては是非真剣に取り組んでいただきたいし、私の知っているかぎりでは、文部省の方々もかなり真剣にそういうことを考えているようですので、行政などと連携してご研究になれば、今は比較的皆が、その必要性について認識してきているような時代にあるように私は思います。

（日本文化の再生に母親の復権が必要であるとのお話に対して、「母性は女性にとって生得的なものなのか、あるいは男性にも母性は育つものなのか」という質問に答えて）

今のご質問はなかなか難しく、かつ切実な問題だと思います。現実的には子供を育てながら仕事を続けるということは、時間的にもまた疲労の蓄積という点からも、非常に大変なことです。それについて、どのようにパブリック、あるいはパブリックセクター、あるいは企業がサポートするかということは大きな問題です。そういう中で母性というのは、女性に生得的なものかどうかという

ご質問ですが、私は一般論で答える自信はありません。しかし、父親にも子供をかわいがる気持ち、世話をやくということに喜びを覚えるという要素は確かにあり、同時に母親にも厳しく子供をしつけるということもある訳ですから、父親も母親も共に母性と父性を持っているのかも知れません。ただ子供の成長段階において、やはり最初の二、三年は母性、女性に依存する度合いはどうしても高くなるだろうと思います。また、高くなるのが自然だろうと思います。例えば、授乳は動作、態度、スキンシップを通して、母親と生まれた子供との間の大切なコミュニケーションであると言われています。育児の段階において最初の二年くらいは、お母さんというものの存在は、お父さんにもまして必要なものであるらしいと思います。しかしこの問題については、現在育児についても色々な理論上の解明が、かなりのスピードで進んでいますから、私も生涯学習を続けながら勉強していきたいと考えております。

（まとめにかえて）

男女の問題で本題が終わりましたから、コマーシャルの時間だろうと思いますので、多少コマーシャルを入れて申し上げます。

地中海クラブという世界で最大のレジャー会社があります。私どものグループもこの地中海クラブとタイアップして、今度日本で第一号の「冬のバカンス村」を、北海道に坪数で言いますと一〇〇〇万坪くらいの広さの所へ作りました。〝クラブメッド　サホロ〟といいますが、これは世界で一〇七番目のバカンス村になります。その会社の創立者というのはトリガノさんという人です。私はムッシュ　トリガノに初めて会ったときに「地中海クラブは世界で大変な成功をしているが、成功の秘訣を一つだけ言うとしたらどんなことですか」と質問したことがあります。

するとトリガノさんは、「それはごく簡単なことだ。まずこの地域にバカンス村を作ろうとしたら、男女のペアのチームを作る。そして、バカンス村の設計をするときには、必ずそのペアのチームが

設計に入る。マーケッティングもペアで、デザインもペアでやってもらう。そうすると男には女性に無い感性があるし、女には男性に無い感性がある。そういったペアのチームで全ての準備をさせるのが、私の会社が世界的になった最大の武器だろう」というように言ってくれたことがあります。この言葉には非常に男女の問題、女性の未来の問題を多く示唆するところがあると思います。それはどういうことなのだろうかと、もしご自分の目でお確かめになりたい方は、是非、サホロの地中海クラブにお越し下さることをコマーシャルとしてお勧めしたいと思います。（拍手）

記念講演

日本文学と女性

ドナルド・キーン

海外では、日本は男尊女卑の国だという評判があります。外国人の男性がそういう評判を聞きますと、非常にうらやましく思いますが、女性のほうはそうではありません。むしろ外国人の女性、特にアメリカの女性が日本に参りますと、日本の女性はどうしてもっともっと自分たちの権利を主張しないのかと、いろいろ苛立つこともあります。しかし日本の歴史や文学を広く見ますと、日本は決して男尊女卑の国だけではないということがわかります。

例えば、やおよろずの神の中でも天照大神は一番地位が高いと思いますし、また仏教のほうでは、もとは男性でしたが段々女性になった観音様もいます。また、昔の外国では、中国とか朝鮮のほうで、日本のことをきしこく（鬼氏国）といっていました。きは鬼、しは氏、どうしてそういう名前ができたかというと、いろいろ説明がありますが、「続日本記」では、この国は東海の女国と言われており、それほど日本の女性は目立つ存在でした。また、中国には私の知っているかぎり一度も女帝という人はいませんでしたが、日本の場合は、特に奈良朝、またその直前に女帝は何人もいました。その中でも推古天皇は、名前から見ましても〝推古〟というのは〝いにしえを推しはかる〟というような意味で、そこから日本の歴史が始まると考えてもよいのではないかと私は思っています。もう少し後では、持統天皇ですが、持統天皇に歌がありまして、百人一首に入っていますし、そうして当時一番素晴らしい詩人だった柿本人麻呂は、持統天皇を尊敬していたばかりではなくて、生きている神だというふうに思っていたに違いないと思います。同じような例はいくらでもあげられます。政治的な意味のあるような女性の系譜もあります。例えば鎌倉時代の北条政子とか、淀君とか、いくらでも例は挙げられますが、私は今日は主に文学の話を致したいと思います。

日本の文学を見ますと一つ大きな特徴があります。それは女性による文学が大変重要だということです。例えば女性の歌人の場合でもそうだったし、あるいは物語の作家にも女性がたくさんいましたが、外国の場合はわりかた最近までそういう現象がありませんでした。ギリシャ文学は大変素

ドナルド・キーン（朝日新聞客員編集委員）

1922年、アメリカ・ニューヨーク生まれ。1942年、コロンビア大学卒業。同大学博士号、ケンブリッジ大学博士号取得。ケンブリッジ大学日本研究講師を勤めた後、京都大学に留学。日本文学の研究に取り組み、菊池寛賞、勲三等旭日中綬賞、読売文学賞、日本文学大賞など多数受賞。現在、コロンビア大学教授。また、アメリカ・アカデミー会員、アメリカ・ペンクラブ会員、日本ペンクラブ会員でもある。著書に「日本文学散歩」、「日本文学を読む」など多数。

晴らしい文学ですが、私が名前を知っている女性の文学者は詩人一人だけです。ローマ文学では私は一人も知りません。中国文学の場合は少しはいますが、それほど有名な存在ではありません。

しかし、日本文学の一番優れた作品は女性によって書かれたものです。これは大変独特な現象ではないかと思っております。女性の書いた文学、特に平安朝が最高に素晴らしいものだったですが、平安朝が鎌倉時代になっても、女性が相変わらず京都のことを書き続けまして、最近まで余り知られてなかった「問はず語り」とか、あるいは「竹むきが記」とか、鎌倉時代に女性の日記がかなり残っておりますし、素晴らしい文学です。

女性の役が大きいのは事実ですが、一番不思議な現象は、世界文学の観点から見ますと、男性がおおいに女性の影響を受けたということです。大体の国の場合は、男性の文学と女性の文学が全然違うか、それとも女性が男性の影響を受けますが、日本の場合は逆でした。例えば「万葉集」という最高に素晴らしい詩歌集がありますが、「ますらをぶり」というような資格があるそうですが、つまり男性的なものです。男性的でありますから「万葉集」の中に、例えば戦争についての長歌とか詩歌がありますし、あるいは陸奥の国に金が発見されたとか、防人が辺境まで行って、自分の家から出るときの悲しみとか、そういうような男性的な歌がかなりあります。中には女性的な歌もあります。けれども「古今集」となると全然変わってきます。「古今集」は皆様ご存じのように最初の勅撰和歌集です。そして随分あとまで日本人にとって一番親しみのある、一番影響力の多い歌集でした。しかし「古今集」の場合絶対「ますらをぶり」とはいえないんです。それは、明らかにもう一つの「たをやめぶり」です。女性的な詩歌集です。もちろん編集者は気の強い紀貫之という男性でしたが、しかし「古今集」の序を読みますと、彼はどういう場合に、人間が歌を詠みたくなるか書いてあるのですが、それを読みますと、大体「古今集」の性格がわかるような気がします。まず一番最初のところには「やまとうたは人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」とあります。

私たちこれを読みますと、なるほど全然新しくも面白くもありません。しかし、実際上大変変わった考え方です。つまり、人の心を種とする詩歌は世界にありますけど、それだけではないのです。つまり、人の心を書く場合は叙情詩になります。しかし、例えばギリシャ文学の話ですが、ホメロスが「イリアッド」を書いたときは、彼は自分の心を歌うつもりではなかった。種は自分の心にあった訳ではないのです。彼は英雄たちの素晴らしい行為を歌った訳です。むしろ過半数の詩歌の場合は、自分たちの心を歌うものではないのです。しかし、このときから日本人の常識の一つとして、歌は人の心を種とすることとなり、これは日本の詩歌の一つの特徴にもなりました。

次にどういう場合に、歌人達は歌を詠むようになったかというと、「春の朝に花の散るを見、秋の夕暮れに木の葉の落つるを聞き、あるいは年ごとに鏡の影に見ゆる雪と波とを嘆き」、それも当然と思われますが、これを見ますと明らかに女性的です。つまり、男性が自分で鏡を見て、雪つまりは白髪を見てがっかりするとか、あるいは波つまりしわを見て嘆く、そういう男性は実はいると思いますが、しかし人の前で嘆くことは絶対にありません。しかもそれについて歌を詠むことはあり得ないと思います。自分は昔たいへんきれいだったという男性はあまりいないでしょう。しかし、これは一番最初に挙げる、歌を詠む動機です。極めて女性的です。私が女性的という場合は、もちろん客観的に証明できないし、また私の感想に過ぎませんので、より女性的といったほうがいいかもしれません。しかし、鏡のことだけではありません。花の散るを見るときにも歌を詠むということ、もちろん男性でも花が散るのを悲しく思うことはあります。今まできれいに咲いていた花が散って残念だ、というようなものです。しかし女性は花が散るのを見ると、やはり、自分がもう一つ年上になったとか、自分の時間が短くなったとか、必ず自分と関係があります。自分の心を種にして、花が散るのを見ているのです。そういう意味では、花を見て嘆くとか、秋の夕暮れに木の葉の落つるを聞くときに、木の葉の落ちるのを聞くことは、ちょっと難しいですが、どうしても主観的にな

ります。見ながらこういう悲しそうな音がしてるだろう、というとこでしょうが、これもどっちかというと女性的だと思います。

またもう一つ不思議な特徴があります。男性はよく自分は女性だという立場で歌を詠むことがありました。これは有名な歌で分かりやすいのですが、「我が宿は道もなきまで荒れにけり　つれなき人を待つとせしまに」これは僧正遍昭という男性が詠んだ歌ですが、しかしどう考えてもこれは女性です。男性は女性が来ることを待って、つれないなあということはないはずです。逆です。女性がいくら待っても恋人がこない、そしてその日だけでなくて、自分の家までの道が見えなくなるほど雑草が、生えるまで彼がこない、もちろんそれはおおげさに言ったのですが、どう考えてもこれは女性が詠むべき歌です。男性では不自然です。

全ての歌が女性的だとは言っておりません。たとえば、将軍実朝の歌は決して女性的ではない。あるいは幕末の平賀元義の歌とか、あるいは明治時代の与謝野鉄幹の歌など、決して女性的ではありません。しかしそういう歌は、歌の主流であるかというと決して主流ではないのです。長いことあらゆる人が詠んでいた歌は女性的な歌だと考えられます。

また散文のほうでも同じ傾向が強いです。男が女であるふりをすることはめずらしくありません。一番有名な例は、「土佐日記」です。「土佐日記」の冒頭に、紀貫之という男性は、日記というものは男性が書くものだけれども、女性として書いてみたくなったと言うんです。彼は自分を女性だと言うんです。どうして立派な男性が自分は女性だというふうに偽っていたか、これは大体分かります。つまり、その前の世紀、「土佐日記」は十世紀の初め頃ですが、九世紀、つまり平安朝の初めの頃は、日本語、日本文学の暗黒時代でした。文学が全くなかったという訳ではありません。その当時の文学は漢詩とか漢文でした。宮廷の男性はみんな漢文で漢詩をつくっていました。女性は大体においては漢詩や漢文を習わなかったのです。それでも紫式部や清少納言は覚えていました。しか

し多くの場合は、男性が文学を書いていました。男性が漢文で書いていました。どうして漢文で書いていたかというと、中国という国を崇拝していたからです。中国の文明は日本の文明、文化よりもはるかに優れていると皆信じていました。そして中国語は、自分たちの国のあまり美しくない言葉よりましだと考えていました。これは決っして日本だけの現象ではありません。ヨーロッパでも中世の人達は、ラテン語でものを書いていました。そうして、初めてイギリス人が英語でものを書く場合、イタリア人がイタリア語でものを書く場合、相当抵抗がありました。あるいは市場の言葉、台所の言葉だというように自分の国の言葉を軽蔑していました。日本人もそうだったです。

しかし、日本の男性達は、女性に手紙を書く場合などは、漢文で書いても女性達には読めなかったから、しかたがなく時々仮名でものを書かなければならなかったのです。仮名というもの自体は、女文字として知られていました。女文字というのは、徳川末期まで使用されました。日本の男性でも、私は今度、女文字で何か書いてみようとか、そういうふうに言っていましたが、どういう理由で男性が女性にものを書くかというと、私が説明するほどのものではないのですが、恋愛の一つの表現だったのです。「古今集」の一つの序の中でもこう書いてあります。「男女の中を和らげる」ということです。それは歌の一つの非常に大事な役目なんです。つまり、男性が女性を説得しようと思って、自分は大変優れた男性であるとか、あるいはどんなに女性が好きかと知らせたいと思ったときに、しかたがなく女性が読める文字、日本語で書いていました。そういうような伝統があったから、日本語が救われたと思ってもいいんです。もしもそういう伝統がなかったとすれば、もし男性が女性にものを書かなかったか、あるいは女性が漢文を習ったとすれば、日本語、日本文学はあまり発展しなかったかもしれません。これは仮定の話ですが、そういう危険があったと私は思っています。結果として日本文学は助かりました。暗黒時代の九世紀でも小野小町とか、在原業平とかそういう偉大な歌人もいました。しかし、次の世紀、十世紀とか十一世紀の平安中期になりますと、

女性達の文学は大変素晴らしいものになります。私が名前を挙げなくてもいいんですけれど、「源氏物語」とか「枕草子」とか、あるいは「蜻蛉日記」とか、実に素晴らしい作品が和文で書かれました。

そうしてこの文学には一つの大きな特徴がありました。その特徴は私自身にとって非常に大切なのですが、そういう文学に普遍性があったということです。極めて深い意味の普遍性がありました。当時の男性が漢文でつけていた日記には、ほとんど普遍性がないんです。つまり、ある日、朝から雨が降ったとか、昼頃に晴れたとか、きょう大納言に会ってこういうような話があって、だれそれが昇格しそうだとか、そういうような話ばっかりあって、私が読んでも退屈するばっかりです。途中で寝てしまいます。しかし「蜻蛉日記」を読みますと、彼女ははっきりいうと関白の二号さんだったのですが、大変教養のある人でした。関白兼家はときどき自分の仕事について話したはずです。今日は大変疲れた、こういうことがあった、だれそれが私の地位を狙っている。そういう話があったはずですが、「蜻蛉日記」にはまったくないんです。そういう話はゼロです。彼女はやはり日記をつけることは自分の心を種とすべきだと思って、自分の心だけしか書かなかったです。場合によってはそれは非常に変な印象を与えるようなものです。有名な例ですけども、兼家に妾ができました。その妾との間に赤ん坊ができました。そうして道綱の母、つまり「蜻蛉日記」を書いた女性は、その子供が生まれたときに大変憤慨しました。嫌だと思っていました。ところがその子供が死んだのです。彼女は喜びました。現在の人は、心の中でどんなに喜んでいても決して書かないんです。それは人に伝えたくない嫌らしい気持ちです。だれでもそういうところを検閲します。絶対自分の感じたままでものを伝えることはないんですが、道綱の母という人物は実に正直でした。仮に心に汚いものがあっても、仮に恥ずべきことがあっても、彼女はそれを書いてしまいました。私たちは「蜻蛉日記」を読むと感激します。ああいう人はほかにちょっといなかったです。場合によっては賛成

できない、同情できないこともありますけど、理解できます。私たちの中にはそういう汚いところもあります。私はそう思います、他の方はわかりませんが……（笑い）。ともかく日本の女性文学にはそういうところがありましたから、現在でも外国で平安朝の文学が、各国の翻訳で読まれています。常識的に考えますと、千年前の日本という特殊な世界だったし、ヨーロッパとは何の関係もない世界だったのです。また人々の信じていた宗教も、ヨーロッパとは全然違っていますし、家庭生活、夫婦関係、全部ヨーロッパ人の常識に反するようなものでしたが、「源氏物語」の英訳を読んで分からないとか、そういう表現をする人はいないと思います。あまり好きでない人はいるかも知れません。つまり、もっとはっきりした行動のある人物が登場しないから物足りない、という人もいるでしょうけども、わからない、理解できないという人はいないと思います。国が違うし、言葉も違うんですけど、人間の心はそれほど違わないんです。

どうしてかというと、徳川中期の大変偉い学者、本居宣長はこう説明しています。彼は「源氏物語」にもののあわれが美しく書かれているというふうに言いました。もののあわれはどんなものか説明しにくいです。私は自信がありませんけども、やはり、感性の問題、物に対して感性があって感情移入の可能性がある、そういうような意味があるんじゃないかと思います。本居宣長は一歩進んで女性的なものが本当の文学、文学の真髄だというふうに言ってました。彼は一例を挙げました。例えば子供が死ぬ場合、父親と母親は同じように悲しむはずです。ところが父親は泣かないんです。声を上げて泣くことは絶対しないんです。彼は武士だったらなるべく無表情で、心の中でどんなに悲しく思っていても、あらわにそれを示せばめめしいとか、武士らしくないと思っているらしいんです。ところが女性のほうは泣いてもかまわないんです。そうして泣くこと自体が文学と密接な関係があります。何も表現しない人は文学も書けないのです。文学が女性的だという意味はそこにあると思います。

また、文学には自分の本当の心持ちを伝えることが大切です。私は日本の詩歌集の中では男性的な「万葉集」が非常に好きですが、男性が書いた詩歌を読む場合、時々本当にそう思っていたんだろうか、本当にそういうことを知っていたんだろうかと、疑問を抱きます。しかし女性が書いたもの、特に私が好きな日記文学の場合は、そういう疑問はまず一度も沸いてこないです。これは事実そのままです。事実疑いないというような気がします。

平安文化全体は女性的だったのではないかと私は思います。例えば平安時代の建築を代表するような建物は何かというと、やはり宇治の平等院だろうと思います。その建物の美しさ、繊細さといいましょうか、あれは決して男性的なものではありません。奈良にある唐招提寺のような重厚なものではないんです。むしろ柔らかい、美しくて、鳳凰というようなかたちで、いつ飛び出すかわからないような建物、それはそれ以前の建築にはありませんでした。また、平安朝の絵もそうです。「源氏物語」の絵巻物を見ると、これこそ日本的な美だと思うのは私だけではないと思います。歌もそうでした。

しかも、極端なことになるとスポーツもそうだったのです。平安朝のスポーツで一番たびたび文学に出るのは蹴鞠（けまり）です。蹴鞠は本当に優雅なものです。つまり蹴鞠の場合は勝つということはないんです。むしろ相手の人が適当に蹴ることが出来るように、やさしく相手のほうに蹴るわけです。フットボールと全く違う。男性的と言えば男性的ですが、蹴鞠のほうは大変美しいものです。私はたびたび蹴鞠を見た訳ではないんですけども、見たときには本当に美しいと思います。神主たちは美しい服装をして、ゆっくりとみやびに遊びます。それこそ平安的なスポーツだと私は思います。

私は平安朝のことを考えますと、何よりも文学のことが一番先に頭に浮かんできますけども、勿論平安の歴史、長い歴史の中にはいろんな事件が起こりました。例えば平安朝の一番盛んだった頃でも、都に強盗がはびこっていましたし、いろいろ疫病もあって、私たちが嫌うようなことがいっ

ぱいありました。芥川竜之介が書いた「羅生門」とか、そういう短編小説を読みますと、平安朝は決して宮廷生活だけではなかったのです。当時の強盗が宮城の中にも入ったのではないかとも思われます。そうあってもおかしくないです。決して治安が現在の日本のようになってなかったんです。そのような現実は、あまり文学によって広く知られてはいません。私達は大体において、文学によって昔のことを考えがちです。私は特にそうですが。しかしある意味では日本歴史のことを考えますと、一番確実な事実は歌です。つまり、一例をあげますと、「平家物語」の一番最後に大原御幸がありますが、後白河天皇が寂光院まで行って、そこで建礼門院に会っていろいろ昔の話をします。その時、歌も交わします。読むと感激します。素晴らしい文学だと思いますが、しかし、後で考えますと「平家物語」を書いた人はどうして二人きりの話を、全部初めから終わりまで聞けたでしょうか。建礼門院が新聞記者を呼んで、こういうことがありましたからと漏らしたとは思えません。何があったかというと、歌があったのだと思います。つまり、歌は覚え易いものだったし、あるいは誰かが立ち聞きして聞いたかも知れない。歌があって後に歴史が出来ました。歌に基づいてその前の事情と後の事情を書くことがあったと私は思っています。証拠はもちろんありませんけども、どう考えても歴史としても一番確実なものは歌だと思っております。

平安末期となると、事情はもっともっと悪くなります。保元の乱とか、平治の乱とかがありまして、一番最後は源平の戦争です。保元の乱や、平治の乱を読みますと、一番目立つ人物の一人は清盛です。清盛は非常に男性的な人でした。あれほど男性的な人はあまりいないと思います。しかし、厳島へ行きますと、あるいは「平家納経」を見ますと、決して男性的ではないんです。非常に女性的です。「平家納経」というのはお経ですけれども、美しい絵が描いてある。本当に極楽のような絵ですが、清盛の趣味だとすれば、ああいう人物は極楽の絵よりも地獄の絵を喜んだはずです。人が悩んでいるような場面、炎が立っているような絵が清盛の趣味ではなかったかと思われますが、し

かし彼も平安文化の影響を受けたんだなと思います。

このほか「平家物語」にさまざまの素晴らしい場面がありますけれども、一つ非常に有名なのが敦盛の最後です。敦盛は平家の一人です。まだ十六歳です、まだ非常に若いです。平家というとやはり軍人でした。恐ろしい軍人でした。保元の乱でも、平治の乱でも色々悪いことをしました。後でも悪いことを色々やってます。決して宮廷人ではありませんでした。しかし、敦盛と熊谷直実が戦うときは随分違うんです。敦盛はまずお化粧して、歯はおはぐろをして、戦場へ行くときでも笛を持って行きます。熊谷は東の荒武者で、彼はもちろん顔にお化粧つけることはありません。彼は本当に驚きます。彼はできることなら敦盛を助けたいと思います。自分の息子がその日に怪我をしたのですから、大変な打撃でした。この人の父親も大変嘆くでしょうから、できるものなら救いたいのです。それを敦盛にいうと、敦盛は実にぞんざいな言葉で答えます。決してありがたく思ってないんです。ということで、熊谷は自分は次の時代の人物だと分かっていたようです。次の時代は源の時代。平家の時代ではなくて、源氏の時代です。彼の時代は前の時代と違って、男性的だろうと……。彼は勿論言葉でそれを知らなかった訳ですが。しかし、目の前に見える貴族的な顔をしている敦盛は、同じような軍人であるはずですが、彼は既に宮廷文化の洗脳を受けています。彼は文化的で、そういう教育を受けた人として、熊谷を軽蔑しています。彼は教養のない人間です。熊谷直実は「お名前を教えて下さい」と、大変丁寧な日本語で言うんです。すると敦盛は「首を切って誰かに見せたらいい、直ぐに名前を教えてくれるだろう」と、そういうことを言うんです。随分対称的なことになっています。しかし、一番深いところにあるのは、やはり女性的な文化を知らない男に対する軽蔑です。そういう男とは対等に話さない、彼は自分の喉の上に刀を置かれていても軽蔑してるんです。文化のない人だと思っています。

封建時代が始まると、長い日本の中世が始まりますが、中世の特徴は申すまでもないことですが、

戦争が多いことです。特に中世の終わり頃に戦国時代があり、応仁の乱とか戦国時代がありました。そういう時代の女性の立場は非常に悪いです。つまり、他のことはいくらできても、弓とか矢とか刀を上手に使わなければ、どうにもならない時代です。そういう時代でしたから私達常識では、女性はあまり好意的に描かれてないはずだと思われますけども、しかし中世の代表的な、一番典型的な文学を考えますと、必ずしもそうではありませんでした。私がいま考えているのは能のことです。皆さんご存知でしょうが、能の中でも一番高く評価されているのは鬘物（かづらもの）です。つまり女性が主人公の「松風」、「熊野」などがそうです。こういう能はあらゆる意味で一番優れていると思っています。それだけではなく、私は日本文学全体の中でも「松風」による曲は最高級のものだと思います。書いたのは世阿弥でした。男性でしたが、登場する女性たちは、松風にしても、熊野にしても相当偉い人物に描かれています。そういう軍国の日本の時代でも、女性の立場はかなり高かったと私は思いたいです。

近世になりましたら、また芸能が大変大切になりますが、ここでは女性と文学は密接な関係にありました。歌舞伎も、元祖は阿国歌舞伎でしょう。出雲大社の巫女（みこ）阿国が一番最初に歌舞伎を作ったのです。近松の浄瑠璃は演劇としての近世最高のものですが、近松の浄瑠璃の中で不思議なことがあります。特に心中物、最後に心中があるようなものですが、いつも女性が先に死ぬ決断をするんです。

例えば曽根崎心中という有名な浄瑠璃では、徳兵衛という人は実に弱々しいです。初めに彼はまず、九平次という信用に値しない人に、自分の大事な金を預けるんです。私たちは九平次を見た瞬間から、この人は悪い人だとすぐわかります。第一幕の最後の所で徳兵衛は九平次に証文を見せて、ここにはこのとおり、私の金を借りたと書いてあると言ったんです。九平次はどこかと見て、ああ、これはなくした判子が押してある、きっとお前はそれを拾って証書を偽造したに違いないと言うん

です。徳兵衛は仕方がないから九平次をぶんなぐろうとするんですが、徳兵衛は一人、相手の九平次の連中は十何人もいます。チャンバラ映画で一人対五十人の場合、一人がいつも勝ちます。しかし近松の場合は、一人が完全に負けます。徳兵衛は実にみじめです。幕間のとき、それは天満の茶屋ですが、この時の徳兵衛の登場は演劇文学の全体を見ても一番みじめです。彼はどういうふうに舞台に入るかというと、お初の打掛けの下で這って入ります。そして縁側の下で待っているんです。あれほどみじめな登場はほかにないと思います。そしてお初は足を縁側の先まで出して、徳兵衛が私と一緒に死にたいと言うのを聞きたいと言うんです。実はそれは彼の言うべき台詞です。彼女は何も困ったことはないんです。しかし、彼女はもうこの人がなかなか言わないから、しかたがない自分で言おうと。それは素晴らしい場面です。彼は彼女の足をとって、自分の喉笛をなでて死ぬ決意を伝えるんです。しかし、あくまでも彼女から言うんです。

あるいはもう一つ、それほど度々上演されていないんですが、「鑓の権三重帳子」という近松浄瑠璃がありますが、その中のおさいという人物は、主人もいるし子供もいますが、若い男の人に色々恋の言葉を言ったりして、しまいに不義の関係ができます。あくまで男性は「やりたくない、嫌だ」、「あんたと一緒に寝たくない」と言うんですが、しかし彼女はより強いから、しまいにそうなります。

また、歌舞伎とか浄瑠璃の番付を見ると、いつも女性の名前が先です。「お染久松」、「梅川忠兵衛」も男性の方が先なのはありません。あるかどうか私も知らないんです。

近松自身は浄瑠璃を書いたときに大変苦労していました。というのは、近世の女性たちはあまり物を言わなかったのです。物を言うとよくないということで、どんなに激しい感情を覚えていても、なかなか口にすることはありませんでした。近松はいつか友達に述べたことがありますけれども、「実の女の口よりえ言わぬことを打ち出しているゆえ、その実情あらわるるなり。」つまり、本当の女の

人は決してそういうことは言わないんですが、私は無理して彼女たちの実情、本当の気持ちを伝えているから芝居ができる。もしそうでなければおもしろくないと。近松の戯曲は日本の演劇文学の中でも大変優れたものですが、彼も十分女性を尊敬したということがわかります。

幕末、徳川末期となると、近世全体に女流作家が非常に少なかった。不思議に少なかった。加賀の千代女とか、そういう人がいることはいましたけど、やはり平安朝の文学あるいは鎌倉時代の文学の伝統を考えますと、実に少なかったのですが、段々女性の教育の程度が高まりました。徳川末期となると、小説の読者は大抵女性だったのです。そして著者は女性を喜ばせるように書いていました。例えば「梅暦」といった大変有名な、すばらしい小説があります。あきらかに女性のために書いた小説でした。男性も読んだことは読んだんですけども、男性は主な読者ではなかった。当時の一番大事な小説は、女性の読者のために書かれたと考えてもよいと思います。

それでは明治時代に入ります。明治時代に女流文学に一種の復活があります。まだ小規模ですが、樋口一葉という大変優れた小説家がいましたし、あるいは与謝野晶子という素晴らしい詩人もいました。ついこの間、東京で「十三人の女流作家」という大きな展覧会がありました。見事なものでした。樋口一葉から大体今の時代まで、宇野千代さんまで、実に見事なものでしたが、しかし、初めのところ、つまり明治、大正の女流作家の家にあったものとか、持ち物はやはり皆貧乏なものでした。あんまり恵まれてなかったです。

ということで、私の考えでは日本の女流文学の復活は、実は戦後の現象ではないかと思います。戦前にも女流作家、林芙美子とか宇野千代など色々いましたけれども、今のように大変人気のある女流作家はそうたくさんいませんでした。現在は女流作家の本がよく売れます。例えば有吉佐和子の本が何百万も売れることもあります。それはかつて想像もできなかった現象です。一つだけ女性として、不満をおもちになる方もいると思いますけども、それは日本人の女性がまだノーベル文学

賞をとってないということです。男性も一人しかいないからあるいは仕方ないかもしれませんが、現在日本の女性の文学は大変優れたもので、どう考えても世界中に認められるような時代になりました。つい先月でしたが、アメリカのインテリ向き、一番格式の高い雑誌「ニューヨーカー」に宇野千代さんについて長い記事が載りました。それはかつてあり得えないことでした。宇野千代さんが九十歳になったことは、相当意味があると思いますけれども……。八十八歳のときに宇野さんは振り袖姿で人の前に出ていましたが、とても美しいです。今でも。九十歳になっても、雪とか波ということはあまり心配してないようです。ともかく、私は日本の文学の長い伝統、あるいは日本文化全般の長い伝統の中で、女流作家とか、女流芸術家が演じた役は非常に大きいと思います。男尊女卑という評判は、ある意味では正しいかもしれませんが、日本文化の場合は決してそういうことはありません。ありがとうございました。（拍手）

TALK セッション1

飛び出せ世界に、女性たち

進行係　それでは、はじめに安藤アサ子部会長から皆様方にご挨拶を申し上げます。

安藤　どなたもおはようございます。今日は恐らく皆さん朝早くから、家族の者をせきたてて学校や職場へ送り出され、自分は急いで身支度をされて、ここにおいでた方ばかりだと思います。

　世の中は大変珍しいことが多ございまして、私も今日この会場に時間に遅れないようにということで急いで参りました。そしてエレベータのところで偶然高橋久子先生にお目にかかりました。高橋久子先生は他の部会のパネラーでございますのに偶然お会いしたんです。そのような偶然があるということは、私は非常に人生の中で素晴らしいことだと思います。そういうことがありましたから今日私どもの参加致しますこの分科会も、すごく楽しいものになるだろうと、そういうふうな予感で胸をわくわくさせております。

　いろいろと申し上げたいことはたくさんございますけれども、今日、私どものこの会のコーディネーターをしていただきます藤本先生につきましては、もう皆さん私がご紹介するまでもなく、北九州市における国際問題の権威者でございますが、朝に晩に私どもの中にいらっしゃいまして、いろいろとご指導いただく、たいへん仲のいいお友達でもございます。

　その先生のことをちょっとかいつまんでご紹介させていただきます。熊本大学ご卒業の後、地元の熊本でＹＭＣＡのお仕事に入られ、現在は北九州のＹＭＣＡの総主事をなさっておられます。その他、社会福祉関係、社会教育関係、いろいろと公職をたくさん持っておられます。枚挙にいとまがございませんけれども、特に青少年問題、国際問題につきましては、私どもが日夜教えていただいている先生でございます。

　なお、今日のこの会は婦人対策室のお骨折りによりまして、二十四日から二十七日まで「二十一世紀展」を含めまして、北九州市の画期的な私ども女性の集いでございまして、その中でも、今日のこの十時から十二時、また、昼食をはさみましての午後のパネルディスカッション、これを私はハイライトだと信じております。そういうことで私自身も、いろいろの雑用は全部かなぐり捨てて、今日のこのトークに私の関心をすべて集めて参りました。色々な方にたくさんご協力いただきました。民生局の方はもちろんでございますけれども、司会から進行、会場の設営、その他いろいろとやりました。昔から俗においしいものは少人数で、仕事は大人数でと申しますが、その通りを実現した今日の会合でございます。たくさんの収穫があると思いますので、しっかり学んでいただきまして、地元に帰りまして、この会場の皆様が、今日の

●パネラー

角　田　房　子（作家）

1914年、東京都生まれ。1938年、パリ・ソルボンヌ大学へ留学。1960年、「文芸春秋」誌に寄稿したのをきっかけに、執筆活動を始める。近年は、日韓関係の歴史に強い関心をもち、韓国に滞在して取材。1988年、「閔妃暗殺」が第一回新潮学芸賞を受賞。主な著書「いっさい夢にござ候－本間雅晴中将伝」「甘粕大尉」など多数。

エレーヌ・ドゥ・グロート（福岡大学助教授）

ベルギー・ガン（ケント）市生まれ。1972年、ガン大学文学部卒業。同年来日。愛知県立大学、京都産業大学でフランス語、フランス文学を教える。1977年から福岡に移り現職。そのかたわら、ベルギーの詩人アンリ・ミショー、フェミニストとして有名な作家シュザンヌ・リラール等の研究に取り組んでいる。

パトリシア笠　松（翻訳業・明治学園講師）

1980年、アメリカ・バージニア大学卒業。専攻は人類学。1980～1983年までＹＭＣＡ英語教師、1983年からＹＭＣＡ専門学校英語部門コーディネーターを務め、1984年から現職。また、1987年には「Ｐ＆Ｃ翻訳サービス」を共同創始、翻訳業でも活躍している。

●コーディネーター

藤　本　新　二（北九州ＹＭＣＡ総主事）

1959年、熊本大学法学部卒業。熊本ＹＭＣＡ、東京ＹＭＣＡなどを経て、1965年から現職。その他にも、北九州市社会教育委員、北九州ユニセフ協会事務局長・常任理事、社会福祉法人北九州市あゆみの会議長、北九州市国際青年年長期行動計画推進会議委員等多数の公職を務めている。

お話を漏れなく伝えていただければ、ご登壇いただきます諸先生方のご恩に報いることではないかと考えております。

簡単ではございますが、皆様つつがなく、今日のお勉強が出来ますことを祈念いたしまして、簡単ではございますが、コーディネーターの藤本先生のご紹介と合わせて、私の願いを申し上げさせていただきました。

どうもご清聴ありがとうございました。

連絡係　それでは、さっそく始めるわけでございますけれども、少し壇上の用意がございますので、その間、皆様方に、事務連絡をさせていただきたいと思います。

今日この会は、十一時五五分に終了させていただきます。そういたしまして、お弁当を引き換えていただきましたら、前の「周防」というお部屋と、それから階段の後ろ側になります「不知火」というお部屋、それが五〇人ずつくらい入るようでございますので、そちらの方に分散していただきまして、お食事をとっていただきたいと思います。

全体会場は、この会館でございますので、時間はたっぷりございます。それで、時間が終わりますまでは、どうぞお席をお立ちになりませんように、終わりました後、お弁当の引き換えをしていただきますようにお願い申しあげておきます。

それでは、さっそく討議を始めていただきたいと思います。

藤本先生のご紹介は、さきほども会長が致しましたので、マイクをバトンタッチしたいと思います。

先生どうぞよろしくお願い致します。

藤本新二（コーディネーター）　安藤さん、ご紹介ありがとうございました。

紹介の仕方も国によって違うようでございます。司会ないしは、その会合の中心になられる方が、例えばその会合のコーディネーターを紹介しますと、それに対して、私ども日本人は、「本日のコーディネーターをさせていただきますＹＭＣＡの藤本でございます」、と繰り返して申します。それをやらないと、何かしら失礼に当たるというような感じがしますね。国によっては、そういうことをすること自体が何か失礼である、あの人は自分を売り込みすぎている、というふうに思われているようなきらいも致します。

さて、私ども今日只今からこのセッション、パネルディスカッションにおきましては、「飛び出せ、世界へ女性たち」、なぜ女性達だけなのかわかりませんが、男性も飛び出したいんです。

今日の時代は、家族はあるが家庭がない、友達はいるけど友情がない、職場はストレスいっぱい。そんな社会

で私達、日常の生活をしている。だからこそむしろ、物じゃなくて心の交わりを、ただ単にコミュニティあるいは家庭、職場だけじゃなくて、世界大的な心の交わりが必要な時代に入って来ているんでしょう。

今日の時代というのは、よく言われます３Ｋ時代、末吉市長も昨夜、申しておりました。高齢化、高度情報化、そして国際化、これは北九州だけが言っているんじゃないんです。日本全国どこでもどんな小さい村でも、この三つを言っている訳ですね。北九州も同じでございます。それほどに日本全体が国際化という面で、問われているということを、決して経済面だけでなくて、私達のコミュニティの問題、あるいは人間としての日本人あるいは、日本の女性・男性という面でも問われていることでありましょう。

そういう問題をとらえながら、今日は、いかにしたら、私達日本の女性が、もっと国際レベルで通用する女性になっていくことが出来るのか。どのような社会になっていけば、私達が住んでおりますコミュニティ、地域社会が、もっと世界的なレベルでと言いましょうか、海外からの方々が住みやすい場所だと、楽しい所だと、意味のある所だというふうにお感じ下さるようなコミュニティになっていくのか。

そういうことを考えながら、そのために、私達は何をどのようにしていったらいいんだろう、何ができるんだろう、ということを身近かな問題として考えていくのが、本日の私達のこのセッションの中心課題ではないか、というふうな気が致します。

国際の問題と、婦人の自立という問題、この二つを結び合わせたのが私達の本日のこの場における課題だ、というふうに考えていきたいと思います。

さて、この問題・課題を一緒に考えて行く上におきまして、色んなアイディアを出して下さったり、データを提供してくださるお三方をまず紹介をさせていただきましょう。

私も眼鏡が必要になって参りました。

私の左隣にお座りいただいております、角田房子さんでございます。どうぞよろしくお願い致します。

東京生まれの東京育ちでございます。二十三～二十四歳の頃、パリのソルボンヌ大学へご留学。お帰りになりまして、文芸春秋に寄稿されたことがきっかけになりまして、執筆活動にお入りになり、とりわけ、これは皆さん方お読みいただけますでしょうか、私は読めませんでね、お聞きしましたら〝みんび〟と読むんだそうですが、〝閔妃暗殺〟で第一回新潮学芸賞を受賞されました。

この付近からが先生の主なる執筆活動の実りでございます、たくさんの著書がございます。

とりわけ本日は、韓国の問題を中心にしながらお話しをいただきます。

お隣が、あっ、それからちょっとこれが問題なんですが、一九一四年東京都生まれ、と書いてある訳ですね。で、生年が書いてありますのは、角田先生の所だけでございまして、他の方は書いてございません。男であれ女であれ、生まれた年が何年かというのを、問うこと自体がむしろ国際的ではない、というふうな感じも致します。

エレーヌ・ドゥ・グロートさん、福岡大学の助教授でございます。福岡大学では、フランス文学と、フランス語の言語学をご指導なさっております。ベルギー生まれのフランス育ちでございますが、先生、そうでもない、あっそうですか。どうも失礼しました。この付近にいま一つ私の国際性のなさが、ボロが出ますね。

一九七二年にガン大学の文学部をご卒業になりまして、その年にすぐ来日なさって、愛知県立大学、京都産業大学でフランス語、フランス文学を教えていらっしゃった。その後、福岡にお見えいただいています。私は一見しましたときに、ああこの人は道を間違ったんじゃないかなと、女優の道を歩くべきだったというふうな感じが致しました。

パトリシア・笠松さんでございます。今日は非常にしとやかに座っていただいていますが、非常に活発な女性でございます。相撲をとったら私の方が負けるだろうと思いますが、一九八〇年アメリカ、バージニア大学を卒業されました。専攻は、人類学でございます。YMCAの英語学校のフルタイムインストラクターとしてお働きになり、また、専門学校の方のコーディネートをしておられました。

現在、明治学園の講師をするかたわら、翻訳の仕事を共同でしておられます。大変素晴らしい翻訳を英語から日本語へ、日本語から英語へ、日本人で英語のできる方と共同体制の中で、立派にやってのけておられます。

ちなみにグロートさんも、それから、パトリシア・笠松さん、お二人共、ご主人は日本人でございますね。お二人共皆さん方の日本語よりもいいかもしれません。私もあまりいい日本語は使えないんです。時々、外国の方々から漢字を間違ったり、文章を間違ったりしますと、「藤本さん、その日本語間違っています」という注意を受けますけどね。それくらい、まさに日本も多少はそういった面では、国際化してきているのかもしれません。

さあ、それでは、このお三方にお話しいただきます。今日は最初に三つの問題に触れていただきます。

一つは、それぞれの国における、とりわけご婦人方の生き方、職業とかあるいは家庭の問題、地域活動への参加の問題、あるいは、地域づくりですね、外国人との接

し方などなど、この全てをカバーできるかどうかわかりませんし、部分的になるかもしれませんが、その問題について、私の国では、あるいはこの地域では、こういうふうにしてやっておりますよと、ご婦人達は生きておりますよという問題が一点。

それから第二点は、そういう国々からおみえになって、日本に住んでいらっしゃって日本を見たときに、日本の社会あるいは日本の女性の生き方は、とりわけ国際という分野においては、こういう所に問題があるんではないか、おかしいよとかね。あるいは、こういう所はすばらしいよとか、お気づきになったポイントをお話しいただきます。

そして第三番目には、私達、日本女性が、あるいは日本の女性が住んでおります地域社会を、こういうふうなことをやったら、あるいは、こういうふうにしたら、もっと国際的に通用する人、あるいは、地域になっていくんではないかというアイディアを、それぞれの先生方お話していただくことになっております。

このために、それぞれの先生方十分ずつお話をいただきます。で、その後、少し追加の意見を述べていただいて、いくつかの問題に関しまして、このお三方でディスカッションをしていただきます。短い時間だと思います。この間に皆さんは、どうぞ、質問でありますとか、あるいは意見を用意して置いて下さい。この中にもたくさんの方々が、身近かな国際交流活動をやってらっしゃると思うんですね。大上段にふりかざしたものじゃなくて、身近かな国際交流活動の事例を皆さん方の方から「こういうふうにやったらいいよ」とか、あるいは、「私、こういうことやっているのよ」ということなどをご報告いただければ、たいへんありがたいと思います。最後に、お一人お一人から、短いコメントを頂戴し、それを、私の方でまとめをさせていただいて、できるだけ十一時五五分に、この会を終了させていただきたいと思っています。

質問ないしは意見がございませんならば、十一時くらいに終わって、後は遊ぶというふうなことでも構わないと思います。

それでは、さっそく進めさせていただきましょう。

一番最初にお話いただくのは、ちょっとしんどい面もありますが、角田房子さんでございます。よろしくお願い致します。

角田房子　皆さまに納得していただけるようなお話を申し上げられるかどうか、自信がございませんけれど、国際感覚とか、国際化、国際人というような言葉、近頃は本当によく聞くようになりました。多くの方々が自分も本当の国際人になりたい、という希望をもっていらっしゃると思います。それは〝国際〟という名前のついた講演

会、ことに女性向けの教養講座というものが非常に多くて、私も何度か呼んでいただいておりますので、多くの方がこれを希望してらっしゃることがわかるのでございます。

しかし、あなたは、どういう人をもって国際人と思うか、ということになりますと、さあーというようなことで、はっきりしたお答えの出ない方もあるように思うのです。

これはもちろん、一つこれが正しいという答えがあるはずはなく、その人その人で自分はこう思うというお考えを、お持ちなのが当然でございますし、それがいいことだと私は思っております。世の中には、国際人とは、英語やフランス語など外国語を流暢に話す人だ、というふうな解釈もあるようです。どなたかが外人のいらっしゃる席で、流暢にお話をされると、「まあ、あの人あんなに英語が上手だ、国際人だわねえ」という言葉が出てくるときがあるようです。

それから、次に、これは笑い話でございますけれど、自分は子供のときからエッフェル塔を、写真だの絵で何度も見ていた。それが、観光ツアーに入ってパリへ行って、自分の目でエッフェル塔を見てきた。見ただけでなく、その上へ昇ってお食事もして来た。本当に私も国際人になったものだ、ということ。この外、面白い例はたくさんございますけど、今日ここへわざわざおいでになった皆様方は、その二つともが国際人のはずはないとお思いだと存じます。もちろん、英語を初め外国語が流暢に話せる、よく理解できるということは、国際人であるために非常に強い条件であることは確かでございます。

しかし、外国語が流暢に話せるから、それだけで国際人だと、イコールでつながるとは私は思っておりません。

それでは、私は国際人とはどういう人を指す言葉と思っているか、それを、これからお話致しますけど、それは皆様にもこうお思いなさいというのではなくて、あなた方が、国際人についてお考えになるご参考になればということでございます。

私は、国際人というのは、国家とか民族の枠を超えて、世界的な視野でものを考えることのできる人、これが国際人だと思っております。

たとえ、英語もドイツ語も、ちゃんとできなくても、こういう視野を持ってものを考えられる人、これは、まず第一の基本的な条件で国際人と思うんです。具体的に申しますと、世界中にいろんな問題がございますね。石油は何十年後に失くなるというような資源の枯渇であるとか、それから環境汚染、どこどこで原爆テストをしたら大気を伝わって、これはもう地球全体に回るというふうな環境汚染であるとか、それから、食べる物がないという飢餓の問題、子供達が飢えている飢餓の問題。こういうふうな平和に対する脅威、地球上の危機について、その解決といいますか、少しでも良くなることに、ほんとにわずかなことでも、自分も役立ちたいという積極的な関心をもって、「人類は」という立場に立って考えることのできる人、これを私は国際人だと思っております。

これは、自分以外の他人の立場になって考えることができる、また、日本人にとってということだけでなくて、他の国の人の立場に身を置いて考えることのできる人、ということでございます。

そして、その他国の方々とのお付き合い、直接お付き合いができなくても、その人々のことを考えるとき、自分だけの物差しで測らない人、これは各国、価値感の物差しというのは違うからです。それを、日本では、これはいいことだと昔から言われ、自分も信じきっているもの、その物差しで、他の国の人を測って、ああこの人、間違っている、この人、悪いとしないで、物差しの違いだなということがわかる、こういうことを私は、国際人の基本と考えております。

価値感の違いということを私が強く感じましたのは、もう二十年も前でございますけれども、ブラジル移民の取材をした時でございます。今は、もうそれこそ国際化が進んでおりますので、戦後、移住した方、最近行った方など、国際感覚を身につけておられますけれども、私は、初期の移民の方々を取材致しました。

それは、明治・大正の時代に出た方々で、本当に彼らは勤勉で、よく働いて、今日のブラジル国における、日本人の信頼を築き上げた方々でございます。

初めに、この人達は日本で美徳とされるものを、本当によく発揮なさいました。

まず、勤勉であること、それから質素であること。倹約・質素というものは、その時代の日本人の美徳とされたものでございます。

骨身を惜しまず働くこと、そうしなければ自分達は成功しない、これはもう世界中どこへ行っても、絶対の美徳だと、彼らは信じておりました。

むりもないことで、彼らは土曜も日曜もなく、朝早くまだ太陽が昇る前に、星の光っている野良へ出て、機械化などは全くないときに、鍬をふるって汗水流して、夕方は陽が落ちてしまうまで、一日働き通しました。

そして、身なりをきれいにするとか、楽しみごとを持つとかいうことは、成功してからのことだとして、日曜日でも、その通りに働きました。

ブラジルはポルトガル語の国で、ポルトガル人を始め、ドイツ人とか、イタリア人とか、多くの外の国から来た移住者たちばかりで成り立った、人種のるつぼといわれ

るほどの国でございます。

日本人にとって思いがけないことは、外の国から来た人々に非難されました。日本人は人付き合いを知らない、日曜日には、手をきれいに洗って、さっぱりとした服装で、教会へ来て、まず神様にお祈りをし、牧師さんのお話を聞き、そして、皆とお付き合いをする。それが誰もがなすべきことなのに、日本人は日曜日も畑で働いていて、教会に来ない。いつもきたならしい泥だらけの服装をしている。美的感覚もない民族だ、といわれたのです。またポルトガル語を習おうとしない、排他的な人間だという非難も受けました。日系の移民にはそんな余裕がなかったのです。ことに農村から出た女の人々、学校で横文字を習ったこともない人々が、ポルトガル語を学ぼうとすることには、今の私達には想像がつかないほどの距離があったということです。こういうことを全く違う物差しで測られたために、非難を受けたということなのです。

私が取材致しました時は、もう七十～八十ぐらいのお方でしたけれども、涙ながらに女の方々が私に話されました。

そのとき、本当に国によって、価値感は違うと感じました。自分の物差しがどこまで通用するか、他はどういう物差しを持っていらっしゃるか。こういうことの考えられるということ、決して物差しは、世界中一本ではないということ。こういうことの考えられる方を、私は国際人だと思っております。

また、後ほど話させていただきます。

藤本新二　ありがとうございました。

それでは、引き続きまして、エレーヌ・ドゥ・グロート先生にお話をいただきましょう。お願いします。

エレーヌ・ドゥ・グロート　初めまして、今日のテーマは「飛び出せ、世界へ女性たち」ですから、女性はどういうふうに世界の世界人になれるのか、今日は仕事と結びつけたいと思います。

そのためにまず、ヨーロッパの女性の生き方について、少しお話ししたいと思います。

今のヨーロッパ女性は、だんだん自分自身に、関心を向けています。

つまり、自分の愛情生活と、そして自分の職業生活、そして多くのヨーロッパの女性が、今、働いています。

小さな子供を持ってても、働いています。

つまり、女性はもう子供に自分の生活を合わせることがなくて、かえって子供を母親の生活観に合わせます。ですから、多くのヨーロッパの女性はまだ小さな子供がいても、働きに出るんです。もちろんそのときは、子供と、一対一で過ごす時間が少なくなりますけれども、

過ごす時間よりも、過ごし方が大事だと思います。それに父親が穴埋めになります。

これは、まだ日本ではなかなか見られることがありません。いまでも日本は、いつも母親が、全部子供の面倒を見ないといけない。父親の存在感が薄いというか。でも、今日は、そのことについて話しません。また仕事の話しに戻りますが、自分から進んで、仕事を選んだ女性にとっては、ヨーロッパ女性でも、日本の女性もそう思いますけれども、仕事が昔と違った意味をもつようになりました。じつは昔も二十世紀の初めも多くの女性は働いていたのです。

でも、その女性にとっては、教育の機会がなかったので、つらい仕事しかなかった。そして、女性はひどく搾取されて、女性が仕事をするのは、社会的な失敗として考えられたのです。

でも今は全然違います。今、女性が、仕事に行くのは自分自身必要とするからです。自分の自立の条件として、仕事をするようになりました。

仕事が女性の自立の条件になり、仕事が今では家にいるときとは違った、自分の可能性を広げてくれるのです。

女性は今、男性と同じように教育を受けることができますので、ずっと家の中に閉じこもると、せっかくの教育がもったいない。

ですから女性は母親としてだけじゃなくて、妻としてだけじゃなくて、また、自分の別の面を伸ばす必要があると思います。

そして、仕事っていうのは、今、社会的な成功のシンボルになりました。

働きに行く女性達は、その女性にとって仕事はまず友情関係を広げてくれます。そして人生にやりがいとか、生きがい、それに刺激を与えてくれます。それとまた、特に孤独を逃れる、避けることができると思います。子供は、あっと言う間に大きくなりますし、そして、特に日本では、時々ご主人が遅くまで、家に帰ってこない。そして、平均寿命も女性には、長くなりましたので、何も仕事がなければ、そして、することがなかったら、もう三十年の間何もできない、つまらない人生が待っていると思います。そして、そのために時々、今、日本では六十歳の女性から離婚、ご主人の退職金をもらってから離婚の要求が出されるんです。つまり女性にとって、仕事はたいへん大事なことだと思います。

その仕事が、どういうふうに国際化に結ぶことができるかということは、やはり女性が社会に出ると、いろいろな広い考えを持つようになると思います。そして、いろんな人と接触することができる。そして、仕事を持たない女性は、ずっと家にいて、自分の趣味に時間を過ご

したり、テレビを見るしかないんです。

もちろん、テレビにもよく外国人がでてきます。そして、テレビのコマーシャルを見ても、多くの外国人が出ています。ですから、そういう女性も外国人を見る機会がありますけれども、しかし、私が街を歩いていても、時々「ああ、ホンモノの外人や」とか言われます。つまり、ホンモノのゴリラとかホンモノのサルみたいなものになります。ですから、本当のパートナーとしては受け入れてくれません。ただ別の世界、別の星から来た人がそこにいるといったぐあいです。

私が、バスに乗ると、混んでても、隣の席が空いていても、誰も座りに来ないんです。ですから少し寂しい思いがします。

しかし、私も今色んな女性、仕事を持つ女性と接触することがあります。そういう色んな仕事を持つ、活動する女性と話をすると、違う国の人でも、日本人であっても、フィリピン人であっても、アメリカ人であっても、違う国の人だということを忘れてしまいます。全然、そういうことを感じないんです。

つまり、ほんとのパートナーになります。色んな話ができます。同じ人間、同じ経験を有する人間として話が合います。ですから、私は、よく思いますけれども、国際化、さっき先生も言いましたが、国際化は外国語を習うとか、旅行するとかも、もちろんそうですが。でも旅行といっても、一週間でヨーロッパ見て回って、アメリカ見て回って、そしてまた日本に戻って、自分の台所に立つ、テレビを見る、これだけでは、国際人になれません。

しかし、仕事を持つとは、自分の環境の中で仕事をするとは、自分の住む町で仕事をするということは、つまり、自分の国から出なくても、世界の中で仕事ができることだと思います。

もちろん、日本の女性にとっては、まだヨーロッパの女性と比べると、仕事を持つのは少し難しいんです。仕事の環境も、例えば、残業があって、転勤があって、まだなかなか難しいんです。

しかし、その社会を少しずつ変えて行かないといけないんです。

その社会を少しずつ変えていくのは、やはり、私達の仕事なんです。

でも、もう私達の役目よりも、次の世代、今の大学生、今の若者たち、今の高校生、中学生、小学生の子供達、次の世代の役目です。

でも、次の世代、次の子供たちのメンタリティーを変えていくのは、それは私達自身の仕事だと思います。

もちろん、言葉では色々なことが言えますが、でも言

葉は、こっちから入って、あっちから出ていきます。ですから、言葉よりも私達自身が積極的に、色んな活躍をしながら、社会を変えていく。次の子供達の、次の世代の、次の若者たちのメンタリティーを変えていくのが、私達の大きな責任だと思います。

どうもありがとう。

藤本新二　ありがとうございました。それじゃ、もうひとかたうかがわせていただきましょう。笠松さんです。よろしくお願いします。

パトリシア・笠松　皆さん、おはようございます。

多分この四人の中、私の日本語が、一番悪いと思います。間違いがあればすいません。もし、私が、アメリカの女性は国際交流をどういうふうにうまくやっているかと、尋ねられたら、私はそれに答えることができないと思います。食べることとか、呼吸をすることのようなとっても自然なことを、どういうふうに説明できるでしょうか。

アメリカの生活では、国際交流は、毎日の生活の一部分です。アメリカの中には、おばあさんとおじいさんが、外国からやって来ている人達がいて、そのおばあちゃんとおじいさん達は、ほとんど英語を話せません。

でも私達は、彼らを外国人と呼びません。そのおじいさんとおばあさん達は、私達の知らない経験を持ち、そして、私達が何かを学べる人達です。

日本では、日本人が外の国と大変違う、そして、日本人は皆同じだという考えが誇張され過ぎています。その事は、一番言いたいことです。

このことは、二つのポイントで日本の国際交流を大変妨げています。一つは外国人との交流です。もう一つは、帰国子女やその両親との交流です。国際交流は、アメリカ人と日本人、日本人とフランス人じゃなくて、日本人と日本人もできます。日本人は違う顔したり、髪の毛の色や目の色が違っている人達を見ると、自分達と同じ人間だと思いません。

それで、外国人達は決まりきった質問を受けます。寿司はどうですか。梅干し好きですか。刺身食べますか。納豆はいかがですか。これらの質問が答えられると、ほとんどの日本人は、国際交流ができたと思って幸せになります。

でも、これは国際交流とは、とってもかけ離れています。

外国人は、いつも同じ質問を受けるので、はい、私は刺身好きです。はい寿司も食べます。はい、梅干し食べます。いいえ、納豆あまり好きじゃない。この答えを書

いて、Tシャツを作りたいほどです。もう、この八年間の間は、何回もこの質問に答えました。

私はアメリカについて、もっと内容のある質問を聞きたいです。私も日本について色々な質問をしたいのです。でも、悲しいことに、アメリカについて質問をしてくれた人は、ほとんどいません。

例えば、私がバージニア州の出身だと言った後で、バージニア州について聞いてくれた人は、いませんでした。この八年間はずっといない。全然ない。

もう一つ、決まりきった質問をよく受けます。日本の生活に慣れましたか。この質問が国際性のなさを私に教えてくれました。

いったい、どれくらい経つと日本の生活に慣れるのでしょうか。私は皆さんに聞きたいと思います。日本人は、国際化に対して壁を作っています。日本人は日本と日本に関することは、世界の国々と比べると、とっても奇妙で違っていると思っています。そして、日本人でなければ、日本人の文化が理解できないと考えています。

もし、日本人がこのことを認識することができて、自分達ととっても違う人種だということを考えるのをやめて、外国人の人々と同じ人間だと考えれば、国際化は、やさしくなるでしょう。市民のレベルだけじゃない。市役所のレベルも国際化について語るとき、日本人でなければ日本人と違うと考えています。

例えば、市役所が先月にフレンドシップクルーズをやったとき、皆さん行きましたか。日本人の北九州市民とは別に、外人あてに手紙を出そうとしました。その分け方に私はちょっと傷つきました。というのは、私は北九州市の市民でない、と考えられたと思ったからです。

でも私は、この街に八年も住んでいるのです。税金も払っています。市のお手伝いもたくさんしたいと、いつも考えています。でも市民ではなく、外国人という訳です。すごく悲しい、私は。

日本人は帰国子女とその両親との交流を持つ機会があります。学校は帰国子女の持つ経験を、一般の学校で活かすように将来するべきです。帰国子女を助けるかわりに、学校や子供達や日本の社会は、帰国子女を型にはめようとします。日本の社会は、帰国子女に彼らがほかの子供たちと違っていることで、帰国子女に、恥ずかしい思いをさせたり、外国での経験を忘れさせようとします。

子供達にとって、ほかの子供との交流は、大変重要です。帰国子女は、ほかの子供に気に入るようなことをします。このことは大変な損失だと思います。とっても悲しい状況だと思います。

最後は、全てのことは、この単純なルールにあてはまります。皆さんが国際人になりたいと思えば、常識的な

マナーに従うことです。常識的なマナーの一つは、隣の人を大事に思うことです。隣の人は、日本人であろうが、外国人であろうが関係ありません。

例えば、人を指すことが礼儀正しいことでしょうか。若いお母さん達は、外国人を指しながら、子供達に「あっ、あの外人見てごらんなさい。」と言っています。知らない人の後ろで、「おい、日本人こんにちは」と言うことは、礼儀正しいでしょうか。

なぜ、知らない外国人の人に「ハローハロー外人」と大声で言うのでしょうか。外国の人達を同じ人間として、大事に思って下さい。そして日本人と違っていることを楽しんで下さい。

もう一つのポイントは、日本人のことを、大事に思って下さい。日本人もそれぞれ違うということを出すようにして下さい。日本では、お母さん達が子供達の生活に、大変大きな影響を与えています。お母さん達が、これらのことを子供達に十分教えて下さい。お母さん達もこれらのことを実行すれば、国際人になることができるでしょう。

ありがとうございます。

藤本新二　私どもは小さいときから日本の社会で生まれ、日本の社会で育って来ております。どこがどう違うのかということは、なかなか見えない。慣れてしまうとそれが当たり前だ、それだけが正しいというふうに考えてしまいがち。

だけど、今お話しいただいたお三方のパネリストのお話を伺いますと、世界には、たくさんの文化があるんだなあ、ものの見方・考え方があるんだなあ。日本だけが世界に唯一の文化、絶対正しい文化を持っているんじゃないんだ、それぞれの国には、歴史があり、文化があり、ものの見方があり、考え方があり、また、価値感がある。それをお互い認め合っていくという、そのことが大切であって、そしてまた、国際、国際というけれども、国の枠を超えて、人間としてお互いに付き合っていけるというその姿勢が非常に大切だと、この二点は皆さん方、共通してたと思うんですね。

そういう意味におきましては、国際という言葉にかえて〝民際〟という言葉にしたらどうか。言葉を変えたから、変るというわけではありませんがね。人民の民の際ですね、たみのきわ、人と人との間、この問題が国際なんだというふうにおっしゃる方もあるくらいですね。

いろんなおもしろいお話も出ました。この北九州のフランス語学院のコモンさんという方が、街を歩いていると今でも、依然として「お、外人、外人」と言うらしいんですね。で、「外人、外人」それはまあ、日本人の癖だからしょうがない。その次にくるのが、アメリカ人とい

うんですね。そうすると、コモンさんはフランス人だから、非常にいやだということを言っておりますね。その次にくるのが、〝ハロー、ハロー〟という言葉だという。〝ハロー、ハロー〟で、これは彼もわかるんですが、ハローという言葉でも、われわれは（明るい感じで）「こんにちは」というふうに機嫌よく言うといいですがね、（暗い感じで）「ハロー」なんかねえ、犬コロでも呼ぶような、そういった雰囲気を感じます、と言っています。

最後には、言葉余って、"This is a pen"と言って逃げると言うんですがね。あの意味もない会話。外国人はアメリカ人だけじゃない、今一六七の国が世界にあるんですね。それぞれに異なった文化をもっております。そういう中で、そういうことを前提にしながら、角田先生は、真の〝国際人〟とか〝国際化〟とか、あるいは、〝国際〟とかいうことは、明確な言語規定はなかなか出来ない。が、世界的な視野でものを考え、そして、行動できる人だと。この世界には、異なった文化がたくさんある。そのことを認めながら、その異なる文化を承認しながら、相手の物差しに立って、人と人との交わりができる人、そういう人が、私にとっての国際人だということを、教えて下さっております。

グロートさんは、ヨーロッパの女性が、いま特に自分自身を中心にして、関心を寄せてきている。ですから、自分の自立のために、あるいは自分の持っている能力とか才能を花開かせるために、職業、職場あるいは社会進出を一生懸命図っているという、その現状をお話ししていただきながら、そのことによって世界を体験する機会が、非常に恵まれてきていることを示して下さいました。職場進出、社会進出ということを通しての女性の自立というのは、ただ単に非常に狭い分野のことではなくて、世界に目を開いていく、その視野の拡大のためにも非常に大切なことではないのかと。

先生も長い間日本の社会に住みながら、お感じになっていることは、やはり先生がごらんになった日本の方々が、「あっ、ほんものの外人がきた」というふうにね、受けとめて下さる。そのことは逆にいえば、この異なる、異質なものを認識するということなんでしょうね。まともにつきあってくれない。特別扱いだ。それは、海外からおみえになったお客様にとっては、大変迷惑なことであって、もっと一人の人間として、一人の女性として、皆さんと同じように当たり前につきあっていただきたい。それができたときが、日本の方々が国際化されたときではないのか、というお話をいただいております。

そのように私達がなっていくことなしには、次の世代である子供達の国際化というのが、非常に難しいのではないかということですね。子供の国際教育という面から

も、親がまさに国際化しなきゃいけないというテーマをお話しいただいおります。

笠松さんは、アメリカでは我々が話しておりますような国際化というのは、特別なことじゃなく、日常の生活の一部で、当たり前のことなので、とりわけそのことだけをポンと持ち出して、アメリカで話をすることは基本的には問題にならない。それは当たり前のことなんですね。そのような前提の違いを示されました。裏返すならば日本という社会は、それを特別扱いしなければ、問題解決しないという特殊性があります。

ここに非常に大きな差があるわけですね。この付近を一つ我々は、はっきり認識できたと思います。ですから私達日本人は、まさにあまり熱心にまじめに考えすぎるがゆえに、この国際という面において、一つの壁を作ってしまっているじゃないかという感じ方をお話しいただいています。

国際の問題を考えていくときに、私たち日本人にとっての外国（人）とは、皮膚の色、髪の毛の色、目の色が違うのが外国人であって国際である。それらが一緒であるアジア人の問題は国際の問題ではない。あるいは帰国子女の問題等は、国際の問題ではないのかということですね。そこには非常に大きな国際の問題がある。その付近のことをもっと大切に、私達は考えていかなきゃいけないんじゃないか。それらを含めて私達日本人は、海外からおみえになっておられる方々、あるいは海外での生活体験を非常に長くお持ちになった方々を、日本の風俗文化、価値感に適応させようということでもって、国際化を進めてるんじゃないか。それは違う。やはり角田先生がおっしゃったように、異なった文化というのをお互いに認め大切にするということなしには、私達日本人も日本の女性も、そして日本の地域社会も、まさに国際化ということは実現できないだろう。

多様性の容認といいますか、多様性を受け入れていくということです。その付近がやはり同質文化といいますか、よくホモ―ジュニアスという言葉が使われますが、同一文化の中でのみ日本人は生きれるという、その枠がある訳ですね。これを打ち破ることなしには、国際化というのは非常に難しいだろう。そしてもう一つ私達が忘れてはならないことは、国際化、国際化ということで私達は外に往々にして目を向けがちですけど、国の交わりあるいは異なった国の人々との交わりを考えていくときに、もっと私達は日本という国、こういう歴史を持った、こういう文化を持った、こういう言語を持った、風俗習慣を持った日本という、私達が今住んでいるところのことについてもっと深く理解する、学ぶということ、それをきちんと伝えていくという、その部分が欠落してはい

ませんか、という大変耳の痛いことばもあったような気が致します。

ありがとうございました。

さて、少しこの付近をめぐってお話をいただきたいのですが。

角田先生！　角田先生は、とりわけ韓国のことに関しましては、たいへんご造詣が深い訳ですが、韓国を中心としてアジアの女性、日本以外のアジアの女性につきまして、この付近の国際の問題について、お話ししていただける部分がございましたら、もう少しお話しいただければと思います。どうぞお願いします。

角田房子　私は今年の一月末に、先程ご紹介くださいました、「閔妃暗殺」を出したのでございますが、これを書くためにだいたい三年かかりました。この仕事を始めますまで私は、当然日本人として知っていなければならない日韓の歴史を、ほとんど知らなかったのでございます。私は、自分の無知に驚いて、この本を書こうと決意した訳でございます。

外国とか、国際化とかいう言葉を使うとき、私達は無意識にも欧米、いわゆる白人社会だけを頭に浮かべるのではないかと思うのです。自分の仕事の上でも、私が第二次世界大戦前のフランス留学生だったということで、文芸春秋の仕事を始めましたときも、フランス語の取材ができるからという理由で、ヨーロッパのものばかり書かされておりました。自分もそれに何の抵抗もなく、やっていたのでございますけれども。今のように日本が国際社会での孤立を深めているときに、私は日韓の歴史について、自分の無知を知る機会を与えられたのでございます。もちろん欧米についての知識は必要がないなどと、無茶なことを言っているのではございません。

けれども、欧米に向けるのと同じ関心、同じ程度の知識、少なくとも五分と五分との目をくばりを、私達は、自分の身近かなアジアの国々、アジアの人々に向けなければならないということ。何を当たり前のことを今頃言っているのかとおっしゃるかも知れませんが、私自身の経験ではどうもお恥ずかしい次第ですが、欧米へばかり関心がいっていたのではないか、ということです。

この閔妃暗殺事件が起こったのは、朝鮮の李朝末期で、明治二十八年です。まだ百年にちょっと足りない事件ですが、日本人の大集団が、朝鮮の王宮になだれこんで、王妃を暗殺したという国際犯罪、なんともこんなことを日本人がやったのかと驚き、首をたれるほかはないような事件でございました。これを私はじめ日本人のほとんどが今まで知らなかったのですが、韓国では今もＴＶで芝居で小説で、繰り返し扱われていて、中学生でさえ知っているというのです。そして日本との間に何かイヤなこ

とが起こったとき、日本人は我が国の王妃を虐殺するような人々なんだということで、対日感情の悪化をあおる事件だと聞いたのです。これをお聞きになって皆さまはどうお思いになりますか。

被害者側である韓国では誰でも知っていて、加害者である私ども日本人がこの事件をほとんど知らないのです。しかし、日本人は、歴史に関心がないから、この事件を知らないのも当たり前だと言えることではありません。

日本人は教育程度も高いし、ことに歴史に対する関心が強いといわれている国民です。いまは歴史ブームという言葉さえよく聞きます。この閔妃事件と他の事件とをちょっと比べてみますと、マリーアントワネット、あのフランス革命の直後に処刑されたフランスの王妃でございますね。マリーアントワネットと言えば、誰でも知っています、日本では。この王妃については、シュテファンツァイクの非常に優れた伝記もございますし、またこうまで一般の人がよくご存知なのは、宝塚のベルバラのせいだとは思います。いわゆるミーチャンハーチャンといわれる人々も、この王妃はステキな生活をしてたんだ、北欧の貴族のフェルゼン伯爵というすばらしい恋人を持っていて、とても生活を楽しんだ人だと、よくそういうことまで話題になさる。それはそういう男性の存在は、シュテファンツァイクの伝記の中にも、ちゃんと書かれております、実在の人物でございますけど、そんなことまでよくご存知です。

時代を比べますと、フランス革命は、一七八九年ですから、今から約二百年前のこと。この朝鮮の王妃を殺した事件は、明治二十八年、一八九五年でございますから、まだちょっと百年に足りない新しい事件でございます。しかし、閔妃暗殺を知らない日本人も、このマリーアントワネットのことは、大変よく知っている。知っているのが悪いなどとは決して申しません。フランス革命というのは世界の歴史の中の大事件、どれほど知っていても知りすぎているということはない、本当に大事なことなのですが、日本との関係を考えてみましょう。

二〇〇年前のフランスとも、フランス革命とも、日本という国は直接の関係はございませんでした。閔妃暗殺はいかがでしょうか。日本人の集団が下手人であり、その首謀者は、これは信じがたいことでございますが、そのときの日本公使なのです、それで、日本は世界の国々から指弾されたので、何とか形をつけなければならなくなり、三浦公使を始め、この事件に関わった人五〇人以上を日本へ送還して、広島で裁判をしました。そしてその結果は、翌年に証拠不十分で全員が免訴、無罪になっております。証拠不十分どころか、アメリカ人やロシア人など目撃者はたくさんいたのです。しかも「私が王妃

を殺した」という人がなんと二人も三人も出てきている。証拠不十分どころか、ありすぎるほどの証拠があったのに、日本は全員を無罪にしてしまった。こういう時代であったということです。

この事件に対して、韓国の方々が今も反発なさるお気持ちはよくわかります。しかもこれを話題にしたとき、日本人が、「そんな事件あったの、嘘でしょう。日本の公使、（今の言葉で大使でございます）大使がそんな国際犯罪の首謀者だったなんて、そんなことあなた方作り話してるんじゃないか。」とまで言う。どんなに腹が立つかと思います。何もこの閔妃暗殺事件だけではございません。これは一例ですけれども、日本人はどうも日本のために、暗いつらい歴史を歩まねばならなかった、朝鮮半島の歴史を知らなすぎるようです。これは、私は非常に問題だと思い自分が無知であったことへの反省をもこめて、閔妃事件を書きました。これからも韓国の歴史を書いていこうと思っております。

日韓のおつきあいがうまくいくかどうかを考えますと、時には私は絶望的な気持ちになる時さえございます。それほど両国間には多くの無理があります。しかし同時に、日韓の関係をちゃんと日本人がやっていくかどうかということは、日本が国際社会でちゃんと生きていけるかどうかの、バロメーターになるとさえ言われております。

試金石であると。そうであれば、ぜひとも私は、大衆参加の日韓友好関係を築きたいという気持を強く持つしだいでございます。

ご婦人方にこの際一言申し上げたいのは、「まず日韓関係の歴史を知ることから始めていただきたい」と。申し上げたことに対してあなた方は「私は韓国と何の関係もないし、旅行もすることはない。韓国の人とおつきあいすることもないから、自分が歴史を学んだところで何の役にもたたない。」というふうには考えないでいただきたいということです。今、政治的にも、経済的にも、韓国と直接の交渉を持っているのは男性が圧倒的に多い。ほとんど男性がやってらっしゃいます。政府も、民間も。しかしその後に、日韓関係の正しい歴史を知って、政府の言葉をかりれば遺憾の念ですが、「申し訳ないことであった。どんなに私達はあなた方の気持ちを傷つけたか。再び誤りはせず、対等の人間として、許して、仲良くしていただきたい」という気持ち、謙虚な気持ちを持つ、女性がいるかいないか、今はほとんどないに等しい状態でございますが、女の方々にこの厚い層ができてこそ、真の友好関係は築かれると私には思われます。

国際人になるというようなことも、何か自分の生活から飛び離れた遠いことではなくて、どうぞ、自分も関与する、いい厚い層を作る中の一人になる、ということか

ら始めていただきたいと思います。「私は関係ないの、何を読んだって、何を考えたって、何の役にもたたない。ただの主婦なんですから。」とは決して思わないでいただきたいということでございます。

藤本新二　角田先生、「閔妃暗殺」はどこから出されておりますか。

角田房子　出版社ですか。新潮社でございます。

藤本新二　是非、まだの方はお読みいただきたいと思います。十七版まで出ているそうですね。一九一〇年、日韓併合される前の、日韓の非常に歪んだ歴史の中でのことですけれども、一九一〇年に日韓併合されて、三十六年間の植民地といいますか併合された歴史の中で、それ以前もそれ以後も色んな歴史的事件が生起しておりますね。私達は個人としてはそれに、直接関わらなかったということであっても、やはり国の歴史として多様な関わりがある。そのことにやっぱり民族はこだわりとかあるいは思いを持っております。被害を受けた側はいつまでもそれを忘れません。しかし加害者の側というのは都合よくそれを忘れてしまう、それでいいのかどうかですね。

私達の周りにも、日韓の歴史はまだたくさん生きている訳でしょう。戦時中に強制連行された方々が、炭坑その他で働いてらっしゃった。その方々、この北九州に今も住んでおられます。日本の軍人のための従軍慰安婦として連行された韓国の女性が、まだ黒崎の方に長らえて生きておりますね。こんな問題にどう我々は対応するのか、あるいは創氏改名をされ、そして自分の名前さえ用いることができなかった人達。こういった非常に痛ましい歴史、そしてまた中国との関係の中で思い出しますのは、例えば南京大虐殺ですね。それで日本側の発表と中国側の発表は違いますが、三五万人とも四〇万とも言われる中国人を、殺した日本の軍隊の行為というものを、一体我々はどう今の時代において総括するのか。

日タイの問題も同じようにありましょう。フィリピンの問題もございますね。こういう問題は、今も生きているんですね。あるフィリピンの女性がおっしゃいました。日本のご婦人方の婦人の自立の会議に出た。そのときに日本のご婦人方は、非常に素晴らしい日本の婦人の自立に向かっての歴史をお話し下さった。それは、素晴らしいと思う。一九七五年のあの国際婦人年以来の成果であろうと思う。しかし同じアジアにありながら、私達フィリピンの若い女性達が生きていく道は大きくは三つしかないんだと。地元の産業・企業はありません。ですから貧しい生活を農村その他で続けるということは困難です。ですからほんのひと握りの金持ちの家庭に、メイドとして入ることか、あるいは、日本などの優遇措置を受けた企業の職員として、働き口を与えてもらえるか、自分の

体を売って男性の相手をして生きていくか、この三つしかないんです。こういう状況に置かれている私達フィリピンの女性の自立のために、日本の女性達はどう共に働いて下さるのですか。それを聞きましたけれど、答えはありませんでしたということですね。

そういうジャパユキさんとか言われている人々の問題も含めて、在日朝鮮人、韓国人の問題も私達北九州の国際の問題なんです。この問題にどう私達は関わっていけるんでしょうか。という非常に身近かな問題も含めて、歴史もやはり学んでほしい、そういうご指摘でございます。どうもありがとうございました。どうも国際、国際というと、欧米のことのように感じますけど、そうじゃなくて私達の住んでおりますアジアにも、非常に身近かな問題がたくさん歴史を通じて転がっている、このことも忘れてはいけないというご指摘でございました。ありがとうございます。

さて、グロートさんね、ヨーロッパもアメリカと似かよった面はあろうかと思いますが、ただ非常にたくさんの国がありますね。それぞれの国は異なった文化・歴史を持っていると思いますが、どうなんでしょう、ヨーロッパは一つなんでしょうか。国が違う、民族が違うということで、民族間の戦いとかコンフェリクトがあるのかないのか、その問題、どういうふうに解決してらっしゃるのか、少しお話しいただけませんか。

エレーヌ・ドウ・グロート　今、角田先生のお話を聞いて、そして日本人は韓国人やフィリピン人に対しての態度というか、そしてヨーロッパにもそういう問題があります。今、もちろんヨーロッパにも色んな国があって、人口が混じっています。つまりフランスでもベルギーでも、イギリスでも、そうなんですけれども、多分、私が分かっているかぎりでは、少しずつ黒人問題が解決、終わってしまうんですね。ですから人種差別ですか、少しずつなくなる、よく分からないがそういう感じがします。しかしヨーロッパにとってはそれは初めての問題なんです。まだ全然解決できない。逆にだんだんひどくなるんです。

なぜアラビア人がヨーロッパに入ってきたのか、オイルショックの前にヨーロッパは非常に豊かだったのです。そして炭坑の仕事をヨーロッパ人はしたくなかったんです。つまり工場で働くのもしたくなかった。じゃあアラビア人を呼んで、別に呼んだわけではなくて、アラビアの国も色んな貧しい人がいたから、ヨーロッパに働きにいこうと思った。そしてそれがうまくいったのです。でもオイルショックの後は、非常に日本の経済も落ちて、豊かさがなくなったのです。ヨーロッパ人も昔したくなかった仕事が、またしたくなったのです。結局、経済問題と共に色々な問題、そして人種差別が始まったのです。今でもパリに行っても朝、道の掃除をするのは全部黒人かアラビア人です。喫茶店とかカフェーには、ここは、黒人あるいはアラビア人は禁じられています。入ってはいけない。こういう問題が今多いのです。差別がある。

ですから、それは日本人とアジア人の問題だけでなくて、すべての世界中の人間としての問題だと思います。どういうふうに解決できるかどうか私もよく分からない。ただ一人一人がその問題を自分で解決するべきではないかと思います。つまり自分だけそういう差別を起こさないようにとか、自分一人ではあまり何もできないと思うんですけれども、自分から始めて、努力するしかないと思うんですけれどもね。

藤本新二　すべてのことは一人から始まる、そこから広がりが出てくるような感じが致します。ありがとうございました。

笠松さんね、今出ましたアメリカの問題、黒人問題が一つ歴史的にありますね。もう一つ最近私が気がつきますのは、よく文化の違いといいますか、アメリカは先程申し上げたようにメルティングポットオブヒューマンビーイング、人類の坩堝（るつぼ）、あるいは溶鋼炉と多様な民族が混ざって、一つの坩堝（るつぼ）の中で生きているということがいわれてきましたが、少し近年になって変わってきている。これはカナダの影響でしょうか。カナダはそれとは違ってモザイクカルチャーというふうにね、いろんな民族が、各々独自の文化・歴史を守りながら、一つの国の中で生きていくということを、大切にしてきた国なんですね。その付近の影響を受けて、アメリカでもそんなモザイク文化の問題が出てきている訳ですね。そのいずれかについて話してくださいませんか。どちらでもかまいません。

パトリシア・笠松　アメリカの方を。

アメリカとヨーロッパは多分同じ感じですね。アメリカの方でも社会のレベルは一番大切。色んな人種差別があります。

だいたいお金のない人達は、今ごろはメキシコ人が一番問題ですね。メキシコ人は今すごくアメリカに入って

来ました。その人達は、レーバーユニオン労働組合に入れなかったでしょう。だから給料がものすごく安い、その人達は他のアメリカの人達の仕事を奪うというかな。もっとお金持ちの方の人種差別は、今日本人ですね。日本人ともう一つはユダヤ人ですね。それも長い歴史がありますね。ユダヤ人の差別。だから社会のレベルは大切、アメリカの方は。今はもう黒人の問題はだんだん少なくなりました。

藤本新二　むしろそうしますと、かってからずっとアメリカ社会を特徴づけた階層社会で wasp, wascx, その他の白人、yellow black という問題はどうなりましたか。

パトリシア・笠松　でも今は、もうちょっと混ざってしまってます。

藤本新二　アメリカ社会は伝統的に階層社会ですから、白人で、アングロサクソンでピューリタン。あるいはプロテスタントの教会のメンバー。この人達が最上級で、その次にくるのが白人で、アングロサクソン系のカトリック。ケネディ大統領はカトリックでしたね。この人が大統領になったときには、そういう面でも問題になったくらいなんですね。そして他の白人がいて、黄色人種がいて、黒人がいて、そして、その他のメキシカンなんかも入るという順序になっていた訳で、その付近がずいぶんと変わってきたということです。アメリカの歴史も黒人の問題も含めて、ずいぶんと変わってきている。それだけやっぱり社会が好ましい方向に進展している。しかし、これは決してすべてが終わったものでないことは、皆さん方も新聞あるいはラジオ、TVでご存知のことですね。

そういう多様な問題は、やはりどこの国でも抱えながら進んでいく。その問題を解決しようと、マイノリティー（少数）から始まって、全体の運動に広がっているという、歴史をみることができると思うんですね。私達のこのコミュニティもそうありたいと思います。

さて時間がなくなってしまったのですが、あと二十分くらい、みなさんの方からご意見とかご質問、あるいは事例発表等を、していただきたいと思います。遠慮なく、ここは決してお互いに、敵同士が集まってやっつけてやろうという、そういう会合ではありません。お互いが味方です。どうぞ味方同士の会合として、気楽に話して下さい。ご自由にお願い致します。

質問者　沖縄県から参りました伊波圭子と申します。パネリストの皆さんの目から、日本の婦人の生き方をどう御覧になりますか。良い点、悪い点を指摘していただけたらありがたいと思います。

藤本新二　日本の婦人の生き方で、良い点悪い点お気づきの点を、お話下さいということでございます。それじゃあグロートさんからお願いしましょうか。

エレーヌ・ドウ・グロート　色々あります。良い点と悪い点が色々とあると思いますが、そうですね。初めて日本に来たとき、一つカルチャーショックがありました。というのは、日本に来て初めは京都に住んでいました。そして、もちろんお金もあまりなかったから、小さなアパートに住んでいたんです。私が買い物に行く時とか、仕事に出掛けるとき、いつも階段に色んな女性がお話していました。そして買い物をして戻ってくると、まだその女性たちが立ってお話ていた。また、夜、仕事から帰ってくると、またお話していた。ですから、一日皆な何してるんでしょうかと。さっきもお話したように、ヨーロッパは多くの女性が勤めている。そして、ヨーロッパは個人社会ですから、あまり他の人と長い時間話することはない。朝おはようとか、こんにちはとか言うだけなので、それが少しカルチャーショックだったんです。そして、今でもそういう女性がいると、私の働いている目から見ると、少しかわいそうというか、一日中ずっと家にいて、子供の世話、もちろん子供の世話は大変ですし、必要なことで素晴らしいことだと思うんですけれども、それだけで、一生過ごすのは少しかわいそうっていう感じがします。もちろん、それはすべての日本女性ではなく、一部分だけなんでしょうけど。

そして、だんだん日本に住んでみて、最初の印象と違ってきたのは、最近では多くの女性が働きに出て、働くだけではなく、色々な活動に参加していると思うんです。そういう中で、色んなすばらしい女性と会うことができるようになり、だんだん日本もヨーロッパみたいになると思っています。

それと一方で、もう一つの日本の女性の生き方で、そうですね、日本女性だけじゃなくて、男性も含めてもいいんですけども、非常に親切で助け合う、それは、日本人皆なんです。でも、助け合いという気持ちを持っている男性との接触は、仕事の場だけなんですけども、近所の場合は、例えば一つの個人のエピソードなんですが、十年前に母が亡くなったんです。急に病気になって、帰らないといけなくなったんですが、その時、私にはまだ小さな子供がいました。そして多分亡くなるだろうとか、色々世話しないといけないから、子供を日本に置いといたんです。面倒見る人が全然いないから、皆近所の人に助けてもらったんです。

それも非常に驚いたことで、ヨーロッパだったら絶対にないと思うんです。だからヨーロッパは個人主義社会、それも良い面がありますけども、日本はそうじゃないけでも、それにも良い面があると思います。近所付き合い、近所の助け合いとかですね。そういうのは非常に親切な面で、素晴らしいことだと思ったんです。

また日本の女性、私の学生にいつもアドバイスするのは、やはり、家はもちろん近所付き合いも大事で、それで良いんですけども、仕事も大事です。一生自分に合う、一生続けられる仕事を選んで下さいとアドバイスしています。それも一つのアドバイスというか、皆さんに言いたい。

藤本新二　ありがとうございました。それじゃ次は笠松さん、お話いただきましょう。

パトリシア・笠松　私もだいたい同じですね。社会人という意味では悪いと思う、日本の女性達は。でも、心を持っている人というのはすごく良いと思います。すごく優しい。私の近所の人たちはいつも私を手伝ってくれて、助かります。すごくうれしいです。でも、もうちょっと社会人になる方が良いと思います。日本の婦人達はだいたい自分の意見で話はできません。いつもトピックは子供、子供ばっかり、子供と天気、その二つぐらいですね。もうちょっと社会人になるほうが良いと思います。それだけ。

藤本新二　はい、ありがとうございました。角田先生ね、ちょっと韓国のことをお伺いしたいんですが。私の友人の奥さんに、友人というのは牧師なんですがね、その奥さんでミョンジャさんという韓国の女性がおりましてですね。彼女本も書いておりますが、日本に来まして、そして、日本のご婦人からぜひ遊びにいらっしゃい、近くにきたらぜひ遊びにいらっしゃいと言われたんで、たまたま近くへ行った折、立ち寄ったら大変迷惑がられたと言うんでね。本当にそう考えないんだったら、そんな言葉をかけなきゃいいのに、というところから出発して、日本には挨拶程度の言葉とか、あるいは本音と建前とかいうふうな、切り替えがあるということに気づいていく、その歴史を本に書いておりましたけどね。韓国の女性と日本の女性の違いといいますか、お気づきの点がありましたら、少しお話しいただけませんか。

角田房子　今のお話初めて伺いました。大変残念なことだと思います。韓国の女性とあまり広くお付き合いしたとは言えないのでございます。というのは、私は韓国語ができませんので、あちらで日本語のできる方々としかおつき合いがないのです。それから私、先程申し上げましたように、あちらの学者さん達のご指導を受けることを、主な目的として韓国へ行きますので、具体的には、ソウル大学の先生方、教授方と、そのお弟子さん達だけお付き合いしておりますので、いわゆる知的水準、どこの国にも上下ございますが、その最も高いところの方々としかお付き合いしていない。もちろんホテルの中とか、買い物で韓国の女性と接してはおりますけれども、そう深くお話が、私の語学の弱点のためにできないということ

とがございます。前提はそういうことですが、今ご質問を受けましたことについて答えますと、これは女性だけとはいえないでしょうが、特に女性で私感じますのは、日本の女性よりも社会問題とか、政治というものに対して非常に強い関心がおありになり、実感をもって語られるということです。それは平均して韓国の女性の方が日本より教育も高く、知識も高いからということではございません。そういう点では日本の女性は恵まれているのですけど、これも恵まれていたせいでしょうか、私共日本人は、民族として滅ぼされてしまうというような、ひどい目に会ったことがないんです。それから、沖縄とか硫黄島など、確かに日本の領土での戦争は、一部ございましたけれど、日本内地に住んでいる私共が、自分の目の前で、戦争によって家族が殺されるという悲劇を、体験しておりません。そういうところに、やはり今日の差が出たんじゃないかと思うんです。韓国の方々の前の大統領全斗煥への突き上げ、学生さんだけでなく、一般市民、女の人も激しく動いてますでしょ。日本ではリクルート問題に対して、どれだけ女性の声が表面に出ているか、この差ですね。軽々に私どっちがいいとか、悪いとか、だから日本人もと、そうは申しませんけれど、明らかにここに違いがある。ということは、韓国の女性にとって政治問題、社会問題それから、国際舞台での韓国の位置などということが、もう彼女たちの生活と直結している、死活問題、今日の問題、自分の夫、子供に直接関わっている問題だということを、実感をもっておられる。ここが違うと思います。

でも、日本人もまた、今日、わたしたちも一日として他国と無関係で暮らしてはいないんです。人口の少ない農村とか、漁村にいてもそうだと思うんです。自分の口に入れる食べ物を考えましても、もう日本だけで食べてる訳ではなくて、色んな意味で他国とのかかわり合い、世界の中の日本というとらえ方をしなきゃ、私達の生活自身が成り立たないのが事実なのですけれど、まだ日本の女性の認識はフワッとしているようです。

そこで、ここから後は、自分も含めて日本人の悪いところ、私このパネリストの中でたった一人日本人でございます。良いところというのは、あえて申してもなんにもなりませんから、注文なり、反省だけを申しあげますけれど、そういう点でなにしろフワッとしていられる条件が私達にありますので、なんとかもう少し積極的に知識を持とうと、社会とか政治とかいうものに。そんな高い、難しい本を急に買ってこなくても、まず毎日の新聞から読む場所を社説なりそれから、国際関係の記事なりに目を通していく。そして、ああそうかと知識を得るだけでなく、それを基にして自分の考えというのを、少し

ずつ確かめていくということを、していったらと思うのでございます。そうすれば、例えばアフリカで、今非常に飢餓の問題がある。子供達が日に日に死んでいくというようなものを見たときにですね、そういう写真なんかを見たときに、ああ日本に生まれてよかった、日本人はちょっと口に合わなかったら、捨ててもいいほど食べ物があるからよかったねと、自分さえ良ければいいのかという読み方ではなく、こんなに私達は豊富な食べ物に囲まれて暮らしているのに、この人達になんとかしてあげられないのかということ、もちろん個人としてなんにもできないかもしれませんけど、それは寄付を集めるときの、例え一〇〇円のお金でも形になっていくと思いますし、日本政府がそれを積極的に助けようとする時、国民からの拍手が起こり、ぜひやってあげてくれという気持を持つか持たないか、色んな差が出てくるのでございます。ですから、まずもっと社会に関心も持たねばならないということ、関心を持つためには、その基本になる知識を持たなければなりませんので、身近かなところからどこの女優さんが、歌手が離婚したとかしないとかいうのを読むのをちょっと減らして、もう少し真面目なものを読んで、それについて考えていく。そうなれば自然にそれがご主人との話題にもなりますし、そうすれば自分の考えがもっと広まったり、また、夫に影響を与えることもできるというふうに思うのです。以上でございます。

エレーヌ・ドゥ・グロート　すみません、私、あと一こと言ってもよろしいですか。今先生も言いました。私達ね、一人ひとり何か小さいことでも出来ると思う。小さな出来事、おとといなんですけれども、私京都に行きました。つまり、昔の学生の結婚式に出席するために行きました。そして昔の色んな学生と会うことができて、色々話をしたんです。その中の一人の学生の話を聞くと、非常に感動しました。彼女も色んな外国に旅行しましたんですけども、新聞で読むとやはり日本に住んでいるアジアの留学生は、色々な問題があって、日本の円も高いし、生活が厳しい。そこでその留学生が自分の国に戻って、日本の悪い点しか見ていないから悪い点とか、悪いイメージを広める。自分がカナダやフランスに旅行をしたとき、いつもその国の人は親切にしてくれるのに、日本に来る留学生がこんなに、日本や日本人に対して悪いイメージをもって帰るのは、日本人として非常に悲しいと言って、自分でも何か出来ることがあるのではないか、何かしたいと考えて、彼女は大阪に住んでいるけれども、市役所に行って何かしたい、何かありますかと聞きました。そして、そういう留学生の日本の親になったらいいでしょう、とそういう手続きをして、ある台湾の留学生の日本の親になりました。彼女も結婚したばかりで、そんなに

お金がない。でも週に一回その留学生が食事にくる。たいして食事は出来ない。自分の家族と同じ食事ですけれども、そういうふうにいろいろ話をして、そして食事しながら、なんとなく国際交流に参加している。そんなのは、難しいことではないと思うんです。皆できると思うんです。そういう話を聞いて非常に感動しました。そこからでも皆さんどうでしょう。今ふと思い出してちょっと伝えようと思いました。

藤本新二　ありがとうございます。

パトリシア・笠松　同じことでもう一つは土、日のホームステイはどうですかと考えます。

藤本新二　えー、時間がきてしまいました。たったお一人のご質問で終わったんですが、申し訳ないと思います。埼玉県の所沢市で同じような運動が起きまして、ご承知のように、日本は中曽根さんが一〇万人のアジアの留学生を日本に呼ぶということで今、三万人ぐらいに増えてきてますね。一〇万人くらいになっていく訳です。このときにとりわけ、中国、台湾の学生は、そして韓国からの留学生は非常に増えておりますけども、下宿させてくれるところ、間借りできるところが、非常に狭められていますね。中国の学生は油を使うので、家が汚くなるというんですね。そして、韓国の学生はにんにくをたくさん食べてくさい。だから一緒に住めないということです。そして、白人の学生がくると、どうぞどうぞと言いますけどね。留学生といいますと、どこの国ですか、いつまでいるんですかと聞く。非常に下宿、その他を見付けにくいというのが現状です。お招きするのはいいんですが、招かれたそのコミュニティで、彼らにそういった差別をしていくようなことであれば、せっかく招いても、日本に対して非常に悪い感情をもって帰る。その現状に目を付けた所沢のご婦人が、留学生のための里親運動を始めて、非常に成功していらっしゃる。

　同じようなケースですけどね。逆に裏返したケースなんですけど、私共の職員の一人に五十五歳になる女性がおります。高校を卒業して、経理の専門学校に行って、今私共の団体で経理をやっています。彼女ＹＭＣＡに十年前に入って参りました。活動の一つの場が与えられまして、在日朝鮮人、韓国人、及びその歴史を知ることを通じて、木浦にあります韓国の孤児院の里親を始めた訳です。毎月、手紙を書き、お金を送り続けて十年経っています。彼女は何年か経って、自分の韓国語がうまくなった時に韓国を訪ねるか、あるいは向こうから子供が、いま二人いる訳ですけどね、やってきて、話ができるのを毎日楽しみにしながら生きている。そのことを漏れ聞いた別の職員が、私はお母さんになれないけども、お姉さんにはなれるということで、この人は二十五歳の女性で

すが、お姉さんになってもう五年くらいになりますね。身近かにそういうことたくさんあると思うのです。そういう活動をぜひ私たち身近なところで、やっていければ大変素晴らしいなと。自分のところから変えていかなきゃいけないということを、今日は学ばせていただいた訳です。

身近かな国際交流、なぜ今北九州において、日本において国際なのか、あるいは、どういうふうにしたら私達の身近かな国際交流活動ができるのか、それが只単に、具体的な活動の面だけではなくて、私達の物の見方、考え方、あるいは生き方そのものにも影響を及ぼしていくのでございます。

今日は短いセッションでございましたが、皆様方この場においてご意見を聞きいていただき、ああ、あれは良かったで終わるんじゃなくて、それを受けて、私はどう考えるのか、私はどう生きるのか、そういうことをやはり考えていかなければ、何も変わりません。余りにも豊かになり過ぎた日本の社会の中では、意識的にあるいは計画的に自分の行動を考えていかないと、どうも変わりようがないという感じが致しますね。そういう部分をしっかりと胸に留めて、皆さん方に、この会合が自分の行き方における一つのターニングポイントになっていくきっかけともなればと願って、このセッションをお開きにさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

TALK セッション2　働く女性の新世紀

進行係　皆様、おはようございます。そろそろ時間になりましたので始めたいと思います。私、本日の進行を務めさせていただきます山田と申します。よろしくお願いします。

さて、「日本女性会議'88北九州」、この会場は「働く女性の新世紀」というのがテーマで働く女性の現状と問題点を考え、未来を展望する分科会でございます。お忙しい中、素晴らしいパネラーの先生方をお迎えしておりますので、会場の皆様とも、出来るだけ意見を交換していただきまして、充実した時間を過ごしてほしいと思っております。

それでは、本日のコーディネーターでもあり、パネラーでもいらっしゃいます藤岡先生に、マイクをお渡ししたいと思います。先生、よろしくお願いします。

藤岡佐規子　ただ今ご紹介いただきました藤岡でございます。実行委員会の一人として、この会のコーディネーターという大役を仰せつかりまして、実は、昨夜のレセプションでも、「明日、大変ね」って言われるたびに、プレッシャーで身の縮む思いをしておりました。幸い本日は素晴らしいお三方の講師をお迎えしておりますし、また、これだけ大勢、各地からお集まり下さいました皆様が、どうぞ積極的にご発言ご参加いただきまして、本日のテーマであります「働く女性の新世紀」、働く女性がいきいきとした新世紀を開く方途をみんなで探って参りたいと思います。この会でそのためのエネルギーが生まれますようにと、願っております。ご協力をよろしくお願いします。では本日のパネリストの先生方をご紹介させていただきます。私のお隣りにいらっしゃいますのが、高橋久子先生でございます。（拍手）

お手元の資料の八ページにご紹介が載っておりますけれども、高橋先生は、この北九州のご出身だそうでございます。女学校もこちらでおすませになって、一九五三年に東京大学の経済学部をご卒業になりまして、その年に労働省にご入省になりました。それからずっと婦人少年局婦人労働課長あるいは内閣審議官兼総理府婦人問題担当室長、婦人少年局長などをご歴任なさいまして、この間に国連婦人の地位委員会などで、政府代表としてご活躍をなさっております。現在は労働保険審査会の委員をなさっておりまして、ご著書もたくさんございます。色々お話を伺えるのではないかと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

真ん中にいらっしゃいます、黒一点が、隈河培男先生でございます。（拍手）

お手元の資料にございますように、地元の井筒屋にご入社なさいまして、社長室電算担当次長、教育部長、あるいは用度部長、監査役室部長を歴任なさいまして、今

●パネラー

高　橋　久　子（元労働省婦人少年局長）

1927年、神奈川県生まれ。1953年、東京大学経済学部卒業。同年労働省入省。婦人少年局婦人労働課長、内閣審議官兼総理府婦人問題担当室長、婦人少年局長などを歴任。この間、国連婦人の地位委員会などに政府代表、代表代理として出席。現在、労働保険審査会委員。著書「婦人労働の法律問題」「変わりゆく婦人労働」など。

隈　河　培　男（社員教育研究会代表）

1959年、佐賀大学文理学部卒業。同年、㈱井筒屋入社。社長室電算担当次長、教育部長、用度部長、監査役室部長を歴任し、1988年1月退職。この間、北九州青年会議所理事、小さな親切運動北九州市本部常任委員等を務める。現在、社員教育コンサルタントとして活躍中。また、1988年4月から純真女子短期大学助教授として、秘書学を教えている。

宮　地　六　美（九州大学教授）

1934年、山口県生まれ。1956年、九州大学理学部卒業。1983年から現職。専攻は火山層序学、年代地質学など。1981年から1983年まで、アメリカコロラド州デンバーにあるアメリカ合衆国地質調査所に留学。九州における大型火砕流堆積物についての研究や、九州の火山岩類、花崗岩類についての年代測定の研究論文など多数。

●コーディネーター

藤　岡　佐規子（北九州市保育所連盟保母会会長）

1946年、京都女子専門学校（現京都女子大学）保母科卒業。同年4月から、光沢寺保育園の保母、主任保母として勤務し現在に至る。その他にも、福岡県保育所連盟保母会会長、北九州市児童福祉審議会委員等多数の公職を務めている。主な著書「花ひらけ子供たち」「子育てテレホン相談」「これからの乳児教育」など多数。

年の一月にご退任になっておりますが、この間、北九州青年会議所の理事とか、小さな親切運動北九州市本部の常任委員などをお務めになりまして、現在は社員教育コンサルタントとして、ご活躍中でございます。今年の四月からは純真女子短大で教鞭をおとりになっていらっしゃいますが、秘書学を教えていらっしゃるそうでございます。女性の大変多い企業で、人事教育などをご担当になりまして、女性の働き方についての色々苦言あるいは助言、期待などをお話しいただけるのではないかと思います。よろしくお願い致します。

最後になりましたが、宮地六美先生でございます。（拍手）

現役では九州大学ただ一人の女性教授でいらっしゃいます。山口県のお生まれでございまして、九州大学の理学部をご卒業になりまし、一九八三年に教授になっていらっしゃいます。ご専攻は女性には大変珍しい、火山層序学、地質学をおやりになっていらっしゃるそうでございまして、一九八一年から二年間、お嬢様お二人をお連れになって、アメリカにご留学になってらっしゃいます。その折りに、アメリカの男性達がいかに家庭でよく働くかなんていうことも、お話ししたいとおっしゃっていらっしゃいまして、大変楽しいものになるのではないかと思います。ご承知かも知れませんが、「アメリカでお墓について考えた」というご本をお書きになっていらっしゃいます。そこに書かれてありますように、コロラド州デンバーにある、アメリカ合衆国地質調査所にご留学になりまして、九州における大型火砕流堆積物ですか、そういった大変難しいものをご研究のようでございますけれども、男性ばかりの大学のなかで、大変ご苦労なさっているんじゃないかと思います。そのようなことを色々お話しいただけるかと存じます。よろしくお願いいたします。

私、先程ご紹介いただきましたけれども、終戦後ずっと四十年間ほど、働くお母様のお子さんの保育に協力させていただきました。その長い間、働くお母様が、周りの人々から「あんな小さい子供を他人に預けてまで働かなくてもいい」というような非難を受けながら、時には加害者意識に悩まされながら働く、お母様達を見てきました。そのお子さん達を、専業主婦に勝るとも劣らないような育て方をどうすれば保障できるかっていうことを、みんなで研究して参りまして、今日は仲間達も大勢やってきておりますので、お話をうけたまわりながら、そういったことについて、今後の問題を考えて参りたいと思います。それでは、最初に、高橋先生からお話をいただく訳でございますが、この分科会のテーマについては、皆さん十分にご承知とは思いますけれども、働く女性が、非常に増加し続けています今日、働くということを女性

の生き方にどう位置付けていくか、現状を出し合いながら、将来について色々な展望を語り合っていきたいというものでございます。進め方でございますけれども、全部で一二〇分しかございません。そして、午後の会場へ移動のためにどうしても十二時には終わらなければいけないと言われております。最初に十五分ずつパネリストの先生方にご発言いただきまして、その後、指定討論者の方お二人にパートタイマーの問題とか、それから女子の進学指導の問題とか、そういったようなことを五分ずつご提言いただきまして、できればフロアからも三十分から三十五分参加していただき、その後まとめを五分ずつ、パネリストの先生方にお願いしたいと思っております。では、最初に高橋久子先生から、働く女性の現状と問題点などについてお話をいただきたいと思います。よろしくお願い致します。

高橋　久子　ただ今のご紹介にもございましたように、私はこの北九州市の出身でございます。今回、この日本女性会議が北九州市で行われるということで、これに参加させていただいたことは、本当に私にとってうれしいことでございます。北九州がこんなに女性問題で燃え上がっている時期に、自分もその一員になれたということで、このイベントが今後につながっていく、そのきっかけになれば、と願っている訳でございます。今のご紹介にもありましたように、私は北九州市の、今で言えば門司区で女学校を卒業しました。小学校から女学校時代をここで過ごしましたから、私のいわば精神形成期というのは、この土地にあった訳です。で、女学校を卒業しまして、東京の大学に参りまして、大学を卒業して労働省に入ったのが、昭和二十八年なんです。昭和二十八年以来、労働省の役人として、そして今も、一般職から特別職というふうにかわりましたけれども、役人生活をやっておりますから、三分の一世紀以上役人という暮らしをしている訳でございます。その中で自分自身が働く婦人として、役人というのは私が入りました昭和二十八年頃は、全く男性の秩序で出来上がっている世界でございまして、今でもまあそういう傾向は強いんですけれども、二十八年ごろはますますそれが強かった訳です。どこにいきましても、初めての女性だから、初めての女性だから、ということで、取り扱いに、色んなところが戸惑うというようなところがありまして、その中で女性として、男性に伍してやっていこうとしますと、色んな意味で頭をぶっつけ、問題を一つ一つ切り開かなければならなかったという、自分自身の体験がございます。それから、この経歴にもございますように、婦人労働問題に直接関わり合いを持ちました。行政マンとして関わり合いを持ちました。この婦人労働行政への関わり方は一つはです

ね、最低賃金の問題ついて取り組んだんです。最低賃金というのは、労働者の賃金を最低はいくらにするかということを法律で決める訳ですね。この最低賃金の問題をいくらにするかということを決めるために、全国各地色んな産地で働く婦人の実態を見た訳です。最低賃金というのは、労働者全部に適用されるんですけれども、その最低賃にひっかかるスレスレのところで働いているのは大部分が女性である訳です。全国の産地で色んな女性の働く姿を見ました。軍手の指先をかがっていたおばあさん、マッチの箱詰めをしていたおばあさん、織物の産地で、子供をかごの中に入れて、そのかごに入れた子供を機械の脇に寝かせながら、ハタを織っていた女の人、あるいは、だいたいがもうみんな高卒という状況になったなか、中学校卒業しただけで、工場に入って、紡織機の間を走り回っていた、ほんとにまだ幼いという言葉があてはまるような、女子労働者、そういう方々の姿を見て参りました。「婦人労働白書」が十月の末に発表されましたけれども、それには働く婦人が千六百十五万になった。家庭の専業主婦より働いている方の数が約八十万人上回った、働く婦人がもう社会の大層を占めるようになったと、報道されておりますけれども、本当に働く婦人は、そういう形で働きながら、日本の経済の発展を支えてきた訳です。日本の高度成長というのは、婦人の働きがなければ、ありえなかったと私は思います。その中で、婦人労働者の姿というのは男子と違った、色んな特徴をもっているということを思います。特徴の一つは、女子の労働というのは、単純な、それこそ今日入った人がすぐにできるような仕事です。どうしてそういうことかと言いますと、婦人労働者というのはいつやめるかわからないという、当てにならない労働者であるというふうに思われている訳ですね。とにかく家庭の仕事がある、家庭の仕事が大事だということで、職場は二の次に考えている、というふうに思われているものですから、今日雇ってすぐできる、明日やめても困らない、補充はすぐあるというような、そういう仕事にしか就かせていない訳です。教育訓練をやって、その人を枢要な仕事に就かせても、いつやめられるかわからない、そうすると危なくてそんな仕事はさせられない、教育投資は無駄になる、という考え方から単純な仕事しかやらせない。二番目は根気のいる仕事ですね、これは特に、内職で働いているおばあさんたちの仕事を見た時にそう思いました。根気のいる仕事で、男子じゃとっても長続きしないと思われるような、まぁ女性でも若い人はあまりやらないような、そういう根気のいる仕事というのが、特に高齢の女子に与えられている仕事です。三番目は人の補助をする仕事です。ある企業で、「うちの企業は非常に女子を活用しています」

と胸を張っていました。どういうふうに活用しているかと聞きますと、二人一組で、いろんなところを回らせるんです。で、男はチーフで女はそのアシスタントという形で、活用していますというふうに胸を張って答えられました。女性は補助という形で使われていることが多いんです。四番目は接客サービスという仕事です。女の人は人あたりが柔らかいから、人にサービスする仕事が向いているんだ、というふうに思われております。ですから、電話の交換っていうのは、労働基準法で女子の深夜業が認められている仕事です。要するに女子の柔らかな声というのが、電話の交換で求められている。看護婦さんも女子の深夜業っていうのが認められている。そういう形で、人をケアする仕事、人にサービスをする仕事、そういう仕事は、女子の適職というふうに考えられている訳です。こういった仕事が、女子向きの仕事というふうに言われております。そして、仕事の内容はそういうことですけれども、もう一つ働き方に特徴があります。男の場合はだいたいがフルタイムで働く訳です。もうフルタイムで男は働くのが当然というふうに受けとめられておりまして、男の人に「あなたはなぜ働いているんですか」ということを質問する人はおりません。しかし私は長い職業生活で、しばしばインタビューを受ける時、「あなたはなぜ働いているんですか」ということを何度も聞かれました。どうして女にだけ「あなたはなぜ働くか」ということを聞くんでしょう、それは働くということが大変珍しいこと、そういう状態です。ですから、フルタイムで働くということばかりではなくて、パートタイム、あるいは内職という、様々な働き方をしております。これを周辺労働力というふうに呼ぶ人がおります。つまり、中核的な労働者の周りに完全な家庭の主婦ではない、労働者と家庭の主婦との中間段階というのが女子労働者の場合は多い訳です。色んな段階で仕事との関わり合いを持っております。パートタイムの労働者の人に「なぜパートタイムで働いているのか」と聞くと、やっぱり「家庭の仕事と両立しやすいから」というようなことを言われる訳です。内職の人もそうです。「うちで仕事ができるから」「自由に好きな時に仕事ができるから」というのがその理由になっているんです。で、その自由がある程度確保できるということの代償に、そういった仕事の賃金というのは非常に安いんです。多くの代償を払って女性はそういった仕事についている。それはなぜかと言うと、やはり家庭の仕事というものが、女性が本来やるべきものだというふうに考えられている。そして、実際にその仕事を担っている人が大多数であるということなんです。たまに、家庭の仕事から全くフリーな女性がおります。独身の女性もおります。家で非常に理想的な夫がいて、

その人が家庭のことをやってくれる人もおります。ですから「私は職場の仕事を十分にやれます」という女の人もおりますけれども、しかし、社会は、女の人と言うのはだいたい家庭の仕事を持ってるんだ、あるいは、家庭の仕事をやらなきゃならない存在だ、と思っておりますから、女性はあてにならない労働力なんです。そういう中で企業の雇用管理の制度は出来上がっておりますから、企業は女性を募集する時、あるいは教育訓練する時、男性と同じようには扱わないんです。このように女性の労働者が増えてきておりますのに、女性の雇用管理を見ますと、非常に、多くの点で、男性と違った取り扱いがなされております。昭和五十年、国際婦人年でしたけれども、その以後色んな形で女性の雇用管理の調査が行われました。四年制の大学卒業の女子を募集しないという企業が非常に多く、四年制の大卒を採用する企業の中で、女子も募集の対象にするという企業は、だいたい三割だったんです。七割の企業は女子には試験も受けさせないという形でシャットアウトしていた。教育訓練もまたしかりです。教育訓練で、男子と女子と同じように教育訓練するという仕組みになっていない企業が非常に多かった。訓練をすると言っておりましても、その訓練の内容はまぁ初任者研修と言いますか、採用したときの接遇訓練みたいなことはやるけれども、中堅職員としての研修、あるいは管理職としての研修はやらない。昇格もそうです。昇格ということになりますと、五十年の国際婦人年の後でも、なおかつ半分以下の企業にしか昇格の道は開かれていなかった。そして定年退職、定年になりますと女子は男性より早い年齢で退職しなければならない、あるいは結婚した女性は、退職しなければならない、というような制度があります。そういう中で、女性たちは昭和四十年ごろから特に、一生この仕事を続けたいという女性が増えてきたこともあって、平等に目覚めて参りました。こんな定年退職っていうのはおかしいじゃないかということを、裁判に訴える女性が増えてきたんです。四十年ごろから裁判が相次ぎました。結婚退職制や若年定年制の裁判が。次々にそういった制度というのは、我が国の憲法が規定している男女平等という公の秩序に反するもの、従ってその制度は無効だという裁判を、女性は勝ち取ってきたんです。しかしそれはまだ、裁判で個別に解消されるということに過ぎませんでした。もっと平等をちゃんと法律で規定してほしい、という要求が次々に出て参りました。そして、長い時間をかけて練り上げられて、雇用機会均等法というのがやっとできたのが、昭和六十年国連婦人の十年の最終の年です。その時にやっと雇用機会均等法ができたんです。この均等法は、社会に大きなインパクトを与えました。当初予想していたより

も、反響は大きかったと思います。それはやはり、この法律が日本の女子の労働者が増えている中で、しかも、企業は女子労働者を活用する時代を迎えているということで、活用を考えなければならなくなっている、そういう時代の中で、この法律ができたからということだと思います。この法律ができた当時、募集とか採用、あるいは配置とか昇進昇格については、事業主の努力義務になっているということから、法律の効果が疑われた訳ですけれども、予想以上に今のところは、この効果が出ているように思います。募集・採用・教育訓練・福利厚生・定年といったような項目については、非常に改善が進んだというふうに言われております。ただ、配置とか昇進・昇格という点になりますと、まだ、これまでに改善した企業、それから改善の必要がなかったという企業を合わせて約六割台ということで、今後に課題が残っております。しかし、制度としてこういうものが改善されたというのが、今までの結果でございまして、実態として門戸は均等に開かれたけれども、さて、均等に開かれた門戸を生かして女性が本当に平等に進出しているだろうか、そういうことになって参りますと、まだまだこれから多くの課題が残っていると言わざるを得ません。それからまた、業種別に見ましても、私が最近調査したところによりますと、規模・業種によってバラつきがあるように思います。大企業では法律も知ってる、そして、かなり改善に着手しているということがありますけれども、中小企業ではまだまだ、それから業種を見ますと、サービス産業などはかなり改善が進んでおります。サービス産業を含めた第三次産業はかなり改善が進んでおります。これはやはりそういった業種というのは、女子の能力が比較的発揮しやすいという分野であったのと同時に非常に企画力というのが重んじられるようになってきているからではないかと思います。そして、その企画力の中で今まで良かれ悪しかれ家庭生活というものを担わされて、消費の場というものにいた女性が、消費者という目から、それを生かした企画をすると、それがかなり当たるというようなことがあって、女性をそういう部門に登用しようというような企業が、かなり増えているというようなことも反映しているかと思います。それに引き換えて、製造業業種というのはやっぱり遅れが見られます。特に、機械産業といったような業種は遅れてるように思います。従って中小企業の製造業業種というのは、やはり今から制度も改善していかなければならないという状況だと思います。機会は均等に開かれた、実態の改善はまだまだ、そして業種別にもバラつきが見られるという中で、均等法は今三年目に入っておりますけれども、これを生かして日本の女性が本当にその能力を、男性に伍して発揮し

ていけるような社会を作るということが、今後の課題だと思います。それは、企業にもあるいはその外の社会一般の方々の、この問題に対する理解、協力ということが必要だと思いますけれども、私はなんといっても、その鍵を握るのは女性自身に他ならないと思います。女性が自らの能力を高め、そして開かれた機会を上手に生かして、積極的にそれを活用してその中に飛び込み、そして平等を実現していくということを女性自身が取り組まなければ均等法というのは、空念仏に終わるのではないかというふうに思います。（拍手）

藤岡佐規子　どうもありがとうございました。それでは次に隈河先生、男性の目からご覧になって、働く女性の問題についてご提言をお願いします。

隈河培男　今日は私一人でございますけれども、決して男性代表なんていう立場ではございませんので、かなり独断と偏見が入るかもしれません。けれども、男性の一人の意見ということで、お聞き戴きたい。最近の著しい傾向ということからまず申し上げたいんでございますが、まず一つは、高学歴化社会になってきたということですね。これは特に男性よりも女性の方が、非常に高学歴化というのは高いんです。とりかたによっても違いますが、高校卒業で見た場合ですね、卒業時点で見た場合で、高校卒業で就職するっていう人は、これは減少しておりま

れから、これも高橋先生が先程触れられましたが、家事専業者よりも七十九万人多い。約八十万というふうに高橋先生からお話しございましたが、この新聞記事では七十九万人多い、ということで出てますね。それから、結婚・出産などで離職する割合が一六・一%、これは、十年前の二二・〇%から比べたら五・九%減った、と。それから、女性雇用者の勤続年数、これが七・一年、十年前が五・五年でこれに比べると一・六年長くなった、とこういうふうに書いてある訳です。こういうように、働く女性というのは確実に増えております。また、結婚しても出産の時に退職する人が減っております。とは言いながらもです、この「労働白書」によりますと、働く女性の三人に一人が、パートないしアルバイトで働いている、というふうに実態が報じられています。また、勤続年数にしましても、伸びたとは言いましてもですね、男性の場合はほぼ定年まで三十数年勤める訳ですが、まだまだ七・一年というような状況でございます。

　こういうように、社会がどんどん変わっていってる状況の中で、企業側がどういうふうに変わってきたかっていうことを申し上げたい訳ですが、まず、一番目は高卒女子の採用をしない企業が出てきたってことですね。高学歴化がどんどん進んでいる中で、この傾向というのは今後ますます強くなるんではないかと思います。二番目が女性の人材育成を真剣に考える企業が増えてきた、考え始めてきたその制度の一つが「総合職」というものですね。表現によっては「機関職」というような表現もあろうかと思うんですが、四年制大卒女子の採用時点で「あなたは総合職を選びますか、一般職を選びますか。」こういう区分をしまして採用します。そして、総合職の女性を大卒の男性と同じように、処遇しようというような制度でございます。日本経済新聞が上場企業を対象にした調査によりますと、四年制大学卒業の女性が係長になるには十二・二年かかる。それにひきかえまして、女性の平均勤続年数は先程申し上げました七・一年ですから、四大卒の女性はまだ短いと思うんですね。そうしますと一番最初の役職につくそれまでに、勤める人は非常に少ないという状況がある訳です。こういうことを考えますとやはり「総合職を選びますか、一般職を選びますか。」と、こういうことにならざるを得ないんじゃないかと思うんです。そういうことで、せいぜい七年ぐらいで退職する人と、長く勤めようとする人と同じように、経費をかけてですね、会社が研修をしたり人材育成に経費を使うっていうことは、なかなか企業の論理から考えてもそこまではまだまだやらないということでございます。二つ目は昇格試験をする会社が増えてきたということですね。これはある程度長く勤めた女性には、昇格試験を

受けられるようなチャンスを与える。そして昇進の道を開いていく。三番目が社内ライセンス制度っていうのを作る企業が出てきた。これは一定の年数勤めて、結婚をしたり、あるいは出産の時に退職をしようとする。退職をする場合に、将来またその会社にですね、再就職をする場合、そういう希望を持っている人に、その会社にまた採用しましょう、そのために資格を認定する訳です。退職する時点で。こういう企業が現在もう既にできている訳です。しかし、これらの女性の人材の活用とか、育成など新しい制度ですね、これはいずれもまだ日が浅うございます。そうして、大企業とかあるいは女子社員の比率が高い企業で導入されているに過ぎません。この間お会いしたある会社の総務の方が、「うちの会社はですね女子社員については結婚する時に円満に退社していただくということを前提にしています。だからそれ以上の女子社員の研修っていうのはまず考えていません」と言われました。現実にこういう会社がまだまだ多いんではないか、というふうに思います。こういった新しい制度っていうのもまだ発足したばかりですから、定着するまでにはまだ時間がかかると思いますし、手直しもされていくだろうと思います。企業にとりまして女性を育成して活用するには、どういう研修をしてどういうふうに育てていったらいいのか、こういうノウハウを今企業が模索

中というのが、現実の段階だと思うんです。だから、これがどうなっていくかっていうのが、今後の大きな課題ではないかと思います。

今年の九月に女子短大生からこんな質問を受けたんです。「大手の証券会社と電力会社に実は二つ内定したんです。先生、どちらに行った方がいいんでしょうか。初任給はほぼかわりません。」ということなんです。それに対しまして私はですね、「証券会社は仕事がきついぞ」と。これはある程度女性は就職時期になるとだいだい証券会社・銀行っていうのはまぁきついっていうことはかなりわかってるんですが、「それに比べて電力会社っていうのは仕事は楽だろうね」と。しかし問題はですね、現在の仕事がきついとかきつくないとか、ということよりも、「あなたが将来の人生を考えた場合に、キャリアウーマンとして長く仕事を続けたいと思っているのか、あるいは習いごともして、そうして結婚あるいは出産の頃に退職をしようと思って人生を考えているのか、ここがポイントではないだろうか」長く仕事を続けようと思うのであれば、証券会社は女子社員の比率が高い訳です。店頭に行かれたらおわかりになると思いますが。だから女子社員をどんどん育てるノウハウをもうかなり導入してますが、今からそういうものが、活用の制度っていうのがもっとできてくると思うんですね。それで「今はきついけれど

も、長く勤めようと思うのなら証券会社を選んだ方が私はいいと思うね」というふうにアドバイスをしたんですが、皆さん方はどうお考えになるでしょうか。私は以上です。

藤岡佐規子　ありがとうございました。限河先生の、最初の昇任までに、もう既に女性は辞めてるじゃないかというようなご指摘がありましたけれども、このことに関してはやっぱり家事・育児の問題がかかわってくると思いますが。

では、宮地先生どうぞよろしくお願いします。

宮地六美　宮地でございます。今日の私のテーマは「日米での体験を通して家事・育児・仕事へのかかわり方」と、そういうふうになっていました。女性問題について日頃から勉強しておられる方々には、このテーマをお聞きになるとすぐ「あぁあれだな」とすぐピンとこられると思うんですけど、私は地質学者でして、そういう勉強したことがないんで、何をお話ししたらいいのかわからないまま、ここに出てきてしまいました。私の分担課題である「日米での体験を通して家事・育児・仕事へのかかわり方」というのには主語がございません。ですからそれをいいことに、勝手に私の方で作りかえまして「日米での体験を通して男性の家事・育児・仕事へのかかわり方」と、そういうふうに「男性の」という三文字を入れさせて戴きました。「日米の体験」と申しましても、それが頭についてますけれども、日本と言っても日本の片すみの九州で、九州と言ってもまたその片すみの福岡で、また福岡の片すみの九大教養部という小さな小さな職場と、そして、私の自宅を往復するだけの毎日の経験です。また一方、アメリカの方にいたしましても、一九八一年から八三年までのたったの二年間、それもアメリカは広うございますけれども、その中の一つの州、コロラド州のデンバーという、人口百万人くらいの都市なんですけれども、そこでの経験話ですから、日米の体験とおおげさに言ってみたところで、どれだけ普遍性があるか大変心配なところです。

それにしてもアメリカの男達っていうのはよく働いていましたね、びっくりしました。「アメリカでお墓について考えた」という本を、この七月に自費出版しましたけれども、その中で二十代・四十代・五十代の三人にアメリカの男たちの代表になってもらいまして、登場して戴きました。本当によくやるって感じでしたね。まず五十代の代表ですけれども、私が会った時は五十六歳でした。四十八歳の時離婚して、娘二人を引き取って育てたと言ってました。娘二人は彼が離婚した時は十代ですから、まぁ赤ん坊から育てるのじゃないにしても、それはかなり大変だったようです。この人は私に与えられたテーマ「家

事・育児・仕事へのかかわり方」全てにおいて満点だと思います。彼の家は敷地が約三百坪、それから建坪が、ベイスメント、地下室ですが、地下室や車庫まで入れて百五十坪。アメリカの家では庭に芝生を植えることになっているんですね。ですから、その芝生の手入れ、デンバーは高原地帯で夏は暑いところで乾燥地帯です。その芝生を枯らさないように水をやるっていうのは大仕事なんです。百五十坪の建坪の家っていうのは、アメリカでは普通の庶民の家なんですけども、トイレが三カ所あります。トイレにはお風呂とかシャワーとかついてますから、タイルがはげただの、水漏れがするなど、排水口がつまっただの、それは男の仕事です。それから家の外壁のペンキを塗りますけれども、それも男の仕事。自動車の整備も男の仕事です。ガソリンを入れたり、エンジンオイルを入れたり、これも全部やります。こういった本来、男の仕事とされているものすべてやった上で、家庭内の仕事、例えば洗濯、アイロンかけ、炊事、皿洗い、掃除、そういったものも全部自分でやります。ほとほと感心しました。本当にアメリカの男ってよくやるって感じでしたね。満点です。今日のお客様男性の方は少ないんですけれども、本当は男性の方に聞いて戴きたいと思いますね。この友達とドライブに出掛けたことがあるんですけれども、サンドイッチを持ってきてくれました。食パンの中にハムとチーズとレタスを入れて、輪切りにしたトマトが入っているんですが、なんとこれは彼が庭で作ったものなんですね。それを二つに切ってサランラップに包んでありました。お店で買うようなこぎれいなものでないにしても、でも素朴でとてもいい感じでしたよ。この人はもともと不器用な人なんですね。料理などには向いてないような人です。家事の仕事を好きでやってるようではなさそうですけれども、でも面倒くさがらずに、何も苦にすることなくやっていました。なぜ奥さん貰わないのか。女がいないと不自由じゃないかと聞いてみたんですけれども、「全部自分で出来る」と、「家庭内の仕事は全部出来るから、そういうための奥さんは要らない」と言うんですね。「結婚というのはビジネスじゃないから」とそういう返事でした。

四十二歳の男性は、私が出会った時は離婚してまして、その後結婚したんですけれども。二年前に離婚して、子供二人は母親の方にとられたって言ってました。でも、週末と夏休み一週間とか二週間会える契約になってて、子供たちと会う日は、ほんとソワソワしてうれしそうでした。私はこの人のところに二年間勉強を習いにいったんですけれども、彼はよく私たち親子を彼の家庭に招待してくれました。二年間で七～八回にもなります。私の家族だけということもありましたけれども、よその家族

も一緒、ですから多いときは十二～三人になりましたかね、お客さんが。そのパーティを全部男手一人でやるんですよ。お皿を揃えたり、コップを揃えたり、アルコール、ビールだの、ワインだのコーラだの揃えてね。おつまみも揃える。お肉も焼く。全部やります。パーティの準備だけでも大変なのに、パーティの途中のホスト役もやらなくちゃいけません。お客様一人一人に退屈させないように色んな話を持ってきます。大人だけならともかく、子供がおりますから、子供一人一人、その子供に合うような話題を探して話す。そういうこともやってました。後片付けももちろん、すべて男の人一人がやります。時にはガールフレンドが来て手伝ってました。これにもホトホト感心しました。この四十代の人も五十代の人も同じ研究所の人たちでしたけれども、研究面でも世界でトップクラスの人なんですよ。今日のテーマの「家事・育児」のあとに「仕事へのかかわり方」というのがついてますから、特にこの連中の仕事ぶりを紹介しましたけれども、世界で一流の研究者たちです。

二十代の男性として取り上げたのは、大学の四年生でしたけれども民家のベイスメント、地下室を借りて自炊をしていました。学生なんですが、アメリカでは生活費ぐらい自分でバイトで稼ぐというのが普通です。親からお金をもらって大学に行くっていうのは、プライドが許さないんだそうです。そういう感じでした。自分で稼いだお金で大学へ行くのですから、勉強にも一段と身が入ります。もったいないからですね、お金が。学生をやり、バイトをやり、そして家事一切自分でする。この場合学生ですから、ちょっと育児の方はね、子供はおりません。この男は私の長女と結婚したので、アメリカの男をじっくりと時間をかけて観察するのにはもってこいの材料です。この人はクッキングがほんとに好きなんですね。根っから好きです。料理が好きです。一緒に作って、一緒に食べて、一緒に片付けるっていうのが彼の理想なんだそうです。ですけれど、まぁ、片付けだけは大抵彼の仕事になっていました。そうさせないと、彼の機嫌が悪いのです。昨年のクリスマスは彼らのところで私過ごしたんですけれども、ある晩お肉の付け合わせにパスタをつけることになっていました、彼が粉からこねて作ったものなんですよ。なんとかのチーズを入れてこねてましてね。私が一口、口に入れますと心配そうに見てましたけどね、「おいしい」って、ほんとおいしかったんですよ、「おいしい」って言いました。「ヨカッタ」って日本語で答えてくれました。で自分の家、彼の家に私がお客で行ったからしてくれたんじゃなくて、彼が私の福岡の家に来たときも、ゴミ出しとかね、皿洗いは彼の仕事です。それから、サラダくらい、一皿くらい作ってもらいます。そう

させないと彼が落ち着かないんです。この三人の男がアメリカの男の代表ではもちろんありませんけれども、彼らは家事という仕事をあまり苦にしていませんでしたね。掃除、洗濯、アイロンかけ、買い物、料理、なんでもさっさとやっていました。喜んでやってるのじゃないかも知れないけれども、普通のこととして、人間一人が生きていくのに当然のこととして、やってるようでした。これがアメリカ。

「日米の体験を通して」ですから、今度は日本の男性のことになります。私は残念なことに、一度しか結婚したことがないので、あまりよく日本の男性を知りません。よその御主人のことも良く分からないので、結局自分の家族の男の話になります。私の父、もう五年くらい前に亡くなりましたけれども、彼が台所に立っているのを見たことありません。洗濯しているのもないですね。掃除もありません。私の亭主はもう十二年前に亡くなってしまいましたけれども、父に比べれば、まあ、よく手伝ってくれたと思います。それは共働きをずっとしてましたからね。保育園の送り迎えなどをよく手伝ってくれました。洗濯や料理、それも時々やってくれてました。昭和一桁の男にしては、外聞を気にせずにやってくれたんじゃないかと思うんでが、それはしないと私が怒るからなんですね。私が恐ろしいからやってたんで、私をいたわってくれるというような、優しい気持ちではなかったと思います、亭主関白の口やかましい人でした。ある日こういうことがありました。ある土曜日の午後です。久しぶりにゆっくり、家に早く帰りまして、畳の上に寝そべって私が新聞を読もうと思って広げました。非常に怒られてしまいました。女のくせに寝そべって新聞読むなって訳です。女が昼間から寝そべっちゃいかんと、女が寝そべるのは夜ってことでしょうけれどね。女だてらに新聞読むな、目障りだっていうんですね。まあ、虫の居所が悪かったと思うんですけれども、でもいつも虫の居所が悪かったみたいですね。女の悪口をさんざん言いたいだけ言って、さっさと天国へ行きましたけれども、今、私も天国です。亭主の親類やら友人たちをみても、家事を手伝うような男性はいません。だんなさんから奥さんへ一方的に命令を下す。「お茶！」「新聞！」「メシ！」とかね。奥さんは何の疑問も感じないまま、その命令に従う。これは私は「主従関係」じゃないかと思うんですね。完全な雇用関係です。アメリカの男性から言われたように、これは「ビジネス」だと思います。亭主は今生きていたら五十代の男です。もう少し若い四十代、三十代、二十代の男性は、そんなことはないと思いますが、どうでしょうか。

「二十一世紀へ向けての女性の生き方」というようなテーマが、最近非常にはやっていますけれども、私はここでも男性を女性に置き換えて、「二十一世紀へ向けての男性の生き方」について話し合ったほうがいいと思います。これは日本が抱えている、これからの大変深刻な問題になってくると思います。私は大学にいますから、十八歳から二十一歳くらいまでの男性、学生ですけれども、よく話す機会があります。私はいつも彼らに「腰の軽い男になれ」と言うんです。と言ってもけっして職を転々とする、一か所に落ち着かないという男じゃないのです。そういう腰の軽さじゃありません。さっと立ち上がってコーヒーを入れる、サービスする、そういうふうに言っているのです。そういう男は私はカッコいいと思います。なぜいいか。人に対する優しさというのがあります。人に対する、人間に対する優しさというのがあります。

これから先、十年先、二十年先、日本はどうなっていくか、日本はアメリカと違うと言っても、少しずつアメリカのようになっていくと思います。それはどういうことかと申しますと、外へ出て仕事をしたいという女性が増えてくると思います。女でも外へ出てバリバリ仕事をしたい、バリバリ仕事をして認められたいという人が増えてくると思います。人に認められたいというのは、これは人間の本能的なものじゃないかと思います。ですから、女にも人に認められたい、ほめられたいという気持ちは男と同じようにあります。すると、女性が経済的に自立してくると思います。食べて行けるようになる。そうすると「ビジネス」として成り立っていた今までのいわゆる日本の結婚とか、結婚を家庭に置き換えてもいいですけれども、そういったものが崩れていくのじゃないかと思います。女の側から言わせてもらえば、バカバカしくてやっちゃおれないということになります。男の命令に従うだけの主従関係、男の奴隷はもうまっぴらだ、ということじゃないでしょうか。最近、結婚しない女性が増えてきています。また、離婚をしたいという女性も増えてきています。つまり、シングルになりたいという人が増えているというのは、もう、そろそろそういう兆しが現れ始めたのだと、そういうふうに私は思っています。母親や妻に頼らなかったら、靴下ひとつ脱げないような男性はどうなるのか、脱がせてくれる女性が来るまで待っているのか、あるいは自分で脱ぐしかありません。どちらかです。靴下を脱がせてくれる女性が来るのか来ないのか、待つと言ったっていつまで待てばいいのか。そういう人任せの人生を送るより、自分で脱ぎなさいと、そういうふうに学生達に言っています。衣食住という、人間が生きていくための最低限の身の回りのことぐらい、自分でやりなさい、そういうふうに男子学生に言っています。

自立した女性は自立した男性にしか来ないよと。どれ位分かってくれるんでしょうかね、大変心もとないです。

女子学生にはどう言っているのか、女子学生に何も言わないのは片手落ちですね。男性と同じように家庭内の仕事はもちろんできなくてはいけません。そして、経済的に自立するようにと言っております、亭主に課長さんになれとハッパかける前に、自分が課長さんになりなさい。そういうふうに言っています。私は教授夫人と教授とどちらもやりましたけれども、教授夫人よりも教授の方がいいですね。何がいいって「主人がこう申しております」というより、「私はこう考えております」という方が気分がいいです。（笑い）終わります。

藤岡佐規子　ありがとうございました。男性もいつもよりたくさんいらっしゃるんですけれども、今の宮地先生のお話、笑い声は女性の方が早かったですね。しばらくたって苦笑なさっていたようですが。限河先生のご感想も後ほどお伺いしたいと思っておりますけれども。私も保育所に勤務して仕事を持つお母様方の子育てに、協力させていただいて、この四十年間にお父様方の係わり方が随分違ってきているのを実感しております。昨今、シングル志向の女性が多いとおっしゃっていましたが、特に、最近はふがいないお父ちゃまに愛想をつかして、自立というか、離婚をなさる方も増えてきまして、そのことを心配する保育者たちもおりますけれども、でも離婚前のゴタゴタの間、子供も母親も暗かったんですね。母親が暗いと子供も暗いですから。ですから離婚なさっていきいきなさると、ああ離婚って、必ずしも悪いものじゃないんだなあ、と思うんです。子供にとってもですね。不幸な結婚の解消策であるとも言えるような気もしております。私共にとってやはり仕事をし続けるときに、子供っていうのはとてもネックなんです。私の同僚が子供を産む前の月に夫を船の事故で亡くして、それから一人で保育の仕事を続けながら子供を育てて、やっと中学校に入ったときに、「先生、本当に今までありがとうございました。これで少しは息がつけるでしょう」と喜び勇んで入学式に出掛けたんですね。で、帰ってきましてなんとなく元気がないので「どうしたの」って聞きましたら、「中学校に入ったら小学校の時のようではなく、非行が問題になる。その非行がもっとも多いのが、働いている母親の家庭だ」と、校長先生が入学式の式辞の中でおっしゃったということがありました。どうして子供の非行、それから家庭内暴力がなぜ女が働くことだけにしわ寄せして考えられるのか、ということを常に憤慨しておりました。それで、一九七五年メキシコで、国際婦人年ということが決まった年に、北九州市も非常に乳児保育の希望者が多かったのに、行政はやはり乳児の保育というのは抵抗がありまして、なんですか、やむなくというか、必要悪的な形でその要請に応えようというようなところがありました。私は仲間たちと零歳から保育所に入った子供と、一般的な子供の発達とどう違いがあるのかということを調査いたしました。その中で運動能力は保育所で育つ子供のほうが非常に優れておりました。これはもう全然ためらいなく言える訳ですが、適応、探索操作の活動や個人的、社会的行動という分野は、大体フィフティーフィフティーで、ただ、言葉の発達というか、停滞的傾向が目立ったわけですね。で、これはどういうことだろうかと、色々タイムスタディなどをとって調べましたら、専業主婦の方は赤ちゃんが泣き始めますと、洗濯をしていても「ちょっと待ってね」とか、色んな言葉をかけてすっ飛んで行って、「どうしたの、おなかすいたの？それともおむつかな？」って色々言葉をかけながら係わっていく訳ですね。ところが保育所のほうはプログラムが決まっているものですから、時間がくると次の行動を促す言葉だけに、終始していたっていうようなことでありました。これは保育の方法を変えれば、専業主婦に育てられる子供に勝るとも劣らない育ちをするんじゃないかということで、三歳になってから家庭から保育所に入った子供、これは途中で中間離職をなさって、三歳までは自分の手でと、一生懸命に育てられたお子さんだと思いますけれども、零歳から連続的に保育所で育っている子供と、どういうふうに言葉の育ちが違ってくるんだろうかと、北九州市の全園にプログラムを流しまして、零歳から六歳までの係わり方を、カリキュラムに取り入れていただくよう働きかけてきました。最終的には保育所育ちの子供たちが、非常に豊かな言葉を話せるようになったということを、日本保育学会で発表致しました。その学会では、働くお母さんに絶対後ろめたい思いはさせませんよ、私達でできるところは十分お手伝いしますので、頑張って働いてくださいね、というふうに励ましたり、働くお母様方がそういう子供に対する、加害者意識をお持ちにならなくてすむように、登校拒否児の出現率が保育所で長期間、長時間育った子供の方が低いとか、基礎学力、社会性、生活行動など全領域で、乳児保育経験群が上位という研究発表が色々ございました。

そういうふうなことで、決して働くお母さんの子供が悪く育ってはいないということを、ある程度自信を持って言える訳でございます。

私共の仲間が全国に約十八万人います。昭和五十三年に男性も保母にということで、法的に認められ、男性保育者が今五百人近くなってきているんですね。北九州でも何人かそういう方が入ってこられました。ところが入っていらっしゃると、女性ばかりの職場で、どうも孤立し

てしまうとか、色々なトラブルが起こったり、力仕事ばっかりさせられるとか、そういうふうなことでやめていかれる保育者、男性保育者が多くなりました。全国的にもそうです。昨日の中国・四国・九州地区婦人問題推進地域会議のパネラーのNHKアナウンサー小宮山さんも「私、国会を担当しているんですが、ほとんどが男性の中で、女性一人というのは本当に大変だけど、でも頑張っているのよ」とおっしゃったんですね。男性の方は女性ばかりの職場で頑張れないのだろうか、などと色々お話を伺いながら考えるところが多かった訳です。

皆さん非常に時間に、協力していただきましたが、高橋先生からは女性の働き方の四つの特徴についておっしゃっていただきました。単純作業とか、根気のいる仕事、補助的な仕事とか、消極的な立場での仕事です。隈河先生からは、女性の勤続年数が非常に低いというようなお話がありました。ここら辺りで、本日二人の指定討論者をお願いしているのでご紹介致しましょう。お一人は三嶋千鶴子さんとおっしゃる方ですが、パートタイマーとして働いていらっしゃいます。以前公務員をなさっていらっしゃったんですけれども、やはり結婚、出産、育児という中間離職で、専門的な仕事を身に付けていなかったために復職できなかったということで、今パートで働いていらっしゃる訳です。では、まず三嶋さんからご自分のご体験に基づいて、ご発表いただきたいと思います。三島さん、よろしくお願いいたします。

三嶋千鶴子　私は昭和五十五年から八年間、パートとして働いております。働きたいと考えたのは家庭の事情で、二人の子供を育てなければならなくなったからです。まず、仕事を探すことから始めましたけれど、四十代後半の全く特別技術をもたない私には、パートの仕事さえ見つけることは大変なことでした。一番働き易い九時から三時までは、三十、四十代前半の若い女性で占められ、残されているのはもっとも条件の悪い早朝とか、夕方五時以降の仕事でした。色々探してようやくスーパーの経営する和風レストランに、ウエイトレスとして働くことになりました。皆さん、ウエイトレスというのはどういう仕事かご存知でしょうか。美しい制服を着て白いエプロンをつけて、お客さまよりオーダーをとり、食事を運んだり、後片付けをする人がおりますね。にこやかな笑顔をまき散らしておりますけど、実情は両手に一kgから三kgの大変重いトレイを持ち、全神経を集中しながら時間内に、こまねずみのごとく走り回っている仕事です。お客さまの多いときは、当然休む暇など全くありません。そんなに大変なことかと思われますでしょうが、パートの仕事はフルタイマー八時間の仕事を、四時間から六時間に凝縮したような大変密度の高い仕事です。このよう

な職場環境の中でタバコの害とか、空気の汚れなどのため、声が全く出なくなった人、重い物を毎日持つために手がしびれて、物を落とすようになった人、また過労のために眠れなくて、内蔵が悪くなった人など、同僚たちは身体を悪くして次から次へと退職していきます。私もこのような仕事を四年あまりも続けた今年の三月頃より、右手の手の甲がはれ始め三、四指とも曲がらない状態になりましたが、春休みになったため、治療のための休みは全く取れずそのまま働いておりました。激しい痛みと共に痺れ始め、物を度々落とすようになり、病院で精密検査をしていただいた結果、伸筋けんしょう炎と診断されました。職業病ではないかという疑問がありましたが、パートで身分の保障がないための解雇、再契約はどうだろうか、職場復帰はできるだろうかなど、色んな問題がありましたが、皆様の力をお借りしてパートとして初めての職業病認定を申請しています。労災申請中なので社会保険による傷病手当てはこの六か月間支給されず、会社は全く何の援助もしてくれていない状況です。

今、パートで働く女性の一番不安なことは健康であり、過密な労働で身体を悪くした時は、多くの先輩や同僚たちが歩んだ退職という道を、私も選ぶべきかなあと迷いましたけど、今まで全く知ることのなかった就業規則も会社に作られており、大変難しい労働基準法もパートに適用されるんだなあということも初めて知り、知ることの大切さを痛感致しております。劣悪な労働条件に対策が全くないままに、耐えている私たちにも責任の一端はあると思います。「どうせパートだから」という考え方は捨てて、自信と誇りをもって働きたいと思います。

藤岡佐規子　ありがとうございました。それでは、もうひとかた、三浦日佐代さん、このかたは八幡中央高校の先生でいらっしゃいます。女子高生が高学歴化の中で学校を卒業して就職なさる方が、少なくなったという隈河先生のお話がございましたけれども、進路指導の中における職業指導というようなことでお話を伺いたいと思います。よろしくお願い致します。

三浦日佐代　大変大きなテーマをいただいたので、話があちこちに広がるかと思いますが、経験を通してお話しさせていただきます。現在一年生を担任しておりますが、その一年生の実情を見ると、今高校の学区が拡大されて十数年が経っていますが、中学校から高校への進路指導が、実際には偏差値による学校選択という実情の中で、生徒は進路とは偏差値で学校を選ぶことであるというふうにあっさり見てしまっております。本当の意味で人生そのものと繋ぐ、労働と繋がったところにもっていくということが、三年間の高校の教育の中では系統的に行うことが大変難しいというのが実情だと思います。学校は

教科指導とホームルームということになりますが、そのホームルームで、今日テーマになっているような事柄を系統的に指導することは、現状ではむつかしいと思います。高校の進路指導もやはり偏差値を中心としながら、家庭の事情、本人の生き方を聞きながら、就職するのか、進学するのか決めるのです。本当は就職か進学かという言い方もおかしいと思うんです。経済的に自立するということで言えば、最終的には就職する訳で、そのときにそのための準備として、更に先の学校を選ぶのか、それとも高校までに身に付けた力で職を手にいれるのかということが、正しい位置付けのはずですが、現実としてはそういうふうに捕らえられてはおりません。それから、進学するという時も、やはりどの学校なのか、国公立であるのか私立であるのか、偏差値はどうなのかというようなところに、現実的には視点が置かれているのが事実です。先日も生徒にアンケートしたり、話を聞いたりした訳ですが、男子は軒並み女性に対して、「自分の奥さんは家にいて欲しい」で、「家事に影響が出ないならば働いて構わない」。女子のほうもおおかたの意見として「一度就職をして、結婚したあと退職して、もう一度勤めには出たい」。子供の手が離れたら勤めに出たいというところではかなり前と意識が変わってきていることは事実であると思います。しかしその時に、「子供が家に帰ってくる時間には家にいたい」という回答がほとんどです。家事に対しては、これは進んでいるなと思いましたが、女子だけがするのを当然とする意見はほとんど高校生でありません。むしろ男子と公平にということでした。ただその中で、その男子と公平にということが、女子をどこかの部分で崩しているところがあるんですね。例えば、掃除などにしても、むしろ男子のほうが徹底してきっちりするという実情が私のクラスでもあります。女子が雑巾をきっちり絞らない点、ゆすがないという状態もある訳ですね。その家事労働に対する捕らえ方が、先程、宮地先生からもありましたように、人間が生きて行くときに避けて通れない、誰でも皆がかかえている作業であると、命を繋ぐための作業であるというふうに、ご家庭の中で両親が子供に対して位置付けているのだろうか、あるいは職業に対しても、職業に貴せんがない、生きていくということは、働くこととそのまま繋がっているんだというふうに教えられているんだろうか、というようなところにも疑問を感じています。それから学校に対するお父様、お母様からの色んな期待の中でも、やはり私は普通高校に勤めておりますが、進学実績をどうしても中心にして、私たちに対する指導が求められてくる訳です。そのときに、本当の意味で人間としてどうあるべきなのか、一生をどう全うするのかという話し合いが十分できないままに、送り出していく先がどの学校になったのかというところだけに、私達の指導内容の重点が置かれているとも言えます。そういう中で、今日このテーマを考えると、今の日本の高校はまだまだ遅れているなと思います。もっと本当の意味で開かれた学校として、本当の意味の進路指導、生きること、人生そのものと結びついた進路指導をやっていきたいと思います。

藤岡佐規子　ありがとうございました。それではフロアーの皆様にご意見をいただきたいと思います。どうぞ。

発言者A　私は子供三人抱えて、高校を卒業して市役所で働いております。今年で丸二十三年です。今は母と一緒に暮らしておりますので、家事のこととか子育てのこととか大変楽になりましたけれども、子供三人を保育所から家に連れて帰って、お風呂に入れて寝かせて、それから家事をして、次の日の仕事のことを考えながら、朝起きたら子供の具合が悪くて、思っていた仕事が出来なくて休みを取るときに、「あれが分からない」、「これが分からない」と係長や同僚から言われてつらい思いをしたこともありました。先程、高橋先生や隈河先生から言われたように、今年の労働白書の中で、婦人が今、全労働者の四割りを占めようとしている中で、やはり日本経済を支えている女性の力は、すごく大きいものだというふうに私も認識しております。その中で、男女平等と女性の地位向上の問題で、働く婦人がどうなっているのかについて考えてみたいと思います。

差別の問題は、家庭でも地域でも職場の中でもたくさんありますが、例えば賃金では男性の賃金を一〇〇とした場合に、今年の労働白書を見ると女性の賃金はわずか五二%くらいなんです。国際婦人年、国連婦人の十年の動きの中で、国際的には男女の賃金格差は世界的に非常に縮んできています。女性の地位がそれだけ上がっているにもかかわらず、賃金面では日本は一九七六年の五六%をピークにずっと下がってきているんです。その大きな原因はやはりパートの婦人が増えてきたということなんですね。パートの婦人が増えてきて、社会に係わり合う婦人が増えてきたということは、非常に良いことだと思うんです。しかし、先程から言われたように、そのパートの婦人達を安い賃金で使っているというところに、問題があると思うんですね。パートや短時間、臨時あるいは季節的な雇用というのは、パートという名前があるだけで労働基準法から適用を除外したり、賃金を安くしたりされます。しかもパートといっても実際の労働時間は六時間とか七時間とかフルタイムの人と変わらないような労働時間であり、中身も先程パートの方が言われているように責任を負わされているという、そういう実情の中でこの最低賃金を上げていくと同時に、パートの賃金

と労働条件を上げていかない限り、女性の地位向上もまた男女差別も解消されないし、女性が自立していく上で非常に大事な経済的自立の問題も、解決できないと思うんです。男性の横暴に耐えられなくなって、離婚を決意していく婦人たちが、どうしても離婚できない、我慢をして結婚生活を続けていかなければいけない原因の一つが女性の賃金が安い、パートだけでは食べていけないということもあると思います。その点で、ぜひ労働婦人の問題では、このパートの問題を含めて、男女の賃金格差をなくしていくために、この女性会議や婦人の運動を広げていっていただきたいと思います。私は労働組合の中で婦人の運動も広げております。働いている婦人も働いていない婦人も、共に手を繋ぎながら一緒にやっていくということが大事なんじゃないかということで、問題提起の意味で発言させていただきました。

藤岡佐規子　ありがとうございました。ほかの方もどうぞ。

発言者B　私は沖縄から参りました。私は県庁の職員で婦人労働の行政に携わっている者ですけれども、かたわら労働組合の婦人の運動や婦人団体の運動を、ずっと共働きして二十三年くらい並行しながらやっております。昨日も中国・四国・九州の会議に参加をさせていただいたんですけれども、今沖縄の婦人の問題で大変深刻な問題がありますので、皆さんに訴えたいなと思います。

高橋先生の方から、色々婦人労働の状況、それから男女差別の昭和四十年代からの判例の話等がありまして、今やっと均等法が三年目に入って、企業の方でも均等法の積極面が生かされて、女性自身も変わってきたという報告がありました。実は今、沖縄では三十五歳のバスガイドが、いわゆる「三十五歳で定年ですよ」ということで、会社の就業規則や労働協約の中でもそれが決められておりまして、今年の二月に満三十五歳を迎えて解雇になった訳ですね。それで、均等法がせっかくできたのにこれはおかしいんじゃないかということで、色んな県内の婦人の集会等でも訴えていたんです。「均等法では、このことについては職種別の定年制であって、均等法による男女差別ではないのではないか」という意見と、「いやそんなことはない、ガイドというのは女子が圧倒的に多いし、女子しかいないけれども、女子のみという募集で自分は入ったのではない」と。そして今、定年はいわゆる「高年齢者等の雇用の安定等に関する法律」ですか、そういうことで定年年齢を引き上げようということを、国も含めて県などは指導している訳ですね。そういう中で、三十五歳定年は余りにも若すぎるんじゃないかと。「私は今からやっと子供が離れて本当にガイドとして熟年っていうんですか、具体的にお客さんの要求に応じたガイ

ドができるのに」という声を上げた訳です。しかし、労働組合も力及ばず、最終的に裁判になりました。そして今まで審訊というお互いの和解に向けての話し合いが八回も進められてきたんですが、最終的には和解に応じなかったんです。というのは、結局、ガイドの定年年齢を将来男子と同じように六十歳にするという回答が会社側から出ないで、「そのガイドを教育職としてあげるというようなことでどうですか」という和解の提起があったものですから、本人としてはやっぱりそれは根本的な解決にならないと。また多くの私達婦人団体の方からも一回に解決しなくても、とりあえずあなたの定年年齢は引き上げるということの将来的な見通しがついたので、そろそろ和解に応じてもいいんじゃないかという意見等もありました。しかし、最終的に裁判になって、二回目の裁判が十二月にある訳ですけれども、この裁判で彼女が提起したことに該当する人、つまり三十五歳の定年を迎える人が同じ会社の中に、今年の八月に、二人いたんですね。この人達は会社側から、当面定年の執行を猶予されました。また、均等法について労働婦人だけの問題だと思っていた女性達も、彼女が裁判に踏み切ったことによって、均等法がこういうところで生かされているのかと、それから職域別定年というのと、均等法の男女差別というのは一体どういう関係なんだろうか、ということを考えるきっかけとなったようです。つまり、ガイドという職に観光客が何を求めているのだろうかと。いわゆるきれいで若くて、歌が上手で案内がセリフどおりにできればいいのかというと、そうではなくてやはり深みのある、特に沖縄ですから、沖縄戦跡の話や歴史的な深いシナリオになるようなもので、お客さんのニーズに応えられるようなガイドが求められるのではないだろうか。また、外国では歳をとった人達がガイドをやっているじゃないかという声などがありまして、改めて均等法を自分たちの身近な中に生かすという、空気がすごく盛り上がりました。議会でも随分大きくこれが取り上げられまして、この問題が、均等法が提起した問題として、女性達にとって基本の問題だという意識、最後に高橋先生がおっしゃっていましたけれども、やはり鍵を握るのは私達だという大きな議論がわきました。昭和四十年代にあったような差別と定年制の問題は、まだまだ私達の沖縄の方では、これから続々ともっと出てくるというような状況です。以上報告に代えたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

藤岡佐規子　ありがとうございました。今のパートの問題、それから定年の問題、こういったことについて高橋先生、少しお話していただけませんでしょうか。

高橋久子　最初にパートの問題ですけれども、最初の私

の話の中でも触れましたけれども、パートの問題というのは私は、女性が働く場合の問題点というのを集約的に抱えている存在だと思うんです。女性は色んな形で職場における男女差別の問題を持っておりますけれども、いわゆるキャリアウーマンと言われる女性、四年制大学を卒業した女性も、いろんな職場の男女差別にぶつかっている。そしてパートの人達も色んな問題にぶつかっている。しかし、その根っこはですね、やはり女性は家庭責任を負っている、あるいは負うべきものというふうに見られている、そこに根っこがあって、その根っこはつながっているんじゃないかと思うんです。パートの人達、もう一つ先には内職という人達がいるんですね。内職の人の労働条件はパートの人よりもっと悪いんですけれども。パートの人達というのはそういう問題を集約的に抱えている存在じゃないかと思います。概して賃金は低いということですね。これは単純な仕事しか与えられていないことから、賃金が低いということがあります。そして労働基準法ですね、さきほど労働基準法を適用して欲しいということを言われましたが、本当は基準法はパートの人にも適用されているんです。法的には適用はされているんですけれども、事業所の方が、パートには適用されていないと思っている事業所もあるようです。それからパートの人達自身が自分達には適用されていないと思っている。だから、行政としてはですね、パートにも基準法は適用になるんだというPRを、もっとしなければいかんというふうに言っておりますが、行政だけでは行き届かない点もありますから、パートの方にも労働基準法はちゃんと適用になるんだということを、少なくともこの場におられる方は、今後声を大きくして言って下さい。そして、その中で、もし、パートについて問題が起こってきたときにはどうすればいいか、労働基準法の適用関係については、労働基準監督署という所があります。それから婦人少年室という所も色んな問題については相談に乗ってくれるはずです。ですから色んな問題が起きた時に、皆で考えていただきたい。日本の女性というのはどうも問題が起こったときにですね、それを明るみに出すことをとてもいやがるという面があるんです。宮地先生がおられますけれども、私もアメリカの公民権法、この法律の中に雇用における男女差別禁止規定があるのですが、その施行状況を調査するために、いわゆる均等委員会という所に調査に行ったことがあるんです。そこで「色んな問題を皆ここに訴えてきますか」と聞くと、「ええ、来ますとも」ということで、アメリカと日本との意識の違いというのは、そういうところにあるんじゃないかと思ったんです。どうも日本では明るみに出したがらない。ですから、よく婦人少年室の方々からの声を

聞きますと、いろんなことを訴えてこられて、「それでは私共の方で解決に乗り出しましょう」と言うと、「いや、ちょっと待って下さい。職場にこういうところに来たことが分かると困ります」ということを言われるので、徹底的に解決しようと思っても、なかなかそれが困難だというところがあります。しかし、それを敢えてやるのは、職を失うかどうかという土壇場になってくる定年の裁判なんですね。ですからこういう問題はご自分ひとりで悩まないで、職場の周りの人に相談する、あるいは労働組合の方々とも相談する、それから行政に訴えるということをなさって、パートというのは色んな問題を抱えているのが事実ですから、それを一つひとつ解決していくということをやっていかなければ、パートの問題に集約されている女性の労働の問題というのは、解決していくのが難しいんじゃないかと思います。大きな問題の解決も、結局は一つひとつの問題、一人ひとりの取り組みにかかっているというふうに思う訳です。

それから先程の定年退職の問題ですね。これは私が行政におりますときに、昭和五十二年から定年差別について計画を作って、指導して歩いたことがあるんです。そのときに、企業がなぜそういう定年差別を設けているのか、色んな理由を挙げておりました。女性は勤続年数が短い、女性は職業意識が低い、その中にいわゆる女性はですね、若くて美しい人がいいんだという考え方があるんですね。私は、課の男性職員にも実際に企業がどういうことを言っているか、あなたも聞いていらっしゃいと言いましたら、その人は大きな喫茶店に聞きに行ったんです。喫茶店の主人がですね、「あなただって若い人がお茶を持ってきたほうがいいでしょう。中年の人がお茶を持ってきたら、お茶がまずくなりませんか」と言われたといって、帰ってきたんですね。

今度の話はバスガイドということですが、特にこういう観光に関係する会社は、歳をとった女の人を嫌います。民放などでは女子の若年定年制というのがあったんです。ブラウン管に映るのは若く美しい女性の方がいいということですね。それに対して伊豆のサボテン公園というところで、女子の四十七歳という定年制について判決が示されました。これはもちろん訴えた女性が勝ったんですけれども、その判例のなかの一文に、確か私の記憶ではこの判決だと思いますが、「老醜は、つまり老いたための醜さは、男女異なることなく」とありました。女性だけ若くて美しいというのが一つの能力にされて、それを問われて職を失うようなことはおかしいと思うんです。職種別定年というのは、えてしてそういった意味で使われることが多いんです。職種別定年はですね、合理的理由がある場合もあります。その職種にはどうしても、

その年齢でなければ体力的に無理だとか、そういう合理的理由がある場合もありますけれども、しかし、女性の若さ、美しさということを評価するがために、職種別に女性は若くて退職せざるを得ないというのは、私は合理的理由とは言えないと思います。これは裁判にかかっているということですから、その事案について私がストレートに発言するというのはまずいと思いますので、一般論として聞いていただきたいと思います。ただ、そういう中で、女性が裁判に訴えているということが、後に続く人たちに大きな励ましになっているということを伺いますと、私はその裁判は非常に意義があったと思います。そして。先程も申し上げましたように、日本の女性はおとなしくしていましたけれども、こういう形でやることによって、その問題について多くの方々の共鳴が得られ、そして、その問題に皆が今後取り組んでいくということになれば、それは広がりを見せる貴重な一石だというふうに思っております。

藤岡佐規子　パートに関するお話をいただきましたけれども、労働基準法がパートにも適用されるということ、それを知らないということがどれだけ大変なことかということですね。それからまた、一人で悩まずにどんどん相談なさいということも、今日ご参加の皆さんには非常に意義のあることではなかったかと思います。

先程、宮地先生からは、アメリカ男性の家庭における働きぶりがご紹介されましたけれども、今、高橋先生もすべて根っこには、女性が家庭責任を負うものだというふうな決め付け、あるいは、自分自身も負うべきであるというふうな考え方が、あるのではないかというご指摘がございましたけれども、隈河先生、この点いかがですか。

隈河培男　私は古い人間ですから、まだまだ新しい考え方にはあまりなじみきらない方なんですね、どちらかというと。ただ若い方達に話すチャンスがある時に、いつも思いますことは、非常に価値観が違うということですね。今、例えば学校の先生あたりにお伺いしますと、一年違えばもう違いますよと言われるくらい違ってきています。けれども今、社会をリードしている年代というのは、まだまだ大正、昭和の初めくらいに生まれた年代ですね。そういう人たちが評価している訳ですから、若い方達の考え方に対して、そういう人達は非常に批判が多い訳ですね。私も批判を色々持っています。そういう中で、今の若い人達の価値観が、そのまま社会の常識になってもいいんですか、と言っています。やはり年配の者は年配の者としての意見を言って、そしてその中から、言葉は適当じゃないかも知れませんけれども、もまれて、お互いに意見を出し合って生まれたものであれば、それ

は社会的なものとして認知されるんではないだろうかと。だから、今若い方達が考えていることが、すんなり社会の常識として通ってもいいんですかということをいつも申し上げるんです。そういうことを話していますと、時間がありませんが、ポイントはそういう考えを持っております。

藤岡佐規子　どうもありがとうございました。今のご発言その他について、どなたかご意見をどうぞ。

発言者C　私は大学を卒業して、かなり大きな企業に勤めて十九年になります。その中で勤めて最初のころ、とにかく私が入った時期は猫の手も欲しい時期で、本当は大学卒という肩書きじゃなくてもよかったのですが、とにかく人手不足で、たまたま研究所というところに入りました。そして独身の間はそれなりに上司の考えで、おもしろい仕事をさせてもらいましたけれども、結婚して子供を産むにいたって、段々主流の仕事から外されて、研究職から外れてしまいました。一方、同期の男性はすでにもう課長職になっています。私はやっと大学卒で五年か六年ぐらいになって、まあ中堅社員と言われる男性と同じくらいになって、今年になって初めて、そういう二十代の男性と一緒に中堅社員の教育を受けました。そしてその中に女性は私ともう一人、今年五十歳になる女性の方が一緒に受けました。「私は五十歳の熟年コースを最近受けたばっかりなのに、中堅社員教育を受けるなんて、うれしいような悲しいような」という話をされたんですけれども。そういう企業に勤めていて、先般雇用機会均等法ができて、門戸が開かれたって言われましたけれども、うちの企業の場合は大学卒の女性は、ずっと採っていないというふうに新聞で発表されていました。ところが、実際に会社の新聞等を見てみると、社員のなかに大学卒の女性がポツポツいる訳ですね。そこで組合を通じて聞くと、「あれは学卒じゃないんだ。縁故で入ったから、大学卒の女性が欲しくてとったんじゃないから、学卒じゃない」ということで、「学卒の女子という肩書きはない」ということでした。最近話を聞いてみると、学卒の女子を「あなたは総合職、（要するに）転勤を前提とした職種でいいか」という採用の仕方をしているということで、少し会社の流れが変わったなと思ったんですが、じゃあ今、今まで勤めていた女性がそういう扱いを受けているかというと、それはそのまま据え置きという感じです。賃金体系そのものは、賃金表は男女別ではなくて一本なんです。ただ、入った時にどのランクからスタートするかというので男女で違う。高卒は今までの組合等の働きで、スタート時点から二十何歳かまでは一緒になったんですが、その後の進み方が、男性と女性ではるかに違う。女性は何年経っても最低で、やっと次ぎに上が

るけれども、男性は何年かごとにどんどん次に上がれるという仕組みが昔からありました。それはほとんど今も変わっていません。そしてやっと大学卒の女性を総合職「転勤できますか」ということで採用し始めているという話を聞いたときに、どうして男には「転勤できますか」ということを聞かないのかということを思ったんですね。というのが私の会社の中で職場配転というのがかなりあって、うちの会社はたまたま本社が九州にあるからというので、地元志向の人が男性でもたくさん入社している。ところが「東京の工場に行け、営業所に行け」と言われて、それでやむなく辞める男性、しかも、もう家庭も持って子供さんも学校に行って、苦しい時期に辞める男性というのが非常に増えているんですね。その中でやっぱりここでずっと働きたいという男性がいる。また、女性のなかにも「転勤できます」という方もいるかも知れないし、ここで働きたいという方もいるかも知れない。それなのに女性だけ入社の時に、そういう選択をさせられるということで非常に不満を持っています。

しかも、先程機会は開かれたから、女性自らが自分の能力を磨いて、開かれた門をもっと開くことができるようにという話でしたので、私自身は今の職場の中で、独身時代とは違った色んなことをしたいんだという思いは常にあって、色んな機会にそれを訴えてきたけれど、なかなかうまく行かなかった。周りの人を見ても、中学あるいは高校を出て働いて、均等法はできたけれど、職場ではやはり、なかなかうだつが上がらないという人も多いんですね。自分の能力を磨くったって、何年経っても同じ仕事で、入社何か月の人と大差無いような、仕事しかさせてもらえないという状況の中で、補助職のような仕事をしている人、ラインの仕事をしている女性が、果たしてその能力をどんなふうに磨いていけば、皆の能力や地位を向上させることができるのか、非常に難しく思います。

どうやれば私達が、学卒の一部エリートだけじゃなくて、単純作業は単純作業なりに、男性だったらバカらしくなって、投げ出すような仕事をやっている女性、そういう仕事にもそれなりの価値を、認めるべきだと私は思いますが、単純な作業であるがゆえに低賃金に甘んじている人達も含めて、もっと女性の底を上げるにはどうしたらいいのか、私はそこら辺りを職場に帰って考えていきたいと思っています。

藤岡佐規子　ありがとうございました。ほかに、どうぞ。

発言者D　今、婦人が働いていく上では、保育所が充実しているということによって、働く婦人達が安心して職場に出ていくことができると思うんです。私が今勤めている市立病院の保育所は、産休明けから預かっています。

ところが普通の保育所では、なかなかそういうところはないんですね。私の住んでいる地区でも二十五、六年前に乳児保育所をみんなの力で作ったんですが、いつのまにか、やはり乳児保育所は採算が合わないという面があったのかもしれませんが、今はもう普通の保育所になってしまいました。そういう点では、赤ちゃんのときから預けられる保育所を、女性がはばたく二十一世紀に向けてもっと作っていかなければいけないんじゃないかと思っています。民間で職場保育所を作っていくのは本当に大変なことだと思うんですが。私の保育所も本当に困って困ってどうしようもないお母さん達が、最初は自分達の力で作って、その後、看護婦さんが足りなかったときに、病院も運営に力を貸してくれるようになったのですが、今は、育児休暇がとれるような制度ができたから、なにも産休明けから預からなくてもいいんじゃないか、などという意見もチラホラ出るようになりました。そういう点では、今から婦人が多様な形でどんどん働いていく中で、産休明けの一か月、二か月足らずの赤ちゃんから、預かってくれる保育所を作ることも大切なことだと思います。そしてその保育所が、劣悪な条件ではなくて、本当に心を込めて保育ができるように整備されて、お母さん達が安心して働ける時代を作っていきたいと思います。

藤岡佐規子　ありがとうございました。この辺で三人の先生方に、最後のご発言をいただきたいと思います。宮地先生からお願いします。

宮地六美　先程、課長夫人より課長になれ、教授夫人より教授になれと申し上げましたけれども、かなり反論があろうかと思います。なぜなれるのかって。この日本の男社会の中で、女が仕事につくのでさえ大変なのに、昇進していくことはどれだけ難しいかということなんですが、それは私も十分承知しています。私は大学に勤めているので、会社とか外の職場は経験がないんですけれども、大学というところは女性にとって、非常にひどいところだというふうに思います。特に国立大学はひどい。数字で申し上げましょう。九大は講師以上、助手は外して講師以上の教官が多少出入りはありますけれども、千二十人中、女性は九人。わずか〇・九%です。

東大は三千二百人に対して十四人。〇・四%。京大は千四百人に対して九人。〇・六%です。ですから、一%にも満たない女性教官なんですね。今日ここにおいでの皆さんが二百人としますと、〇・九%の率なら一・八人です。それから東大なら〇・八人だから一人もいらっしゃらないということになります。今日のお客様全部男性ということになる訳ですね。工学部とか理学部の話をしてるんじゃありません。文学部も薬学部も医学部も、またカウンセラーも全部含めての数字です。研究所も含めて

の数字です。私は数字を当たって見るまでこんなにひどいとは思いませんでした。女に大学の講義はできないかって、そんなことはありません。私もやってます。女に理学部や工学部の教官が勤まらないかって、そんなことはありません。私も理学部の地質学科という、かなり男の中の男の仕事と、言われているところにおります。私にもできます。大学で差別がないと言えばうそになります。差別だらけです。嫌がらせだらけで、女をいじめる方法っていうのは何でも揃っています。でもそういうものに負けちゃいけないんですね。負けないで頑張るしかありません。そこで、例をお話しします。一人は鉱物学者なんですけれども、彼女は大学を卒業して就職もできませんでした。ある大学で無給の研究生をずっと続けていました。日本の大学はどこも雇ってくれないので、カナダの研究所に行きました。二人の子供は夫に預けて単身赴任です。八年間カナダの研究所や大学で研究を続けました。今度やっと日本の大学に帰ってくることができました。ある本州の国立大学の助教授というポストです。夫は四国の大学ですから、またもや単身赴任ですが、「瀬戸内海の方が太平洋より狭い」と、彼女は言います。国際的に非常に優秀な学者なんですけれども、この八年間に二十回日本の大学に応募しました。応募し続けました。なのにダメになった理由が色々ありましたが、一つだけ傑作をご紹介します。「女が単身赴任じゃ、問題を起こす」ある国立大学の話です。(笑い)でも、彼女は頑張りました。そして、とうとうポストを得ることができました。

もう一つ頑張った例です。私の同僚に物理学の助教授がいるんですが、彼女はある女子大学の家庭科卒業です。物理学が好きで、事務系職員や助手を続けながら、ずっと研究を続けてきました。やはりカナダの大学に留学して、国際学会でもかなり優秀だと認められて、理学博士の学位も取りました。長い間苦労した甲斐があって、昨年助教授に昇進しました。あの封建的な九大で、女子大の家庭科卒業でも頑張れば、物理学科の助教授になれるんです。働きたいという女性にとって、日本という国は本当に住みにくいところだと思います。でも、男社会が悪いとか、男が悪いとか、口で言うばかりじゃ仕方がないんですね。やるしかありません。頑張って続けていくというのが一つ。それから、次に男ならまあ普通にやっていれば何とか昇進していきます。同じように女も普通にやっていればなんとか昇進していくというふうにならないといけないと思います。髪を振り乱して、目を吊り上げて、必死になって、特別に優れた人だけしか昇進しないというのじゃなくて、男が結婚して子供を作って昇進していくというのなら、女も結婚して子供を作って昇進していくというのが保障されないといけない。そうでないと不公平だと思います。でもこれは待っていてもなかなかやってこないんですね。不公平だと言っても仕方ありません。ぜひ、法律で何パーセントかを決めて、どのくらいの数字がいいかわかりませんが、せめて二〇パーセントか三〇パーセントは、女性を登用して欲しいと思います。法律で制度化して欲しい。この問題は女性だけじゃなくて、ハンディキャップの人とか、あるいは外国の人とか、そういう方にもある程度制度化が必要なんじゃないかと思います。

そして三つ目、それが差別なくやられているかどうかのチェック制度が必要だと思います。私が行っていたアメリカの研究所の廊下には、一枚のポスターが張ってありました。WANTEDのような写真がいくつも付いていましてね、それぞれの下に名前と電話番号が書いてありました。差別があったらすぐ知らせてくれという訳です。男性のホワイトピープルの顔も一つ二つありましたが、後は女性とブラックピープル、メキシカン等の顔でした。アメリカにはどんなに小さな差別でも、あったらすぐ訴えることができるという、大変にうらやましい制度がありました。(拍手)

藤岡佐規子　ありがとうございました。では隈河先生どうぞ。

隈河培男　私はパネラーただ一人の男性、この会場にもこう見ますと本当に数える程でございます。それで、男の立場とそれから民間企業の立場で、と言いますのは、私は約三十年間民間企業に勤めていましたので、一言申し上げたいと思います。私の両サイドにおられる先生は民間でお仕事をなさってはいらっしゃいません。しかし、ここで問題になっているパートというのは大体民間企業なんですね。お役所でないところが多いんじゃないかと思うんです。だから、民間企業からの考え方、またそれにプラスの男としての考え方、そういう立場から敢えて申し上げます。

まず一つ、女性が男性と同じ給与や条件を求めるのであれば、厳しい仕事、もちろん残業や出張、転勤、色々あると思います。あるいは研修にも耐えて同じように頑張らなくてはいけないということ。これは当然のことだと思うんです。職場、特に民間企業というのは業績を上げるための戦場です。お役所以上に戦場です。都合が悪いときに「私は女性です、女性だから」というような甘い考えは許されないと思うんです。

二つ目は、男性と女性でこの世の中は構成されておりまして、男性か女性かどちらかしかいない訳です。その中でやはり女性にしかできないことがあると思うんです。ここにおられるほかの女性からお叱りを受けるかもしれませんけれども。子供を産むというのは、男性にはとて

もできないことでございます。こういった子供を産むこと、あるいはこれに続く子育て、仕事をなさる方はなさる方で結構ですが、こちらのほうもやはり立派な仕事だと思うんですね。そういうことで、やはり仕事、外でする仕事だけが仕事ではないんじゃないかと思うんです。学校を卒業しまして、一時期就職して社会経験を積むということにも、もちろん意義があると思います。結婚した後でも夫婦共働きしないと生活ができないというような仕組みになるとすれば、本当に豊かな国と言えるのかどうかという疑いを私は持っておりますね。

三つ目ですが、共働きの家庭は非常に増えております。一方で核家族というのが進んでおります。そうなりますと、夫婦共々毎日疲れて帰ってくる訳ですね。こういう傾向の中で、家庭というのは将来どうなるんだろうか。私は家庭というのは家族のくつろぎの場であるし、また、家族のだんらんの場であるというイメージが非常に強い訳です。ところが、もう疲れて帰ってきますとね、そういう場が、将来ともそういう家庭というのが存続して行くのかどうか。もちろん考え方が変わっていけば別でございます。そういうことで、最も私が将来を懸念していることは、家庭がそういうくつろぎの場として続くのかどうか、あるいは新しい家庭像というのが出てくるのか、その辺を一番懸念しておりますし、今から一番大きな問題ではないかと、私自身は考えております。

藤岡佐規子　ありがとうございました。それでは高橋先生お願い致します。

高橋久子　最初に、先程ご質問を受けましたので、ちょっとその答えを申し上げたいと思います。女性は一つの職場に張り付けられていて、その中でどうやって能力を磨いたらいいのかという、私は本当にごもっともなご意見だと思うんです。でも、能力の磨き方は色々ありまして、一つの職場にいて、その中で磨ける能力というのもあると思います。得てして、人に聞いてとにかく仕事を安直にこなしていくというタイプの人と、これがこういうふうに処理されなければならないのはなぜか、その根拠は何か、ということで、いろんな先例を調べたり、法律根拠を調べたり、そういうことまでやっていく方というのがあります。後者の方が後々に、非常にその方に強い力を与えるということは言うまでもないと思うんです。ただですね、日本の企業、それから公務員などの場合ですね、ポストを移ることが、能力の形成につながっていくという面がある訳ですね。それは私も公務員として経験致しました。私は公務員の上級職として採用されたんですけれども、私より二年前に入った先輩はずっと十何年も、ほかの男性職員は転々と色んな職場を体験させてもらっているのに、同じ職場に十何年置かれました。そして、その挙げ句、その人は「自分を移して下さい」ということを言って、十数年後にそれが実現したんです。その人の場合には、強力な外部からのプッシュもあったんですけれども、私はその時考えました。私共はこのままじゃだめなんだと。私たちが、もっと能力を形成していくためには、一つの職場じゃなくて色んなところに移っていかなきゃならない。それを私どもは、声を大きくして言おうと。公務員の場合は、ある段階では地方へ転勤したりもします。ところが、最初から女性は転勤しないものというふうに決め付けられていて、転勤もさせない。転勤というのはですね、私たちの場合、地方の課長を経験する訳です。管理職としての貴重な経験になる訳ですね。それがその後のその人のキャリアとして形成されていく。ところが女性は転勤しないものだという決め付けで、地方の課長へ出さなかったんです。このことをそういう立場で採用された女性が横の連絡組織を持って、人事担当者に申し入れをしたんです。申し入れをするのにですね、強く対立的な関係で「こうして下さい」という闘争的な言い方をしなかったんですね。夜の会合を持ちまして、そこへ人事担当者を呼んで、みんなでソフトにおもてなしをいたしましてね、そして実は私どもはこうやって地方に出る覚悟はありますと、地方に出して下さいと、やんわりやんわり言ったんです。それを一度ならず何度か繰り返していきました。だんだん情勢が変わって参りました。ですから、やはりそういうことを、要求することを捨ててはだめだということ、要求の仕方にはノウハウがあるということ、そして、その要求の仕方の時にいちばん強いのは、やっぱり女性が、同じ立場にある者同士が、話し合ってしっかりと団結していることが必要だと思う訳です。私どもの場合もその団結の力というのが、次第に状況を改善して参りました。これを一つお伝えしたいと思います。そして、もう一つはですね、最後に申し上げたいんです。家庭像はどうなるのかというお話もございました。実は私ですね、この家庭内暴力の家庭について、調査をした結果を見たことがあります。子供が家庭内で暴れる訳ですね。そういう家庭はどういう家庭かと。第一に挙げられる原因は、親の期待過剰です。親が、自分が実現できなかった夢を子供に託しているという親の期待過剰。それが子供を押しつぶしてしまっております。二番目に挙げられるのが、父親です。父親の無関心、無関与というのが二番目にでてきます。三番目は何か。母親の溺愛です。母親の愛情過多というのがでてきます。母親の愛情が不足しているというよりも、むしろ、愛情がオーバーで、その愛情がオーバーだというのは、やはり母親自身がこの社会において、自分の欲求を実現できないから、それを子供に託すという点があ

るんだと思います。この社会では、男は企業人間、女は家庭を守るべきもの、その中で女は自分自身のいろんな欲求やなにかを全部犠牲にして、今の暖かな家庭を準備している、というのが姿ではないでしょうか。そういう社会っていうのは、やっぱりどこか歪んでいると思うんです。社会の半分の性の者が社会的に認められず、欲求不満を抱えて生きているということを、もっと社会的にアピールすべきじゃないでしょうか。ですから私は、これからの理想の社会というのは、男の企業における働き方は、今、働きすぎだと思います。時間短縮ということはこれから必要だと思います。この労働条件の改善ということは、雇用機会均等法ができて、その中で男も女も労働条件が今のままではよくない、もっとよくならなければならない。男と女の両方の労働条件を考えるきっかけだと思います。そして、時間短縮がなされる。そうすれば男の人ももっと家庭のことができるようになるんです。女の人も職場で一人前の人間として認められ、家庭の責任は女の人はもっと軽くなるでしょう。男も女も、「仕事」も、「家庭」も、というのが理想の姿だと思います。これからの社会では育児をしない男の人は、意気地無し（育児なし）だと思うんです。そして、私は二十一世紀に女の人がどういう姿になっているかということは、今、母親が男の子をどういうふうに育てるか、ということにかかっていると思います。こういうところに集まってくる方々は、皆さん男はこうあって欲しいと言われるんですけれども、果して家庭で男の子をどう育てておられるのでしょうか。やっぱり私どもは色んなことを言いますけれども、一つ一つ、身近かなことから自分の夫を教育し、まぁ夫はもうだめだというふうに、あきらめている方もいらっしゃるかと思いますけれども、男の子をどう教育していくかということが、すぐれて二十一世紀にかかってるんです。私は、二十一世紀は男女両性が活力を持つ社会になるように、この身の回りのことから皆さんに、取り組んでいただきたいということを最後にお願い致します。（拍手）

藤岡佐規子　大変いいまとめをしていただいたと思っております。現状は、女性が男性よりも倍以上の努力をしないと、なかなか対等になれないということが出てきておりましたけれども、固い壁に小さな穴を一つずつあけながら、未来を展望していくことは、大変必要なことではないかと思います。その時に、家庭における協力ということで、自分の一生の連れ合いを、もうだめだからってあきらめて、子供にかかりっきりにならないで、あまりあきらめず、もう少し、さっきノウハウがあるとおっしゃいましたけれども、くすぐったりひっかいたりしながら、上手に家事に参加させていくということが、必要

だろうと思います。私どもも仕事の中で、次の世代をどう育てるかという、今の高橋先生のお言葉を、実際の保育に生かして参りたいと思います。家庭のくつろぎが女性にだけ期待されるのではない、新しい家庭像を探っていかなければならないと思います。こういった私どもの努力と同時に、法の整備なくしては進められないのではないかとも思います。ちょっと私事になりますけれども、私ども労基法の改正に伴ってですね、非常にフレキシブルな対応が求められているんです。私ども保育所は、財政難だから人手は増やせないのに、子供の処遇低下は許さないというんですね。保育所の場合、四十八時間労働、今そんなところはないと思いますけれども、それがまだ法の中では許されているんですが、処遇低下させず、人手は増やさず、四十時間労働体制にしろという、国の命令がある訳で、こういったことも法整備を考えていかなければ、なんともいたしかたがないんではなかろうかと思います。先程宮地先生がおっしゃったような、差別に対するチェック機能というものも、法に求めていきたいと思いますし、そういったことをやっていきます上でですね、今日は限河先生が黒一点でございましたけれども、どこでも女性が一人ですと、紅一点っていうように言われる訳です。これは決して誉め言葉じゃないと思います。そういう女性が一つの点じゃなくって、点をつなぎ面になって、層を厚くして色々な企業でも行政でも地域でもですね、政策決定に参加して行かないと、慣習や法というのは、なかなか変えにくいのではないかと思いました。最後に人間性の回復を男女ともにと願っていくのが、二十一世紀を展望する姿勢であると思います。ちょうど時間、ちょっと過ぎちゃいましたけれども、今日大変いい話をいただきました、先生方にもう一度拍手でお礼申し上げて終わりたいと思います。（拍手）

TALK セッション3　家族・夫婦・セクシャリティ

進行係　おはようございます。もうそろそろ十時ですので始めたいと思います。私は今日進行を務めさせていただきます兒嶋でございます。よろしくお願いします。

「日本女性会議'88北九州」、この会場は「家族、夫婦、セクシャリティ」というのがテーマでございます。寝たきりという言葉がございますけれども、これは体が悪くて床にふせている人達だけを言うのではなくて、精神的にいっこうに向上しない人達のことを「あの人は精神的に寝たきりだ」というのだそうでございます。今日は素晴らしいパネラーの方達もいらっしゃって下さってますので、出来るだけ皆様とも意見を交換していただきまして、今日は充電する一日であってほしいと思っていますので、よろしくお願い致します。

今日は隣の国の韓国からも先生をお迎えしております。ソウ・ミョンザさん。アンニョンハシムニカ、よろしくお願いします。トークの時間は十二時迄でございます。

申し遅れましたが、このピンクのリボンをしておりますのが、私達係の者でございますので、何かわからないことがありましたら、どうぞ御遠慮なく申しつけて下さい。

それでは本日のコーディネーターでもあり、パネラーでもいらっしゃいます冨安先生にマイクを渡したいと思います。

先生、十二時迄よろしくお願い致します。

冨安兆子　皆様おはようございます。今、先生という言葉が出ましたが、先程、控の間でですね、皆さん、それぞれ、会場の皆さんも先生という意味では、皆、先生なんですけれども、あえて今日は「さん」で通しましょうというふうな話し合いを致しました。このような段差もなくて、平場で話し合いをすればもっといいと思うんですけれども、多少皆さんのお顔が見える必要もあるかと思います。それと、同じ高さには会場の都合で設定が出来ませんので、段がついておりますけれども、同じ生きる仲間として十分に話し合いが出来たらいいなと思っております。今日は参加の皆さんが主役なのですね。私どもは、会場の皆さんからの話を引き出す役、時には挑発するような発言もあるかもしれませんけれども、それを受けて、反論があるときには、たくさんの反論も出していただく、こういうことなのでございます。

進め方としては、最初三人のパネリストの方から、基本的なそれぞれの分野でのお話を出していただいて、そして韓国からお見えのソウ・ミョンザさんからも、韓国の事情のご報告をいただいて、それから皆さんのご質問があればご質問を伺います。ご質問がなければ、更に三人のパネリストの方から、それぞれもうちょっとここを補足したいというところを付け加えていただいて、その

●パネラー

森　崎　和　江（作家）

1947年、福岡女子専門学校（現福岡女子大学）家政科卒業。1960年前後、激しく展開された三池炭坑の反合理化運動で、反権力側にあって戦った大正行動隊の一員として活躍し、「サークル村」「無名通信」などを創刊。搾取階級の視点を原点として、独自の文化論、エロス論を展開。主な著書「第三の性ーはるかなるエロス」「非所有の所有ー性と階級覚書」「からゆきさん」など多数。

久保田　誠　一（朝日新聞西部本社社会部長）

1938年、東京都生まれ。1962年、東京大学教養学部アメリカ学科卒業。同年、朝日新聞社入社。社会部、外報部を経て、テヘラン支局長、サンパウロ支局長、ニューヨーク支局長などを歴任し、1988年から現職。著書に「イスラエル最前線」「狂ったシナリオーフォークランド戦争」（共著）「アメリカと独裁政権」などがある。

篠　崎　正　美（聖マリア短期大学教授）

1940年、長崎県生まれ。1965年、九州大学文学部社会学科修士課程終了。九州大学助手、私立ひろにわ保育所長等を経て現職。大学外でも広く女性問題や女性学についての執筆、講演などで活躍中。著書に「男も読もう女性学入門」「現代の性差と性役割」（共著）「世界の社会学」（共著）などがある。

徐　　明　子（釜山大学校家政大学長）

1933年、ソウル市生まれ。1981年、ソウル慶熙大学校大学院薬学科博士課程終了。ソウル梨花女子大学校教授を経て現職。他にも、釜山市市政諮問委員などを歴任。現在、大韓赤十字社釜山支社青少年諮問委員、ＹＭＣＡ大学生部委員、平和統一政策諮問委員会（憲法機構）女性文科委員長としても活躍中。

●コーディネーター

冨　安　兆　子（高齢化社会をよくする北九州女性の会代表）

1934年、静岡県生まれ。青山学院大学文学部英米文学科卒業。現職の他にも、社会福祉法人「北九州いのちの電話」理事、青少年育成市民会議副会長など、女性の問題を中心に青少年から高齢者に至るさまざまな分野で社会教育と福祉の接点を求めて活躍中。過去数回にわたって諸外国歴訪の経験がある。

後、フロアの皆さんとの討議に入りたいと思います。出来たら皆さんとの討議時間は、四十分位はほしいと思っているんですが、必ずしもそうはならないかも知れませんが、ここへ来たら発言をすることが協力の一つなのですから、どうぞそのおつもりでいて下さい。

三人のパネリストの方々をご紹介する前に、フロアの皆様にお伺い致したいんですが、今日は北九州市以外からお見えの方、どれくらいいらっしゃいますか。ちょっとお手をあげてみて下さいますか。はい、ありがとうございました。残りの方が北九州市内という事ですね。一番遠い方、北海道の方、いらっしゃいますか。いらっしゃらないですね。鹿児島の方いらっしゃいますか。ようこそおいで下さいました。もっと遠い方はいらっしゃいますか。はいどうぞ、どちらからお越しでいらっしゃいますか。あー、沖縄。ゴメンナサイ、はるばると本当によくこそ。はいどうぞ。山形からお見えですか。ありがとうございました。それぞれの所から参加をしていただいて、色んな角度からお話ができるのを楽しみにしております。

今日は、「家族、夫婦、セクシャリティ」、というテーマで話し合いをいたしますが、特にセクシャリティとは何か、わかったような、わからないような、これは皆さんがどう受け止めているかというところから、始めないといけないのではないかという意見もありましたけれども、皆さんのとらえ方はさまざまであっていい、そこから何かを見つけて行けばいいというふうに基本的には思っているのです。今日は是非、この問題に関して発言したいと思って来ておりますという方、どの位いらっしゃいますか。是非発言をしたいと思って来たんですという方は、今のところはない訳ですね。話の事と次第によっては、発言したいという方はいらっしゃいますね。

皆さんから発言をいただかないと、この会そのものが成り立たない訳ですから、絶対発言はしまいなどと、覚悟を決めている方もいらっしゃらないでしょうから、どうぞ、そういう意味では、なるべく皆さんから意見を出していただくということを、くどいようですけれどもお願いして本番に入りたいと思います。

それでは、先程お約束したように、「先生」とは申し上げませんがお隣にいらっしゃいますのは、皆さまどうぞプログラムの十ページをお開け下さい、朝日新聞西部本社社会部長の久保田誠一さんでいらっしゃいます。

久保田誠一　久保田です、こんにちは。実は、天皇陛下のご容態が大変気になっていまして、今日は流れちゃうんじゃないかナーなんて、心配しておったんですけれども。お熱が高いようですが、まだご健在なようで、安心して皆さんのお話に加わらせていただきます。どうぞよろしく。

冨安兆子　そのお隣は作家の森崎和江さん、皆さんの中にも森崎さんのご著書をお読みになった方はたくさんあると思います。今、宗像市にご在住です。九州、中国、四国地域会議でお話をいただくためにお見えになり、今日も引続き、この分科会にも参加していただいております。このこともまた、ご紹介するまでもなくプログラムに書いてあります。どうぞ森崎さん、一言お願い致します。

森崎和江　皆さん、こんにちは。私はここに来る資格があまりないような、生き方をしておりますように思いますけれど、どうぞよろしくお願い致します。

冨安兆子　では、そのお隣の篠崎正美さん。朝倉町にお住まいです。福岡県朝倉郡朝倉町、三連の水車で有名なところでございます。よろしかったら足を延ばしていただくこともいいかと思います。

どうぞ篠崎正美さんお願いします。

篠崎正美　こんにちは。森崎さんが資格がないと言われると、私はすぐに帰りたくなるという感じなんですけれど、どうぞ、最後までご一緒させていただきたいと思います。

冨安兆子　みんな帰りたい人ばっかりで困っておりますが、それでは、韓国からお見えのソウ・ミョンザさんどうぞ。

徐明子　私は、話がよくできないですから、みなさまどうぞよろしくお願いします。

冨安兆子　ご紹介をごく簡単にとどめましたのは、プログラムに書いてございますのでそれをお読みいただいて、少し時間を節約しようということなのでございます。

流れと致しましては、最初に森崎和江さんから、新しい家庭あるいは、より人間的な家庭というんでしょうか、ご自分が模索していらっしゃる家庭像、特にその中でも子供の問題ともからめて、母性、あるいは父性についてもお話しいただけるのではと思っているところでございます。

その次に、森崎さんのお話を受けて久保田さんに、外国での経験が大変豊富でいらっしゃいますので、日本の女性と比べて、無理に比べる必要はないかも知れませんけども、外国の女性がどうあるのか、どういう家庭像なのか、その辺を自由にお話しいただきます。

それから篠崎さんには、セクシャリティ……、セクシャリティとは何か、実は分科会を設けますときに大変問題になった用語なのです。日本語として言い換えることのできる言葉はないかと、一生懸命、実行委員会で探したんですけれど、日本語に置き換えるとイメージが非常に固定されてしまう、やっぱりこれはセクシャリ

ティというような言葉で出さしていただく、そしてそれを篠崎さんのお話の中から感じ取っていただく、どういう範囲の、と言いましょうか、どういう領域のどういう範疇のセクシャリティが出るかは、また聞いてからのお楽しみということなのです。

そして、ソウ・ミョンザさんは、午後の部の全体会場でのお仕事がございますので、ご報告をいただいた後、だいたい十一時半ぐらいになったら、途中でご退席になる予定でございますので、それも前もって皆様にご了承をいただいておきたいと思います。

前置きがたいへん長くなりましたが、さていよいよ、トークに入ることに致しましょう。では、森崎さんどうぞお願い致します。

森崎和江　結婚観、それから家族観というのも、大変変わって参りました。

近年の若いお方々は、シングルライフを目指していらっしゃる方もいらっしゃいますし、それから結婚なさっても子供は産まない、自分の仕事を続けていくという方も大変多うございます。

私はもう、ウン十年昔の話になりますけれども、筑豊に住んでおりまして、我が家の近くに小さな家を一軒借りておりました。その頃はまだ、女性が職業を持つということが大変困難な時代で、ボツボツと働いている女性の方々や、炭鉱が駄目になりましたから、地域の問題などをご一緒に考えていたのです。

そうしますと、あちこちから色々な方がおいでになるようになって、自宅にお泊めしておりましたけれど、子供が大きくなって、それでは間に合わなくなったものですから、近くに小さな家を一軒借りていたのです。訪ねておいでになる方というのは、東京とか京都・大阪など都市の方が多かったのです。小学校、中学校、高校などにお勤めの方とか、公務員の方とか、色々な職業をもっていて、そして子供さんがいらっしゃる。子供さんがいらっしゃるけれども、職場でも家庭でも子供の事に関して、女がどんなに苦労しているかということが、理解されなくて困っていると、色んな問題、様々な角度からでしたけれども、相談においでになるのですね。ですから、お名前も聞かずにいろんな話をお聞きして、何の知恵もありませんけども、できることはご一緒にやっていきたいと、数日休んでいただいたりするので、家を借りておりました。

その頃は子供の問題がネックになっていたんです。最近は、職を持っていらっしゃる方が多くなりまして、子供さんがいてもご主人が色々協力して下さる。子供の送り迎えなどは、たいてい男の仕事というふうになったりしております。帰りが遅いときなどは、子供も食事を

手伝ってくれたり、亭主も手伝うというふうにしていらっしゃる。もっともその当時も、経済力を持っている女性もいて、遊びにいきますとウィスキーなどを出してくれる時、彼女のウィスキーがなくなっていたら、「あなた、ちょっとウィスキー借りるわネー」なんていうふうで、だんなのウィスキーを借りて出してくれたりする。今はそういうのはごく当たり前になっておりまして、ある家庭経済に関する雑誌が出ておりますけれど、これには家計という言葉は死語になりつつあって、もはや家庭は家族それぞれの個計である、というふうに書いてあったりしますほど、家庭というものが変わって参りました。

私は筑豊から東京に出ていって、就職した人々のところに時々行きます。そうすると、さすがに最近は良くなったなぁーと、……家庭でご夫婦よく協力しあって、子供さんも育っているし、いいなぁーというふうに思っておりましたら、この二～三年たいへん気になることが出てきております。それは昨日の婦人問題の場で少し触れさせていただいたのですけれども、これまでは、働くお母さんの条件を一生懸命に考えておれば良かったんですね。

この頃気になっていますのは、赤ちゃんのことなんです。たとえば乳幼児のアレルギー疾患が大変多くなりまして、私がお訪ねする家庭では皆そういうふうになっていて、それに加えてゼンソク。というのが、上京して家庭を持った若夫婦の生活環境というのが、たいへん人工的になっております。公団住宅の十一階なんていうところに入れた夫婦は、幸せで、そうでない家族というのは、都心で十万を超える家賃の中で、部屋が狭くて六畳、八畳に台所、バス、トイレ付きで十万を超します。赤ん坊を預けているベビーシッターも、そういう環境の中で赤ちゃんを預かっていて、一畳に二人位ということになったりします。アレルギー疾患というのが大変ひどくて、口から入れるもの全部を拒否する子もいるんです。一人一人、体質が違うので、大豆タンパクが駄目だとか、卵が駄目だとかいうふうにして、お医者さまが分析して下さっておりましたが、このところ動物性・植物性のタンパク質だけではありませんで、米・麦・豆なども食べると呼吸困難になるほどひどいのです。とても大変なんですね。

二歳半になりますけど母乳しか飲めません。私は大変心配しておりまして、これは食物反応というより、生存反応といいますか、赤ん坊というのは母胎から空気中に出てきたばかりの存在です。母胎とは人間の自然でございまして、自然条件の中で生きていたのが突然、あまりにも高度に人工化している環境の中にほうり出されて、生存拒否のようなもの、母胎に戻ってもう一度やり直し

たい、といっているほどの状況ではないかとも思ったりするんですね。子供にも個性があります。個性があるということを大切に育てたいのに、それが出来ないほど、生まれたばかりの外界が、生産のためといいますか、合理的な形で物を産み出すため、文化を産み出すための条件は整っておりますけれども、生命の発育のための環境は破壊されているのです。私たちが子供を育てる頃、そんなこと本当に考えたことなかったんです。人間の生存の基本条件など永遠に安泰なのだと信じていませんが、今、大事な問題として、家族を取り巻く問題として、あるなぁーと、感じるようになりました。

それに反して今年の夏、一か月程、とある山荘におりましたんです。こういう所なら大丈夫だと思っておりましたら、ここでは違った反応がありまして、自然がたっぷりあるのに、家庭の中で子供が自閉症を起こしておりました。登校拒否の子供もいたりするのです。人間関係が変わっているのです。ですから家族の問題、夫婦の問題を考えようとするときに、どうしても弱いところにいろんな形でシワ寄せがきますから、そういう問題もひっくるめて、今後は考えなくてはならなくなった。私の世代のときは、そんなことつゆ考えませんでした。

私は今、娘夫婦と暮らしており、孫が一人おり、私がこうして外へ出て行くときは、お化粧をしますから、びっくりして顔を見て、ピカピカおばあちゃんといいます。普段は本当におばあちゃんでございまして、昔の話など、もう時効にかかっておりますのに、こういうふうな話をして恐縮なんです。今日のテーマに私はズッコケております面がありまして、何とかして女性全体の問題を考えたいと、あるいは、私自身物書きでございますので、物を書き続けていきたいというふうに考えておりますが、これまで何度となく失敗を繰り返していまして、今はシングルライフという、一人で暮らしているという感じでございます。つまり、夫がおりません。いないつもりはないのですけれども、遠ざかっておりまして、淋しいですね。淋しいんですけれども、それでもこれが私の人生だと思っております。でも男性を無視して生きている訳ではないんです。そうではなくて、やはり、男女力を合わせて生きていくという世の中が欲しい。ことに、子供を産むということについての、形而上下の共有関係が作りたいのです。産むとは何か、育てるとはどういうことか、という家族の基盤が大きな問題になっていると思いますので、ちょっとその出入口として、このくらいのことをひとまず話させていただきました。

冨安兆子　ありがとうございました。

出入口だとおっしゃいましたが、さあこれからどう中に入っていくか、これは私たち共通の課題ですね。

次に、話題が飛躍するかもしれませんけれども、久保田さんにお願いいたします。今日は残念ながらたったお一人の男性です。会場の方にはちらほら男性もいらっしゃいますので、男性同士の連帯が生まれれば、それはそれで結構なのですけれども、今日はなるべく、女性が多勢で男性をいじめるパターンにはならないようにしたいとは思いますが、ところが、そうやすやすといじめられるような方ではないようでございますから、安心して思うことを話して頂きます。

久保田誠一　いじめて下さい、歓迎します。私、四年ほどニューヨークにいました。帰ってきて、まだ一年ちょっとしかたってないのですけれど、よくアメリカ人と酒の席で、〝秘密兵器〟を話題にしました。日本の経済力は凄いと彼らはいつも褒めるのですが、私は、日本にはまだ秘密兵器があるんだと。つまり、まだ男しか社会に出てないんだけれども、男よりももっと能力があり、力のある女性がですね、一斉に職場にでてきたときには、日本のGNPの倍ぐらい簡単に上がる、そしたら日本はもっと凄いんだぞ、と私が脅かす訳です。そうしますとアメリカ人のほとんどがニヤニヤと笑いまして、それはお前間違っているというのです。何を間違っているかと聞きますと、日本というのは男性と女性が実にきちっと役割分担ができている。女性がしっかり家庭を守り、子供の教育をやってくれているから、男は朝から晩まで仕事仕事といって、仕事に専心出来るし、それが日本の経済力の発展につながっているのだと。お前が秘密兵器だと言っているのは、とんだ間違いで、女性が職場にでてきた瞬間から、男はソワソワして仕事に手がつかなくなって、結果的には日本の国の力が落ちちゃうじゃないか、むしろ我々はそれを歓迎したいなんて話がでまして、ワイワイガヤガヤとなる訳です。

アメリカで生活してみて驚いたのは、アメリカという国が、かなり男尊女卑の国だということです。巷間伝えられるところは、日本という国はまだまだ男性社会で、アメリカというのは女性が大事にされている。これは、皆さんもそういう認識だと思うのですけれども、例えばアメリカンエクスプレスというクレジットカードがあるんですけれど、これはビザカードやマスターカードに比べて、はるかに高い買物ができる。我々日本人というのは、自分がカードを持つときに、女房にもカードをもらって、それを女房に預けて好きなように買物させてますね。それから給料も全部女房のところに、銀行から入る仕組みになっていますけど、アメリカでは全く別でありまして、女にカード持たせたら何を買われるかわからんと不安がっている。それから給料もまず絶対渡しません。余程奥さんの力が強くない限りは、だいたいだんながきちっ

と財布のひもをしめている。

昨日、ドナルド・キーンさんと、講演の後フグを食べながら、日本とアメリカの女性はどちらが強いだろう、どちらが幸せだろう、と議論しましたが、そこに下村満子さんも加わってきて、話が弾んだのですけれど、結論はやっぱり日本の女性の方がいいなぁ、恵まれているなぁ、ということなんです。

アメリカの家庭、特に夫婦関係を見てまして、やはり日本と徹底的に違うのは、私は訴訟ということじゃないかと思います。訴えるということ、アメリカという社会は、まさに訴訟の社会で、例えば子供が大学の試験を失敗すると、お父さんと先生を訴える。ちゃんといい教育を自分に与えてくれれば、僕は浪人なんかしないで済んだのに、きちっとお父さんやお母さんが教育を授けてくれなかったから、私はこういう惨めな思いをするのだという。本当に冗談みたいな話ですが、それが通ってしまう。刑務所から囚人が脱獄する。捕まる、連れ戻されてくる。逃走したということで、ペナルティがまた課せられる。そうすると、囚人は看守を訴える。看守がちゃんと見ておれば、おれは逃げなくて済んだんだと。あほな話ですが本当にあったことです。

それから奥さんが亭主をですね、強姦罪で訴える。アメリカ全部がそうだというのではないのですが、例えばオレゴン州とか、ニュージャージ州とか、デラウェア州などで、私が記憶しただけでも五、六件ありました。一九七八年十月ですかオレゴン州で起きた事件は、二十三歳の妻が二十一歳の学生だった亭主にレイプされたといって訴えたケースで、これが非常に話題になって、色んな議論の末、まだ学生だからというんで無罪になったんですけれども、有罪になると最高は二十年の刑を課せられる訳です。ですから、こういう訴えるという風潮が出来た背景には、日本と違って、色んな所から移民が来る、新しい人が入ってくる。そして白黒を決着するのに、どうしても法廷にもっていって、法律に照らしあわせて考えないとできない。しかも、日本には一万五千人しか弁護士がいないのに、アメリカには、なんと七十万人もいる。何でも訴えればお金になるからやろう、やろうとそのかす。こういうことが夫婦関係にも入ってきて、どうしても彼らは別れる時のことを念頭において、結婚生活を始めているような気がします。

日米の大きな違いは、すぐ訴える、訴え上手なアメリカと、できれば訴えたくない、つまり喧嘩下手な日本でしょう。

アメリカの経済が非常に疲弊していて、日本の経済が上昇気流を続けていますが、その一因は、私は家庭だと思うんですね。家庭が落ち着かなくなってくると、その

被害はすぐ子供に行く訳ですね。いつも夫婦喧嘩をしたり、あるいは、それぞれがまた離婚する。アメリカは二組に一組が離婚するといわれていますけれども、新しい配偶者ができれば、当然、それぞれの関心は、新しい夫なり妻などにいく訳なので、子供は置いてきぼりされる。あるいは、奥さんがどんどん仕事にでていく。お父さんもいない、子供は残される。子供はテレビを見て、ポテトチップを食べる、チョコレートナッツを食べる。だからブクブク太る。誰もいない部屋でマリファナを吸う。そういうことが、アメリカの社会の一つの崩壊の大きな原因になっているのではないかと思うんです。その影響が経済にも出ている。

日本では、家庭と夫婦のそれぞれのキーパースンといいますか、信頼をつなぎとめておく役を、女性がしてくれております。そして、アメリカ人が日本人に非常に羨ましいというのは、例えば、ニューヨークに住んでいる日本のお母さん達は、カープールと言いまして、毎日きちんと分担をして、子供達を日本人学校なり現地校に連れて行く、そして、終わると、また学校から連れて帰る。これは、かつてユダヤ人ができたことだけれど、それ以外誰もできないのを日本人がやっている。日本は基本的な役割分担がうまくいってて、その分担がかなりゴチャゴチャになっちゃっているのが、アメリカという気がするのです。

そういう意味で、日本女性に私は讃辞を送りたいのですが、ただ一つ強調したいのは、日本の女性ほど恵まれた立場にある人はいないんだということです。これをしっかりまず認識していただいた上で、その認識の下にですね、話をしていかなければならないんじゃないかと思います。

冨安兆子　ありがとうございました。

世界各地を見てきた上で言えることなんだけれども、日本の女性は、たいへん恵まれていると言う話がでてきまして、何か男性軍の顔がほころびたような感じがするんですが、皆さんその通りだとお思いになりますか。思わない。そこら辺が、いろいろと思うか思わないかが、後で出てくるところですけれども。しかし、女性の神話と言いましょうか、女性はかくあるべきという一つのイメージがあって、そういう意味では、日本の社会はだからこそ、うまく機能しているのだという話でございましたね。さて、そこを受けまして、反論が出てくるか、こないか篠崎さんお願い致します。

篠崎正美　あらかじめ、森崎さんや久保田さんのお話がこういう内容であるとか、全然存じませんでしたので、最初からその反論を企てるというような余裕がありません。今日はトークということですので、おしゃべりの材

料になることを、いくつか申しあげたいと思っています。

私は、今日のテーマに関していえば、「生きるというのはコミュニケーションだ」と思うんですね。コミュニケーションというのは、できればたくさんの異質な、自分とは違う異質な人と交わるということによって、自分を膨らましていく、生きてきたということが感じられるようなそういうプロセスじゃないかなぁーと勝手に思っています。そういう意味では、異なる性、男性と女性というのは、異質な存在の一つの典型だと思います。けれども、今お話しましたアメリカだとかヨーロッパなんかでは、男同士にも、女と男の関係よりも異質性を感じる。コミュニケーションして楽しい、そういう意味で、同性同士でもホモとかレズというようなのが、市民権があってしかるべきだという考え方が、かなりある訳です。私はそういう環境に育っていませんから、観念的にそういうこともいえるなぁーと思うだけで、自分の気持の上でそういうことが受け入れられるかというと、受け入れられるとは言えないという部分の方が大きいんですけれども、そういうようなことを考えます。

それからまた、やっぱり生きるとか命ということを考える場合には、生まれてから死までというロングランというか、長いパースペクティブでものを考えたい。私、最近、高齢者の方の健康ということについて、少し科学的と称する調査をして、つくづく思うんですが、高齢者の方の健康が、かなり高いレベルで維持されている方々についての、要因というものをですね、因子分析なんかで見ますと、非常に面白い結果がある訳です。第一の部分というのは、その人々の心の成熟度に関する色んな要因が、ぞろっとでてくる訳なんですね。健康というのは心の成熟だ。それから二番目の要因としては、体の健康です。体がいろんな調節器・循環器だとか、そういうものが、ちゃんと調節の役割を最後まで果たすという意味の、体の不調節がもちろんある訳です。もう一つ、三番目に社交性というのが出てくるんです。趣味がたくさんあるとか、たくさんの方と交わることができるっていうような、また、それにふさわしい体力とか、デーンとしているんじゃなく、身が軽く、パッと動くというような方の健康度が、高く維持されているというような結果をみまして、やはり、生命をずっと最後までロングランで保って行くためには、自分の存在を基本にして、色んな方と交わっていかなくてはいけないんだと、つくづく感じる訳なんです。その最大のものが、異性とのコミュニケーションっていうことになるんじゃないかなーっていうふうに思います。

そこで、性ということ、異性関係、両性関係ということについて最近、私が注目した事実だけを、最初にパッ

と申し上げたいと思うのですが、この間、高等学校の先生方の教研集会がありまして、そこに行っておりましたら、ある先生はこういうことを言われた。その先生は写真部の顧問の先生なんですけれども、文化祭で……生徒の作品を展示しようと、いろいろ良い作品を見ていたら、ある女生徒のポートレートが、すごくきれいに写ってるのがあった。女生徒が写したもの、女生徒が女性を写したもの、これを大きく伸ばして、写真部の真ん中に置こうとしたら、その女の子と仲の良い生徒のグループが、その写された被写体になった女の子がいないすきに、先生あれは駄目だ、おろしましょう。あんなの置くんだったら、私たち写真部を辞める!とこう言ったと言うんですね。男の先生は、何のことかわからなくて、良く写っているじゃない、写した人の腕も良いと言ったら、結局女の子達は泣き出してしまって、そんなの掲げられたら、私達がカッコイイと思っている男性がそれを見て、みんなその女の子に移っちゃうと困るーと言うんですね。それで、普段あんなに仲がいいグループと思っていたのに、中味はこんなものですか、女の子の友情というのはと言われたんですね。そういう事実だから、女性はやはり女性の自分の性という能力に関しては、男性もある部分では敵対しているかもわかりませんけど、敵対者なんですよね。自分より、女として女性度としてどのくらい上か下か、常に考えていて、自分より上に立たせたくないというふうに、いつのまにか、そういう習性が身についている。

逆にこういうのがあります。ある国立大学で私、女性史の講座を受け持ったときに、受講理由というものを書いて貰いました。七五〇人くらい受講者があって、そのうち二五〇人しか受講できないので、落とすために書いてもらったのですが、その受講生の中に、自分の性体験を書いた男子学生がいました。その男子学生、北九州市出身なんですけれども、累々と自分の小学生時代からの性について、こういう体験、友達のこういう事件というのを書いた後で、大学に入る前の高校三年生のとき、進学で本当に疲れ果てて床屋に行ったときに、これはマスコミの方がもしいらっしゃったら書かないでほしいんですけれども、すみません。床屋の兄ちゃんが、いいとこ連れて行ってやろうと、キャバレーに連れて行ってくれた。そのキャバレーで相当酒を飲んであがったところで、個室つきの浴場に連れていってくれて、初めて性体験をした。凄く自分では感動していいと思ったから、親の金をくすねて何回か行ったと、そういうことが書かれてあったのです。それを見て、やはり、ちょうど今の写真部とは反対に、女性は自分の性ということに対して、女性同志の分断があるけれども、男性は大学

進学で受験している男の子でも、性ということに関してはパッと結託する。一緒に連合する、力を合わせる。そこで、階級とかそういうのは問題ではない。女性は男性という存在に対して、一つの対象物みたいなものであって、自分がどのくらい能力が上か下かあまり関係ない。女性はそれに対して、自分の性としての資源を少しでも上につけるために、自分を取り扱うように、本当にいろんな場面を通じて訓練されている。結果がすでに高校生で出ているんではないでしょうか。

この辺りがですね、男性と女性のコミュニケーションということを考える場合に、私達が男の子や女の子を、家族の中でどう育てているのか、一生涯、自分の命というものを大事にしていきながら、他人とも仲良くする場合に、仲良くする仕方というのは女性は女性同士、常に分裂するように、自分の性を見つめる。男性は買春ツアーにしてもそうですし、いろんな場面でもそうですが、完全に階級みたいなものを越えて、パッと結託するような部分がありはしないだろうかということをですね、この二つの事実によって皆様に投げかけたいと思います。

それから、最近は若い方の意識がかなり動いていると言われます。結婚についての考え方も変わりつつありますね。最近、農村にお嫁さんの来てがない、フイリッピン女性とバーで知り合い、お嫁さんにもらった男性が近くにいるんです。親が物凄い反対をして、友達同士で結婚式を挙げた青年が、私の住んでいる農村にもいます。また、最近農村の花嫁対策ということで行われた、集団見合いに出る機会がありました。

一九歳～三十歳の農村の男性を五十人くらい集めて、女の子は半分くらいでしたが、集団見合いを、そこでたまたま司会をするはめになったんで、そのときに結婚観というのを聞きました。そしたら本当に、私達の頃より変わっているなぁーと思う部分があります。気に入った男性、相手がいれば、結婚という形にこだわらなくても、生活したいという女性が九割でした。だから、その通りする訳でもないとはと思うんですが、やはり、色んながらみの中にある打算の中で、配偶者というものを選択していきますので、全部その結婚外の同棲生活ということを、やるとは限りませんけど、根っこには、そういう願望が若い方の中にあるんだなぁーということ、をつくづく感じました。

女性の意識は非常に流動化しているという部分を感じました。

そして、久保田さんが今おっしゃいましたように、非常に日本の女性は結婚して恵まれた地位を獲得する。私、ある意味では本当だと思うのです。男の子とその家族が必死になって獲得した社会的地位、生活者としてのあら

ゆるものを犠牲にして、職業的地位を達成するために、ものすごい努力を日本の男性はやっている訳ですけれども、そこの中にそれぞれ女性が組み合わさって行く中で、妻が異質な存在としての夫に対して、どういう態度で臨んでいるかということに関しては、私は必ずしも久保田さんがおっしゃったような実情ばかりではない、そういう妻が多いということも事実でしょうけれど、ばかりではない。例えば今のお財布の問題で、この間女子大で公開講座、いろんな国の方のトークセッションがありまして、出ましたボランティア、イギリスの方がですね、特にフィリピンの方なんかが、日本女性は全部財布を任せられてお幸せと言われたんです。日本の女性自身が任せられたといっても、夫の期待は自分の中に埋め込まれているから、その通りに行動しているだけであって、自由勝手にやっている訳ではない。もしそういうことを自由勝手にやれるんだったらそれはお幸せということでしょうけれども、というふうに女性自身の中から反論する部分があった訳です。勿論それを壊せば自分の生活も壊れるから壊す自信のある人しか壊さない訳ですけれども。それからまたやはり夫婦関係というのは根っこはやはり性愛の問題があると思うんですけれども、性愛関係についても妻の満足度とか、あるいは妻が性的欲求を感じた時、本当に主導権を持って対応しているかとか、あるいは自分がそれに満足していない時に、満足してないと本当に言っているかどうかというようなことを、なかなかおもてに表しにくい部分ですけれども、そういうことについて最近少しずつ調査らしきものが出ている範囲内で見てみるとですね、あるいはここにいらっしゃる皆様方が、自分の生活をお考えになって、本当に満足というか、確定した地位というものが対等な関係性のうえで成立しているのか、常に夫をたて、自分が多少欲求不満があっても、それにフタをしてあまり日常生活の意識の上に乗せないような、上がらせないような工夫を自分なりにしたうえで、夫とは付き合っているという部分がないのかどうかということを考えますとですね、秘密兵器どころではなくて、やはり相当な問題がはらまれているのではないかと私は思われます。それの集大成が、私は今の老年期に来ていると思います。

総理府が老年期のこういうことを調査したとき、日本のおじいちゃん、おばあちゃんだけが異性の友達も同性の友達も両方とも持っていますという人がものすごく低いんです。タイだとかアメリカ、フィリピン、デンマークそういう他の国では異性も、同性も同じくらい持っていますという方が結構五割くらいいるのです。それは別に性愛関係ではなくていい、お話をするとかお付き合い、そういうものでかまわないと思うのですけれども、それ

も含めて非常に少ないんです。

男は男の文化、女は女の文化というようにからめ取られてコミュニケーションが出来ないのです。保健婦の大工原さんという方が「老年期の性」ということで調査をした本があるんですが、そんなのを拝見してみますと、男性の場合はやっぱり六十歳でも八十歳、九十歳でも男性は女性と戯れたいと九十%くらいの方が言っているけれども、妻は戯れるどころか同性同士で旅行に行って、夫の面倒を見たくない人が多いというような状態がかなりです。異性のこと、そんな汚らわしいことを今の年になって聞かないで下さい、こんな調子で老年期の性を生きている。それはそれで他の満足を見つけているからいいじゃないかといえばそれまでなんですけれども、私はそういうようなコミュニケーションのあり方で、家族の中に集まっている異なった性が本当に信頼関係というものが深いレベルで築き上られるんだろうか、いろんな信頼が崩されそうな、他のものにはノータッチでなるべく内側に内側に囲んだうえで行動させない、考えない、感じさせないということをしたうえでの信頼関係というのではですね、あまりにも乏しい、貧しいというふうに思わざるをえないんですね。私も家族というのは本当にこの社会の中で信頼関係を創出するほとんど唯一、全能の集団だというふうに思っています。けれども、その信頼のレベル、中味ということを考えると、やっぱりここで問題にするような、女性が本当のところどう考えているのかということを掘り下げないと、本当においしい水を深いところから汲み上げることは出来ないというふうに信じております。

冨安兆子　ありがとうございました。……人間が生きるというのはコミュニケーションの問題だというところから入りまして、そういう意味ではさまざまな多様なコミュニケーションがそれぞれにあるということが、多分バラエティに富んだ多彩な生き方につながるんではないかというお話でした。そういう観点から見ると、日本における男女のかかわり方というのは、本当にこれでいいのだろうかという問題提起だと私は受け止めたんですけれども。

ソウ・ミョンザさんの韓国でのご報告をいただく前に、お三人のそれぞれの発言をお聞きいただいて今までのところでここをちょっと念押ししておきたいとか確認をしておきたいとか、質問したいとかございますか、ご意見は後にしていただきます。質問のところで何かありますか。特にございませんか。

あるいは、パネリストの皆さんにここを聞きたい、お三人にこういうところを期待して来たんですよ、というようなご注文でも構いませんが……はいどうぞ……

井上　最初に馬鹿な質問をさせていただきます。今日は篠崎先生にお会いしたくてやって参りました。あえて私、十年ほど前に講義を受けたものですから、ずっとですね私、今日ここに出て来まして、篠崎先生のほうにお伺いしたいことがございまして。と申しますのは、十年ほど前、先生は大きなお腹を抱えられて教壇に立ってらっしゃいました。私事で恐縮なんですけども昨年結婚しまして先月出産致しました。妻の方が。(笑い)それで出産のひと月前まで実は妻も働いておりまして、その姿を見まして先生のことを思い出した次第でございます。あの当時、先生大きなお腹を抱えて、どのようなお気持で教壇に立っていらっしゃったのか、その当たりをちょっと率直にお伺いしたいと思いまして。

冨安兆子　あの、ちょっと待ってくださいませ。それを聞きたいあなたのお気持ちはどういうことなんですか。

井上　はい、あのそういうふうに突っ込まれると困るんですけども、私自身、妻が働いておりまして、非常に恵まれてるなということを実感として感じました。

冨安兆子　どちらが。

井上　妻に対してですね。そのようなことを許してる状況に対して、と申しますのは、女性が職場で妊娠をしながら、大きなお腹を抱えて働き続けるということが非常に難しい現実というものを随分見て参りましたので、端的に言いますとですね、そのような現象だけをとらえる質問かも分かりませんけどもね。その背景にある今の家族なり夫婦の問題、それを取り巻く社会状況、そういったものもからめてお答えいただければありがたいと思うのですけど

冨安兆子　はい、だんだん難しくなって参りましたね。他に関連で質問がありますか。今メモが廻って来ました。発言の方はお名前と所属というか、私から言わせれば、差し支えなければという意味です。言いたくなければ、おっしゃらない自由はあっていいと思うんですが、多分後で発言を記録するときに、意味がわからなかったら問い合わせるというぐらいの意味のことですからどうぞ。

井上　はい、私、只今老人ホームの方でソーシャルワーカーとして働いております井上と申します。

冨安兆子　ありがとうございました。関連で何か他にありますか。

どうぞ。

米沢　米沢と申します。高齢化社会をよくする北九州女性の会の活動にかかわっておりますけれども、こういう会議で女性の問題が出ましたときに、育児のことは女性の今までの、現在もそうですけれども、働くことのネックになっているということは、本当によくわかるんですけれども、トータルな人間として考えた場合、やはり老

いた親をみるということも、これから高齢化社会がどんどん、急激に進んでいく中で、それはさけて通れない問題になって来ておりますけども、特に森崎先生に伺いたいんですけれども、昨日の話に聞きました母性父性ということも、私なりになんとなく、感覚としてわかっているんですけど、先生はほとんどの場合、女性に介護というものが一任されてるというか、覆いかぶさられてるという状態の中で、トータルとして生きるということの中での老人介護、特に今、政府がやっている在宅ということでの、それは女性をあてにしての在宅だというふうに思っておりますけど、その辺の関係、もう少し聞かせていただけたらなと思います。

冨安兆子　高齢化問題については、「高齢化」という、別の分科会が設けてありますが、しかし、やはり「家族、夫婦、セクシャリティ」ということでも、いろいろ関連して参りますので、森崎さんよろしゅうございますでしょうか。お答えがいただけますね。ご質問これで打ち切ってよろしいですか。はい、それでは、最初の質問の方からいきましょうか。篠崎さんどうぞお願いします。

篠崎正美　十年程前に佐賀県で社会福祉学科で私、勤めた時の学生さんみたいなんですけど、その学校にいる時には、おなかは一度しか大きくならなかったと思うんですけど、三人たて続けに二年おきに生みましてですね。子供連れで出勤して、調査に学生さんと一緒に行ってみたりやりました。今のご質問ですが、本当によく聞いてくれたという感じです。私は、本当に堂々とわざと目立つように真っ赤なマタニティを毎日のように着てですね。社会福祉やるんだったらこれくらい考えてほしい、という気持ちでその当時働いていました。でも、今、奥さんがすごく恵まれた状態になってるとお聞きして、非常に嬉しいです。それ以外は申し上げる必要ないと思います。

森崎和江　全体を通して篠崎さんのご発言に私、全面的に賛成なんですね。それから今、ご質問いただいた米沢さんとおっしゃいましたっけ、おっしゃるとおり、家族、家庭の中で古い形の分業がまだ一般的ですね。一般に男性は自分というのを考えるときに、生まれて死ぬまでというふうに考えるんですね。でも女性の場合は、生まれて産んで死ぬ。というふうに次の代につながっていく生命を含めて、人間というものを見ています。だから男性の人間観というのは、本当にまだ半分しか育っていないと私は思っております。生まれて、産んで、死ぬということを、かつての家族はみんな家の中で、抱えておりました。それが、女性の負担にもなっておりましたが、しかし、文化としては、家庭の中に産むということ、死ぬということが入っておりました。けれども、現代社会というのは、産むことも、家の外に出しましたし、それから死なんていうのは、もっとも激しく家族外に出しております。それこそ死というのは、ゴミのように考えられております。なぜそうなるかというと、活力があって、生産的な効率のいい社会が、中心となっておりますから。子供を産むとか死ぬとかっていうふうなことは、本当に効率の悪いことなのですね。ですから、そういうのは、社会という概念の中からはずされつつあるんです。はずされつつあるものをどうやって救うのか。それは、生産効率を上げた利益の残りでもって、効率的に救う。かつては、ひとりひとりが、生まれて死ぬまでの自分や他人とどうつきあうかということを知っていました。手当ということを知っていた。手をただこうあてるだけで、人の命がよみがえるほどの人間関係というのを。でも古い昔に帰れということではないのです。そのような文化をどういうふうに社会化し、女性も男性も心得ていくことができるのかというのが、本題だと思います。非人間的な社会化でなく、人間的な社会化。また、性分業的な家族労働でなく、男女ともに産むこと、死ぬことを人間の生の内側にとらえること。高齢化の問題というのは、今から私たちが一緒になって考えなければならない、つまり、それをどうやって人間性の中へ、よみがえらせるか。どういうふうにして、家族のなかで死を考えるのかということだと思います。老いていくということ、死ということ、これは私、四つの子供から質問を受けたことがあるのです。夜、隣の部屋からしくしく泣く声が聞こえる。どうしたのかと思って行ってみましたら、長女がしくしく泣いておりまして、「どうしたの」と言って、おふとんの中に入ってだっこしておりましたら、しばらくして泣きやんで「ママ、死ぬの怖くない」ってこう聞いたんですね。本当にドキッと致しました。死ぬの怖くないということとも通じます。そういうことに対して、親がどういうふうに答えることができるのかという問題です。老齢化というのを単に社会問題として、家の外でどういうふうに処分するのかということだけでは解決つかないと思います。それも非常に大事なことですから、こういうのは、もっと細かに話さなければなりませんけども、私が考えておりますのは、ひとりひとりが命をどうとらえているのか、人間観はどうあるべきか、どうありたいのか、ですね。

昔も今も、人間観が男と女とは非常にことなっているのです。生命観が。私は男性のそれは未熟だと思っています。男性と女性がなければいのちは生まれません。それを両性が認識し、どういうふうに手当をし続けていくのか。家族関係の中で、社会機構の中で、家の中は生まれて死ぬまでのトータルなことが、ドラマのように行われるところです。そのドラマをマイナスとせず、両性で

プラス化し、子へ伝承させる方法はどうあるべきか。家でも社会でも。そういうふうなお答えで今のところは、ごめん下さい。

冨安兆子　時間の都合もありますから、意をつくしたというわけにはいかなかったかもしれませんけれども、まずは、そこでよろしゅうございますか。久保田さんから、コメントがおありのようですから、どうぞ。

久保田誠一　私に娘が二人おりまして、今では、高校と中学なんですけど、ブラジルで生活していましたときに娘たちが非常にもてたんです。どんなパーティーに行くときでも、「必ずお嬢さんを連れて来てくれ」と。最初は何故か解らなかったんですけど、日本語だったんです。ブラジルに渡った一世というのは、ちょうど八十年前に笠戸丸で行った方が第一世で、その方はもう数人しか生きておりませんけど、年をとって老いてきた彼らが、今一番深刻に悩んでいることは何かというと、言葉なんです。貧農の息子さんたち、娘さんたちがほんとどでブラジルに行って、一生懸命努力して、子供たちに教育をほどこす。サンパウロ大学というブラジルで一番いい大学の恐らく⅓は日本人系の生徒だと思います。

その努力が実り子供は、いい学校で、いい教育を受けたから、どんどん出世しますけど、そして、今度は孫ができる。実際、おじいちゃん、おばあちゃん、やっとほっとして、やれやれというときに、孫と接する機会が多くなるのだけれど、孫のポルトガル語と自分の日本語ではコミュニケーションができないのです。言葉の厚い壁にぶち当たる。あそこに八十万人の日系人がいると言われてますけど、その一世たちが非常に淋しがっているのは、そういうことで、うちの子供たちがもてたという理由は、小さい子だったんですけど、「おじいちゃん、おばあちゃん、気を使わないで」なんてけろっと言う。その一言にじーんときて、一世にとると涙がでてくるのです。

日本の老人問題も深刻で、僕らもやらなければならないことがたくさんあるのですけれども、我々同胞のなかで、我々の先輩たちが、異国でもっと厳しい条件で、厳しい状況の中で生きているのだということを皆さん、この問題を考えるときにぜひ、頭にいれておいていただきたいと思うのです。

冨安兆子　まだ、ご質問があるかもしれませんが、後のところでお出しくださいますように。

それでは、大変長らくお待たせをいたしました。釜山大学校、家政大学の学長さんをしていらっしゃいます、ソウ・ミョンザさん、どうぞ韓国の女性の状況について、ご報告をお願い致します。

徐明子　家庭での男女関係は社会での男女関係の出発点だと言えます。

伝統的な家族の重要な機能は、家系の継承と出産した子女を家風に従って、また、社会の規範に合うよう、養育することです。

韓国の伝統的な家族は、父権制家族として合う条件が徹底して確立されており、父系血統を中心とした大家族制度で、また儒教文化の導入で、さらに男系為主の特色が濃くなりました。伝統的な家族制度下での女性の任務は、男子を尊重し、女子をさほど重視しない男尊女卑の思想のなかで、父系血統を引き継ぐための子女を出産し、養育をすることでありました。女性の生活というものは、妻は夫が主張すれば、これに文句なしに従うのが、家庭での夫婦間の道理であって、妻は従順と忍耐が強く強調されてきました。

伝統家族での女性の姿は、婚姻前には、父親に対し素直に服従することが強要され、結婚後には、夫に服従するよう要求されるというものでした。夫が死亡した後には、息子に従うようになっており、一生の間、父親、夫、息子である男子に従うという隷属的な位置に置かれているのでありました。特に夫の両親に(対して)不遜であったり、息子を産まなかったり、男性問題や、悪い疾病、盗癖がある場合には、社会が禁止する離婚問題という境遇におかれても何も言えないという立場でした。現在の家族は、大きく変わってきました。

家族の規模役割分担、権力構造などで大きな変化をみせていますが、とくに家事と子女養育に関する意思決定において、女性の発言権が強化されていく傾向にあります。

それでもなお、女性はすべての能力において、男性に劣っていると認定されているため、男性に従順に服従する姿勢を持つのが、幸福であるとされています。従って女性は能力を発揮することができる機会を源泉的に封鎖され、そのような機会を女性自身、自ら放棄するよう誘導したといえるでしょう。反面、男性には、能力の所有者として、不屈の姿勢を持ち、指導的立場でリードしていく積極性が期待されてきました。

家父長的家族関係の例をみれば、結婚式で新郎は一人で、最初に入場した後、新婦は保護者である父親と共に入場し、新郎が新婦を迎えるようになりますが、これは父親に代わって保護者になるという意味です。結婚後には、家庭生活の中でも、重要な仕事、対外的関係をもつ仕事は、主に夫によって決定され、家族がともに住む住宅やそれ以外の財産は、夫の所有になっており、妻は夫に対し敬語を用い、夫は妻に目下に使うような言葉を使うのが普通でありました。

性に関する二重倫理規範をみれば、女性だけに純潔、貞操を強調し、妻に対する夫の精神的・肉体的虐待行為

を傍観しているのが実状です。このように男性の性的自由を許容する反面、女性の貞操を強調するのは、男性が血統を維持しようとする家父長的意識及び女性を人格体と見ずに、手段的存在とみる意識の発現であるということができましょう。

男性の虐待行為を許容する社会的雰囲気は、女性は夫の従属物、私有財産の一形態とみて、夫に妻の処罰権を認定する家父長的意識構造の発現であるということができます。男児選好思想は、息子を産むために出産を繰り返し、羊水検査及び超音波検査などの医術を利用し、胎児の性別を判定した後、息子であれば産み、娘であれば中絶という傾向で現れています。このような現象は、男性の経済活動、及び（死亡した）父母に対する祭司の義務者として当然視され、自然になされる現象としてみることができます。これにより、息子だけは家系継承者として尊く扱われ、娘の名前は族譜にさえあげられず、財産相続においても差別的な立場に置かれるというわけです。

大部分の父母は、子女の能力や意図を考慮することなく、すべての機会や恵択を息子に優先的に与え、娘は伝統的に女性的な品性を期待するだけにとどまっています。今日の韓国の家族は、核家族化しています。

しかし、夫婦中心的な核家族を施行していながらも、内面では大家族的伝統的雰囲気を強く備えており、性役割分担意識も強く残っています。

従って、家族の中心点になる夫婦関係は、平等な関係に転換されねばならず、近代の家事労働の機械化、女性の社会参加の拡大などは、女性を家事専任者とみていた伝統的性役割分担に大きな変換を与えていると言えるでしょう。

男児選好思想など、息子を重視する子女観の変化を促すためには、家族法など男女差別を助長する家族制度の変革のために努力を傾けねばなりません。ありがとうございました。

冨安兆子　ありがとうございました。韓国では、家父長制が法的にはなくなっているとしても、現実の生活の中ではまだまだ家制度的なものが残っているわけですね。

特に今、お話を聞いていて改めて思いましたのは、ちょっと前までは日本でもこういうことが広く見られましたけれども、やはり男の子を非常に重視する、それから女の人の役割は、家事と育児に限る。で「女、三従の教え」というのがついこの間まであったことを思い出す訳ですけれども、常に保護者である男性に従わなければならなかった。女の人のそれぞれのライフステージにおける、つまり子供時代には父親に、結婚してからは夫に、年老いてからは子供、特に男の子に。こういう伝統が、韓国

ではまだまだ色濃く残っていて、それをどう変えていくかというところでご苦労なさっているのですね。

そのような活動が、女性を中心に展開されているということを私どもは改めて聞かせていただいた訳ですが、今日は後で午後の全体会で、ソウ・ミョンザさんから韓国の女性の状況を伺えると思いますので、ここではもう一度拍手で、ご報告いただいてありがとうございましたと申し上げたいと思います。

さてそこで、今までのやりとりを通じて、ぜひ付け加えておきたいということがございますでしょうか。篠崎さん……。

篠崎正美　今のソウさんのお話と森崎さんのお話にもでてきたのですけれども、最近の生殖というか生命ということに関しては、先端技術とか科学技術がどういうふうに、それにかかわろうとしてきているのかということについて、私達が思っている以上に知らないところで、いろんな意思決定が入り込んでいるんじゃないかなってことをですね、常々思っていたんですけれども、今のお話を聞いても本当に驚かされました。

女は産む性であるというふうに思い込んでいるんですけれども、本当に女が産む能力を、女性自身がちゃんとわかって、女性自身の意思決定で使っているだろうか。たとえば、男女の生みわけの問題が今出ましたよね。あるいは遺伝子操作というような、今は日本ではそれほどまだ一般的ではありませんけれども、試験管の中で、赤ちゃんをある程度産むとか、あるいは、代理母の問題だとか、そういうことが科学技術のレベルが上がるに従って、世の中で少しずつ出てくる可能性がある訳ですけれども、それの知識とか技術とかいうものに対し、あるいはそれがもたらす結果について、男性がその大部分を占めている専門家に任せてしまって、女性はだんだんそれから疎外されていくというような部分があるのが常々非常に恐ろしいなと思っています。そのことについて皆様方がどうお考えになるか、ちょっとお尋ねしたいと思います。

もう一つは、社会史の研究者にフィリップ・アリエスという方がいるんですけれども、このアリエスの研究なんかを見てみますと、いろんな条件が変わることによって、女性が子供を産める期間というのが長くなったという事実が見出されているのですね。ところが、さっき出ましたように、子供を産む数が少なくなっている、あるいは、全然産まない人もいる。そうすると、産める期間は長くなっているのに、産む期間は短い。後、産まない期間をどうコントロールしているんだろうか。女性は、セクシャリティの関係において。これはもう、その結婚以前の若い女性の妊娠中絶がものすごく増えているとい

うような問題と、結婚した後、妻が妊娠しないコントロールというものをどうやって決めて、どうやっているんだろうかという問題が、私は表面に出ていない非常に大きな女性の問題としてあると思うんですね。女の人は、夫婦の性交渉において、自分がほとんど主導権を発揮していないという状態の中で、産むことを控えるという知識についても、あまり知らないという状態が日本では特に多い訳ですから、そういう部分が日本の女性のセクシャリティに関する問題としては、もうちょっと女同士で話し合ってですね、自分たち自身もどうするか、あるいはまた、自分たちの次にくる女の子達、私にも娘がおりますけれども、どう教えていくか、というようなことともっともっと議論していくべきだと思います。専門家にお任せ、イザとなったら駆け込んでお任せということでいいのかどうかについてですね、少しずつ考えを話し合っていく必要があるんじゃないかなというふうに思っておりますので、それを付け加えさせていただきます。

森崎和江　こちらばかり話すと、面白くありませんので、皆さんどうぞご発言をと思って控えておりますけれども、ちょっと気になりましたので、付け加えますと、私の短い作品が、高等学校の二年生の国語の教科書の一番始めにでている関係で、あちらこちらの学校の先生達が手紙を下さいます。これは「光の海の中を」という短いもので、成人に達した娘に与える手紙のような形なんですね。その中に我が娘が初潮を迎えた時に、母親としてどうしたのかみたいなこともちょっとふれていたんです。北九州にいらっしゃる先生方から生徒さんの感想文にそえて、たいへん本質的なお手紙をいただきました。

　ところが、この間、東京の先生方から、「男女共学の高校生に教えられない。初潮のことなどが入っているというのは本当に困る」と、そう言われたんですね。それに反して、地元の先生からは、さらに副読本として、私が「性のやさしさ」というのを書いておりましたのを生徒さんに読ませて、それの感想文も送って下さった。つまり、教え方がまるでちがうんです。ところで、とある女子高校生の感想文に、「森崎さん、あなたの性に関する文章に、いつ『あっ、やめて、そんなにしないで』という言葉がでてくるかとハラハラしながら待っていましたけど、あなたどうして『やめて、やめて』と書かなかったのですか」というのがあったんですね。私たちでさえ卒業している性意識ですのに。性意識というのは社会的に作られていきます。意識して一人一人が自分の次の世代、あるいは自分自身、自分の周りの者とともに考えないと、社会全体の動きの中に巻き込まれていきます。そういう意味では、高校生の教育現場というのも本当に後退している。たいへんだな、と思いました。

冨安兆子　フロアの皆さんの方にボールが投げ込まれておりますが、受け止めていただいておりますでしょうか。テーマが今、やや拡散してしまいまして、絞りきることが難しいんですけれども、しょせん、これを絞ってまとめて終わろうという考えは始めからございませんので、どうぞ皆さん投げ込まれたボールを受け止めて下さって、投げ返して下さる方はいらっしゃいませんか。

　ハイ、後ろで手が挙がっています。どうぞお願いします。

　よかったら、お名前と所属というか、背景をおっしゃって下さい。

山内　山内と言います。遠くから来ている方ではないかなと思うんですが、地域会議のために宮崎からでてきました。他のメンバーは今日帰ったのですけど、私、ちょっとこのテーマがとても面白そうだから、この分科会だけでも聞いて帰りたいなと思って参りましたので、今おっしゃったことに対して、ちゃんとした発言ができるかどうかわかりませんけど、一言二言。一つはまず、先程からのソウ先生のお話を大変興味深く聞かせていただきました。私は今日この分科会を選びました理由の一つが、先生のお話を聞いて帰りたいなと思っていましたので、大変ありがとうございます。それで先生に一つお聞きしたかったのは、韓国の中で変わってきている家族の背景がですね、民法ではどうなっているんだろうか、先程ちょっとコーディネーターの方がおっしゃいましたけれども、まだ民法上女性の権利があまり認められていないのかどうかということについてお聞きしたいと思います。

　それから、私もさっきの超音波の話を大変衝撃的に聞きました。人間の考えとか、人間の一生というものは、本当はそんなに変わってないはずなのに、二十世紀に入りまして、科学技術だけが、すごいテンポで進みました。特に戦後、色んな生活の変化が、戦後だけをとってみますと、恐らくものによっては、それ以前の百年に相当するような事柄が、一年で変わっていったところがあると思うんですね。その中で、私どもがそれについていけずに、意識の方は、当然ながら昔のままであってよいものも、あわせてそういった変化についていけないギャップというのがたくさんでてきている。それが、やはり一つは今日、こういうテーマのセクションを設ける理由になったんではないかと思います。ですから私も、今日のこの中で色々出てきたものが、結論が出てくるとは思っておりませんし、たくさんの問題を抱え込むその中に、やはりさっきおっしゃいました超音波の問題とからめて、倫理とか、人間の思想とか、それから生活の変化とかいうような事柄と、科学技術のとんでもない形での発展というものと、どんなふうに調和させていくかという問題につ

いて、考えなくてはいけないんではないかと思っております。私自身は、短大で数学を教えてます関係上、いろんな物事を数字的にみていきたいという立場にあるんですけれども。そういう見通しの中で、この女性会議の中でも、科学的な変化の問題ですけれども、大きな環境の変化ですね、その環境の変化の問題をやはり考えていかなくちゃいけないんじゃないかということを、昨日の会議でも、ちょうど森崎先生がおっしゃって下さって、申し上げましたけれども、あわせて、そういったことまで含めて、この中が発展すると嬉しいと思っています。広げることになって解決にはなりませんけれども、できましたら、ソウ先生、よろしくお願いします。

冨安兆子　わかりました。ありがとうございました。

ソウ・ミョンザさんへのご質問については、午後の全体会でお話しになる予定だそうですから、質問者の方、せっかくですから午後も残って今の問題はお聞き下さい。

民法上の問題についてですね。ぜひ、また続いてお話を伺いたいと思います。

ソウ・ミョンザさん何か一言コメントございますか。もう別の会場に移られるお時間なのですね。

それではお立ちになったところで、拍手でソウ・ミョンザさんをお送りしたいと思います。

ありがとうございました。

徐明子　それでは午後に会いましょう。（退出）

冨安兆子　さて、もう一つ問題はですね、科学技術、特に先端技術のめざましい発展によって、私達の生き方が非常に影響されるようになってきた。生命の操作、遺伝子の操作も含めて、人類の未来にとってバラ色の夢を描けるのか、あるいは、悪魔的なことになるのかというところで、不安を感じている人もかなりあると思うんです。そういう意味では、文明論的な問題になりましたので、今ここで一問一答みたいにやってますと時間が限られていますから、後でまたパネリストの方々からぜひご意見を出していただきたいと思うんですけれども。

続けて皆さんの方からご意見が出ますでしょうか。どうぞ。では前の方どうぞ。

星合　私も、東京から、篠崎先生にぜひお会いしたいと思いましてやって参りました。

星合と申します。先生に二点ほど伺いたいなと思っております。一つはセクシャリティの問題とちょっと離れまして、ジェンダーの問題を伺いたいと思うわけなんですが、性の商品化で、よく例えば、ポスターとかいろいろあると思うんですが、女性の場合には、美しさというものが一つの価値になるという社会状況があると思うんですね。その一つの端的な例として、ミスビューティコンテストとか、そのようなものがある訳で、それを登

竜門にして、女優さんになられる方とか色々いらっしゃる訳なんですが、その辺のことについて、どう考えていったらいいのかという問題が一点と、それともう一つは、先程、男と女の関係を作っていくためには、コミュニケーションが大切なんだというふうなお話だった訳なんですが、例えば、性の問題につきましても、先生が言われましたように、女の側から主張していくということは大事なことだと思う訳なんです。最近、アメリカ、また日本の中でもですね、セクシュアル・ハラスメント、特に職場におけるセクシュアル・ハラスメントの問題が、新聞紙上でもとりあげられている訳なんですが、セクシュアル・ハラスメントのガイドラインを読んでみますと、かなり、そのもろに肉体関係を迫ったというだけではなくて、例えば、職場でポルノのスポーツ新聞とかですね、そういうものを開いただけでも、それはセクシュアル・ハラスメントになるんですよとか、あるいは職場で宴会なんかしてますと、お尻をさわったりとか、そういうのが結構あったりすると思うんですね。

そういう事柄に対して女性の側から「やめて下さい。」とかいう意見をいうと、「君は未熟だ。」「大人気ない。」とかそういうふうな意見がある訳なんですが、そういうふうなところで、どのようにその辺の性に対する主張を女性としてして言ったらいいのかなというその二点を伺いたいと思います。

冨安兆子　今出ました問題は、つまり、セクシャリティというとかなり人間、生身の人間の生き方みたいなものにかかわってきますが、社会的な性としてのジェンダーそれについて特に性の商品化・女性の美しさ、私は男性の美しさも場合によったら、価値を生むのではないかなと思うんですけれども、そういう面についてどう考えるかということですね。

それから、セクシュアル・ハラスメントという言葉がでてきましたが、これは、「性的ないやがらせ」をさします。特に上司が上司である立場を利用して、自分の権力範囲で掌握できる人達に対して、上下の関係を利用して、性的な関係を迫るというようなこと、お尻をなでたり、わざとポルノ雑誌を見せつけたり、ということもですが、その辺について今の日本における男女の関係、日本だけじゃない訳ですが、それをどう思うか、どう主張していけばよいか、ということだったと思います。

このことについてはそれぞれにお答えをいただきたいと思います。

他にもございますか。さっきそこでお手を挙げていらっしゃった方、ご意見の分野が全く違います？関連ですか。じゃ、どうぞ。

古谷　古谷と申します。主婦でございますが、あえて所

属を申し上げますと、ミズ二十一委員会に入らせていただきまして、色々勉強させていただいております。

冨安兆子　北九州市内の方ですね。

古谷　はい、そうです。篠崎先生と森崎先生の最後のお話がございました性の問題ですけれども、私自身の体験を通しながら、子供の性教育というもののあり方を、皆様に一つ投げかけてみたいと思います。

私自身は、母が助産婦でございました。総合病院に勤務する前は自宅で産院をしておりました。もちろん妊婦さんなり、患者さんなりがお越しになる訳ですけれども、私が小学生までは自宅にお見えになりまして、ふすまごしに色々ご相談の内容が自然に聞こえて参ります。四十、五十近いご婦人がお腹を大きくして、中絶できない状態の中で、あえて中絶のご相談をなさる訳なんです。あるいは、性病患者さんとか、色いろんな女性の性についての問題を、私自身が子供なりに考えて疑問に思うような環境の中で、育って参りました。母は、非常にそういう事実をあからさまに、率直に何でも話してくれる母でございましたので、私もその事実をありのままに受け止めながら、そういう中で、ほんとうに女性の置かれている、性的に置かれている立場というものが、非常にみじめで、暗くて、悲しくて、つらいものだなあと、小学生の頃ですから、今、私、四十ですので、三十年位前になるんでしょうか、それも田舎でございましたので、非常に暗いイメージを私は受けました。

母は、非常に明るい人柄の人ですので、事実をさまざまな患者さんを通して教えてくれた中で、私自身が感じていたことは、女性というのは、確かに受身なんだと。イヤでも男性を受け入れて、イヤでも妊娠して、産まなくてもいいものを産まなきゃいけない状況に置かれている訳ですから、そういう受身の中にありながらも、しかし受身だからこそ、女性の性というのは、自らが主体性を持って、主導権はこちらにあるというふうに、そういう自立の仕方をしていかなきゃならないというふうに考えて参りました。

ですから、子供を産むとか、産まないとかというのも、はっきりとした女性の意思で産んでいくべきものであるというふうな、一つの私の考え通りに生きておりますけれども、一番私は、こういう問題におきまして、篠崎先生が、人とのコミュニケーションという問題からお入りになりまして、最後は夫婦の性愛という問題にたどりつかれて、非常に次元の高いお話になったことを、私はここにきて非常に良かったと思っております。そういう問題というのは、なかなか表面に出してお話しにくいテーマでありながらも、しかしそこを深くとらえないと、夫婦という問題あるいは、家族という問題が女性にとって、

本当の意味で、幸せなものにつながっていかないのではないか、耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍びながら、飲みこむような思いをしながら、今までは女性が生きてきて、そういう上に今日の日本の繁栄があると言っても過言ではないくらいに。老人問題でもそうなんですけれども、ですから、日本の女性が非常に恵まれているというふうに感じられるのは、女性が必死でそれを守ってきた賜物ではないかとさえ思うくらいに、女性が社会を支えてきていると思います。その原点が性という問題を、私にも娘がおりますけれども、どういうふうに性教育を子供にしていけば良いか。はっきり申しまして、私は、母からこのように育てられました。私自分に向かっていうんですけれども、「女性は昼間は淑女のごとく、夜は娼婦のごとくならなければ、男というものは、出世しないものだ」と。そういうふうに教育をですね。まあ、色んな話の中で、そういうふうに申した訳なんですけれども、男の生理と女の生理というもの、このあたりのところを母は母なりに大正生まれですので、そういう教育を母も受けてきた人間ですから、私に対してもそういう教育をした訳ですけれども、私は自分の娘に対しては、どういうふうにそういうところの教育をしていけばいいのかということを、率直に申しまして迷っております。今のような女性の解放というのは、私は女性自らが性というものをどう使っていくか。性教育というものは、人生をどう生きていくかということと、同じ次元で考えていかなきゃならない問題というふうに思っております。両先生に、お二人の先生、あるいは男性の女性……恵まれているというふうに私もそう思っておりますけれども、そのあたりの……。

冨安兆子　はい、三人の先生からご意見を聞きたいということなのですね。しかし、これは会場の皆様からもぜひご意見を聞きたいものです。

今の問題はつまり、かつて女の性というのは、暗くてみじめなものだった、ところが、今、ご自分はそのことを逆手にとって主体的に生きようとしている。しかし、次の世代にはどう生き方を伝えていけばいいのか、そのへんの知恵をぜひ出して下さい、ということだったんですね。

まだほかにも出したい問題があるのですね。今手を挙げてらした方、ちょっとお待ち下さい。

これまでの段階で、意見を言いたいんだという方どれくらいいらっしゃるんですか。ちょっと、手を挙げておいてください。今の方と、後ろにお一人。今のところお二人ですね。ではどうぞ。この列の方。

成清　北九州市で婦人相談員をやっております。成清と申します。

こういう会で性の問題が討論といいますか、ご意見が出て、公の場で討議されることに非常に感激しております。そして私は、と申しますのは、性にかかわる仕事をさせていただいております。全国の新国内計画におきましても、性の尊重ということが、かなり言われまして、こういう場で語られてきたことに、とっても震えるような喜びを覚えておる訳でございますけれども、たまたま、先程東京の方が性の商品化という問題を提起して下さいました。そして私が、仕事としてかかわっているものに売春という形がございます。それには男性の意識と女性の意識の差がでて参りまして、買う側と売る側と、それをお金に換えるという立場の女性がいるということもちょっと皆さんに知っていただきたくて、その人達の地位も上げないと、女性の地位が上がらないということをちょっと提案したいと思います。

冨安兆子　先程、篠崎さんが、女性の中にも、特に性という領域では分断があるとおっしゃいました。いろんな分断のされかた、敵対のしかたがあるわけだけれども、その性を売るという側の立場に立ってしまっている人と、そうでない、いうなれば結構な方達とをどうとらえるかということも含めて、ぜひ、ご意見を伺いたいと思います。もうおひと方どうぞ。

関連でしょうか。全く別のことでしょうか。

質問者　先程、中絶の問題がでましたので、そのことについて。

冨安兆子　はい、どうぞ。

質問者　私が、学生だった頃、ちょうどその頃から、中絶という問題がでてきたと思うんです。結局、その場合も、相手の男の人に「産んでいいの。どうするの。」と聞いて、許可がでない限りは、中絶というものを受け入れなければいけないという状態だったんです。お金さえあれば女一人でどこかに行って、育ててというふうな選択権があるのか、いや、自分にはないという意見が多かったと思うんですね。それ以後、色んな女性が社会に進出しても、働き続ける場がないという。

また、夫婦間でということになりますと、全体量としては、結婚して妊娠中絶なさった方というのは減ってきたかも知れませんが、その部分に逆に入ってきたのは、医療の手といいますか、科学の発達といいますか、その部分で選択権というのが、女性自身の方に本当にあるのかどうかというのは、まだわからないなと考えました。それで、恵まれているというところに、少しかかわってくる訳なんですけれども、日本が最近、金銭的にといいますか、物質的にといいますか、急激に豊かな社会になりまして、女性の方は働きたい人が働いて、恵まれた路

線で働ける女性もいる訳なんですけれども、ある部分では今だに悶々と悩むというか、そういう状態が改善されないで、ひきずっている部分と、性の部分でもそういうふうな懐疑がでてきたのではないか。子供を産むのを限定して、豊かに自分が働きつづけられるという生活のできる女の人と、やはり、そういうのが全くできない、だんなも許さない親戚も許さないとか、子供が三人も四人もいるとか、非常に分かれてきたんじゃないかなと思うんですね。

だから、私自身一つの理想として以前、森崎さんの本を読んだとき、「ナッスムニダ」という韓国の言葉だったですかね。産むということについての韓国の言葉と、日本の言葉を比較して、日本の「子供を産むのよ」じゃなくて、韓国の人は「子供が産まれるのよ」というふうに、産むことは産まれることだと、言語自体ができている、と書いていらした。また、トコヨの国というか、あの世の国というか、何か人間の英知を越えたようなトコヨの国から、命が一つ私の所に産まれてきたよ、向こうから産まれてきたよ、という感覚じゃなかったかなあと思うんですね、そういう感覚について書かれていた。今の日本にはそれがない。ただ物質的に産むとか、お金の勘定があえば産むとか、そういうところで家族とか社会が動いているんじゃないか。だから、大切なものを受け取っても、一つの命として育んで、精一杯生きるということが欠けるんではないでしょうか。

冨安兆子

わかりました。つまり産む性としての主体性を、女の人が持っているのかということですね。

産まされたり、産まざるを得なかったり、そこらへんで、今の私達の性意識はどうなのか。私達はこの頃「子供を作る」と言う言い方をするようになってしまいましたけれども、「子供が産まれる」「生命を与えられる」つまり、「生命」ということと、女性が「産む性」であることとの関連。特に、その中で、女性の階級といいましょうか、それが、様々な形で出てきたというご指摘がありましたけれども、そういう意味ではこれも重い問題なのですね。

ところで分科会は、十二時で絶対終わらなくてはいけないという一つの制約があります。時間に管理されないで、こういう問題が出たからには、一日中でもと思うんですが、時間の制約を受けている、これが現代社会に住む我々の非常に悲しいところであります。しかし、今や問題の整理をする時間的余裕はありませんから、お三人の先生、それぞれ、ご自分なりに色々出た意見をとらえた上で、私は、このことについてぜひ言いたいんだというところを順に話していただけますか。篠崎さんからお

願いします。

篠崎正美　それでは手短かに申し上げたいと思います。私は女性の美しさや女らしさというのは、それ自体はあるはずのもの、両性が追求し続けるものだと思います。ただ女性の美しさや女らしさが資源にされるとか、商品にされるという、社会的な仕組みを見ていくべきだと申し上げたいのです。

女性の経済的、精神的な独立性、平等性がないところでは、必ず女性の美しさは、それなりの資源になっていくと思いますね。ですから家族、ちゃんと婚姻届を出した家族であっても、妻が自分の言いたいことをほとんど言えない状況で妻であるならば、上野千鶴子さんが言うように、永久単属専業の売春婦と近いといって差し支えないと思います。売春というのは、売春防止法では不特定多数の異性に、対価を売ることによって糧を得るとなっていますから、特定の専業単属売春になりうると言っていいんじゃないかなと思っています。

それから、性的な暴力についての説明なんです。さっき久保田さんが、訴訟のことをおっしゃいましたけれども、アメリカでは、夫が妻から強姦されそうになったという訴訟もあるのですね。どっちもやってますという感じなんですけれども、だから、触われて人間として未熟だとかなんとか言われるのは、とんでもない話で、どっちも触わったり、触われたりしていればいいと思うのですけれども、それができない間は暴力と言わざるを得ない雰囲気があると思います。それから、娘の教育なんですけれども、私もあまりいい知恵がございません。私自身が昼は貞女のごとく夜は娼婦のごとくということをどことなく聞きながら育ってきたなという感じがしますので。私、娘についてはこれだけのことを今始めたばかりです。高一なんですけれど、高一になったときに、河野美代子さんという人が書かれた、「さらば悲しみの性」というのを入学祝いに贈りました。「あなたも人を好きになる年齢だし、子供を産める年齢だと。好きになって、どんなことをやっても良いかもしれないけれども、こういう結果になるということが含まれているということを、ちゃんと知っておいた方が良いよ」とね。妊娠する可能性があるということを知って、男の子とつきあった方がいい。そして、どういうつきあい方をしても、もう十六だからそれを支持する私は、「中絶なんかしないでほしい。」と言ったんです。そして、「支持する。けれども、自分が人生こういうふうに生きたいと思って、あなたも勉強しているのだろうから、自分がやりたいと思っている勉強とか、就きたいと思っている仕事を途中で放りだすような男性とのつきあい方だけはやめてほしい。」これだけは言い渡してあるつもりなんですけれども、親が思うほど

強いかどうかわかりません。そんなことでよろしいでしょうか。私は、息子にも高一になったら、その本をプレゼントしようと思っているのです。もう一つは、コミュニケーションでマスコミのことが、フロアから出るのではないかなと、私わざと触れなかったのですけれども、欧米のフェミニストたちが、日本にきて非常に奇異に感じるのは、日本のマスコミの中で見られる性的な暴力、あるいは女性を商品化しているということについて「日本の女性はなんで何にも言わないのか。車の横にヌードに近いような女性がにっこり微笑んで坐っている。あれはポルノではないか。それをみんな喜んでみているのはなぜか。」「それは、多分あの人より私の方がましだ、と思いながら見みているんじゃないですか。」と言ったんですけれども、そういう裸身が美しいと感じること自体は、それはそれでいいと思うのですけれど、それで物を売るための手段にすることを、日本の女性が許しているというのは、夫が買春ツアーに行くのを、許しているのと全く同じことじゃないのか。というような問題提起が度々あがっている訳ですけれども、それについて全然なんにもやっていない。私達は、やっぱりちょっとおかしいのではないかなと思います。何かやりたいと思っていますけれど。

喫茶店なんかに、暴力を使った性ですね、強姦しているとか、そういうマンガの本には、全部こんなのは駄目というステッカーをはっていきましょうと、いうようなことを京都の人たちがやっていますけれども、そんなのやったぐらいでなくなるかどうかわかりませんけど、なんにもやらないよりはいいかなあと思っています。

森崎和江　それでは、四、五分よろしいですか。今篠崎さんが個別のことをきちんと話して下さいましたから、それでは私はもっと全体的なことを話そうと思います。

先程も話にでておりましたが、私たち人間というのは、「知恵」がありますので、「知的好奇心」というのは、抑えることができません。で、どんどん技術文化というのは進んでいきます。けれども、もっとトータルな生きるということは、なかなかそれについて行くことはできませんですね。それで、今までは人間の外側にあります自然を、「知的好奇心」でもって加工して、生活に結びつけてきましたけれども、今は私たちの内なる自然「生命」それ自身が商品化されつつあります。

人間の外側の美しさだけではなくて、私たちの腎臓であれ、心臓であれ、商品化というと悪うございますが、でも、「知的好奇心」というか、医療の問題と言ってもいいですけれども、やはりそれを買売しているといえるようになってきております。ですから、人間とは、とか、生命とは、性とは、あるいは自然とはというふうに考え

るときに、今までの概念では、無理になってきているというふうに思います。

それから、もう一つは、性の問題であれ、生きるということであれ、地域差がとてもあります。また、先端部分とそれからたいへん遅れている部分とが、一人の人間の中にもあります。地域的にもありますし、一人の人間の中にもありますから、それを一括しては、なかなか進めることができません。自分の中にあるたいへん遅れている部分、あるいは全体の中にあるたいへん苦悩していらっしゃるところに対する目配り、それを切り棄てて生きるということではなく、それをくるみこんで展開させたい。そういうふうなことをしていかないと、今後の自然破壊、自分自身の生命破壊ということにもつながっていくと思います。いかに生きるか、いかに死ぬかというふうなこと、いかに産むかということも今までの概念だけでは、駄目になっていまして、中絶がこのごろは、私達にとって大変力になってくれております。それ以前は、生んだものはみんな育てるということではありませんでした。「とりあげる」というのは、産んだ命をとりあげるのか、それとも、あの世へ送るのかというのを、女の人に聞く、あるいは男の人に聞いて、そして、その命を育ててきていたという、悲しい伝統があるのですね。それから、今から三十年ぐらい前に、私が筑豊でコトコトとやっておりましたときに、大変問題になっておりましたのは、だんなが「中絶なんてそれは屁じゃないか。屁と同じことばい。」というふうに何べんも中絶を強要するということでした。それともう一つは、高校生などで、どうしても産むといって産んで、赤ちゃんを連れてくるということもありました。けれども、最近は中絶が隠れた文明の一つのように皆の中に浸透しております。それでも若い詩人が、大変ユニークな詩人でいらっしゃいますけれども、彼女が胎児をどういうふうに考えていらっしゃるかというと、胎児というのは、うんこと同じという考えですね。うんこと同じという考え、それはパロディーですけれども、そう考えることで、生命全体を考えていらっしゃる。それくらい命をどうとらえるのかは難しい。一方、技術としての発生学は、どんどん進んでいます。生まれる前、つまり命としてこの世に現れる前から命というのがある訳ですから、それをどういうふうにとらえるのかということがあります。今は、発生を両性でコントロールすることができるようになってきました。男性の性は決してコントロールできないという、性神話が私どもが大きくなる頃までありました。けれども決してそんなものではありませんから、そのあたりもともに考えていくことができるとよいとも思います。それから、こう

いうふうにして、話し合う場所というのがなかなか作られませんでしたので、今後どうぞ皆さんも色々と試みていただきたいと思います。

冨安兆子　男性であるということよりも、むしろ人間として久保田さん、どうぞお願いします。

久保田誠一　父親とはほんとうに損な役割です。娘は大変可愛いのですけれども、娘たちとスキンシップできるのは四歳くらいまでで、中学生くらいになると、例えば、ちょっとさわると「エッチ」とか言って、どなられたりですね。向こうも半ば冗談なんでしょうけど、丹精こめて育てた娘というのは、結局こちらはどこもさわらないうちに自然と誰かにとられちゃう。とても淋しい気持ちがします。ここにいる男性の方だったらわかっていただけると思うのですが。それでは性教育について一言、これはニューヨークの学校のことなんですけれども、小学校の保健婦さんの部屋にコンドームをちゃんと用意している所があるのですね。子供を産まないためにこれを使いなさいと奨励している。さすがに教室では配っていないのですけれども、必要な方は、こちらにいらっしゃいと保健室に行くともらえる。性教育っていうのは、家庭では皆さんお母さん方が色々工夫されていると思うのですけれども、やはり日本の学校でもう少し積極的に授業の中にとり入れていいんじゃないかと思います。私が関知する限りでは、まだまだ不十分であると思います。ですから、お母様達も父兄会とか色んな会で学校の先生方と協力して、性教育をオープンにして、セックスということを、あんまり恥ずかしくなくしゃべれるような環境づくりというのが、一番求められているのではないかと思います。先程、サロゲートマザー（代理母）という話を、どなたかおっしゃっていたのですけど、私ちょうど、この裁判がある頃ニューヨークにいまして、法廷に行ったり、サロゲートマザーに何人かインタビューしたこともあります。やはり非常に難しい問題で、調べてみますとサロゲートマザーになる人が、だいだい有色人種、黒人が多いのですね。あるいはヒスパニックの人がいる。

頼む人はお金持ちで、もう高齢出産は怖いから嫌だから、誰か産んでくれればありがたいという、かなり身勝手な部分もある。それで裁判では非常にもめまして、まだこれという結論がでていないのですけれども、一つの問題を考える時には、一面からでなく側面からも見て行く必要があると思います。それで最後にといいますか、人工中絶で私思い出すのは、今、私が尊敬する女性の一人に加藤シズエさんがいます。彼女がなぜ人工中絶に興味を持ったかというのを聞きますと、石本さんという最初のご主人と結婚して、九州の三池炭坑に来たためなんです。学習院をでた本当にお嬢さんのままでやっ

てきて、女性が炭坑の中で臨月まで働いて、ときには炭坑の中で生んで、その子供を抱えて出てくる。わずかその日寝ただけで、また翌日から働きに行く。それからお母さん、お母さんと子供は母親が炭坑からあがってくるとまつわりつくが、母親は疲れているから、本当にハエでも払うように子供を殴ったり、追い散らしている。こういう光景を目撃して、人工中絶を生涯のテーマにしたいと決意し、九十一歳の現在も人口問題と取り組んでいる。皆さんの中から、加藤シズエさんのような方が出てきて、男性のいたらないところを補い、女性の地位向上に役立つことを私期待したいと思います。

冨安兆子　ありがとうございました。

実はコーディネーター役というのは、単なる交通整理だけでなく、ちゃんと意見を言っていいという、そういう約束でここに坐っている訳ですが、残念ながら、意見を出す機会がほとんどございませんでした。それで私もたいへん「腹ふくるる思い」をしておりますが、皆さんもそうではないかと思うのです。その「腹ふくるる思い」をどうぞ午後の全体会の方でぶつけていただきたいと思います。ただ、今、また、ここから話が始まるといいのになあという感じを持ちました。サロゲートマザー、つまり代理母の問題とか色々出て参りましたし、夫の収入に、依存して生きている妻というのは、単独売春ではないかみたいな厳しい意見も出てきまして、なんとなく、落ち込んでいらっしゃる方もあるかもしれませんから、あえて申し上げますが、しかし、そこに愛があれば、愛がなくて養なわれているというのは、ちょっと問題ですけれども、どうぞ、そういう意味では愛も育てながら、経済的な自立も図っていく、それがトータルな人間としての自立になる。それからもう一つ、加藤シズエさんのような人がこの中から出てくれば、というご意見でしたが、言葉尻をとらえる気はないのですけれども、一人の加藤シズエさんが出るよりも、この中のみなさんがどうぞ、男女の生き方というものを新しく問い直していく一人一人になっていただきたい。そして、それを周りの人に伝えていくことが、たいへんに大事ではないかと思います。言葉の問題で言いますと、先程、父兄会とおっしゃったんで、父兄会では、もう通じない世界になっているんじゃないか、父母会とか、母父会とかですね、言葉は意識が表われる、ある意味で恐ろしいものでもあるのですが、そういうことも含めて皆さん、ご自分の中で結論を簡単に出さずに、男性も女性も一生懸命に生きていくということをしたいものでございます。三人のパネリストの方々ありがとうございました。会場の皆さんもほんとうにありがとうございました。では全体進行の方に渡します。どうぞよろしく。

進行係　皆さんお疲れさまでした。私も皆さんの意見聞いておりまして、できるならば全体進行じゃなくて、皆さんの中に入って一言申し上げたいと思っておりました。私も大いに腹ふくるる、言いたいことを言えなかった不満を感じたものでございますが、まとめに一点だけ言わせてくださいませ。これは全体進行からはずれるかもしれませんが、私は、弁護士をしております。それで、皆さんの離婚という問題についてよくご相談を受ける訳です。その離婚の原因の一番は、性格の不一致というのであがってきております。しかしよく聞きますと、性格の不一致は、ご夫婦の性による不一致というのが多いと思います。性による不一致は、みんなの意見の中でてきましたように、みなさんの夫婦のあり方とか、いろんな問題、男女のあり方の問題を含んでおります。ぜひ帰られましたら、ご主人と、あるいはボーイフレンドとどちらが主導権を握るのが、正解なのかというのをお話をしていただければ嬉しいなと思います。それで次は、純然たるご連絡に入りたいと思います。

皆さんのお手元にアンケート用紙がいっていると思います。できましたら、その用紙に回答していただきますと幸いでございます。

TALK セッション4　楽しく生きようシルバーエイジ

進行係　皆様、早朝からありがとうございます。只今から始めさせていただきたいと思います。本日の全体進行させていただきます、実行委員の泰松と申します。どうぞよろしくお願い致します。

今日は全国各地からたくさんのお客様をお迎えしまして、この第四セッションを開くことになっておりますが、大変遠路のところを、ようこそ北九州市へお越しいただきまして、ありがとうございました。

それに北九州市在住の方々とご一緒に、今日の部会を楽しく、そして、盛りだくさんにしていただきたいと思っております。

昨日、ドナルド・キーン氏の記念講演に始まりました「日本女性会議'88北九州」は、本日のトークセッションにより、なにか一つ持ち帰っていただきたいという気持ちでこのセッションを開かせていただいております。そして、今、男性、女性ともどもシルバー時代の長期化に備えまして、そして、本当に生きていて良かったと思う老後を送られるよう、今日一つずつのお話し合いのなかでそういうものを得て、お帰りいただきたいということを願っております。

本日のトークセッションの登壇者の方は、お忙しい方ばかりで非常にご無理なお願いを致しまして、お招きした訳でございますが、本日、この会のコーディネーターを、保田井先生にお願いしておりますので、バトンタッチしたいと思います。

どうぞよろしくお願い致します。

保田井進　おはようございます。それでは、トークセッション四「楽しく生きよう、シルバーエイジ」只今から始めたいと思います。

パネラーの方々のご紹介をさせていただきますが、まず、私のすぐ左側にいらっしゃる方、皆様方からすれば右側は、菅原真理子先生、ここにございますように内閣総理大臣官房参事官をしていらっしゃる方です。

その次にいらっしゃる先生は、フリーマン美智子先生、はるばるアメリカから、お越しの先生です。北九州市とは大変親しくされております、タコマ市のコミュニティカレッジの教授をしていらっしゃいます。今日は、スライドなどもお使いいただいて、アメリカの様子を色々お話いただくことになっております。

それから、アン・ラトナヤカ先生、インターナショナルスクール北九州のヘッド・ティーチャーをしていらっしゃいます。

今日は、三人の先生とも全部日本語でお話をして下さいます。それぞれ、お国は違いますけれども、日本語で、それぞれ私達の共通の課題としての「楽しく生きよう、シルバーエイジ」について、はじめに十分位ずつお話い

●パネラー

菅　原　真理子（内閣総理大臣官房参事官）

1969年、東京大学卒業。同年、総理府入省。総理府青少年対策本部、婦人問題担当室、経済企画庁国民生活政策課、老人対策室を経て現職。1980～81年には、アメリカ・ハーバード大学に留学。著書として、「米国きゃりあうーまん事情」「女性管理職の時代」「新・家族の時代」など多数。

アン・ラトナヤカ（インターナショナルスクール北九州ヘッドティーチャー）

スリランカ生まれ。ロンドン大学大学院教育心理学科卒業後、スリランカ国営放送局のアナウンサーなどを経験。1972年、駐日スリランカ大使館広報官として来日。1974年、北九州市に移り、新日鉄教育センターの英語講師を務める。現在、西南女学院短大でも英語を教えるほか「北九州ミズ21委員会」のメンバーとして活躍中。

フリーマン　美智子（タコマ市コミュニティカレッジ教授）

北九州市の姉妹都市であるアメリカ・タコマ市在住。1970年、ピュージェットサウンド大学卒業。1973年、同大学教育学修士号、1985年、商業学修士号を取得。1971年から現職。その他にも、北九州市・タコマ市姉妹都市委員、タコマ市日系人会副会長を務める。最近の研究として「北九州市とタコマ市に於ける職業女性の比較研究」がある。

●コーディネーター

保　田　井　進（西南女学院短期大学教授）

1934年、東京都生まれ。同志社大学大学院修士課程終了（専攻は社会福祉学）現職の他にも、社会福祉法人「北九州いのちの電話」理事、北九州市社会福祉協議会理事など社会福祉、児童福祉の分野で活躍。著書「社会福祉ーその理論と実践」（共著）「入門、児童福祉」（共著）「社会福祉施設実習」（共著）などがある。

ただきまして、その後でパネラー同士のディスカッション、更にフロアの皆様方からも、ご質問などいただきまして、十二時五分前に終了したいと、そのように考えております。

さて、私たちの問題を、どのように考えたらよいかということで、始めに少し私からお話しさせていただきますが、私たちの共通の合言葉に地球の½は女性が支えているという、世界の½は女性が支えているという、一つの大切な言葉がございます。けれども、老人の世界においては、高齢化社会においては、½ではないということです。圧倒的に女性が多いというこの問題から、私たちは考えていかなければならないと思います。

現在、すでに六十歳以上の人口のうちで、男性が五〇〇万、女性が八〇〇万、すでに六十歳以上の女性が男性よりも三〇〇万人多いという事実がございます。一人暮らしの老人になりますと、男性一人に女性四人と、一人暮らしの女性は四倍も多いというこの事実でございます。昭和七十五年、西暦二十一世紀が始まるというこの年は、女子の高齢者が一二〇〇万になるだろう。これは昭和六十年のときの老人人口と同じ数だけ、女性が占めるという、そういう女性が圧倒的に多くなる訳でして、しかも、後期高齢者、つまり一般にシルバーエイジは、オールド・オールド、ヤング・オールドという使い分けをします。若い老人、大体七十四歳よりも若い方々はヤング・オールド、七十五歳以上になりますとオールド・オールドと、年をとった高齢者という訳ですが、この年をとった高齢者になりますと、ほとんどが女性になってくる。しかも、一人暮らしのお年寄りのほとんどが配偶者のいない、配偶者を失った方々だということになってくる訳でして、こういう女性の問題であるところの高齢化問題、これを私達はどのように考えたらよいかということになる訳です。

問題は三つあると思います。一つは経済問題です。生活をしていくために必要な所得、それは年金、あるいは子供の仕送り、自分の持っていた預貯金ということでございますけれども、どうしても女性の年金は、男性に比べると少なくなります。働いていた男性達は、厚生年金等がつきまして、年金の金額も多いのですが、主婦として働くことのなかった女性たちの年金は、どうしても少なくなってくるという問題があります。

夫が生きてる間は、自由自在に使っておりました銀行預金や郵便貯金も、夫の名義になっております。財産も夫の名義になっておりますから、夫が亡くなりました後は、これを子供達と分割しなければならない、ということになってくる訳でございます。

さあ、どうしても子供達からの仕送り、そして乏しい

年金で暮らしてゆかなければならない、そういう経済問題がでてくる訳でございます。

二番目の問題は、介護の問題。この後期高齢者になって、誰かのお世話を受けなければ生活できないという状況になったときに、誰の世話を受けるかという問題であります。もう配偶者はすでに死亡しているとすれば、息子の嫁か、娘に世話を受けるということが増えてくる訳でございます。実際、病院や施設に入っているお年寄り達は、四%から六%くらいでしょうから、九四%～九六%の高齢者は自宅で生活することになります。それで、こういう方々が、どうしても一人で暮らすか、あるいは家族と一緒に暮らすというときに、娘かあるいは嫁の世話になるということになってくる訳で、ここにまた女性の問題がでてくる訳でございます。

更にまた、自分がそのようなお世話になる前に、女性は介護人として、介護者として、夫の両親を見取り、そして、夫を見取りと、そういう介護者としての役割りがあり、更にまた、自分が年をとったとき、誰かの世話になるという、そういう問題がある訳でございます。

更に三つ目の問題があります、これは、孤独あるいは孤立の問題であります。一人ぼっちである、誰も側にいないという孤立と、孤独の問題のなかを、どのように暮らしてゆくかという問題がでてきます。さて、このような深刻な問題がでてくる訳でございますけれども、今回私たちが考えておりますのは、これは女性問題として、女性会議として考えていくことになる訳です。

そこで北九州の小倉においでになりました皆様方に、ぜひ憶えていただきたい一人の女性がおります。それは杉田久女という、俳句を作る一人の北九州で生活していた女性の方であります。一八九〇年、明治二十三年に生まれました。そして、結婚しまして、北九州に住むようになった訳ですが、夫は中学校の美術の教師、そして、炊事、洗濯、家事、掃除という、そういう専業主婦の生活のなかで、夫の世話をし、子供の面倒を見ることだけに、明け暮れる女性の生き方に疑問を感じます。しかし、そのような、炊事、洗濯、掃除、夫や子供の面倒を見るということだけに、もの足りなさを感じるこの一人の女性の悩みについて、夫、杉田宇内は、理解することができない、女が何故そのようなことに悩むのか、女が何故そのようなことを気にするのか、話し相手にならない訳であります。

こういう状況のなかで、悶々として自らの自己実現を果たすことのできなかった杉田久女が、俳句の道に生きがいを見出してゆく訳ですが、そういう情況のなかで作ったあの有名な句が、「足袋つぐやノラともならず教師妻」です。一人の人間として生きていきたい、妻であるより

も、母であるよりも、人間として生きていきたいと言って、夫を捨て、子供を捨てて、自らの解放を求めて、自由に羽ばたいていったあのイプセンの主人公、ノラのように私は生きたいと思うけれども、ノラのようになれない自分はいつものように着物をつくろい、足袋をつくろいながら、今日もまた夫の帰りを待たなければならないという、「足袋つぐやノラともならず教師妻」という、そういう句を詠んでいる訳であります。

しかし、彼女は、やがて俳句の道に自らの自己実現の道を見出した。数々の弟子が増え、あちらこちらで呼ばれ、そして、色んな計画を企画して、多くの人を集め、そして東京の方からすぐれた指導者たちも呼び集めて、はなやかな社会活動が始まってくる訳であります。

このときの杉田久女の句が、有名な「花衣ぬぐやまつわるひもいろいろ」華やかな、花模様の着物を脱いでいくときに、着物を脱ぎ、帯をほどき、そして、締めているひもを次々にほどいてゆく訳ですが、足元にはなやかな花柄の模様の着物を脱ぎすてていき、そして、自分をしばっていたところのひもを次々にほどいていく。足元にひも色々にまといつきますけども、自由になった、解放された、自分を歌いあげてゆく、そういう「花衣脱ぐやまつわるひも色々」のなかに解放されて、自由に羽ばたく杉田久女の姿がそこにあった訳であります。

そして、もう一つ、有名な句が「谺して山ほととぎすほしいまま」あの深山幽谷の英彦山の古い杉木立のなかで、自由にこだまして鳴いているほととぎすを歌った、「谺(こだま)して山ほととぎすほしいまま」という、自分自身の声を響き渡らせてゆくその自由な姿も、やがて久女が最後に亡くなるときには、孤独ななかに、太宰府保養院という精神科の病院で、一人淋しく死んでいくときに、そばに家族は誰もいなかったのです。このような家庭の主婦から、自由と独立を求めて社会的に活躍し、華やかな生活のなかで、また最後に孤独に死んでいった杉田久女の生涯については、昨年、田辺聖子さんが、「花衣　ぬぐやまつわる」という小説で公にされ、樹木希林の主演で、「台所の聖女」というドラマがテレビ放映された訳ですが、そのようななかに、私たちはシルバーエイジを、女としてどのようにいきてゆくか、その問題を今日は考えてゆきたいと思う訳でございます。

先程、打ち合せを致しました。余り深刻にならないように、余り暗い話にならないように、明るくのびのびと、この問題を考えていこう、そのような打ち合せもしたところでございます。

前置きが長くなりました。それでは早速、菅原先生から、ご発言いただきたいと思います。お願いします。

菅原真理子　色々な立場の方が、今日集まっていらっしゃ

います。高齢者問題というのは、それまで生きてきた人生のつけが回ってくる、という個人差の非常に大きな問題なんですけれども、その前提として、今、社会のしくみ、社会の制度、国の施策が、どういう方向に変わろうとしているのかを前提条件として、ちょっとお話をさせていただきたいと思います。

今、日本の高齢者対策の方向は、三回目の大きな曲がり角を迎えているといえると思います。第一の曲り角は昭和三十年代後半から四十年代です。今まで伝統的な家族で、親孝行という徳目をもって、高齢者は、家庭の中でお世話するのが一番好ましいというふうに思われて来たのが、「いやいやそれではいけない」と考えられるようになりました。例えば、イギリスで見てみましょう。ゆりかごから墓場まで、あんなに福祉が整っているではないか。

スウェーデンの福祉国家もすてきだなあと、いうことで、ああいう、一歩先を進んでいる欧米先進国の福祉水準に日本も追いつきましょうということで、いろいろな施策を急ごしらえで、かなり急ぎ足で作りあげたのが、第一期だと思います。

例えば、年金制度、例えば医療保険制度、特に老人医療保険の無料化、なんていうようなのも、この時期、たまたま経済成長のなかで、税金の収入が良かったというようなことがありまして、新しい施策がどんどん行われて、昭和四十八年頃は、福祉元年というようなことが言われておりました。ところが、ちょうどその四十八年に第一次オイルショック、その後、昭和五十六年代、第二次オイルショックと歩みを一にしまして、国の財布が怪しくなったんですね。

たいへん財政赤字が増えまして、今までのようにどんどん何でもやってあげます、スウェーデンでやってるのはこれは良いですね。アメリカのこれをまねしましょうというふうな形で、悪い言葉で言いますと、バラマキ形に福祉を提供するということが財政的にできなくなってきた。

そこで今、たいへん強調されておりますのが、福祉あるいは高齢者対策の効率化、それから供給の増大ということです。今、先生がおっしゃいましたように、高齢者の数がどんどん増えている。それに対して、需要はどんどん増えているんですが、その需要を全部満たすだけのことをする力が、政府の財政の事情で、十分余裕がないというのが理由の一つ。それから二つ目がですね、これは、外国でも提案されている一つの新しい動きなんですけれども、公的な福祉というのは本来、限度がある。あくまで国民の税金で行う福祉は公平でなければいけない。あの人には手厚くしてあげて、この人にはささやかにやっ

ていこうとかいうふうに差をつけてはいけない。ところが、一人一人の高齢者の方達というのは、全部差がある訳ですね。

経済力も差があります。需要も差があります。どういう世話をしてもらいたいかというのは、みんな差がある訳ですから、むしろ公的福祉の部分は、必要最低限がよい。プラスαの部分については、いろいろな政府以外の主体で提供してもらう。これをもう少し、促進するということが必要なのではないかと言われ出しました。そしてまた、高齢者一人一人が自立して、できるところまでは自分でやる。というふうなことを奨励しないと、どんどん高齢者の方達が増えていくなかで、とても日本の社会全体がもっていかなくなるのではないか、というふうに考え方が変わってきております。

例えば、具体的に申しますと、所得、女性は、現在のところ年金の面や雇用の面で色々ハンディがあるんですけれども、今、所得関係、高齢者の所得の確保のところで大きな課題になっておりますのが、年金の改正です。

昭和六十一年に改正されまして、基礎年金、皆さん全部、女性も主婦の方も全部、基礎年金でカバーされることになりましたが、厚生年金の方はそれに上積して、色々比例報酬部分なんかがある訳です。この厚生年金、現在のところは六十歳支給ということになっておりますが、これを国民年金と同じように、六十五歳に支給年齢を遅くするということが、プログラムとしてあがっております。これはまだまだ本当に議論の最中でして、その前提としては、もちろん働く機会がなければならない。六十五歳まで、年金年齢を遅らせるならば、六十五歳まで雇用を確保しなければいけない。今、六十歳定年がようやく過半数に達したところです。ですから、この六十歳から六十五歳までですね、どういう形で高齢者の方達の雇用機会を保障するのかと、大変難しい問題です。今までの年功序列ですとか、終身雇用ですとか、もろもろの日本的な雇用、日本的な経営と言われるものの基本が、これによって、ずいぶん変わってくるだろうと思います。

しかし、いずれにしましても、この所得については、働いている人達が、過大な負担をしないでも済むようにやらなければいけない。働いている人、例えば三十代の人、四十代の人、子供を抱えて教育費、あるいは住宅ローンの人と、七十代八十代の方達の必要とする生活費、バランスを考えなければいけない。もちろん、どこが適正なレベルかというのは、本当に議論の余地があるのですけれども、基本的に市民らしい生活、人間らしい生活をするところは、年金で保障しなければいけないんです。プラスαの色々なゆとりのある豊かな生活をしたいという部分は、かなり税金で支えられている、年金だけでと

いうのはむつかしいのではないかと思います。

そういう時代になってきたということです。ですから男性も女性も、特に女性は、どういう形でその部分を、自分のゆとりのある経済生活を確保するかということを、自分で考えなければならない、それが強制されつつあるということがはっきり言えるだろうと思います。

二つ目、健康医療の方、大変悲しいことなんですが、これもやっぱり一番最大のガンは、お金なんですね。

医療ですとか、健康ですとか、福祉なんていうのは、お金抜きで人間としての尊厳を守るために、最高のことをやってあげなければいけない、皆そうおっしゃると思います。そう思うと思います。ところが、例えば今の日本の医療費、今六十二年で十八兆円です。そのうち高齢者医療費が¼です。どんどん国民総生産の伸び以上に医療費が増えております。まず高齢者の方の人数が増えていらっしゃる、ということがあるでしょう。それから良いお薬がどんどんできてきます。それから、CTスキャンとか何とか色々大変高い立派な最新の機械がどんどん色んな病院で使われております。どんなに、回復はかなり可能性が低いような病気になられても、数か月間治療で何とか持たせるということも、現代の医学ではできるようになっております。

ということで、医療費が下がることはまずないと。着実に伸びていくだろうと。はっきり言って案はないのですが、少しでもそれを少なくするためには、治療だけではなしに、病気になってから治療するだけではなしに、まず予防が大事なのではないか。まず病気にならないのが一番大事だと、それが四十歳から、これが老人保健手帳を四十歳でもらって皆さんショックを受けられた方もいらっしゃるのではないかと思うんですけれども、四十代五十代くらいから、健康管理をしっかりやらなくては、ダメなんだ、それをやっぱり国民の方達に一人一人認識してもらって、自分が健康で自立して生きる期間をできるだけ長くする、病院で治療を受ける期間を短くする、こっちの方向に行かなければいけないということです。

そしてもう一つ、日本で今、手をつけなければならなくなっているのは、日本の高齢者の方達の入院は平均四十二日、高齢者だけでなく、全部の平均が四十二日なんです。高齢者の方で入院していらっしゃる高齢者の半分以上の方が六カ月以上入院していらっしゃる。

こういうのが医療費を増やしている訳ですし、高齢者の方達自身にとっても余り幸せではない。社会的な入院、病気は治おったんだけれども、家に帰っても人手がないから病院にそのままいるというような人が、大変多くいらっしゃるのです。そういう人達が、そのまま直ぐに家に帰る間に、もう一つワンクッションを置く、中間施設、

社会復帰できるまで生活の世話をするというような施設を作らなければならないのではないかというのが、一つの新しい試みとなっております。

それからまた、福祉の方、こちらの方も今どんどん高齢者の方が増えていらっしゃいます。寝たきりの方も増えていらっしゃって、そういう方達の看護が、さっき先生がおっしゃいましたように非常に重要な問題になってきています。老人ホームのうちで経済的な理由がある人達をお世話するようなホームはもういい、それより一番手厚い看護を必要とする寝たきりの方達をお世話する、特別養護老人ホームを重点的に整備しましょうということで、今一七四三、まだ少ないですが、この十年間の間に二倍以上にはなっております。これからも、どんどん増やさなければならないということが、第一に必要なんですが、もう一つは、とても施設だけでは間に合わない。施設へ入ることを好まない高齢者がまだまだ大変多いですから、高齢者を家庭で家族がお世話をしている場合、それをサポートするような、家族をサポートするような、寝たきり老人を抱えた家庭を助けるような、色々な施策をやっていこうということで、家庭奉仕員ですとか、デイケアセンターですとか、そういった在宅福祉重視の方に施策が変わり始めております。

これもメニューはいっぱいあるんですけれど、数がまだ十分ではないとの批判が多いので、施設だけが万能なんではないよと、自宅で、今まで住み慣れたところにずっといる方が、高齢者自身にとってもたいへん幸せ、質の高い福祉なんだとという方向です。そちらのほうが質が高いんだと、安いからではなくして、質が良いから、そういうことを、しっかりやっていかなければならないんだ、というふうに考え方が変わり始めております。

そしてまた、そのときにそういうサービスを、国ももちろんやりますが、むしろ経済的に余裕のある人達で、もっと手厚い、レベルの高い福祉を欲しい人は、自分でそういったようなものが買えるように、色々な民間の会社やビジネスの方達も、福祉のことをどんどんやっていただいていいのではないかと。でも相手が高齢者の方ですから、あまりお金もうけであこぎなことはやって欲しくない。きちんと、コントロールはしなければならないという、そういうふうな方向に福祉の面でも、変わり始めてきております。

まだこの他、色々な社会参加を促進して、高齢者の方達が、十分学習する機会を作りましょうとか、色んな社会資本を整備するときにも、高齢者の方達が、全日制市民のかなり大きな割合を占めているんだということを配慮して、高齢者の方達が住みやすいような町づくりをしましょう、あるいは家でも、高齢者の方達が家の中でケ

ガをしたり、生活の自立を妨げられるようなことのないような、細かい気配りのされた家をもっと作ることが必要ではないか、そのための融資をしましょうとか、色々細かいことをしておりますが、もう一度繰り返しますと、今日本の高齢者への対策は、国が全部丸抱えではなしに、一定水準までは国がやる。プラスαの部分は自助でお願い致します。そういう方向に変わり始めてきている訳です。

私は、ここで本当に国民の方達、特に女性達が考えなければならないと思いますのは、やはり施策をするには、優先順位というものが必要だと思うんですね。何でもやればやった方が良いに決まっているんです。高齢者向けの色々具体例を言うと、差し障りがあるので、あまりにばらまき形で元気なお年寄りが、よりちょっと気持ちよくできるための施策に、使うお金があったら、やっぱり本当に気の毒な寝たきりの高齢者の方達、そういう方を抱えていらっしゃる家族を助ける、そちらの方に重点目標を移していくべきなのではないか。高齢者の方達でも、寝たきり、ボケということが大変問題になるんですけれども、七十代で五%、六十代では一%以下、八十代になってからようやく一割以上です。言葉を変えていえば、七十代では九五%以上の方がお元気です。一病息災、慢性病の一つや二つあったとしても、十分日常生活はできる方が大部分です。八十代になっても九割近く、八割以上の方が、日常生活は、ちょっとした援助があればやっていかれます。ですからそういう人達が、自分は年だからもうよそから助けてもらわなければ、やっていけない人だと思わないで、そういう方達ができるだけ長く自立していけるように、それを社会全体が支えるという方向をめざすべきではないか。本当に駄目になったときには、国・福祉が責任をもってきちんとお世話すると、そういうふうな方向へ、皆の議論を煮つめていかなくてはならないのではないかなと考えております。どうも時間が超過して申し訳ありません。

保田井進　ありがとうございました。菅原先生からは国が丸抱えするのではなくという、これはたいへん重要な考え方を示しておられる訳で、必要最低限においては国が保障するけれども、それぞれの生活、それぞれの個性に応じた生活の部分においては、自らこれを自立し、自助していかなければならないという考え方が、基本的なのだというふうにおっしゃっている訳でございます。

その次にアン・ラトナヤカ先生にご発言いただきたいと思います。

アン・ラトナヤカ　私は、日本に来て十六年目になりました。最初日本に来た時は、日本の年輩の方の家に約一年間過ごしたんです。そこで日本の作法、本当の五衛門

風呂にも入りました。だから私にとっては、高齢者という言葉は、スリランカ人として、私の国はスリランカですけど、どういう過ごし方をするかと言えば、多分、二十五年前の日本と同じだと思います。

まずスリランカの老人ホームは、非常に少ない訳です。そして、老人ホームに自分の親を入れているということは、非常に大きなスキャンダルになる訳です。

まず嫁はすごく批判されます。ということは、高齢者をほとんど自分の家で世話するのは、当たり前という考え方です。これは仏教から来ている考え方と思います。なぜならば仏教の考えでは、自分の親にもし悪いことをしたら、次の生まれでは、非常に罰が当たる、という根本的考え方から来ていると思います。そして、例えば寝たきりの老人でも、自分の家で世話するのです。嫁よりも、スリランカには、皆さんご存知かどうかわからないけど、この言葉を使ってよいかどうかわからないけれども、世話するメイドさんが多いので、そして月給も日本に比べたら非常に安いですから、手伝う人が多い訳です。それから社会には、例えば、寝たきり老人がその地域に住んでいるなら、そのコミュニティ、周りの人は、例えば、土曜日とかに来て手伝ってくれることがスリランカでは多い訳です。だから、政府が老人ホームを造っているけど、入る人は非常に少ないから色んなことで是非いらしてくださいと言ってもまだまだ少ないんです。

そしてもう一つは、スリランカの女性はまだ家庭にいるということも大きな理由と思います。外で働く女性は、まだまだ日本に比べたら少ない訳です。しかし、今はその状態ですけど、多分、あと五年、十年後と比べたら変わると思います。そして先程言ったんですけど、日本の高齢者社会を私の目で見て、まず日本では年輩になったら、すぐに地味になるんですね。なんとか控え目、着る色も派手じゃないと。私、外国人としてはこれはちょっと理解はできないんですね。外国人は、年をとってゆくほどちょっと派手になるのは当たり前といっても、もっともっときれいになろうということを考えています。

日本人をみると、どうも控えめになって、いつも後ろになるということを考えていますから、これはどうしてかなと、私は逆に、元気になって、本当に社会の色んなことに参加していく方がいいんじゃないかなと思います。ということは、若いときには、その時期の良いことがありますけど、年をとっていくほど経験、色んなことを味わっていくことが多いんじゃないかなと思います。年をとったから地味になるとか、面白くないとか、色んな心のことは迷ったりね、そんなことはなくても良いと思います。その年には、良いこともあるから、色んなことに参加してゆく方が良いのではないかなと、私の考えです

ね。

今日は、この会場に一人、私の知っている門司からの方がいらっしゃっています。私の学校のイベントとかパーティのときには参加して、私とゴーゴーを踊る方もいらっしゃいます。

辻さんですけど、よろしいですか、どうぞ、ちょっと立っていただけますか、どうもありがとう。私辻さんにすごく、感謝しています。私の学校のイベントとかパーティのときに来ては、私とゴーゴー踊ったり、色んな外国の歌はタイプして持って来て、これ歌いましょうとか。これは日本人は、皆こんなふうに考えたら、自分は淋しいとか、もう誰も面倒みてくれないとか、そういうことにならなくて、自分は自分の力を利用してゆく方が、楽しい老人生活ができると思います。私は、日本に居てどういうふうに生活するのですかと、よく聞かれますけど、私は日本に永住権を持っています。ここに骨を埋めるつもりでいます。私の日本の友達と同じ老人ホームに入って、英語を教えながら、楽しく年を過ごそうかなと思います。

そして皆、同じ友達と同じ老人ホームに入ろうという考え方がありますので、じゃ、あの先生は外国人だから、多分入れないでしょうという人もいますけど、いいえ、そのときには外国人ではなくて、すっかり日本人になってしまうといつも答えます。

だから、ここでもう一度、繰り返して言いたいのは、年をとったから、自分を誰も相手にしないとか、そういうことは考えない方がよいと思います。周りの色んなことを、もうちょっと見て、自分のことを、もうちょっと大事に思って、できることはたくさんあると思います。

それを自分が探がしていく方が一番と思います。周りは何もしてくれないとか文句を言うんじゃなくて、自分のできること、また社会に対しては自分が逆にできること、そして、コミュニティのサービス、自分は年をとったから何もできないじゃなくて、いろんなボランティア活動が日本にもたくさんありますから、そういうことに参加していけば、とても優雅なリッチな年をとっていくんじゃないかなと思います。

じゃ、どこかで、皆さんにお会いすると思いますので、それまで楽しみに待っています。どうもありがとうございました。

保田井進　ありがとうございました。アン・ラトナヤカ先生からごらんになりますと、日本の老人達は、年をとればとるほど地味になり、控えめになり、つき合いも少なくなり、小さな世界に生きてゆくようになると。しかし、そうではなくて、もっと明るく、積極的に、楽しく、そして、社会の役割を果していこうという、そういう広

い生活空間のなかで、のびのびと積極的に生きていくという、老人としての生き方に方向転換する必要があると、そのようにおっしゃっているように思いました。先生は、日本人の老人ホームに、私も一緒に入りますとおっしゃいました。こうして、お友達になって、老後をともに過ごすという、そこに素晴らしい国際化の社会が広がってゆくのだと思います。ありがとうございました。

それでは、フリーマン美智子先生にお話をいただくことに致します。スライドを使いますので、会場暗くなるかもしれません。

お願いします。

フリーマン美智子　まず、最初にタコマの町を少し見ていただきまして、そこに見えます山は、マウントレーニアと呼ばれ、日系の人はタコマ富士と呼んでいるんですね。これはタコマのドームができまして、いろんなイベントをここで催します。

これはタコマの一部の町の様子です。これから、私の学校のことを先にちょっと見ていただきます。アメリカは何歳になっても大学に入学することができます。私の教えているタコマ大学では、十七歳から七十歳以上の生徒が勉強をしています。特に目につくのは四十歳、五十歳の主婦の方々で、今まで外で仕事についたことがない人、または、今までより良い仕事につき、少しでも良い収入を得て、幸せな老後を過ごそうと努力しております。これは私のクラスなんですが、この一番前に座っている生徒は農業の方で、今まで一度も農業以外の仕事についたことのない方なのです。その次に座っている人は、若く見えますけども、四十歳近いんです。この方は片耳は少し聞こえ、片耳は聞こえませんから、いつも私の話す口を見守って、そして、黒板に書いたものを見て勉強しているんです。

この方は五十五歳以上の方です。こちらの方は中風になられまして、もう歩くにもすごく大儀なんですが、まだ勉強しておられるんです。このすごく太ったおばさんは、私の生徒だったんです。五～六年前、私の学校で勉強し、運よく私の学校の秘書をしているんです。ここにいる二人も私の生徒だったんですけども、卒業して、こうしてコンピュータを使う秘書の仕事をしております。

今までお見せしたスライドは、シルバーエイジに達するまでに、中年の方々がどうしてまた学校に入り、勉強しておられるかということをお見せしたんです。のちほど、またふれたいと思います。

これから、お見せするのはタコマ市の近くにあるリタイアメントコミュニティです。八五〇軒ございます。ここに住むには六十二歳以上でないと住めないんです。もし夫婦であれば、どちらかが六十二歳でなければ、そこ

に入ることはできません。

この中にある家はリースです。リースでも一回払いと、月々に払うリースどちらでも結構です。そしてそれ以外に四三五ドルから七七五ドルの費用が要るんです。その費用は、電気代、水道代、健康保険料、この中にある設備、例えば、ゴルフ場とか娯楽場とか、全部含まれているんです。ただ、それ以外にいるのは、食事代と服代だけです。ここは受付です。色んな建物がありまして、この建物のなかは一部屋一部屋住める建物です。これはアパート式になっています。アパートも色んなアパートが中にありまして、自分に合ったアパートに住むようにしております。これはまた違うアパートです。これは家が二軒ひっついた家です。これもまた違うアパートなんですけど、こうして、芝生とか、家がどこかこわれたと言えば、すぐに直しに来てくれるんです。だから、家の側の芝生を刈ったり、電気の球が切れても自分で直すということをしなくても、すぐに誰かが電話一本で飛んできます。これ皆一軒ずつなんですけどもね。こうして郵便屋さんも一軒一軒郵便を持って来てくれます。ちょっと見えにくいんですけど、その少し下に見えるのはゴミ箱なんです。ゴミ箱が外にあるのではなく、穴に埋まっているのです。

これは一軒の家なんです。こうしてどこかにこれから買物に行くのです。この夫婦はご主人の体が不自由になり、住んでおられるんです。

こうして畑を作りたい人は畑を作ることができるんです。だから皆楽しんでおります。

向こうに見えるものは、アメリカ人がよく持っているモーターホームと言う自動車の家なんです。

この辺の夏は、素晴らしいんです。その時期にここに住み、冬になれば暖かい土地、ネバダとかカリフォルニアへ旅行して、そこで二～三カ月過し、また、こちらへ帰って来るのです。使っていない時の駐車場です。そして、そこにはこうした池もあって、素晴らしいきれいなとこです。

こういうような色々の家があるのです。一軒家とか、二軒家とか、六軒家とかがあります。こうして、きれいなのは、ここに住んでおられる高齢者の人が花を植えておられるんです。

私もすごく、これを見て感動しました。そして、この町にはちゃんとお巡りさんがいるんです。ですから、夜中でも何も心配しなくて良い。そして町全体に囲いがしてありまして、夜ゲートが閉まるようになるんです。ですから絶対に安全です。もしどこかに旅行に行くときは、こうしてお巡りさんが、ちゃんと見回りに来てくれます。一日に何回も。だから設備はすごく整っております。

今までのは、アメリカ人の老後のことです。これからちょっとお話したいことは、タコマ、シアトル付近に住む日系の方の老後のことです。

今、ここに写っておりますのは、カワベハウスといいまして、これは、アパートなんです。このカワベハウスがどうして建ったか、ということをちょっとお話ししたいと思います。

カワベというのは日本人の名字なんですけども、この方は、滋賀県出身で、向こうにいかれて一生懸命お働きになって、相当お金を残されました。自分が死んだときには、そのお金を日系の人のために使って下さいと遺言をして亡くなられたんです。

だから、その人の遺言どおりに、こうしてカワベハウスというアパートを建てたんです。

これは、日系の方々が、年をいかれまして、娘や息子たちと一緒に住みたくないという方が、ここで生活をしております。

このようなアパートなんですけども、私は急に撮りましたから、カメラの紐がちょっと写りましたけど、日系の方が窓からのぞいています。

私のお友達のお母さん、福岡県椎田から来ているんですけども、その友達がここに住んでおられるんです。そのおじいさんは九十九歳なんです。それでその九十九歳のおじいさんが、すごく元気で、老人ホームに入ってなくて、ここのアパートで生活しているんです。その方には、三人息子さんがいます。私もここに会いに行ったんです。「どうして息子さんと一緒に住まないんですか」と聞きますと、「僕は息子や嫁の厄介になるよりも、こうして自分一人で生活していれば、自分のしたいことができる」「どんなことがしたいんですか」と聞きますと、「食べたいときに食べ、寝たいときに寝て、子供に何も言われなくてもいいから、僕はこのような生活をやっております。」と言っておられました。

これが、その建物です。素晴らしい建物です。この中で自分のことが自分でできなくなれば、今度は〝敬老ホーム〟と言いまして、日系の老人ホームがございます。これがそうなんです。裏から撮ったんです。その敬老ホームにはちゃんとこんな自動車があります。ちょっと見にくいですけど。

こちらの方々は夫婦なんです。男の方は、シアトルの日本のお寺の隣番です。一番偉いお坊さんなんです。私も何かの縁がありまして、私達夫婦の面倒をみて下さってます。私の主人は白人なんですけれども、このご夫婦が良くして下さり、私達一週間に一度ぐらい会いに行くんです。それで、「一緒に敬老ホームへ行って下さいますか。」というと、「喜んで行きます。」と言って一緒についてて来て下さったんです。

そして、玄関に入った所に、この敬老ホームの一ヵ月間のプログラムが張ってあるんですよね。だから毎日何をやっているのか、すぐにわかります。

これはすごくお年のおばあちゃんです。これはダイニングルームなんですけれど、ちょうど時間以外に行ったんです。そこに見えるのは、今度は、〝キングドーム〟と言いまして、シアトルの〝ドーム〟なんですよね。

すぐそこに見える白いのは、輪になった太平洋なんです。ちょうどそこのダイニングルームに一人おばあちゃんが座っているんですよね。そのおばあちゃんはタコマから来たおばあちゃんなんですけれども、靴下を編んでおられるんですよね。「おばあちゃん、この靴下どうするんですか。」と聞くと、「暖かいから、自分が編んで皆様に差し上げます。」と言っておられました。この日は皆様が面会時間にカラオケを歌いにきて下さいました。皆ボランティアです。

向こうはすごくボランティアがやってきますから、日系の方が、日本のカラオケで、演歌を歌っておられました。それで皆さん楽しそうに一緒に歌っておられますね。

これ見たら、ああ素晴らしいなあと。ここに入っておられる方は皆んな、自分のことが自分でできないような人が多いんですけれども、こうして誰かが来て、色んなことをしているのを、すごく喜んでおられます。このように皆。車いすを見てください。それでも、日本の音楽を聞けば、すごく喜んで、演歌だけでなく、日本の歌、昔なつかしい歌を皆が一緒に歌っておられました。

ここに今、寝ておられるおじいちゃんは、やはり、タコマの方なんですけれども、少し頭がボケちゃって、体の方はすごくお元気なんですけれども、「おじいちゃん、今日向こうで皆が歌ってたわ。行かないの。」と言ったら、「僕は寝てる方がいいんだ。」と言って寝ておられました。

そうして、この施設の中に、日本人だということを忘れないために、日本人だということを思うために、こうして皆様が掛け軸をかけ、私が行くたびに、花が毎日、十四年変わっているんですよね。

これを見て下さい。遠い日本を離れても……日本の地は……この庭も見て下さい。日本に帰ればお正月に玄関に飾る花なんですけども、向こうでもこうして日本人……日本の庭ができています。向こうでは大きな竹はできないのですが、こうして竹まで植えて、日本の国、日本人だということを忘れないで、皆様生活しておられます。

この敬老ホームは、日本食で、日本語が通じるということで、日系の方が、タコマやシアトルだけでなく、遠

い所からも来られます。そして、私も日曜日などにお友達と行くときがあるのですが、たくさんの方が土曜日、日曜日になれば、面会に来ておられます。どうしてかといえば、向こうでは、夫婦とも働いておりますから、やはり土曜日、日曜日しか面会ができません。土曜日、日曜日はたくさんの方がお父さん、お母さんに会いに来ておられます。

最後に、アメリカでは年をとって、自分の子供にみてもらうということがほとんどないんです。ですから、幸せな老後を過ごすには、まずお金、女の人でも大半の人が職についております。子供を育て終わり、自分にこれという職のない方は、いくつになっても、また学校に戻り、手に職をつけ、そして、社会に出ていく。だから皆様も年をとったからと言わないで、一生懸命頑張って下さい。

保田井進　ありがとうございました。それぞれ、三人の先生方に、それぞれのお立場で、たいへん興味深いご発言をいただいたのですが、それぞれまた補足などをいただきたいと思いますが、お二人のお話をお聞きになって、更にコメントあるいは感想もおありかと思いますから、菅原先生どうぞお願い致します。

菅原真理子　私、一番はじめに念押ししておきたいのですが、このホームは州や国の施設ではありませんね。

それからリタイアメントコミュニティ、その年をとった方達がリースで家を借りて、安全に暮らせるようなコミュニティを作る。これも、国とか州政府がやっているのではなくて、民間の資本で行われているコミュニティなんですね。

アメリカというのはそういう点では、本当にセルフヘルプです。それは、アメリカ建国精神である独立精神がここまで脈々と波打っているんだと思うんですけれども、同時にフリーマン美智子さんがおっしゃったように、お金は必要であると。自分が本当に若いうちから、きちんと努力しなければ、よき老後は勝ち取れないと、それは大変徹底していると思います。

それから子供との関係、あるいは家族との関係の点で、たいへん印象的なのは、子供と一緒に暮らさないで、インデペンデント、独立して暮らしたい、という希望が強いだけでなしに、それにかわるものとしてですね、ボランティア活動。日本の我々ですと、まず血のつながった親、兄弟、子供、孫、例えば靴下なんか編んだとしても、まず孫にあげようと思うんですけれども、どんなにお年をとっていらっしゃる方達でも、自分のできることをその血縁に限定しないで、色んな周りの人たちに奉仕しよう、自分の力を他人のために使おうというふうな気慨がおありになると。それは、お互いにやったりとった

りの交換だと思うんですけれども、自分の家族のなかでだけ、自分のエネルギーだとか愛情を限定していると、外からも来ない、自分が家族以外の人達にも色々やってあげておくということが、老後を生き生きとして過ごすために非常に重要な要素なんではないかなと。一朝一夕にね、こういう社会というのはできるものではないんですけれども、日本もこれから高齢化社会に向けて、そういった色々なつながり、家族も、もちろん大変重要なつながりなんですけれど、だけに限定しないで、コミュニティとかボランティアとか、そして公的福祉とかを組み合せてですね、高齢者を支えるということが大変必要になってくるんだろうと思います。

また女性の問題で言いますと、今まで女性が比較的消極的、特に家族のためだけにやっていればそれでいいんだと。むしろ他のことはするな、というふうな社会的な雰囲気があったというのが、私たちのこれから生きる高齢化社会を難しくしている部分があると思うんですが、これから本当に意識して、アンさんがおっしゃったように積極的に自分の意識改革をする。

女性の意識改革をするということが、そのまま高齢者の意識改革ということになるのではないかと思います。自分の力を限定的にある一定の範囲のなかだけ、家族のためだけにというふうに制限してしまうのではなしに、色々なところでその力を使おうと、そういった考え方を持つのが、大変必要なのではないかと思います。

私いつも、日本の高齢期の方、高齢期になろうとしている女性達から、愛されるおばあちゃんになりたいという言葉を聞くことが多いんですよね。愛される、かわいがられるおばあちゃんになりたいと。これからは女性も愛するおばあちゃんになる、かわいがるおばあちゃんになる。そういうふうに自分のかわいがる力、愛情の力、世話をする力、女性は色んな力を持っている訳ですから、それを若い人に、あるいは他の自分よりもっと弱っている高齢者の人達のために使おうと、そういったようなことを考えなければいけないのではないかということを、お二人の話を聞いていて痛感致しました。

保田井進　ありがとうございました。アン・ラトナヤカ先生、お二人のご意見をお聞きになって何か感想ありますか。

アン・ラトナヤカ　本当に今日、日本人の高齢者のことが分かりました。今まで分からない部分がいっぱいありましたが、菅原先生のお話を聞いて本当に勉強になりました。そして、私、まとめとして言いたいのは、社会が自分に何をするかじゃなくて、自分は社会に何ができるかということをまず考えたら、一番良いのではないかと思います。先程のボランティアの活動とか、色々あるか

ら、淋しい老後生活はする必要がありません。もっと豊かに暮らしてゆくことを考えたらいい、そして若い人は、自分中心にばっかり考えるのではなくて、自分もいずれ年をとってゆく時期が来ます。これは事実です。だから、そのときに自分もそういうときには誰かを助けて、まただれかに良い思いをさせるのが一番良いのでないかと思います。

そして、最近、私がよく聞きますのは、日本人は外国で老後の生活をする予定があると。私は本当に色んな映画とか色んなドキュメンタリーを見ると、ブラジルに住んでいる日本人が日本に帰りたい、日本で死にたいということがよく言われます。日本人が老後の生活をずっと外国で暮らせるかどうか、ずっと今まで自分は日本で過ごして年をとってから外国に行くのは、日本人自体、日本人の性格にはあわないと思います。はっきり言って、ここをはっきり言わしてもらうんですけど。老後の生活の場合は、友達、家族、日本人はこれを大切にしてきているんですから、年をとってからぽんと外国に行って老後の生活をすると言ったら、私は疑問に思います。だから、もし、そういう予定がある人は、もうちょっと深く考えた方が。

だからシルバーエイジじゃなくて、本当はこれはゴールデンエイジですね。年とってゆくのはゴールデンエイジ、本当にゴールドですね。これは年じゃないかなと思うんです。

どうもありがとうございました。

保田井進　非常にはっきりでてきたように思いますが。ラトナヤカ先生のスリランカは、先生が先程おっしゃったように日本の二十年前とよく似ているということです。それは、お年寄りの世話は家族で見るのが当たり前。しゅうと、姑の世話は嫁がするのが当たり前、親の面倒を見るのは、子供がするのが当たり前と。そういう家族の相互扶助、そして隣近所の地域社会の相互扶助、それがたいへん強く残っているという訳です。ですからお年寄りを老人ホームに入れることは、お嫁さんにとっては恥ずかしいという、そういう感覚があるのだということであります。そのように、地縁、血縁と言いますが、地域の縁とそれから血縁、血のつながりの縁と、これによって老後問題を支えている。それがスリランカの姿として説明されました。

一方アメリカの方は、お年寄りは、子供の世話にならない。そのかわり、自分でちゃんと老後の生活のための貯えを用意しておいて住む場所、そして、人の世話になるようになったら、お金を払って、人のサービスを買うことのできるような貯えを用意しておくという、そういう独立といった生活態度を大事にしている。しかし、そ

の中で孤立の問題があるけれども、それはボランティア同士の助け合いがあるし、人に頼るのではなくして、自分が人のお世話をするという、社会のために、靴下を編むという、そういう生き方のなかにさびしさを克服する生き方があるのだという訳であります。

さあ、私達日本人は、どちらの生き方を選びとってゆくのか、この問題がある訳であります。菅原先生は、やはり新しい日本人の生き方として独立ということ。自分のことは自分でするという、そういう生き方を今、確立していかなければならないのではないか、このようにおっしゃっているように思います。少し、三人の中でディスカッションしていただきたいのですが、菅原先生、お尋ねしたいことがあります。日本の高齢化問題の一つは、人口が増えるだけでなくて、扶養意識といいますか、老人をお世話するという若い人たちの意識が非常に停滞してきているという、その問題をどう考えるかですね。家族が本当に支えてゆくことができるのか、若い人たちが、高齢者をちゃんと支えていくだけの意識を持っているかどうか。ますます自己中心的になって、価値観が多様化しているときに、高齢化社会は支えられるかという、扶養意識の変化と、核家族の増加、そして、老人世帯の増加、これを一体誰が世話してゆくかということなんですが、その点、自立自助で本当に大丈夫かどうか、その辺を少し、どう考えたらいいか、伺いたいのですが。

菅原真理子　意識調査なんかを致しますと、どうしても本音ではなくて、建前がでるのかもしれないのですが、日本の青年の方達、二十代あるいは三十代の方達を見ても、自分の親の面倒、老後の面倒を見るのは、自分達の責任だ、と言っている人が七割近く、他の国なんかに比べても圧倒的に多いです。ただですね。それはどのレベルになって面倒を見るというふうに考えているかどうか、そこで親の期待と少しギャップがあるんではないかと思うんです。例えば、両親が健康なうち一緒に住もうとか、あるいは、両親が健康なうちは別々に住んで欲しいというふうに思っている。どっちか一人になったり、あるいは体が不自由になったときに、はじめて最後のラストリゾートと言いますか、最後の寄りかかりどころとしては面倒みますよ、ぐらいに思っているというふうに考えた方がいいんじゃないかと思います。

それは、若い人達の扶養意識がどうのこうのという以上に、物理的に大変、老後の時間が長くなってきているということが、あるんじゃないかと思います。今、大体、子供たちが結婚するのは、五十代半ばですよね。女性の場合。半ばまでいかない、五十そこそこでおばあちゃんになる人もいますよね。すると、同居だけとってみた場合、へたをすると、四十年、三十年以上というのは普通

になって、例えば、ずっと同居を続けてゆく場合、一家で一人しか主婦がいないという時期はなくなる。つねに複数の主婦がいるというふうなことになりかねない訳ですから、ある程度、距離を置くほうがいい。そういうふうな住み方が、一つの高齢期の生活の知恵として、親孝行、親不孝、扶養意識が強いの弱いのという問題以前に、自然なのではないかなという感じがします。

ただ問題はですね。そういうふうに別居した後も親と子がいい関係を続けていく知恵、ノウハウがまだ日本人にはないんです。特に男のお子たちなんか見てますと、別居して、例えば、東京なんかに住んでいると、一年に一回顔を見せれば上出来だと、手紙なんか書いたことがないと、そういうようなのが多いですしね、電話だって、女の子だと割とべちゃべちゃしゃべりますけど、男の子の場合は、ほとんど親とは話をしないとかというふうなかたちですね、一緒に住んでいるうちは家族だけど、一旦離れてしまうと大変疎遠になってしまう。家族ではないみたいになってしまう。これが高齢者の方達が別居を恐れる、大きな理由になっているんじゃないかと思うんです。ですから、これからの日本人は新しい家族のつき合い方、つかず離れず、べったりではなしに、過大な期待をして、お互いをがんじがらめにするのではなくてですね、ある程度の距離を置きながら、暖かい、本当に思いやりの心を持ち続けるということが、たいへん必要なのではないかなというふうに思っています。

保田井進　ありがとうございました。ほかの先生何かご意見ありますか。

フリーマン美智子　私もお話を聞いて、びっくりしたことがあるんです。日本の入院期間が平均四十二日と聞きました。それには驚きました。というのは、例をあげて言いますと、私の親友のご主人が今年の六月二十二日に心臓の手術をしたんです。手術した日がちょうど木曜日で、お医者さんが、「あなたは少し長く入院しないとだめですよ。」と言われたんです。親友ですから、私も家族のようにお付き合いさせていただいてますから、「ああそうですか。」と言って、「先生、長いって、いつ退院するのですか。」「来週の金曜日です。」って言われたんです。それでちゃんと、金曜日に退院して帰って来たんです。心臓の手術ですよ、皆様。ここからここまで、全部かち割って手術したの。私は毎年、こちらにお盆にお墓参りに帰って来ます。向こうを発ったのが、八月十日だったと思うんですけど、そのときに彼が運転をして、飛行場に私達を送ってくれたのです。心臓の手術で一週間ですよね。それから想像していただいたらいいんですけれども、日本人の方がどうして平均入院四十二日、ひょっとしたら日本は入院費が安いんではないかなということを考えさ

せられました。向こうは、入院費が高いのです。こちらの事はあまり分かりませんけれども、それでもすごく驚きました。

保田井進　菅原先生どうぞ。

菅原真理子　アメリカは、平均八日です。同じ統計のとり方をして日本の四二日に対して。ヨーロッパの国々はその間、大体、二十日から三十日ぐらいなんですけれども、全くおっしゃるように経済的な理由なんです。一日長く入院していると、その分、何千ドル何百ドルとかかりますので、皆、もう動けるようになったら点滴の液を持ってでも退院する。お産なんかの場合は、一日でワンオーバーナイトで帰って来るというぐらいに徹底しております。それにアメリカでは日本みたいに医療保険でカバーしません。公的な医療保険ではなしに、私的なブルークロスとかいう保険ではカバーしますが、それにも一定の限度があります。ですから、本当に日本の医療保険制度はなかなか手厚いですが、問題はどんどんどんどん赤字が増えていくことなんですね。どうすれば良いか。

保田井進　どうぞ。

フリーマン美智子　もう一言言いたいのですが。ボランティアのお話なんですけども、お話を聞いておりますと、日本はすごく老人ホームの費用がかかると言われたんですけど、アメリカでも国の施設の老人ホームはないのです。ですけど、そういうところはすごくボランティアが来ているのです。高校生は学校が終われば直に、カバンを家におろさず、そのまま学校から直接に老人ホームにボランティアに行く。そしてまた、老人といったら失礼ですけど、まだ動ける老人ですよね、七十歳、七十五歳になった方でも、老人ホームにボランティアで毎日いかれるんです。だから朝起きてすぐに老人ホームに行って、手の使えない人の食事をさせてあげる。そしてまた、家に帰って、またあくる日に行く。結局、それを毎日、繰り返しておられるんです。

自分が若いときに色んなことをボランティアしておいて、自分がボランティアが必要なときには、回り回って帰ってくるという組織になっているんです。ですから、私は、完全にボランティアでやっていると言うんじゃないんですけれども、お話を聞いて、やはりタコマの方がボランティア組織は進んでいるんじゃないかなということを、今日はここで考えさせられました。

だから、皆様も主婦の方が多いと思いますが、家の掃除、洗濯がすみましたら、半時間、一時間でも結構ですから、どこでも必要なところにボランティアをしていただければ、北九州、また、日本の国そのものが、もっともっとリッチになるんじゃないかと思います。どうぞよろしくお願いします。

保田井進　はいどうぞ、菅原先生の方から。

菅原真理子　今、フリーマンさんが、主婦にボランティアのお願いをなさいましたけれども、もう一言だけつけ加えますと、アメリカあたりでは、男性もとってもボランティアをよくやるんですよね。

　働いている人も、夜仕事が終わってから、あるいは、土曜・日曜にボランティア活動をする。働いている女性も、働いている男性も、主婦の女性も、皆がボランティアを自分の生活の一部の中に組み込んでいる。主婦だけのボランティアではなしに、社会全体がそういうボランティア精神というんでしょうか、お互いに同じ社会のメンバーなんだというふうな意識を持つということが必要なんじゃないかなと思います。

保田井進　はいどうぞ、アン先生。

アン・ラトナヤカ　最後の一言ですけど、最近、私はよく感じることは、日本人は色んな真似、自分に似合わない真似をする訳です。それで日本は古い伝統の国ですから、私もスリランカ人ですから、言いたいのは、忘れなく自分の親を大事にすることは、やっぱり日本の歴史の中にありますね。伝統もありますから。私も毎月、親は必要じゃなくても、ポケットマネーを送ります。これは必要だからじゃなくて、やっぱり親はあくまでも大事ですね。それから、日本の社会もこういうことをずっと育ててきているので、そういう伝統は忘れなく、伝統というものは捨てるものではなく、いいことは大事にしていく方が何よりと思います。日本人がぜひ良いことは大切にしていくことを期待しています。ありがとうございました。

保田井進　はい、とても大切なことをありがとうございました。ここで、時間は少ないのですが、会場の皆さんの中から、ご質問がございましたら、お二人ぐらいしかできないかと思いますけれども、いかがでしょうか。

　時間がありませんので手短かに、そしてどなたにお尋ねなさるか伺いたいと思います。

沢辺（質問者）　三分ほど時間をいただきたいと思います。私は、北九州母子寡婦福祉会の理事長をしております、沢辺と申します。今年九月十五日で満七十七歳を迎えました。昭和五年十八歳の春から、出身小学校の教師として四十年間、児童・幼児の教育をやって参りまして、退職と同時に福祉事務所の中に家庭相談室ができたということで、そこに来てくれということで参りました。問題のある子供さん、家庭の相談指導にあずかりまして、八年間勤めました。これを退任するとともに、現在の母子家庭、寡婦の福祉増進のための活動を続けて、今、目下十一年目を歩いております。このほかに婦人会の仕事とか、特にボランティア的な仕事としては、老人ホーム、

いわゆる障害のある老人ホームで音楽指導をまる十四年行っている訳でございます。全くボランティア活動をしております。このようにしておりますと、お友達が「もういいかげんにやめて楽をしたらどうですか。」とか、あるいは、「そんなに働いてお金をもうけてどうするのですか。」と言われることがあります。そのとき私は、「いいえ、お金もうけで、お金で働いているのではありませんよ。私は、世の中のため、人のためにいささかでもお役に立てば本望だと思って、ボランティア的に仕事をしているのです。それが私の生きがいであり、また喜びであり、そして、たくさんの人とふれ合っていくことによって今日を楽しく生かされておる訳です。それはひいてはまた、健康にもつながっているのですよ。」と、胸を張って言う訳でございます。しかし、私としても自分自身の楽しみとして、好きな墨絵も習いたいし、大好きな民謡も深めたいという願いを持っております。

　けれども、その時間を見出しえない毎日の状態なんです。考えてみますと、老後を楽しく暮らすためには、やはり若いときから将来に向かって生活の設計をたて、これを着実に実行していくことが大事なことではないかと思います。また、老後を楽しく暮らすためには、私の経験を通して申しますと、一に健康、二に経済的自立、三に心を豊かに持って、自由の時間を持つこと、この三つではないかと思います。皆さんいかがでございますか。

　そこで、保田井先生にお聞きしたいのでございますが、シルバーエイジを楽しく生きるため、よく老人の生きがいということが言われておりますが、どのように私達は老人の生きがいを考えていけばよろしいか、これについてお教えいただきたい。それから、フリーマン美智子先生には、今、色々お聞きしましたが、アメリカ、あるいは先生のいらっしゃるところでのお年を召した方々が、楽しく生きるために、実際どのような生き方をしていらっしゃるかを、お教えいただきたいと思います。よろしく、お願い致します。

保田井進　私が先ですか。高齢化することによって、新しい生活課題が次々にできてくると思います。それは、自分の息子がお嫁さんをもらった、そういう言い方は女性の立場からよくないのですが、息子が結婚をしたときには、姑に対しては、お母様、お母様と呼びます。恐らく、沢辺先生のようなご家庭でしたら、お母様というよりも、先生とお嫁さんとおっしゃるかもしれません。

　そういうふうに先生とかお母様とか奉ってですね、お母様、ちょっと教えて下さいとか、お母様ちょっと、このおみおつけの味をみて下さい、というふうに言われますけれども、それはつかの間でして、年をとってきますと、「おばあちゃん、トイレを流してありませんでした」

と叱られることになるんです。「おばあちゃん、ガスはちゃんと消して下さらないと困ります。」叱られ、苦情を言われ、そして不快指数がどんどん増えていくという、そういう日がくる訳です。孫もかわいいときがありますけれども、しばらくしますと、孫が「おばあちゃん、いつ死ぬの。」と言います。「おばあちゃんが死んだらね、おばあちゃんの部屋、私の勉強部屋になる。母ちゃんが言いよったよ。おばあちゃん、いつ死ぬの。」自分がこの一部屋を占領していることが、皆の迷惑になっているということを、知らされる日が来る訳です。そのような思いがけない自分の役割や、自分のいる場所を失うときに、明るく、伸び伸びと生きていきながら、この若い人達のために私は何をしていくのか、私の役割と責任は何かということを考えなければいけない。

そういう、今、置かれた自分の課題に向かって挑戦しながら、自分で置かれた状況の中で、成長し、喜びをもたらすものとして、自ら啓発していくということが、明るく生きてゆく、伸び伸びと生きていく、たいへん大きな課題だと思います。

つらいです。本当に情けない思いをしますけど、その中でなお希望をもって生きていく、その生きざまを若い人たちに示していくこと、それが一つの明るく生きていく課題ではないかと、私はそのように思いますが。それじゃ、菅原先生、ラトナヤカ先生、ご質問があったと思いますが。

フリーマン美智子　向こうの方では、家で過ごす老後の時間は少ないのです。というのは、いくつになっても働いておられるのです。国の保険が六十二歳または六十五歳にならないともらえないんです。ですから、最低六十二歳まで皆様働かれます。アメリカで女の方で働いておられない方というのは少ないんです。もう大半何かの職についておられます。ですから、その年に達して、国から保険がおりても、今度は第二の仕事に変わられます。というのは、たくさん収入はないけど、まだ他に収入が入ってくるのです。ですから、先生が今言われましたように、〝おばあちゃん〟と、文句をいわれる時期がないんですよね。だから、もし、息子か娘と一緒に住んでいても、おばあちゃんも職業婦人でありますから、堂々として家に帰ることができる。また大半の人は、一緒に住んでいませんけども、家に帰っても、自分で食事を作り、何かしなくてはなりません。ですから老後の時間というんですか、死ぬまでの時間、日にちが短いんです。

そして、また本当の老後の人は、皆さんお友達、またクラブ、また教会の集まりで、トランプをしたりゲームをしたり、一緒に旅行をしたり、そのような活動を自分達で決め、こうこうしましょうって。おばあちゃん、おじいちゃん、プログラムにつきなさいって、若い人に言われず、まあ言われることもあると思いますけれども、大半自分達が、こうこうしましょと、自分たちの方針は自分たちで決めるような方針をとっていると私は思います。こうですとは私は言いきりませんけども、向こうの人は、自分のことは自分達で決めて、その方向に動いていく方法をとっていると思います。

保田井進　ありがとうございました。沢辺先生、よろしいですか。はい、菅原先生に対してですね。

もう一度、菅原先生にご質問があったんでしょ。沢辺先生。それでよろしいんですね。

ありがとうございました。それじゃほかにご質問、はい、それじゃこちらの方、お願いします。

質問者　時間の関係で簡単に質問させていただきます。岡山市の市議会議員でございます。菅原先生にお尋ねしたいと思うのですが、私達、五十代でございまして、そこを視点に今の時代を見まして、女性のライフサイクルが、五十代から八十代になったという中で、今、一番必要なのは、先程フリーマン美智子先生から見せていただきました中で、一番感銘を受けたことですが、子育ての終わりました後の女性が、次の第二の人生と言っていいのでしょうか。生きていくための学校へ、年齢制限なく、新たに勉強に入れるという。例え、若いときに四年間、専門の勉強をしておりましても、子育ての時間、いったん家庭に入って、再びというときには、時代に遅れている場合もございますし、全然そういう意識がなくて、専業主婦で一生を送れる幸せな方もございますが、今の社会情勢のなかで、四十代、五十代になりまして、ゆうゆうと自分の趣味だけで生きていかれる経済力をもっている方というのは、非常に恵まれた経済力の男性とご結婚なさった一部の方に限られている訳でして、また途中から一人になっていらっしゃる方もございます。

ところが、日本の社会では、四十代、五十代になりますと、働く場所というのは、パートか、皿洗いか、掃除婦かという現状の中で、常日頃、必要だと思っておりますのは、年齢制限なく、いつの年代からでも、次の時代に備えて入れる学校というのが、一番今必要じゃないかと思っている訳です。ところが、文部省で生涯教育ということを叫ばれて、そういった施設等に向けて、もう方針が出ているようですけども、この生涯教育というのをそういう視点からみますと、どのように国は考えていらっしゃるのか、ただカルチャーセンターを増やしたり、公的施設を増やしたりするだけではなく、はっきりそういう次の女性が、五十代、六十代になっても働き続ける学校という意味では、どういうふうに国としてはお考えになるのかを、お聞かせいただいたら、ありがたいと思い

ます。

以上でございます。

菅原真理子　今年の七月一日に文部省に生涯学習局ができたように、生涯学習・ライフロングラーニングということを、国は大変、力をいれているのですが、今、岡山市の先生がおっしゃいましたとおり、これは恐らく文部省主導だからだと思うんですけれども、こういう学習というのは、もっぱら教養をつける、それから自分の人生を豊かに楽しむ、そういったことを中心にしたカリキュラムが多いというのは、否めないと思います。そもそもですね、日本の学校教育が二十代の方達を対象とした大学教育においても、あまり直接世の中の役に立つような知識・技能を教えるよりも、四年間人生勉強してこいというか、人生のモラトリアムを楽しんでこいというくらいなことが、言われているようなカリキュラムができているくらいですので、今更、四十代、五十代の方に向けて、大学教育の中味を本当に変えられるかどうかというのは、疑問があると思いますし、なかなか、むつかしいのは、はっきりしております。

ただですね、これから数年のうちに変わるんじゃないかと思いますのは、平成四年が十八歳人口のピークなんです。それから後は大学へ進学する、その年齢の子供たちがどんどん少なくなっていきます。ということは、お客様が集まらないと言いますか、学生さんが集まらない学校が増えます。すると、そういうところでは必ずサバイバルのために、四十代、五十代の女性あるいは、もう一度職業能力を身につけたいという学生にとって、魅力的なカリキュラムを作らなければならない。恐らく、私の全く個人的な感じでは、国立大学よりもむしろ、私立大学の方にそういうふうな自己変革をなさるところが増えてくるだろうというふうな気が致しますので、もうしばらくお待ちをという感じです。

問題は、それと経済的な面ですよね。もし、私立大学の主導でそういうふうなことが進んでいきますと、ある程度の費用がかかると思うんですが、特に四十代、五十代の方達が、もう一度学び直した後、それをちゃんと受け入れてくれる職場があるかどうか、それに対応するお給料を出してくれるかどうか。そこのところが最大のネックになっていると思います。特にそこのところでは需要の多い知識・技術を身につける。例えば、もう一度、コンピューターを一から勉強しようというくらいのつもりでですね、女性達も、むしろ大学でなしに専門学校でも良いぐらいのつもりでですね、能力を身につけなければならないんじゃないかなというふうな気がします。

保田井進　ありがとうございました。もう時間がなくなってきましたので、それでは最後のご発言にしたいと思います。お願いします。

松尾（質問者）　小倉北区の松尾と申します。生活学校で七年間勉強をしておりますが、私は完全な専業主婦でございます。菅原先生にちょっとお尋ねなんですが、やはり経済的な自立がないと私たち困るんですが、この年齢になりまして、今更どうしようもないんですが、それが日本人と申しますか、私たちの年齢までは子供の教育に手がかかります。四十代までは、家庭のこと、主人のこと、子供のことに夢中で、結局はそれから自分に自由ができましたら、私なんかは自分なりに社会参加はさせていただいておりますが、夫との会話が、やはり本当のところ、経済的、精神的、生涯計画に対する話し合いができてないように思います。私だけかもしれませんけれども、周りを見回してみても、外国の方に比べますと、どうしてもそういう、これは、日本的な生活環境じゃないかと思っております。これを直していかないことには、私たちの楽しいシルバーエイジをゴールデンエイジに変えていくことはできないんじゃないかと思いますし、私たちが今から、保田井先生がおっしゃいましたように、オールドがオールド・オールドをみないといけない年齢になってきましたときに、今までは家庭医と申しますか、地域のお医者さんが、親しくして下さって、家庭で看護ができておりましたが、今は、それが皆無に等しいのですね。

元気な方しか、そのお医者さんには通えないのです。ひどくなりますと、そのお医者さんでは往診もしていただけませんので、どうしても入院するということになります。若い方はお勤めをしてますので、看護をする方が誰かということなんですね。こういうことを私たちが今考えておかないと、これが十年、二十年、二十一世紀になったときには、どうしようもなくなるんじゃないかと思います。

だから、今私たちが何をというので、地域でやはり助け合いのボランティアと申しますか、できる間にそれをやっておかないと、と思っております。私もそれに努めたいと思いまして、できるだけお友達を、親友という心の友達をたくさん作ることに努めております。今、私が倒れましたら、皆さんがおむつ換えにでも何にでも行ってあげるよ。という方をたくさん身の周りに作りましたから、これが私の全部の財産だろうと思ってます。そういうことでございます。

保田井進　ありがとうございました。それでは菅原先生、どうぞ。

菅原真理子　松尾さんがおっしゃった問題提起は、色々な日本の女性が今、背負っている問題が全部あったので、それに正確にお答えするのは、大変難しいんです。

一つは、家族、夫のかかわりになると思いますが、これを本当に、むしろ日本の男性が今まで、あまりにも職業中心、それから生産中心主義できて、男性達自身がむしろ気の毒な立場にいる。今いろんな方たちが濡れ落葉族だなんて、そういう職業から引退した中年の男性のことを言っておりますけど、やっぱり少しそういう人達、男性達ですね、いきなりその理解者になることを求めるのは、長い長いそれこそ生育歴があるわけですから、不可能だと思いますので、少しずつ、自立をさせてあげるように側のパートナーである奥さんが、色々な形で、時間をかけて仕向けてあげるということが、非常に大事だと思います。ぜひお願いしたいのは、皆さんの育てていらっしゃる若い男性をですね、自立した男性にぜひ育ててあげていただきたい。場合によると、若い男性の方がより数が少なくて、お母様たちに大事に大事に育てられて、自立能力が低下しているというふうなことも言われておりますので、ぜひそれをお願い致したいと思います。

それから、同年代の助け合い、これはこれから本当に大事になってくると思います。二〇二〇年頃には、全人口の二十三・六%が六十五歳以上と頭でっかちになっちゃう訳です。特に私なんかは、団塊の世代なんですけれども、とにかく自分の世代は多いんだけれども、若い世代がいないと。やはり自分の世代のなかでですね、しっかりせよと弱った方を、まだ元気な方が助け起こしてというふうなことを考えていかなければならない。最初におっしゃったように、日本では、女性の方が、これから高齢期になればなるほど、数が多くなっていく。

同世代の女性の数が多くなってゆく。これはもうはっきりしておりますので、そういうお互いに女性同士が支え合うというネットワークを作るというのは、本当に大事だろうと思います。

それはどういうふうにしてできるのか、やっぱり四十代ぐらいから、今、松尾さんがやっていらっしゃるような形で支え合ったという共通の体験が非常に必要になっていくだろうと思うんですけれども。

我々女性自身がお互いを同志としてみる、どうしても女性は今まで特に四十代ぐらいまでは、家庭中心ということでですね、なかなか活動の範囲、愛情の範囲が広がらなかった。これから、同世代の女同士の助け合いということを、非常に重視しなければならないと思います。介護の問題、看護の問題、これは家庭が直接的に担うことが多いんですが、それをサポートするシステムが必要です。家庭奉仕員、これは社会福祉協議会ですとか、地方の自治体等でもやっておりますけれども、それ以外にきちんとしたボランティアの活動をする組織がほしい。色々な自治体、コミュニティ、婦人、サービスコミュニ

ティですとか、社会福祉協会ですとか、色んなネーミングができておりますが、是非これから、まだできてないところでも、五十代の方、四十代の方中心になって、そういう組織、お互いの助け合いのための互助組織を作っていただくよう、ぜひお願いしたいと思います。地方の自治体の方達も、ぜひそういうふうな動きを支援して、サポートしていただきたいな、というふうに願っています。

そして、あともう一つ、介護の問題で見逃せないのは、老人介護というのは、アマチュアである人が全部全面的にやるには、あまりにも深刻な重要な仕事なので、もっともっとプロフェッショナルの人が介護の場へこなければいけない。

厚生省では昨年から、社会福祉士ですとか、介護士ですとかというふうな、資格認定制度を始めましたけれども、そういったような資格を是非多くの方がおとりになって、それこそ遅すぎるということはありません。経験が十分評価されますので、どんどんプロとして介護をなさる方向へ、たくさんの女性たちが進出して欲しいと思いますし、それに対して十分な対価を払う。寝たきりの方たちの介護というのは、本当にたいへんな仕事なんだ、しかも重要な仕事なんだ、お医者さんと同じほど重要な仕事なんだから、きちんとした対価を払うという社会的なコンセンサスが必要なんじゃないかなと思っております。

保田井進　ありがとうございました。かなり基本的な方向をお話しいただいたと思います。それでは、アン・ラトナヤカ先生とフリーマン美智子先生、一言ずつ何かありましたら、一分くらいで。アン先生いかがですか。

アン・ラトナヤカ　どなたか、スリランカのことを、もうちょっとくわしく聞きたいなら、ぜひこの会場でお願いしたいんですけど、何かご質問がありますか。スリランカに対して。

相川（質問者）　八幡西区に住んでいます、専業主婦の相川ですけど、スリランカの国には、寝たきり老人というのはいらっしゃるんですか。

アン・ラトナヤカ　います。しかし、先程言ったとおり、老人ホームには行かせないのですね。この方達は、自分の家でなるべく世話をするということはします。もちろん、寝たきり老人はいらっしゃいます。

田川（質問者）　先生、日本に十六年間いまして、日本の方がずいぶん寝たきり老人が多いと思いませんか。

アン・ラトナヤカ　はっきり言って、そんなに感じてないんですね。でも、今日は、色んなそういうことがはっきり具体的にわかりましたので、本当に多いなと初めて感じました。

田川（質問者）　寝たきり老人を見る場合、スリランカではとても嫌ったりとかしませんですか。非常に喜んで介護しますか。

アン・ラトナヤカ　まず、嫌うということは、スリランカは仏教の国ですから考えられないことですね。

保田井進　はい、時間がございませんので、寝たきり老人については、菅原先生の方からコメントがおありと思いますので、お願いします。

菅原真理子　今、寝たきりの方は、日本は確かにおっしゃるとおり、ほかの国に比べて、たいへん多いです。四・六％と推計されていますが、その中のかなりの部分が、いわゆる寝かせきり老人なのではないかと言われておりまして、例えば、脳卒中の発作が起こった後も、リハビリテーションをきちんとしてあげる。

あるいは、少しでも動くようになったら、周りがよけいな手をさしのべないで、ご自分の力で歩けるようにする。いろいろな車イスとか、そういったような機器の助けを得る。それから家が日本的な家屋ですと、中でデコボコがあったりして、たいへん自立しにくいんですけれども、そういった高齢者向けに設備、施設をきちんと整えるということで、今の寝たきり老人の⅔は、何とか自立した生活が可能なのではないか、と言われております。

保田井進　寝たきり老人は日本独特の一つの老人の姿として、朝日新聞などにも出たところですね。それでは、フリーマン先生何か。

フリーマン美智子　最後に北九州市の皆様、シルバーエイジを楽しく生きるために、年齢にかかわらず勉強をし、ボランティアをし、自分を伸ばして下さい。どうもありがとうございました。

保田井進　フリーマン美智子先生は、先程のスライドのなかに紹介されました、パノラマシティ、つまり高齢者たちだけが住んでいる一つの地域社会があって、そこには色々なサービスが提供されている。もちろんそれは自分でお金を払って、そのサービスを購入する訳ですけれども、そのパンフレットを約十五～十六冊持ってきて下さってますので、事務局の方にお預けしますが、恐らく、各府県から来られた方々、あるいは市の代表の方々にお渡しできる程度だと思いますが、お申し出いただいたらよろしいかと思います。

最後に時間がなくなりましたけども、今日伺っておりまして、私が心にとめたことは、やはり高齢者と言えども人間として、その死の瞬間に至るまで働くこと、役に立つこと、それを大事にしていこうということです。

寝たきりでも役に立つ大事な仕事があります。孫のために祈る、息子のために祈る、やさしい言葉かけをするということにおいては、寝たきりであってもなお役割が

あり、その大事なわざが残されている訳であります。働くこと、役に立つことを、いつまでも大事にしよう。ただし、そのためには、働く場所を社会が用意しなければならないと。働くことができるように、働く能力を学ぶ学習の機会を与えなければいけないし、働く場所を喜んで提供するということが必要だろうと思います。おばあちゃんがお茶碗洗ったら汚いから洗い直すんだとか、「おばあちゃん、それしなくてもいいです。私がしますから。」と言って、おばあちゃんの仕事を取り上げるというふうなことを決してしないようにしなければいけない。生涯学習ということを、もっと大事にしようということがございました。

二番目の問題は自立ということになります。自立の反対は依存であります。夫に依存する、息子に依存する、行政に依存するのではなくして、経済的に自立する、社会的に自立する、精神的に自立する、この自立して生きることに、本当の人間としての喜びと生きがいがあるのだ、ということを先生方はご指摘下さった訳であります。

その自立ということは、三番目になりますが、コミュニティとかネットワークという言葉がでてきました。自分のことだけを考える、自分の幸せだけのために自立するのではなくて、ともに生きると。先程のご発言にございました。いつでもおしめを取り換えに来てくれる仲間がいるという、そういうネットワークを私たちは作っていなければならない。女性がおしめを取り換えてもらわなければならないときには、配偶者はすでにおりませんので、おしめを取り換えに来てくれる仲間を作って置くというネットワークが必要だろうと思います。この自立ということの中には、もう一つ男性を自立せしめねばならないと、男性が妻に依存し、嫁に依存し、女性に頼っていて、何も自分のことができない。電話が鳴っても取ろうとしない。テレビを切り換えるのも、わざわざ台所の奥さんを呼びつけて、テレビを切り換えさせるというような、そういう男性ではなくして、自分のことがちゃんとできる。また、お世話のできる男性を女性の手で育てていかなければならないだろう。そのようなご発言があった訳であります。

最後に私は、きわめて重要なことだと思いますが、日本のこれからの福祉の選択の道は二つあります。一つは年金を充実させていこうという、あの北ヨーロッパのスウェーデンやデンマークのような行き方であります。それは税金を増やします。そして厚生年金や、国民年金や、健康保険の掛金を、もっと増やしていかなければならないんです。所得の七〇％を税金と社会保険に納めていくならば、北ヨーロッパのような福祉ができるはずです。

もう一つは、自分の生活のために自分で貯えを用意し

て置く、自分で働いて、自分の老後の生活のために、貯金を確保していくという貯金型であります。税金や社会保険の掛金を増やして、国の行政サービスを高度化していくのか、それとも自分たちのことは、自分で貯えて置くという貯蓄型の福祉を進めていくのか。この二つの大きな選択に対して、私たちは、どのように選んでいくのか。今日それぞれの先生が、ご指摘いただいたことがらを踏まえながら、私達は一つの高齢化社会に向けての福祉の選択をしていく。その意味においては、私達は行政に、政治に、地域社会にも目を向けて、私たちの意見を発言し、参加していく責任があるのだろうというふうに思います。

そのようなことがらを今日学びながら、大変充実した楽しいひとときを過ごすことができたことを、心から感謝したいと思います。パネラーの先生方、本当にありがとうございました。今日の素晴らしい体験を私たちは持ち帰っていきたいと思います。

ありがとうございました。

進行係　それでは「楽しく生きようシルバーエイジ」トークセッション四を終わりたいと思います。

今日ご出席いただきましたお若いクラスの方は、二十一世紀に向けて、シルバーライフチャレンジの示唆を得られたことと思います。そして、今、そのシルバーエイジのまっ只中にいらっしゃいます方は、本日のご助言を心の糧として、明日からのまた、新しい楽しさを加えた日々を送られますことをお祈り申し上げまして、このトークセッション終わらせていただきたいと思います。

連絡事項がございますから、そのままお待ち下さい。

今日、ご助言の先生方、たいへん長時間にわたりましてどうもありがとうございました。皆様、拍手でお送りしたいと思います。

シンポジウム　21世紀の世界をひらく女性たち

菅　原　真理子（内閣総理大臣官房参事官）

1969年、東京大学卒業。同年、総理府入省。総理府青少年対策本部、婦人問題担当室、経済企画庁国民生活政策課、老人対策室を経て現職。1980～81年には、アメリカ・ハーバード大学に留学。著書に「米国きゃりあうーまん事情」「女性管理職の時代」「新・家族の時代」など多数。

高　橋　久　子（元労働省婦人少年局長）

1927年、神奈川県生まれ。1953年、東京大学経済学部卒業。同年労働省入省。婦人少年局婦人労働課長、内閣審議官兼総理府婦人問題担当室長、婦人少年局長などを歴任。この間、国連婦人の地位委員会などに政府代表、代表代理として出席。現在、労働保険審査会委員。著書「婦人労働の法律問題」「変わりゆく婦人労働」など。

角　田　房　子（作家）

1914年、東京都生まれ。1938年、パリ・ソルボンヌ大学へ留学。1960年、「文芸春秋」誌に寄稿したのをきっかけに、執筆活動を始める。近年は、日韓関係の歴史に強い関心をもち、韓国に滞在して取材。1988年、「閔妃暗殺」が第一回新潮学芸賞を受賞。主な著書「いっさい夢にござ候ー本間雅晴中将伝」「甘粕大尉」など多数。

な　だ　いなだ（評論家、精神科医）

1929年、東京都生まれ。1953年、慶応義塾大学医学部卒業。専門は、アルコール中毒の臨床。医療に携わるかたわら詩、小説、児童文学、評論、エッセイなど多方面にわたる文筆活動を行う。著書に「こころのかたち」「娘の学校同窓会」「江戸狂歌」「なだいなだ全集」「アルコール中毒」など多数。

●ゲスト

セシリア・ファンクハウザー（タコマ市サウスサウンド女性会議理事）

1966年、メリールハースト大学社会学科を卒業。その後ワシントン州立大学修士課程で社会福祉を、市立大学修士課程で経営学を学ぶ。1979年、タコマ市の有職婦人によって設立された「サウスサウンド女性会議」の理事。現在、「Washington Women's Employment & Education」（ワシントン女性の雇用と教育を考える会）の会長として、低所得に苦しんでいる女性やシングルマザーの就業問題に取り組んでいる。

●パネラー

秋　川　リ　サ（俳優）

1952年、東京都生まれ。お茶の水文化学院英語科卒業。1967年、モデルとしてデビュー。ファッションショー、テレビドラマ、舞台、映画、エッセイなど幅広く活躍中。1986年、ラマーズ法による自宅出産を公開して話題となった。著書に「私のラマーズ法　出産と育児ノート」がある。

天　野　祐　吉（雑誌「広告批評」発行人）

1933年、東京都生まれ。創元社、博報堂などを経て、1970年、マドラ出版を設立。1979年、「広告批評」を創刊。今までまともに論じられることのなかった広告を批評の対象として取り上げた。同誌発行人としての仕事のほか、著書に「広告の本」「ＣＭ文化論」や「くじらのだいすけ」「ぬくぬく」などの絵本もある。

下　村　満　子（朝日新聞編集委員）

1938年、東京都生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業後、，アメリカ・ニューヨーク大学大学院を経て、朝日新聞社入社。「週刊朝日」編集部からニューヨーク特派員を経て、現在編集委員。1981年には、国際報道に活躍した日本人ジャーナリストに贈られるボーン・上田賞を女性として初めて受賞。著書「ソ連人のアメリカ観」など。

徐　　明　子（釜山大学校家政大学長）

1933年、ソウル市生まれ。1981年、ソウル慶熙大学校大学院薬学科博士課程終了。ソウル梨花女子大学校教授を経て現職。他にも、釜山市市政諮問委員などを歴任。現在、大韓赤十字社釜山支社青少年諮問委員、ＹＭＣＡ大学生部委員、平和統一政策諮問委員会（憲法機構）女性文科委員長としても活躍中。

司会　皆様こんにちは。本日はようこそ「日本女性会議'88北九州シンポジウム」においでいただきありがとうございます。私は本日進行役を務めさせていただきます芳賀喜子でございます。どうぞよろしくお願い致します。

「日本女性会議'88北九州」は二十四日から二十七日まで四日間にわたりまして、様々な事業を予定致しております。本日は「二十一世紀の世界をひらく女性たち」のテーマのもとでシンポジウム、そして夜はアトラクションを予定致しております。

まず最初に開会の辞を蔵野ツシさんから申し上げます。蔵野さんよろしくお願い致します。

蔵野ツシ　いよいよこの会も三日目を迎えた訳でございます。本日も早朝から「TALKセッション」で、非常に皆様方もお疲れになっていらっしゃるものと思いますが、これからシンポジウムを開催致しますので、よろしくお願いします。

司会　それではシンポジウム開催にあたり、末吉北九州市長から皆様にご挨拶がございます。

末吉市長　北九州市長の末吉でございます。一言ご挨拶を申し上げます。

全国から本当に多くの皆様を北九州にお迎えして「日本女性会議'88北九州」を盛大に開くことができました。まずもって感謝を申し上げます。北九州市は今から二十五年前に、世界的に類を見ないという対等合併で生まれた町でございます。今年は市政二十五周年記念事業として、多くのイベントを行って参りました。本年度の予定しております二十五周年の大きな事業は、この「日本女性会議」をもって終わりになると思っております。多くの皆様においでいただいて有り難うございます。私共も初めての経験でございましたし、全国から多くの皆様を、お迎え出来るかどうか心配した訳でございますが、北は山形から南は沖縄まで、多くの方にいらっしゃっていただき、そして盛り沢山なイベント、行事のなかで数日を迎えております。

私も昨年、市長に就任して以来、あるいは市長に就任するにあたりまして、女性に関する政策をずいぶん訴えて参りました。そのうちずいぶん実現しているのもございます。取り掛かっているのもございます。市政への女性の積極的な参加を求めて、おそらく十大市では審議会、委員会等では、女性の占める委員の割合は一番高いのではないかと思いますし、それから一般の皆様から公募して、ミズ21委員会という女性の方々によるシンクタンクを作りまして、本当に活躍をいただいております。これから来年に向かってはさらに、「北九州市女性ライフプラン」を作るべく今一生懸命やらせております。

男女の共同参加型の社会を目指というふうに言われて

おりますが、私自分なりに考えますと、行政にしろあるいは仕事にしろ、あるいは一つの行事をとりましても、男女の違いを意識しなくてすむ社会、そういうことが理想ではないかと、かねて私個人として思っております。つまり私共男性にとりましては、たとえ女性が上司でありましても、こだわりなく仕事が出来る社会、あるいは行事を一緒にやるにしても、役割をそれぞれ分担しながらやって行ける社会、そういうことを目指して行くべきではないかと思って、私自身そういう考えから政策を訴え、またそれに向かって実施に努力しているところでございます。今回この行事のために私達の職員は一生懸命、女性のみならず男性諸君も、一生懸命この行事に参加をさせていただいております。おそらくそういった職員の方々は、これを機会に非常に目が開かれたという、そういう社会人になっていくのではないかと思います。十年前に比べましても、女性の問題、地位の向上の問題については、随分進歩したと思いますが、まだまだ問題がございます。こういうシンポジウムあるいは行事に参加をして関心を持っていただく、持っていただいた関心をさらに持ち続けていただく、こういうことが将来のために是非必要だと思います。どうぞこういう機会を利用されまして、今後の女性問題あるいは男性問題、さらには共同参加型社会実現を目指して、皆様方と一歩一歩前進して行きたいと念じております。簡単でございますがご挨拶にさせていただきます。

司会　今日の会議に際しまして、祝電をちょうだいしておりますので、この場をお借りしてご紹介させていただきます。

「日本女性会議'88北九州レセプションのご盛会を祝し日本における女性問題の取組みの促進のため皆様方の交流が一層深められますことを祈念致します。

山形市長　金澤忠男様」

「二十一世紀世界をひらく日本女性会議'88北九州のご盛会をお祝い申し上げ、ますますのご発展をお祈り申します。

衆議院議員　三原朝彦様」

本日は姉妹都市タコマ市から、北九州市制25周年をお祝いいただいて、お客様がおみえでいらっしゃいます。ご紹介させていただきます。「ワシントン女性の雇用と教育を考える会」会長　セシリア、ファンクハウザーさん、そして、長年タコマ市に住んで、北九州市との友好の掛け橋をつとめて下さっています、フリーマン美智子さんです。

ファンクハウザーさんはタコマ市で、女性の職業訓練について様々な活動をなさっておりまして、女性の地位向上のために、大きく貢献をしていらっしゃる方です。それでは、一言ご挨拶の言葉をいただきたいと思います。

通訳は広沢さんです。どうぞよろしくお願い致します。

広沢通訳者　要約してお伝えします。今日は「日本女性会議'88北九州」にお招きいただき、本当にありがとうございました。国際化をはかるということの意味が、私は少しずつわかってきたような気が致します。そして日本文化の価値とか物の考え方が、理解できるようになりました。

それからそのことによって、私の日系の同僚達への理解が、高まってきていると思います。その人達を私がアメリカに帰ってから、もっとよく理解してあげられるのではないかと思います。アメリカは皆様ご存知のように、多くの種類の人々が移住してきておりますし、そして、アメリカ社会にいったん溶けこんでいきますと、それぞれがまるでアメリカ的になっていくような感じがするのですけれど、そういう中でお互いに、一緒になっていいところを出し合っていく、他民族効果というのを作っていくのがアメリカなのでございます。私共も、こういう女性会議を通して、女性として持っている力とか、能力とかをもっと出していかなくてはいけないと思います。お互いに作用し合うことが出来るのではないでしょうか。社会問題における多くの共通点、日本でもアメリカでもまたその他の国々でも、多くの共通の問題を抱えておりますので、各々の良さを出し合い認め合い協力し合って、そしてこの様な女性会議を度々開く必要があると思います。労働の問題、差別の問題、保育所のこと、その他そういうようなことを多くの人々が話し合って、そして解決していけたらどんなに良いかと思います。ぜひ近いうちにこのような会議を開きましょう。

司会　タコマ市からおいでいただきましたファンクハウザーさんでした。ではフリーマンさん、どうぞお願いします。

フリーマン　北九州市の姉妹都市タコマ市から参りましたフリーマン美智子です。今日こうして皆様とお目にかかれて大変うれしく思っております。今後北九州市とタコマ市の交流の掛け橋を、私のようなものが務めさせていただければ、大変光栄に思っております。どうぞ今後とも皆様よろしくお願い致します。

司会　ありがとうございました。ファンクハウザーさん、そして、フリーマン美智子さんからご挨拶をいただきました。皆様もう一度盛大な拍手をお願い致します。

ではシンポジウム「21世紀の世界をひらく女性たち」の講師の先生方をお迎え致しましょう。先生方どうぞ中央の方にお越し下さいませ。

それでは、本日のシンポジウムでコーディネーターを務めて下さいます、菅原真理子先生のプロフィールを紹介させていただきます。菅原真理子先生は、一九六九年

東京大学をご卒業後、総理府に入省、総理府青少年対策本部、婦人問題担当室、経済企画庁国民生活政策課、老人対策室を経て、現在内閣総理大臣官房参事官をお勤めでいらっしゃいます。またハーバード大学にご留学して、著書に「米国きゃりあうーまん事情」、「女性管理職の時代」、「新家族の時代」など多数おありでいらっしゃいます。

菅原真理子　皆様こんにちは。今日は東京でもなかなかこれだけの方々が、顔を揃えることは少ないという豪華なメンバーで、シンポジウム「21世紀の世界をひらく女性たち」についてのデスカッションの、コーディネーターを務めさせていただくということになって、大変喜んでおります。

始めにパネラーの方達に十分程度それぞれのご意見をちょうだいし、その後で会場あるいはパネラー同志の意見の交換をしたいと思います。それではパネラーの方達のご紹介をさせていただきます。まず私のお隣りが俳優の秋川リサさんです。二十年前にモデルとしてデビューなさったころのままの、とてもアトラクティブな女性ですが、今日は「女性とセクシャリティ」についてお話をしていただく予定です。

そのお隣りが雑誌「広告批評」の発行人をしていらっしゃいます天野祐吉さん、色々なところで鋭い、また温かいユニークな社会批評家として、ご活躍していらっしゃいます。今日は「女性とマスメディア」についてお話いただけるはずでございます。

そのお隣りが朝日新聞編集委員の下村満子さん、国際文化ジャーナリストとして、縦横無尽に活躍していらっしゃいまして、今日は「女性と国際社会」というテーマでお話をいただきます。

そのお隣りは徐明子（ソウミョンザ）先生、釜山大学校家政大学長をしていらっしゃいます。揺れ動く韓国の女性の現状についてお話をしていただく予定です。

そのお隣りが高橋久子先生、公務員としての先輩で、労働省婦人少年局長をなさっていらっしゃいました。こちらのご出身でございます。

そのお隣りが作家の角田房子先生、今年「閔妃（ミンピ）暗殺」を上梓なさいましたが、「女性と日韓の歴史」についてお話をしていただく予定です。

最後が、なだいなだ先生、評論家としてまた精神科医としてご活躍でいらっしゃいます。

パネラーのご紹介はこちらのアイウエオ順で致しましたが、意見の開陳は逆になだ先生からお願いします。

なだいなだ　裏切られた。僕はアイウエオ順に並べと言われたので、発言順序もアイウエオ順かと思って喜んでいたのですけれど、逆とは！

正直に白状しますと、十六、七歳の頃私は女性恐怖に捕われ、女性が怖くて怖くてしょうがなかったんです。それで精神科医になろうとしたのですね。自分が精神科医になれば、ただで治すことが出来るのではないかと思った。それが間違いで、精神科医になったら忙しくて治すひまがなかった。私は女性は怖いはずがない、怖くないものを怖がるのだから、病気だと思っていたのですね。それが結婚をして生まれた子供が皆な女の子、四人全部。そして連中を見ていますと、納得した。女性は怖くないと思っていたのが間違いであって、女性は怖い。だから怖いものが怖くて当たり前ではないかと。こう思うようになったら、何だかつきものが落ちたみたいで、随分ラクになりました。まあそういう訳で、こういう所に来ると今もってドキドキするのですね。

また、東京から来るのに飛行機に乗らなければならない。飛行機が苦手なんです私は。今日もまた西風が強くて揺れまして。揺れるとどういう訳か、「お母さん」とか、「お袋」とかいう言葉が自然に出ますね。不思議だな。父ちゃんじゃあないんですね。どういう訳か、かあちゃんなんですね。これは洋の東西を問わないと思います。フランス人だって戦争などで死にそうになった時に、「ママン、ママン」と叫んだりする。イタリア人なども頻繁に「マンママミーア」て言うんです。日常的に言うんです。何かびっくりしたら「マンママミーア」。「まあ大変だ」とか、「まあびっくり」とかの意味。これは「私のおっかあ」という意味なんですね。男も女も皆なそうですね。つまり女性は女であると同時に、母親イメージを背負っている。次第に大人になって、ああいよいよ女になったなんていわれる時代がきて、そして、その後子供を持って母親になる。母親らしくなったという時代が来ますね。その先はいつまでも母親なんですね。私も今日、飛行機の中で揺れながら、「おっかあ」と口に出しながら計算した。私の母はいま八十九歳なんです。私を頼りにしているんです。私がじゃあないんです、向うが息子を頼りにしている。それが現実。それとは違って私たちの心の中に、永遠の母親というイメージがあるんですね。この母親イメージは日本だけじゃありません。この間ちょっとスペインに行って来まして、プラードの博物館に行きました。そして感心した。何と多くの聖母マリア像が描かれてきたか。母親像ですね。ムリーリョの絵ですけれども、ちょっとほんのちょっとですけど、おっぱいを出した聖母マリア像があるんですね。有名な絵なのですが。そういう母親イメージが無意識の中にあります。女性に対する批判は、その母親イメージに基づいて、生まれてくるのですね。甘えた人間ほど、私など甘えん坊なんですけど、母親イメージと女性イメージを重ね合せたがる訳ですね。

そして女性が社会的に進出した場合に、女性である前に母親の仕事をきちっとしているかどうかを、評価の基準に置いてしまいがちになる。男の場合にはそんなことをいいません。結婚しないで一人で暮らしている男が、男のロマンを求めているなんていうと、何か格好いいように見えるんですね。ところが女性が仕事一途に暮らしていて、女のロマンよと言ってもあまり受けない。そういう訳で母親のイメージは、これからもずっと女性にとって重荷だろうと思います。女性が社会的に進出し、力をつけていけばいくほど、母親のイメージを重く感じなければならないと思うんですね。こうして家族が、家族という単位でこの世に残っている間は、母親に対する過重なくらいの負担がかかっていくんではないかと思います。それを払いのけるのは国の責任ですね。女性がその母親イメージを振り払らうことが出来るか否か、これは女性ばかりでなく、男にも責任がある。日本の男は、自分の嫁さんまでかあちゃんと呼んでしまう。そういう甘えん坊の国では、文化的な母親のイメージというものを脱却する必要がある。

私には四人の娘がいますけど、娘と言うと何か小さく感じられるでしょうが、一番下が二十一歳、上がもう三十歳を超しています。皆な大きいのですね。二人は結婚したのですけれど、両方とも一度は結婚しないで子供を産もうとしたんですね。私に向かって「父ちゃん、おじいちゃんにしてあげるよ」なんて言うんで、「そんなものになりたくない」と言ったんですけれども、「なりたくなくても自然の理で、私が親になればあなたはおじいちゃんだ」なんて言われて、冗談と思っていたらお腹が大きくなってきた。あわてふためいたんですけれども、よく話を聞くと、家族のこと、一緒に働く亭主と家庭を作っていく上で、様々な問題のことを考えていたようです。一番上などは、うちは女の子だけだから、名前が残らなくなっちゃうではないか、つまり姓を名乗れなくなるのではないかなどという、以外とつまらないことを心配していたのですね。

三番目は医者なんですけれども、これも「父ちゃん、じいさんにしてあげる」と言いましてね。また寿命がちょっと縮まった。産まれる一か月前に結婚したんですね。うちの馬鹿娘は。私を冷や冷やさせておいて、そして最後は非常に常識的な結論を出す。まあそういう訳で話を聞いてきますと、自分達は女性として家族を全部しょっていかなければならない。例えば医者になったら、すくなくとも医者という仕事を、男に負けずきちっとやったうえで、そして更に、家の仕事がよく出来ないといけないと言われることがつらいんですね。そういうところをきちっと男性と分かり合えて、初めて共同して生活ができ

る。三番目の娘は亭主も同じように医者なんですけど、父親もやる、家事も半分半分ぐらいにやる。そういう約束ができてようやく結婚したらしいですね。私はそういうのを見ていると、これから先は少しずつではあるけれども女性像が変わっていくと思います。お袋のイメージ、永遠の女性のイメージが消えてしまうことに、甘えん坊のぼくはノスタルジアを感じているのですけれどもね。やはり消えて行き、そしで新しい時代がくる。二十一世紀はこうした古いイメージと訣別できた時代ではないかという気がします。

菅原真理子　女性がこれから二十一世紀に向けて、過重な母親のイメージをどうはねのけるか、あるいは我々がどう調和していくか、これは私達一人一人にとって重い課題ではないかという感じが致します。また後でこの問題については、皆様のご意見をいただきたいと思います。

次は角田先生よろしゅうございますか。先生は今年「閔妃（ミンピ）暗殺」と遠い国、遠くて近い国の歴史を、大変ご丁寧に調べていらっしゃいますので、色々な問題を私たちに提起していただけると思います。よろしくお願いします。

角田房子　私は女性と歴史について、自分が考えておりますことを申し上げたいと思います。

私は今年一月末に「閔妃暗殺」という本を出版致しました。私が日韓関係の歴史について書いた初めての本でございました。ある日突然私は自分がいかにお隣りの国、韓国と日本との関係の歴史について無知であるかに気付いたのです。これは私の専攻ではないということでなくて、日本人の一人として当然知っていなければならないことも知らなかったという、自分の無知に驚いてこれを書いた訳でございます。閔妃暗殺事件というのは明治二十八年、一八九五年に起こった事件ですから、今から九十数年前でございます。この事件を一口に申しますと、日本人の集団が朝鮮の王宮になだれこんで、王妃を虐殺したという事でございます。しかもその主謀者がその時の日本公使、今の言葉でいえば大使です。日本を代表する人物として朝鮮にいた、三浦公使が主謀者であったという、今の常識では考えられないような、誠にひどい事件でした。もう昔のことではないかと思う方もあるでしょうが、また、百年もたたないことだと言えば、まさかそんな非常識なことがあるはずがない、作り話だろうと思われる方もありましょう。しかし、これは資料に裏付けられたまごうことなき事実でございます。時の日本政府も、もちろん諸外国からの非難をかわさねばなりません。そこで、三浦公使を始め、この事件に係わった五十人余りの人々を、本国送還にして広島で裁判を致しましたが、その結果は証拠不十分ということで、翌年全員が不起訴、

無罪放免ということになっております。明治二十年代終わり頃の日本は、こういう国であったということに私は驚きました。しかし私がもっとも驚きましたのは、この事件の内容もさることながら、韓国ではこの事件が小説で戯曲でテレビでラジオで、繰り返し繰り返しとりあげられていて、中学生でも知っている、そして日本との間で何かまずいことがあったとき、しばしばこれが話題になって、対日感情の悪化をあおっているということです。これを私に話されたのは元駐韓大使であった後宮（ウシロウブ）さんなのです。後宮さんの話でなかったら、私はこれを信じなかったろうと思った程、今の常識では考えられないようなひどい事件でございます。これを聞きました時ぞっとするような恐しさを感じました。現在の韓国の方々は皆この事件を知っておられ、そして日本に対する問題のある時にはしばしばそれが話題になる。それなのに、加害者側の日本ではどうか。私を始め私の周囲の人に聞きましても、多くの方がこの事件があったことさえご存知ない。この両国の大衆の歴史に対する認識のずれ、ずれというか大きな差、これを私初めて知りまして、日頃よく耳にする日韓友好とか相互理解とかいう言葉を、非常に空しく感じたのでございます。日韓の友好関係がどれ程大事なことであるか、今さら言うまでもないことです。日本政府も繰り返し言っておられます。

それほど日韓友好が大切なことなのに、私を始め多くの日本人が、両国関係の歴史をよく知らないままでいいのかと思いまして、「閔妃暗殺」を書いた訳でございます。これを書きましてから今十ケ月程たちました。その間に、これはいつものことですが、国際化、国際感覚といった言葉をしょっちゅう聞きました。また毎日の新聞や雑誌で、日本がいかに世界の中で孤立しているか、その孤立の度は深まっているという記事を読みますたびに、閔妃暗殺についての歴史をどう日本人が扱ってきたかということ、正しい知識を持つべきものを、持っていなかったという反省がわき上がって参ります。日本の孤立、日本が世界からどう眺められていたかということを最も端的に、ピシャリとやられた思いが致しましたのは、「プレジデント」という雑誌の七月号に出ていた、ライシャワー博士とニューヨーク市立大学の霍見教授との対談でした。ライシャワーさんは今さら申し上げるまでもなくご存知と思いますが、一九六一年から六年間、日本で、アメリカ大使をなさった方で、現在はハーバード大学の名誉教授でいらっしゃいます。そして、奥様は日本人で非常によく日本を知っている、日本に好意的なお方です。ライシャワーさんはその対談のなかで、日本に好意を持っている自分としては誠に残念なので、だからこそ率直なアドバイスをするという前置きで、日本は

今世界中からどうにも身勝手なことを考えて、何をするかわからない国だと思われている。日本ほど諸外国から嫌われ疑われている国は、ないだろうということをはっきり指摘しておられます。それについて、なおライシャワーさんのお言葉は続いていて、かつてドイツが日本のように嫌われ疑われ不信感を持たれていた。しかし、戦後の四十何年の間に、ドイツは意識してそれを直そうと努力する態度をとってきている。それで今は随分良くなっている。しかし、残念ながら日本は逆へ逆へと行っているのではないか、ということでございました。これを読みまして私思い出しましたことは、閔妃を書きますために韓国に何度もいっております時、昭和六十年の五月だったと思うのですが、今のドイツの大統領の話を聞きました。五月というのはドイツの敗戦の月でございます。その時に今の大統領の、「ドイツの過去の歴史というものは、戦後に生まれた若い人々にとっても関係ないと言えるものではない。全ドイツ人が責任を負わなければならないことである。過去の歴史というのをよく踏まえて、自分の今日の考えを決め、将来を考えなくてはいけない。過去をいいかげんにする、過去についての認識をもたない者は現在もまた盲目である。過去に目を閉じるものは現在についてもまた盲目である」というようなご発言を聞きました。これに私とても力づけられたんです。というのは、閔妃を書くために明治三十年ぐらいまでの日韓の歴史をやっておりますと、こうまで日本はひどいことをしたのか、と思うような日本のいわゆる誤り、恥が次々に出てきます。これを日本人である私が正確に書いていかねばならない、その恥を暴かねばならないことのつらさで、もう本当に私は負けそうになっておりました。そうしたときに、ドイツの大統領の、過去をちゃんと知らなくては、現在のことは考えられないじゃないかというお言葉を聞いた訳です。恥があればこそ、私はこれを書かなければならないんだと思いました。日本のいい所だけ拾って、良かったなあ、良かったなあと、ご同慶の至りばかりを繰り返していてもなんにもならない。もし過去に恥があったら、それこそを書かねばならないという気持で、これを書いた訳でございます。書きまして、今もう一年程経っておりますが、この間にもこの経験を踏まえまして、日本以外の国はこの過去の歴史を、どう扱っているかということが気になって、そちらに注意を向けて新聞などを読んでおりました。日本人はどうも過去の歴史、良いも悪いも過去の歴史を正しく知ろうとする態度が弱い、ことに日本としての誤りというものは、知りたくないという気質が強いんではないかと思うんです。教科書問題を思い出していただきましたら、韓国や中国からどう言われ、それにどう対処したかという日本の言

動の中にそれが現れていると思います。日本人はどうも、過去を水に流すという、昔からの習慣があったのではないでしょうか。良いも悪いも流してしまって、もう済んじゃったこと、今さら言ったってしょうがないじゃあないかということで、すべて忘れてしまう。流せば悪いところも一緒に流れて行きますから、まあ良い気持というか、嫌な思いをしたり反省したりしないで済みます。そこに弱さがあるんじゃないかという気がするんでございます。この頃のことで皆様記憶に新しいと思いますけど、例えばまずアメリカがやりましたね。戦争中の日本人の扱いは自分たちが間違っていたと。これを謝罪して補償金を支払う、それに続いてカナダも同じ態度をとっています。過去の悪かったことは悪かったと謝罪をしていらっしゃる。一つの例ですけど、ちゃんと過去の歴史をもう一度見直して責任を取っておられるなあということがありました。それから今年の九月の始めでございましたか、チェコスロバキアのフサーク大統領が中国を訪問されております。鄧小平とフサーク、共に激動の時代を生き抜いてきた、二人の対談というのを期待をもって面白く読みました。この中で鄧小平氏が歴史について語っておりましたが、過去の成功の歴史というのはもちろん民族の宝であります。この意味は何か困難にぶつかり失敗をした時に、しかし過去に私達には輝かしい歴史があったということで、民族として誇りと自信を持つことに役立つという意味ですね。同時に過去の失敗もまた宝であるということを鄧小平氏は言っていらっしゃる。過去の失敗を直視することによって再び愚を繰返さない、どうすれば良いか考える時に過去に問いかける、歴史に問いかけて考えを決めていくという、その基になるから過去の失敗を決して忘れ去ってはいけない。それもまた宝であるということを鄧小平氏は言っている。なるほどと思いました。どうも過去の歴史を水に流すくせのついている私達は、過去の恥といいますか、誤りを人に指摘されると、まず感情的に反発して、「そうじゃあない。こちらにも理由があったんだ」と言いたい気持ちが先に立つ。日本では鄧小平が言う二番目の宝物、過去の失敗の宝を捨てているんではないかという気が致しました。国際化、国際人になろうというシンポジウムが今日午前中にございましたけど、私はまず歴史を重視する、大事にするということも一つの大きな柱ではないかと思っております。他国についての知識を持つためには、まず関心を持たなければなりませんが、その場合、国際化という言葉を聞きますと、どうも私達日本人は、無意識に欧米社会、白人社会を対象に考えがちのようです。国際人という言葉が何か欧米と結びついてしまう。欧米だけに結びつかないまでも、そちらを重視する傾向があるんじゃないかと思

うんです。私自身そうでございましたので、今は反省しておりますが、私のような方が多いのではないかと思って申し上げるのでございます。この「閔妃暗殺」を書いたことで、いかに私が隣国との歴史を知らなかったかが分りました。もちろん全然知らなかったとは申しませんが……一九一〇年、明治四十三年でございますが、この時に日韓併合が行われ、その後三十六年間、今も諸悪の基のように韓国で言われている〝日帝三十六年〟が続いております。その時代も、戦争に突入してからは人権無視の強制連行もあり、そして日本の敗戦によってあちらの国が解放独立してからも、色々と深くかかわって今日にきている訳でございます。そのくらいは知っておりましても、日韓併合というものはある日突然起こるはずのものではない、その前はどうなっていたのか、一体いつどのような経緯で日本と韓国は、当時は朝鮮王朝ですけれども、国交を開いたのか。さあその辺になるとお恥ずかしながら、私の知識はまったくボーッとしてしまって、一九一〇年の日韓併合からが、やっと頭にかすかながら浮かんで来るという程度でございました。欧米のことについてはもう少し知っているような気がする。これではいけないと初めて気がつきました。もちろん欧米のことはどうでもいいなどと、そんな暴言を申している訳ではございません。これもおおいに大事でございますが、まず身近かのアジアの国のこと、特に日本が多くのご迷惑をかけ、日本によって暗くつらい道を歩まねばならなかった韓国とか中国について、少なくとも欧米と同じ位に知識を持たねばと思うのでございます。女性の方々に特にこれをお願いしたい次第でございます。

菅原真理子　過去に目をつむるものは現在にも盲目である。過去の失敗も民族の宝として視界に据えて、国際化ということを考えなければならない。大変意味深い問題提起だったと思います。もう一つ私大変感心しておりますのは、先生が本当にその日本の恥を暴くつらい作業を始められたというのが、七十歳を過ぎられてからということです。この責任感、問題意識、そしてそれを貫かれたお強さというのを拝見しておりますと、本当にこれからの私達の大変な励ましになるような気が致します。どうもありがとうございました。

　では徐先生お願い致します。

徐明子　私は準備したものを読ませていただきますから、皆様ご了解をいただきたいと思います。

　過去、昔から韓国の男性は、家外で生産活動に従事しながら、村や部落を統率する社会的存在としての役割を果たしてきたのに対し、女性は家系継承のため、子女出産養育を主とした、家庭内的存在として暮らしてきました。このような男女の役割区分の伝統的慣習は、一八八

〇年の間、儒教が社会と国家の統治理念として受容されることによって深く根付きました。しかし、一八八〇年代に入って新教育に接する機会が開かれてから、女性達は教育を受けた先覚者を中心に、家庭内の閉鎖的な役割から抜け、社会活動に参加し始め、その後一九四八年の政府樹立と共に制定された制憲憲法は、男女平等条項を明示し、韓国女性発展の新しい幕開けになりました。一方、国連が一九七五年を「世界女性の年」と定めて以来、国内でも女性問題専担機構設置など、制度的装置が設けられ始め、一九八三年に韓国女性開発院の設立、一九八四年に韓国女性学会の創立など、女性研究雰囲気の拡散はもちろん、より深層的な女性研究がなされる興体が出揃いました。しかし、女性が実際に社会へ男性と同等に進出するに至らず、いまだ近代化の条件が揃ったとは言えません。

それでは、今日の韓国女性問題の現状を簡単に調べて見ることにします。

まず法制上の女性問題について述べてみます。法というものは社会階層、人種、性を問わず、均等な機会と主張を保障するものでなくてはならないものですが、韓国女性は永い間、法的不平等のもとにあり、一九四八年の政府樹立と共に制定された憲法により、初めて男女平等を保障されるようなりました。一九六〇年の民法の制定で女性の法的地位は認定されましたが、家族法においては従来の家父長的家族制度を基盤にしているため、いまだに平等な地位が保障されない状態です。このような不平等な家族法の条項を改正するために、一九七七年に十分だとは言えませんが、親族相続法の一部条項が改正されました。しかしまだ不平等条項は残っており、家族法改訂に対する論議は続けられています。改訂されなければならない条項をみれば、まず戸主相続制度というものがあります。必ず長男が戸主になり、財産相続で特典を受けるようになっています。もし長男が死亡すれば年が若く能力がなくとも息子が戸主になると決められています。婚姻に伴う入籍関係は、妻が原則的に夫側の籍に入籍して家族の一員になり、親権法関係は、離婚した夫婦である場合、母親が子供を養育したとしても親権者になることはできません。相続関係においては、戸籍が移った娘は他の兄弟姉妹に比べて四分の一しか相続を受けられません。離婚関係法では、婚姻中の家事労働の代価が無視されており、結局女性は離婚すると不利になるだけであります。離婚する場合、すべての財産は互いに分けて持つことが出来るよう法律が改正されるのが望ましいと言えましょう。また同姓等の婚姻禁止というものは近親結婚を防ぐためのものでありながら、母親の姓は関係なく、父親の姓でのみ婚姻を禁じております。これは男

性血統だけ重要視する性差別制度であると言えましょう。また親族の範囲規定は、夫の家は八親、妻の家は四親までとなっており、これらは男性側の親族のみ重視された差別制度と言えます。

家族法以外で女性の法的地位を考慮しなければならないのは、就業女性を管理する勤労基準法の遵守問題であります。雇用において男女差別待遇を防ぐための處優条項を始めとして、保健上有害または危険な作業からの、保護と有給生理休暇などが規定されていますが、この条項は一部職種と職場を除いては、徹底して守られてないという実情です。

教育面の現状を見れば、一九八六年高等教育を受けている女子学生は、三十六万五千人で、約三〇・三%になります。就学率に対する一九八五年の調査結果をみれば、小学校、中学校の場合は断然就学率は伸びていますし、高等学校では一九七〇年に比べて三倍の七五%、大学校では一九七〇年の五倍にもなる二一・二%に急昇していますが、それでも男性に比べて低い就学率を表しています。女学生の進学率は、中学校を卒業後高等学校に進学するものが一九七〇年に比べ大きく増加しているので、未婚年少年齢の就業率減少傾向がこのような事実によって説明できます。中学校から高等学校に進学する時、男子は普通高校進学率が六一・二%なのに対し、女子は四四・七%が実業系学校に進学しております。この現状は、正しく大学進学を放棄した選択であると言えるでしょう。また中学校や高等学校の教育課程内容を見れば、男子学生には技術科を、女子学生には家庭科を履修するよう区分されており、これらの学習雰囲気、基本学習施設、教師陣、教育指針などの良し悪しなどが女子学生の進路選択、性別役割に対する認識などに、少なからず影響を与えております。

大学進学で女性が特に志望する分野は、伝統的に女性的なものと関わりの深い芸術関係、師範系、薬学系、看護学系などがあがっています。小学校教師を育成する教育大学の入学は、女子学生たちで八〇ないし九〇%を超すという盛況を見せています。そのため、一九八五年度から教育大学入試において、女子学生の入学が収容限度七〇%を超過しないように規制するようになりました。これは教育が女性教師の伸びるのを統制するための方案と言えます。このように韓国はいまだに教育上、男女の不均等が顕著にあらわれているため、これを是正するためには、現在非常に少ない男女共学化の拡大を図り、また教科課程の改編で性固定観念を無くし、社会教育及び技術教育の拡大に、女性の雇用を促進することが肝要であると言えましょう。

次に雇用問題をみれば、経済構造の急速な産業化に伴

い、女性達も経済活動に大きく参加するようになりました。一九七〇年代を通して韓国女性の就業率は、男性の就業率よりもっと早い速度で増加して行きつつあり、現在全就業者の約四〇％を占め、女性は経済発展になくてはならない重要な原動力と言えます。年齢別経済活動参加率の推移を見れば、軽工業を含んでの労働力主力であった十四歳ないし十九歳の未婚年少年齢層の参加率が、一九八〇年代に入って急速に減少している反面、二十歳ないし五十歳未満の年齢層の参加率は継続的に増加しています。また就業構造に併行してあらわれる男女間の賃金格差はかなり深刻な状態です。同一学歴を持つ四年制大学卒業女性の平均初賃金が男性のそれの六八％程度であり、入社後四年もたつと五七％くらいに低下するのであります。労働時間は女性労働者の三十八％が十時間以上労働しているのですが、これは男性よりも長時間働いていることを示します。一方女性雇用において一九八六年の資料によると、大卒女性の就業率は約三十％程度で、大卒男性の就業率九五％に比べてまだまだ低い状態です。

女性の就業機会の拡大をもたらすためには、まず女性の職業観確立、時間制就業の拡大、女性の中間管理職進出促進、男女同一賃金保障、様々な教育機関での職業相談指導強化などを中心に、制度的社会的支援がなされねばならないと言えましょう。結論的に申し上げますと、結局女性の問題は人間の問題であり、全人類の問題であります。将来世界を更に発展させていくためには、潜在している人類半ばを占める女性の能力を、疎外させていてはなりません。韓国社会の更なる発展のためには、韓国女性の発展の阻害要因となっている性役割固定観念の見直し、女性能力の開発及び指導、女性発展のために社会資源体制の整備、女性の政策通路の活性化などの問題が、解消されなければなりません。従って女性の地位は社会正義の一貫として、また社会発展を見積もる尺度として、理解されなければならないでしょう。

菅原真理子　すぐ近くの国で経済成長、すばらしい経済の成功ですとか、あるいは成長等については色々の機会に聞くことがあっても、韓国の女性がどういう状況に置かれているかということを、なかなか知る機会がない私達にいい情報をあたえていただいたと思います。そしてまた、日本と同じように韓国の女性も、性役割分担意識の落差に悩んでいる、それを超えるために色々努力していらっしゃるということもよくわかりました。

次は順序が逆になりましたが、高橋先生は長い間、日本の女性達が社会の中で、その地位を確保するための色々の動きにも関わられてこられた方ですので、そういうことも含めてお話をお願いします。

高橋久子　「女性と政策決定」というのが、私がこの場

でお話するテーマでございますが、私は先程のご紹介にもありましたように、この北九州市で女学校までを終えまして、それから東京に出て学校を終えて、昭和二十八年労働省に入りました。労働省の中で、三十数年色んな問題に関わってきた訳でございますけれども、その中で「国際婦人年」の年には、婦人労働課長というのをやっておりました。それからの「国連婦人の十年」の間に、婦人労働課長から総理府の婦人問題を担当する婦人問題担当室長というのをやりまして、そしてちょうど「国連婦人の十年」の中間の年に婦人少年局長ということで、まあ「国連婦人の十年」の推進の中で、色々な婦人問題にかかわってきた訳でございます。その際に国際会議にも出まして、一番強調されておりましたのが二つございます。

その一つはこの女性の政策決定への参加、そしてもう一つが固定的役割分担の是正、この二つがどの会議に出ましても、非常に重要な問題として取り上げられていた訳でございます。この政策決定という場合に、しばしば政治への参加という、非常に狭い意味で使われていることが多い訳ですけれども、私は政策決定という問題は重要であるということをいう場合には、政治はもちろんその中心にあることは疑いない訳ですが、この社会には色んな組織がございます。その組織の方針を決定する、つまり企業なら企業でその企業の行き方を決定する、労組なら労組で決定する、あるいは協同組合、ＰＴＡ、色んな組織がございますが、その組織をどういうふうに動かすかという方針決定は、すべてこれ政策決定の問題としてとらえていいのではないか、そういう場に女性が出て行くというのが、女性の政策決定への参加ということであるというふうに、とらえるものだと考えたいと思います。

ここでもそういう問題意識でお話をしたいと思いますが、女性の政策決定への参加の現状を見ますと、極めて不十分でございます。ちなみにまず政治の面から申し上げますと、国会議員で衆議院の議員というのは五〇九人おりますが、その内婦人は七人に過ぎません。一・四％です。参議院はちょっと多いのですけれども、これでも八・八％。地方議会では、都道府県議会議員は一・三％ですが、町村議員になりますと、これはもう一％を割り、〇・九％に過ぎないというような状況でございます。それから国とか地方公共団体が政策を決めます時に審議会というのがありまして、その審議会が提示した意見に基づいて政策を決める訳ですが、その審議会委員の中に女性が非常に少ないんです。「国際婦人年」の年、昭和五十年ですが、その時はわずかに婦人の審議会の委員が二・四％しかいなかった。そこでそれを一〇％に引き上げま

しょうという目標を立てて頑張ってきた結果、現在では上がりましたけれど一〇%を超えておりません。六・三%に過ぎません。でもまあ、これは声を大にして言ってきた結果、ここまで引き上げられてきたんですが、まだまだ婦人の参加は不十分です。ある時に、色んな審議会で婦人が入っている審議会はどれか、入っていない審議会はどれかということを調べました時に、人口審議会というのがあります。これに婦人の委員が一人もいないというので、皆あきれかえったことがあります。人口問題で婦人の入らない、これで何が議論できるかということでございました。

先程も申し上げましたように、色んな組織の政策決定への参加という点について申しますと、企業において企業のトップレベルの層には婦人が非常に少ない。社長とかあるいは専務理事とかそういうのになっている女性は、オーナー経営者という方が多い訳です。下から上がってきた方が経営者になるような、そういう所では、ほとんど婦人はまだ上層部におりません。婦人が昇進昇格の対象には、制度的にもなっていないというところが、かつて調査をいたしますと、半分もあるという状況でございました。やっと雇用機会均等法ができて、制度は改善されてきておりますけれども、まだ昇進という面は非常に改善が遅れております。改善の必要が無かったという所と、改善したという所をあわせても約六割に過ぎない。それから、また、制度は改善されても実態はまだまだこれからという状況でございます。

労働組合の役員にも女性は少ないし、そしてたまたま女性がなっておりますと、たいてい婦人青年対策部とか婦人がつくところにしかないんです。組織を担当とか、財務を担当とか、そういう所には女性は余りいないという状況でございます。組合の委員長に女性がいるという所はほとんどございません。

協同組合の組織あるいはＰＴＡなど、そういった色んな組織を見てみましても、全員女性が団体の構成メンバーであるという所の会長は女性です。しかし団体の構成メンバーの中に男性が少しでも入っておりますと、しばしば会長は男性で、女性はその補佐役の副会長になる、というようなケースが多いのです。

なぜこういうことになっているかと申しますと、やはり男女の固定的な役割分担意識、つまり「男は仕事、女は家庭」という意識が非常に根強い、そのために女性は政治の分野にも出にくいし、あるいは企業の中では勤務が継続できないというようなことから、なかなか政策決定の場には上って行かないということだと思います。また「男は主、女は従」というそういう考え方もございます。こういう社会一般の考え方にプラスして、我が国の

選挙は、非常に女性にやりにくいようになってしまったということが言えると思います。戦後一時期女性が非常に大量に国会に登場した場合がございます。その時は連記式でございました。しかし今は連記式の選挙制度にはなっておりません。そしてしかも、お金が莫大に要る選挙になってしまっている。それから体力の限界まできりぎり動き回らなければ当選しないことになっている。また選挙をやろうとする時、一家をあげてやらなければならないようなことになってしまっている。そのような選挙制度になってくると、女性は非常に出にくいんです。そういう中で、やはり女性が政策決定に参加していかなければいけないということを、強く訴えたいと思うんです。

私は「国連婦人の十年」の間に色んな所の会議に出ました。印象に残っておりますのは、ちょうど「国連婦人の十年」の中間年にインドのニューデリーで開かれた会議に出たんです。その時に政策決定の参加の必要性を、こもごも訴える人が多かった中で、ある発展途上国の人はこういうことを言いました。今我々の国は開発ということがとっても重要な課題です。発展途上国は皆そうなんです。開発が非常に重要な課題になっている。ただその開発計画を作るに当たっては、女性の声を反映させたい、女性の声が反映した開発計画を作るべきだと考えている。なぜならば、女性の声が反映しない開発計画が作られると、開発した結果必ずしも女性が幸せにならないからだ。例えば女性は今色んな分野で働いて仕事を持っているけれども、開発が進むと機械化が進んでいく。そして女性の職業訓練がそれに伴っていかないと、女性はかえって働く場を失うことになります。その職業訓練のやり方も女性は字も知らない人が多いので、絵によって訓練してくれるとか、そういう方法をとってもらわなければならない。そういうことを発言していくためには、やっぱり女性が政策決定へ参加していなければならないんだということを、訴えていたのが非常に印象に残りました。そして、その女性は更にこう言うんです。我々も参加して作った計画は、自分たちの計画だからその計画の遂行には自分たちも責任を持つと。そういうふうに言っております。それが私非常に印象に残っております。政策決定を進めていくのは色んなところで、考え方を変えてもらわなければなりませんけれども、その中核になるのはやはり女性自身にほかならないと思います。

時間がありませんから、最後に一つ私が色んなことを考える原点に、やはり北九州で育った私の原体験が反映しているということを、お話したいと思います。私は女学校時代、門司におりました。門司はご承知のように、戦時中大陸へ行く兵士を送り出す船出の港であり、それ

から大陸から帰ってくる兵士を迎える港でありました。送って行く兵士を見送る時は大変元気よく送る訳です。日の丸の小旗を打ち振って、ところが帰ってくる方を迎える時、生きて無事に帰ってくる方もありますが、白い箱に入ってくる方もございました。しかし箱に入ってくる方よりも、もっと私共が胸を傷めましたのは、大陸で凍傷にかかって両手両脚を切断されて、まるで達磨のような形で帰ってくる方がありました。ああいう悲惨さというのが、今も私の胸に強く残っております。あの戦争が起こったということ、そういうふうに日本が進んでいったということ、その時は婦人は参政権を持っておりませんでした。政治の場で発言するチャンスは全くなかったんです。

女が参加していたらあんなことにはならなかっただろうという仮定の話を、私はここで申し上げるつもりはございませんが、今後の日本の進む道を決めるに当たっては、日本がいつまでも平和な国であり、そして世界の平和に貢献できるようなそういう国であらしめるためには、やっぱり女性が積極的に政策決定に参加して、その中で日本の国の進路を決めるべきであるというふうに考えております。

菅原真理子　女性の政策決定の参加が、単に女性の地位向上のためだけではなしに、平和、国際協力の推進、そういった部分で、女性が参加することによって、日本がより良くなるということがらに貢献できるということが、大事でないかと問題提起がされたと思います。

次に下村さん、国際社会で色々活躍していらっしゃって、意見を述べられることが多いのではないかと思いますが、どうぞお願いします。

下村満子　もう今更何も申し上げることがない程で、四人の先生方が、私が言いたいこと全部おっしゃって下さいまして、特に角田先生は私になりかわって国際化の問題をお話いただきましたので、私降りた方がいいのじゃあないかと思いますが。そこへ私の結論とほぼ同じことを今、高橋先生がおっしゃいましたので私の出る幕がないんですが、まあ同じことでも言葉を変えてという感じになりますけれど、ちょっとアングルを変えて、ほぼ同じような話になると思います。角田先生が盛んにおっしゃったように、最近日本では、やたら国際化、国際化と念仏のように皆様唱えていらっしゃいます。私も何か、こういうテーマをいただいて、一体どういうことかなって、悩まなきゃならない程ですし、また国際化について色々の話をしろという場によく呼ばれるんですけれど、国際化とか国際人というのは、非常に不思議な言葉でしてね。私が観察する限り、日本人が国際化、国際化というお念仏を一生懸命唱えれば唱える程、真の日本はますます内

向きになっているのではないか、表看板だけ立てているのではないか、というのが私の総括的な印象なんですね。最近の日本をみますと、よその国に対して格好よくするためのアクセサリーという気がするんですが、では国際化とは何かということですが、一言で言ってしまうと、別に国際社会などという特別なものがあるとは思えないんですね。結局はどこの国に行ったって人間が住んでいる社会なんです。人間というのは目の色が違おうと、肌の色が違おうと、所詮人間は人間なんですね。人間の本質は私は絶対に共通だと思います。変わらないと思います。アメリカ人だって東南アジアやアフリカ人だって鬼でも蛇でもない、ごく普通の私たちと同じように悲しい時には泣き、嬉しい時には笑い、幸せな時は本当に幸せと感じる人間が、地球上に住んでいるに過ぎないんですね。そういう人たちとどう付き合うかというだけの話ですね。何かそれをことさら区別して、議論することがおかしいということですね。実は私、十年前に、初めて留学致しまして、たまたまアメリカだったんですけれども、生まれて初めて外国へ行って（と言うか、実は私、中国満洲で終戦を迎えました。何で戦争が起こったか分らない本当に子供で、アワアワしていた時代でしたが、それでも一応中国から引き揚げ者として連れられて帰ってきたという世代でございますが）、その後物心ついて初めて外国に行ったのがアメリカでした。そこでたまたま大学の寮に住みまして、九〇ケ国位からの方達と一緒の生活だったんです。ニューヨークでしたから。一番国際的な大学でした。本当に黒い人から、黄色い人から、白い人から、もうアフリカから東南アジアから、欧米から全部。ソ連人もいましたね。夜、皆で集まってよくおしゃべりをしたんですが、例えば、恋をする人の気持ちは国が違ってもちっとも変わらない。同じように心を傷めたり失恋して泣いたりしていますし、何も変わらない。要するにそういう人たちと自然体で付き合えるということが、私は国際人の原点ではないかと、そういうふうに思うんですが、これは言うは易しでなかなか難しい。どうしてかと言いますと、先程人間の本質は変わらないと申し上げましたけれども、やはりそうは言っても人間皆洋服を着ている。たまたまお隣の徐さんは、今日も韓国のナショナルコスチュームを着ていらして、美しいなと思いますね。こうやって見た時の先生と、例えば西洋流のスーツをパッと着ていらした時の先生と、やっぱり何となく見た目が、印象が違う。それと同じように、世界には色々な文化、伝統、習慣、宗教、価値観、あるいは言語、生活様式、あるいは政治の制度、経済制度を持った国がある訳です。それは着ている洋服みたいな物だと思うんですね。それをひっぱがした裸の人間は皆同じなんですが、

着ている物というのは人を案外惑わすんですね。違うじゃないか、どっか違うんじゃないかという不信感。同じではないということを、同じ言語を話さない、同じ価値観を持たないということで感じる訳です。人間はイデオロギーが違うだけで、裏切られたりする先入観があります。本当のその人を見ないで着ている物から判断する、これは何も国際間の問題のみならず我々日本人同士でも同じですね。その人が着ている物が立派だ、何かみすぼらしい格好をしているということで人を見てしまう、外見で。人間にはそういう弱点があります。例えば同じ国内でも九州と東京人、大阪人と東京人は違う、結婚してもなかなかうまくいかないと言われる程ですね、本当につまらないそうしたことによって、案外人間っていうのは色々のトラブルが出てきます。そういう意味で、口で言うほど人間皆本質的には同じでございます、仲良くやりましょうということではどうも事が解決しない。そこに色んな問題が出て来る訳です。私は日本の国際化問題を、先程角田先生がずばりとおっしゃいましたように、大体三つの段階に分けて考えます。これは学問的分類じゃなくて、私の自己流ですが、まず戦後を見ますと、第一段階の国際化は戦争直後のことでありまして、その頃の国際化というのはイコール欧米化、西洋化以外何ものでもなかった。その他の国々など眼中に無かった。アメリカさんのようになりたい、あの国のようになりたい、ということが一つのターゲットになっておりまして、国際化イコール西洋化、特にアメリカ化ということでありましたから、国際化論争などという難しいことをする必要がなかった。それからアメリカや欧米の方にも、日本を戦争で負けた貧乏でかわいそうな、助けてやらなければならない国ということで、別に敵対心もなく、むしろ日本の異質の部分というもの、例えば歌舞伎とか柔道とかそういう違うものを大変アプリシエイトしたというのですか、そういうことであまり摩擦はなかったんですね。ところが最近のいわゆる国際化問題、摩擦というのが起こってきましたのは、日本が高度成長期を経て、石油危機を乗り越えた頃からです。待てよと、かわいそうな貧乏な敗戦国だと思っていたら、何だか知らないけど、いつのまにかライバルになったと。ことに欧米の国々にとってですね、先端を行っていたつもりなのに、自分たちと肌の色を異にする、黄色い国の人間達が、何やらうまくやっとるではないか、ということで改めて見直すようになった訳です。向こうが我々をライバル視すると同時に、日本の方にも今まで欧米一辺倒だった態度に変化が起こり、ナショナリズムが出てきまして、戦後いったん捨て去りました日本的なるものというものを、いい意味では見直すのですが、悪い意味で復古調やおごりというものが出てきまして、そこにぶつかり摩擦が生じてきました。その段階で、やはり日本は欧米とうまくやらなくてはならないという声があがり、国際化が言われ出した。これを私第二の国際化というのですが、これはあくまでも経済とか貿易の面で、うまくやらないと損であるということで、そのためには国際人を養成しなけりゃあいけないとか、色々な議論が行われてきた訳ですね。これは私の目からみるとあくまでも受け身の国際化ですね。受け身ということは相手様にあわせるということです。だから、欧米流に何とかあわせて欧米流のお付き合いをしよう、欧米流の論議で色々交渉ごとをしましょうということです。それは悪いことではないと思いますが、極めて現実主義的に、当面の問題をどうやってうまくすり抜けてやって行くかという、極めて目先のことからだけ出てきたことであった訳です。幸か不幸か今世界の先進諸国と言われる国は全部西欧の国々です、日本以外は。世界は欧米流のビジネスのやり方とか、ルールで動いている。ゲームのルールがすべて欧米流である以上、西欧に合わさざるを得ないという状況です。

私はその段階、日本の第二の国際化の段階というのは、ちょうど女性の社会進出のプロセスと非常に似ていると、よく説明するんです。それは男一色で塗り固められた男性中心の企業や会社や組織に、女性が初めて入って行った時の姿というのはどうかというと、そこで女の論理、女の立場などいくら言ったって聞いてもらえないから、ともかくその男のポリティクスを学ばざるを得ない。そこで男のポリティクスを身につけて、そのルールで勝負しなければいけない。それが女性が最初に男社会に進出する時に、非常に苦労しなければならないことで、日本が国際社会の中で、先進工業国の一員となった時に置かれた状態というのは、大変それに似ているのではないかと思います。サミット・ミーティングというのがあります。先進国首脳会議というんですが、各国の首脳が並んで写真に写る時、欧米の首脳たちの中に一人だけ、アジアの我が国の首相がいつもこじんまりと立っている訳ですね。それで中曽根さんなどはいかにしてレーガンさんの隣に立って写真に写るかと、もうばたばたと彼の隣にすり寄ったり何かして、大変にアピールしなければならない。しかしまあそこに行く中曽根さんや竹下さんは、大変におつらいのでないかと思うんです。他の首脳は皆さん平素やっている通りのマナーで、平素やっている通りのスタイルで行動すればいい訳ですが、日本人の方はまず違う言葉を使って話さなければならないために、通訳を使うとしてもですね、サンキュウとか少しぐらい何か喋らなければならない。にこにこしなければいけない。それから恥をかいてはいけないということで、物凄く気

を遣わなくてはならない。西洋流のルールでゲームをしなければいけないという意味で、大変しんどい立場に置かれている。しかしそれはあくまでもあちら様にあわせるという受け身の国際化であって、私の目から見ると、本当の理想の国際化ではないと思っています。そろそろ日本は第三の国際化の段階に入っていかなければならないし、入っていきつつあるのではないかと思います。先程ちょっと言いましたように、欧米流の文明というものが、どうも今極まってしまっている、何事も極まると崩壊するんですね。「大国の興亡」という本が今売れているようですが、何事も極まり過ぎると崩壊するという意味でですね。一色になってしまうというのは非常に危険なんです。そういう意味で、欧米流のルール、ゲームのルールで動いている社会、国際社会に、もっと色んな価値観、もっと違う国々が入って二十一世紀に向けて新しい国際秩序、新しい国際的価値の創出に取り組んでいかなくては、ならなくなるのではないかと思うんです。そのためには欧米のみならず、日本、あるいは東南アジア、アフリカ、中南米という色々な国、あるいは共産主義の国々も含めて、地球社会をグローバルな単位で、どうやってうまく運営していくかというルールを、新たに真剣に考えて行かなくてはいけない。その時にこそ私は日本が欧米の真似ではなくて、我々が本来持っている良い部分を、そうした新しい価値の創出の中に提案していかなくてはいけないと思うんですね。そのプロセスにおいてこそ、私達はもうちょっとバランスのとれた形で、新しい国際社会の秩序を形成していけるんじゃあないかと思うんです。そういう時に必要な人間とはどういう人かと言うと、やはりマルチプルな、一色でなくてマルチプルな、多様な、ラジオやテレビで言えば、幾つものチャンネルを自由に切り替えられるような、柔軟な周波数を幾つも持った人間だと思います。これは日本人の最も不得意なことです。日本人は単一で一色になってしまいやすい。しかしもっと周波数を自由に切り替えられるフレキシブルな人、それから相手の立っている所に立って物を眺められる人、つまり日本列島からしかものが見られないような人はやっぱり駄目なんですね。日本列島から見た世界と、アメリカ大陸に立って見た世界、中国大陸に立って見た世界は、まるで違うんですよ。ジャーナリストの目から見ても、ソビエトに立って見た世界とアメリカに立って見た世界とは本当に違うんです。ここに座っていても、私がこうやって見ている世界と、その角からこう見ていらっしゃる方の見ているものは、同じ会場に同じ時刻に同じ話を聞いていても違うんです。その違いがあるということを自覚することが、多様な立場に立つ、多様な国々の立場が理解できるということで、これが無いと国同士

で、いわゆるレセプションギャップという摩擦が起こる訳です。だからなにもアメリカ人になったり、中国人になったり、韓国人になる必要はないけど、日本人であっていいのですが、同時に分かる、理解するという、つまりあちらから見たら物が違って見えるんだということを理解できる人間、それは相手の痛みのわかる人間だということですが、そういう人間になるように我々は変わっていかなければいけないんですが、日本人というのは変わるということのもっとも不得意な人種です。それはどうしてかというと単一民族なんですね。単一民族は非常に単純な目標を掲げて、例えば高度成長期に物質的にどうやって豊かになるかという、戦後のそういう方針を達成するのは大変うまい。何も考えないで馬車馬みたいにワアッと行けばよかったんですから。その場合、男性中心のピラミット社会は、社会の中の単一人種社会です。だから単一が二重に重なっている訳ですが、日本の経済成長の大成功の秘密は、そこにあるということになっているんです。その上に、最近は外国に学ぶものなしという大変なおごりが出てきて、そして角田先生が言われたように、歴史を反省せず正当化しようとする傾向が出てきました。これは私、やはり男性社会の、男中心の社会の崩壊の兆しと思うんです。男が悪いんじゃないんです。何事も一色で極まるというのは危険なことで、男性中心社会というのは、崩壊に近い現象になっていると思います。

今回のリクルート問題でも、政治、経済、官界、すべてもう腐っていますよね。崩壊の兆しだと思うんですね。そういう社会をどうやって変えていくかと言う時に、異質な要素が必要なんです。一色で固まっていたら駄目なんです。出口がない堂々巡りなんです。その時に必要な要素として私は三つ考えております。一が女性、二が若い人、ヤングゼネレーション、第三がノン・ジャパニーズ、非日本人。この三つのファクターを大変重視しているんですね。なぜかと言うと、この三つのファクターがより偉いからとかより高尚であるとかではなくて、これまで全く参加してない要素だったからです。つまり新しいファクターとして、変えていく時の原動力、プッシュする力として大変女性が重要だと思っております。別に男性が悪い訳ではないんです。男性も皆、おかしいおかしいと思っているのですが、変えられないんですね。一つの大きな組織の中に入っている。「いち降りた」と言う訳にはいかないんです。女は失うものがないから冒険ができるんです。そういう訳で私は二十一世紀は大変女性に期待しております。

菅原真理子　国際化というのは、幾つもの周波数を自由に切り替えることができる、そして日本だけの立場、自

分だけの立場から物事をみるのではなくて、相手の立場に立って物事を見ることのできる複眼の視線を持つということ、いい視点が沢山ご提言のなかに含まれていたと思います。

では次に天野さん、女性とは別の視点からちょっと塩と胡椒で、女性とマスメディアの問題についてご意見を伺いたいと思います。

天野祐吉　コマーシャルの歴史を見ていますと、その時代にどういう女性がもてたかというのがよく分かりますね。昔のコマーシャルを見ると、この時代にはこういう人がもてたんだなとわかるし、今のコマーシャル見ていると、最近はこういう変な人がもてるんだなということが見えてくる。秋川リサさんが初めてコマーシャルに出たのは何年前だっけ。

秋川リサ　はい、コマーシャルは十八年前でした。

天野祐吉　あのときは皆、ほんとにびっくりしましたもんね。隣に居るから言う訳ではないんだけど、見た途端にみんなびっくりした。「何だこれ」と思いましたね。それまでの美人イメージというものを、本質的に変えた人なんですこの人は。（笑い）昔はやっぱりこういう人は美人とは言わなかったんです。だけど何か、要するに美人というのは造形の問題じゃないんじゃないの、もっと伸び伸びしたハートの問題じゃないのということを、この人はコマーシャルの中で主張した。あれでかなり美人イメージが変わったと思う。こういう世の中の動きというのは、コマーシャルを見ているとよく分かる。女性像の変遷なんてのもよく分かるんですね。リサさんのコマーシャルのどこが面白かったかというと、今までの女性像の枠から外れている所がすごく面白かった。リサさんは「ございます」と言うのを「ございまあーす」と言った。あれはもう完全に形がい化した丁重語を、からかっているとしか思えなかったですね。そういう批評性があって僕は面白いと思ったんです。枠を、既成の女の枠をこわしていくような所ですね。

そういうコマーシャルは今でもあることはあります。ただ、やっぱり全体として見ると、コマーシャルの中では女の人をどうやって既成の枠にはめていくか、どうやって男にとって都合のいい女の人をつくるかという枠が、色んな形で出来あがっているように思う。それは広告を作っている人が皆暴君でですね、女をそういうふうに扱いやすいようにしようと計画している訳じゃない。無意識のレベルでそういうのがある訳ですね。意識しているんじゃないんだけど、ついそういうふうになってしまう。ですからコマーシャルの女の人を見ていると、今の男たちに期待される女性の役割みたいなものが、よく見えてしまうということがあると思います。

それはやっぱり家事をする人なんですね。コマーシャルの中の女の人はまず八〇%がそう。例えば三田佳子さんという人が、よく出て来て掃除機などかけてますよね。とってもいいコマーシャルなんですけれど、どうして掃除機のコマーシャルは、女の人ばっかり出るんだろうと不思議でならない。山崎努さんなんかやったらいいんじゃないかと思うんですね。別に男が掃除をしたってかまわないし、現実にはしている人もけっこういる。ところが、コマーシャルでは、掃除するのは必ず女の人みたいなところがですね、どうもずれているんじゃないかと思います。

女性週刊誌というのも、不思議ですね。突然話が変わりますけど、どうしてあんなに男性誌と女性誌が分かれているのかなあと。外国にも勿論女性誌ってあることはありますが、ともかく日本のように女性誌が花盛りの国はない。男女に読者をわけない雑誌がもっと出てきていいし、僕も自分の作っている雑誌はそういうつもりでやっていますし、現実に両方の人から読んでもらっていますけど、なぜか女性誌っていうのが次々に出てくる。もう終わってもいいんじゃないかと思っても、また第何次ブームだとかいって出てくるんですね。あれを読んでいるとやっぱり女性の興味っていうのは、こういう所に非常に限定されているのかなあというふうに、誤解されてしまう訳ですね。セックスのこととですね、おしゃれ、ファッションのこととですね、食べ物グルメ。こんなのばっかりでしょう。それもいいですけどね、もっとほかのことだっていっぱい関心があるし、興味をもっている筈なのに、何か女性の興味の対象はこれだっていうように決めて、それで女性誌が作られている。ああいうのがどうしてあんなに売れ続けているかというのが、僕には非常に不思議なんですね。建前の上ではそういう女性の役割を否定していながら、実際にはそれをあおっていくことで、やっぱり現実の女性はこんなことを求めているんだな、というような論理がそこから逆に成り立って来てしまうという、不思議な現象が起きている。別に僕は女性誌が憎い訳ではないんですけども、やっぱりもっともっと雑誌そのものも、そういうものを越えていくような形が出てこなければいけないんじゃないでしょうか。その点では、コマーシャルの方がまだ進んでいるかも知れない。例えば浅茅陽子さんのエバラ焼肉のたれ。だんなが今日会社の友達が遊びに来るんで、焼肉をしてくれと言うのがありますね。「何人来るの」「三人」とか言って、「じゃあ五〇〇グラムだね」って言う。不満そうな顔をしている亭主に、「肉は少ない位の方がおいしいの」と言うコマーシャルです。かつては嘘みたいにハッピーな、リアリティのない家庭ばかり描いていたコマーシャルも、やっぱり

それでは駄目で、現実をどこかに映し取っていかなければ、駄目だというふうになってきている。

女の人の頑張り方も色々だと思うんですね、社会の中で頑張っていらっしゃる人もいるし、家庭人として頑張っている人もいる。それはそれでまた僕はいいことだと思いますが、頑張っている奥さんというのが、ああいう形でてくる。あれは絶対あの亭主は変わると僕は思いますよ。（笑い）

もう一つ、「世話焼きぱっ缶」ていうコマーシャルも、僕は好きですね。お風呂に入っている若い奥さんに、お風呂の外からだんなが「オイおつまみ」と情ない声で言うと、奥さんがガバァッと風呂から身を起こして「世話焼きがあるでしょうッ！」とどなるんですね。あの奥さんなんかも、ダメな亭主を相手に、一生懸命がんばってるなア、という感じがする。

ところが、あのCMは、奥さんの言い方がひどすぎる、あれではだんなが可愛想だという投書がいっぱい来てですね、それであの会社は、「世話焼きあるでしょうッ！」と言う言い方を穏やかに変えちゃったんですね。最近のは穏やかに「世話焼きあるでしょう」なんて言っている。コマーシャルの世界には、そういう自粛というのがよくありまして「ごん」に、「おじいちゃん、また死んだふりしている」というのがありますが、あれも老人を馬鹿にしているという投書がいっぱい来てですね、途中から「寝たふり」になってしまった。（笑い）こないだは「皆さんお元気ですか」っていう車のコマーシャルで、〃元気〃っていうのが今いけないそうで、（笑い）パクパクと口が動くだけになっちゃった。それはともかく「世話焼きぱっ缶」で投書してきた人ってどういう人って、担当の人に聞いたら、「いや女の人ばっかりですよ」って言うんです。だから僕は、やっぱり女の敵は女だと思っている訳です。

（拍手）

菅原真理子　大変スパイスの効いたお話を有り難うございました。

本当にマスメディアは、私達の知らないうちに私達の生活を写す鏡であると同時に、私達の意識を再生産していくんだなあということを痛感致しました。

では最後に美人の枠を変えさせた秋川リサさんどうぞ。今ではもう既に二児のお母さんですね。

秋川リサ　いえ、四児です。私は非常に難しいテーマを与えられてしまいました。「女性とセクシャリティ」です。セクシャリティというのを、昨日あわてて色々辞書で調べました。非常に幅広いんですね。セクシャリティ、もともとセックスつまり性、セクシャルと言ったら性的な事と、子供の辞書に出ていました。セクシャリティについて出ていなかったから私あわてたんです。結局、女性

にセクシャリティがあると同時に、男性にもセクシャリティがあると思います。唯どうしても女性の方のセクシャリティ、性に関して色々な思いをすることが多いように思います。私が先程人の枠を変えたと言われたその時代に、コマーシャルというものに出ておりました。十六、七歳から資生堂のコマーシャルにでていて、その時に当人はテレビという物を通して男性側、また女性からも観賞動物的な扱われ方をすることに対して、抵抗がない訳です。むしろそれは若さで仲々楽しい事、色んな人が私を見るということは商いの方にも影響しますし、また男性側から可愛いね、きれいだね、と言ってくれることに決して嫌な気分ではない。それが少しずつ、あれっ、それでいいのかな、ただ見つめられて可愛いね、きれいだねだけでいいのかな、というのに気が付き始めました。それを男性側から言わせますと、「あの子はもうそろそろ年だね」そういう状態になってくる。内容が伴って自分は成長していきたい、女性というのは男性のいわゆる観賞動物という既成の枠を取り壊したいと思う時に、最近はそういうことは望まない人達が出てますけどね。「二十歳を越したらただのおばん」と自分達を自虐的に言って、その女性の若さ、いい意味での若さ、ですから観賞動物というのを卑下した言い方だけではなく、良い意味でも言っている訳ですけども、男性中心の観賞動物みたいな形を自分から放棄する若い方たちも出ている。ですけどまだまだ街にあふれるいわゆるワンレングス・ボディコン女ですね、ああいうのがやはり「スタイルがいいね、きれいだね、可愛いね」というものを同性からも異性からも、求めている象徴的な姿ではないかと思んです。じゃあ若さが無くなった時にどうなるかというと、その女性の状態によって随分変わると思うんですね立場が。大体結婚をする。または仕事を続けて行く。ですけどそこには男性というものがつきまといます。そうすると、あれあいつの女、あいつの女房、あれ俺の女、いわゆる所有動物になるんですね。誰々さん個人ではなく、誰かのものというふうに扱われてくる。それも新婚さん一年位の時には、「私の亭主は何とかで、私はその女房でございます」これも仲々気分のいい時もある訳ですが、その内「なんでこの男の所有動物のように扱われなければ私いけないの」というので、天野さんが先程おっしゃったようなコマーシャルも、時代の反映として出てくるのでしょう。男の所有動物というふうに扱われる頃から、女性の考え方は二つに分かれるように思います。それでいいんだろうか、あるいはまた、女性は男性に所有されても仕方ない、経済的に自立出来ないからいいのよ、または仕事をしていることが自立なのだからそれでいいのよ、というように。私は決してそれだけとは思いません。精神的な

自立というのは、一生かかって人間がしていくものなんだと思うんです。今はまだその経済的に自立することが、イコールすべての自立のように、女性雑誌などがあまりにも書き立てるために、錯覚されている部分もあると思います。

そこで、セクシャリティの方に戻るんですけども、女性の性欲として命を産み出す訳で、勿論男性の協力があって産み出すんですが、女性の場合は体内から一人の子供が産まれ出て来ますので、一応男性よりも多く性を感じる、考えるということのチャンスを持っているように思います。それは出産という喜ぶべき経験の中で、改めて性が命につながる大事なものと感じる人もいれば、残念ながら堕胎という不幸な経験の中から、性は命につながるものであったということを、感じる人もいらっしゃるでしょう。ところが男性の方はどうかというと、なかなかそれはお感じにならない。別に男性が悪いと言っている訳ではありません。

これは国際社会の話に近くなると思うんですけれど、特別日本の男性は東南アジアに、バスツアーで女性を買いに行く、平気でなさるわけですよね。それをまた機嫌良く送り出す奥さんが現実にいるんですよ。商売の方なら構わない、商売女だったら私はいいのよと。もしも商売の女の方が妊娠をしても、それはその人のミスでしょと、あなたに関係のないことよというその現実。兵器を持って戦争に向かわないで、今度は違う武器を持って、戦争しているような錯覚を起こすんですけどね。種を播くのは男の甲斐性、そしてそれを集めて育てるのは女の甲斐性と言われます。私の場合には前の奥さんの子供も育てていますので、その甲斐性で、亭主と協力しているようになってしまうんですよ。まあそれはちょっと置いときまして。やっぱりバスツアーで女を買いに行くみたいなことっていうのは、非常に世界的にも批判されていて、じゃあ外国の方はそういうことをしないかというと、そうじゃあないんですが、そのやり方とか、その何と言うのでしょう、そこに何を考えて行くのか、いわゆる性というと男性の方は下半身としかお考えでないようです。だから性のことをきちんと男女が語ることが難しい。どうしてもエロ話、嫌らしい話、私はそういうことは話したくないという風になってしまうのですね。だけど実際には女性と男性、この性の問題をきちんとしていかないとある意味では何も解決されないと思うんです。女は受け身であるとか男は攻撃的であるとか、私は女だからレイプされてひどい目にあった、そういう現象だけが表に出て、本当の意味で女性にとって何が性的に屈辱的なことなのか、それとも何をすれば許せるのか、男女の間で性の問題でどういうことまでが許されることなんだとか、

性の問題は最終的には命につながっていく問題ですから、それはとてもきちんと話し合わなければいけないんですが、一番皆様不得意です。夫婦間でもお話しになる方はあまりいらっしゃらないと思います。あんまりシーンとならないで下さい。それで私がこういう場に、最近とてもよく呼ばれる原因は何なのかといいますと、出産だと思います。私はかつて二十年前まで、日本の女性の多くがしてきた家庭分娩を、自分の意志で色んな事情によって選びました。なぜそういう家庭分娩を選んだかということを話すと、二〜三時間経ってしまいますので、それは割愛しますけど、自分の考え自分の意思によって選んだ訳です。ですけれども、その家庭分娩という現代では非常に珍しい事を選んだために、一部マスコミでいやな表現をされました。私の家族は、私の産んだ子供以外に二人の子供もいまして、あと主人の両親、それから私の母、それに勿論主人に私ですね、それに近所に私のとても大事な親友が住んだりするもんで、家庭分娩の際にはその人々が協力をしたことが、いわゆる公開した、人に下半身を見せたというふうな表現で伝わる訳ですね。私としては非常にはっきり言って不愉快。先程女性雑誌の事にふれましたが、女性の自立を始め、生き方もはたまたダイエット、グルメ、温泉、そして出産までファッションのように扱うのが目につきます。出産もラマーズ法という言葉を使ったファッションになってしまいました。「ラマーズ法で産んだんですね。松田聖子さんもそうだってね。私もラマーズ法で産もうと思うの」こういう女性が実は非常に多い。生き方もそれから出産も、これファッションではない。ですから先程どなたかがおっしゃった女の足を女が引っぱる、確かにそうなんです。女性の中が色んな意識を持って、色々なことを考え自分で選んでも、例えばある女性が私の出産のことで、その記事なりを読んでそおっと側に寄ってきて、「いったい何見せたの？よくできるわね。恥ずかしくない？」と言いました。つまり性は下半身であり、その下半身はポルノティック、今そういう方が堂々とテレビにお出になっていますけど、アダルトビデオと同じ扱いなんですね。これは何なのかと思います。出産する時の女性は自然の形なんですけども、これですら女性の中でも、出産というものは下半身をさらすから非常に恥ずかしい、または隠すべきこと、下半身というものは公に語るべきものではない。語るとするとアダルトビデオを見るのが悪いとか、嫌らしいものを見たとか見ないとか、そういうようなものになってしまう。

性教育については、子供を持っときながら、私は自分の子供には性教育はできない、そんなものは学校でやってもらはなくてはと言う方がとても多い。だけど性の問

題ってのは命の問題ですから、親がきちっと教えることが大事なんじゃあないかと私は思います。そこから人間の男と女の付き合い方のモラル、最近は女性同士が好きだという方もいるし、男性同士が好きだと言う方もいらっしゃる、これは個人の趣味ですから善い悪いは言いたくない。つまり人間関係のモラル、人間同士どう付き合うかということを、性を通してまず親が子へ伝え、子は自分の人生を選び、そしてその子供がいずれ性を通して次の命を産む、命を得て人間は生きているということにつながると思います。そして、その生きていくという言葉の中に初めて自立とは何か、真の幸福とは何か、平等とは何か、自由とは何かということが出てくると思います。ですけど今、自由イコール野放図と考えていらっしゃる人がいる。性も野放図に考えて、そうして快楽とかそういうものだけで性を解決しようとする。ところが、自由を自分で選んだら、それにまつわる責任があるということを、誰も考えていらっしゃらない。子供達にお母さん達も教えようとしないから、なんとなくの世界ができてしまって、いつのまにかなんとなく結婚をし、なんとなく子供を産み、何となく社会に付き合ったような気がする。そして、「私の人生はいったい何だったんだろう」という女性も多いことは確かであります。性というのは一番話づらいことだけど、本当は一番最初に、性とは一体何なのかということを、子供達に教えなくてはいけないと思います。

私にはまだ二歳半、一歳半の男の子と、女の子がいますけど、もう自分達の身体の状態が違うことによって、男と女の性別があることを、自分の気持ちの中に持っています。その時から性ってものが始まるし、その時からきちっと性というものを考えた上で、受け身である、攻撃的であるということではない、人間、女として何が平等、何が自由かということを、もう一つ考えてみた方がいいのではないかなあと、出産を通して私も改めてそう感じました、ということです。（拍手）

菅原真理子　自分のタックスカードを本当に決められているんだなあと、本当に皆さんもひしひしとお分かりなんじゃあないかと思いました。

これで七人の方の最初の基調コメント、基調発言が終わりました。私もコーディネーターをおおせつかりました時には、これだけ立場の違う方々、きっと関心をお持ちでいらっしゃるテーマも全部違う方々が一堂に会してお話をなさるということになると、どういうことになるんだろうと、いささか空恐ろしささえ感じておりました。この七人の方々の発言をお聞きになって、確かに色々なご意見が出ました。そして立場によって本当にニュアンスが違うなと、聞いた皆さん良くお分りになったと思うんですけども、非常に多様な意見の中から、私自身は二つの大きな問題が提示されているのではないかと感じました。一つは女性であるということ、セクシャリティー、母親、妻といったような家族といいますか、私的な場面で女性がどういうふうに生きていくかということを、改めて考え直さなければならない時期に、きているのではないかということ。それから二つ目が国際化の話、国際化は色々の所で議論されている訳で、もうすでに今までの発言の中でも、十分議論があったような気もしますが、特にこの中で、女性がどのような役割を果たせるのか、女性がその国際化の中で貢献するということが、日本に世界にどういうことをもたらすのかということを、もう少し発言で聞いてみたいなあと感じました。この外にきっと会場の方達も、私はこういうことを聞いてみたい、私はこういう意見だと、きっとこの七人の方達の意見を聞いていらっしゃる内に、ムズムズとなさった方もいらっしゃるだろうと思います。時間の関係もありますが、会場からお二人程度ご発言、特にこういう問題についてパネラーの方達に聞きたい、あるいはこのテーマについて、討論してほしいというご希望がありましたら、手を挙げて発言していただければと思います。手を挙げられた方、じゃあお願い致します。

会場からの意見　色んなお話ありがとうございました。私現在高校生の娘を持って、進学に色々悩んでいるのですけれど、仕事を一生持ちたいって言うんです本人が。それで子育てと仕事というものはですね、私くらいの年齢になりますと、一応子育てを終わって色々活動ができるんですけども、娘が今から職業に就いて結婚して出産するとすれば、五、六歳になる位まで子供を多分託児所に預けるか何かすると思うんですね。その時に子供がうちに帰ってきて母親がいない、私は今までずっと専業主婦ですので、子供が帰ってきた時には家にいるんです。それが今度自分の孫がそうじゃあなくなる。そんな場合その子供に与える影響と、それから夫となる人と、家事とか育児をどういうふうに分担していくのか、本人同士の問題だと思うんですけれども、ちょっと今のところ不安ですので、そういうご意見をお聞きしたいんです。

菅原真理子　子育て、育児と女性の生活設計、それと女性の仕事をどういう形で、調和させていくかという観点についても、ちょっとご発言をお願いしたいということです。まだ外にございませんか。

会場からの意見　よろしいでしょうか。最初の質問の方をちょっと聞き取りにくかったんで違うかもしれませんけれども、高等学校の教師をやってる者なんですが、下村さんのご意見の中に、期待する三つのファクターというので、若い世代というのが挙げられておりました。私

も仕事の関係で正にその通りだと思うんですけれども、日々現場におりまして、教師というのは理念だけでは仕事はできませんから、その場その場で対応していく訳ですけれども、私の持っております現場の現実というのは、皆様がたくさん勇気を与えて下さいましたけれども、それとは非常に差がありまして、この会場を出たらまた気持ちが萎えてしまうんではないかと思うので、もっと具体的に何かヒントをいただけたらと思います。私の持っている状況は、例えば今、私の所属する高等学校では、アメリカ合衆国のオハイオ州から一人女子学生が留学して来ております。彼女はちょうど閻魔大王が持っているというジョウハイという、物が良く見える鏡、私共の学校の生徒にとって、彼女はそのジョウハイみたいな存在だと思うんですけれども、彼女が一週間程前、九月からですからまだ日本語も良く分かりませんので、非常にプレッシャーがかかって泣き出してしまいました。それは多分、彼女を取り巻く日本人の若者達が、どう彼女と付き合っていいのか分からない、まあアドバイスは致しますけれど、教師がいない時にどう付き合っていいのか分からないので、結局想像しますに、彼女をちょうどパンダを見るように取り巻いてしまった。親切な心はあったんだけれども、言葉ができないので手も足も出ない状態。「いいのよ、日本語でいいのよ」と彼女自身は言うのですけれども、「私は英語の教師としてきたのではないから」とはっきり言うんですけれども、どうしても若い世代というのは、私たち古い世代のおりみたいなものを、増幅して持っているような感じがして、どうも下村さんの期待に応えることが、現場の者としてはなかなか難しいんです。

できたら何か具体的な、若い世代への対応策みたいなものをいただけたらと思います。

菅原真理子　そうですね、もっと若い世代、特に若い女性達が、どういうふうな人生を生きて行けば良いかということのアドバイスを、皆さんからお聞きしたいと思いますね。まだ外にどなたかいらっしゃいますか。

会場からの発言　私はスリランカからきたアン・ラトナヤカと申しますが、私が日本で英語を教え始めた時の経験ですけど、私が日本人からまず受けた質問は「あなたはアメリカ人ですか」と聞かれたんです。きっと私が黒い髪だから、スリランカ人だからということで、最初は認めてくれなかったんです。そこで、たまたま私の母がイギリス人で、私がイギリスの大学を卒業したと知って、初めて英語の教師として認めてくれた訳です。だから、アジアの女性として大変難しい部分もありました。またコマーシャルについても、先程先生が言われたんですけど、モデルさんは大変欧米のモデルさんが多いのですが、

これはどう思われますか、ちょっと聞きたいのです。

菅原真理子　アジアの女性の立場から、少し国際化の焦点をそちらにあわせて、ご意見をいただくことも必要かもしれません。ではどうしましょうか。

それぞれ特に、どの先生ということはなしに先生方の中で、例えば、子育てと仕事をどう調和させていくのか、あるいは、母であり妻であり女性としての生き方と、社会との係わりをどういうふうに持っていくのか、というようなことについてちょっとお話しいただけますか。なだ先生いかがですか。

なだいなだ先生　質問者の質問にも、それから司会者の方の「子育てと仕事をどう調和させるか」というごく自然なまとめに対しても、良き母親であることにこだわりを感じます。私は仕事と子育てを調和させなくたっていいと思います。調和させなくちゃいかんと思っているから過剰に母親なるのです。何かその点で、完璧な母親意識を引きずっているのではないかと思うんですね。例えば岡本かの子さんは、小説家として有名な人で、私も一時期憧れたことがあるんですけれども、あの人の子育てはひどいものだったらしいですね。柱に縛り付けられた岡本太郎さんがギャアギャア泣くと、「ね、泣きやみなさい、早くやめなさい。この小説書き終ったらヨーロッパに行って、パリのシャンゼリゼを二人で馬車に乗って下りましょうね」と言ったそうです。それでも赤ん坊の岡本太郎さんは泣きやまなかったそうで、(笑い)泣きやむはずがないですよね。しかし、私は岡本太郎さんを見ていて、たしかに変わった所のある人で、社会の常識的なモノサシからハミ出しているかもしれないけど、芸術家としてはそれで良い。

私は岡本太郎さんを認める寛容さが必要だし、社会が母親として少しは失格でもね、岡本かの子を小説家として認める、そういう抱擁力を持っていた方が良いと思うんです。私はそういう意味で、「母親のイメージを引きずるな」と言いたかったんですね。ある裁判に行ったことがありまして、そして「カルテット」という小説を書いたんです。その裁判では、検事が性転換をした女性証人にしつこく訊問するんです。性転換手術をしたお医者さんを裁きたいからですね。何ととんでもないことをしてくれた、人の道に反する、という訳で法廷に引き出された。優生保護法という法律で裁かれることになったんです。その時に、性転換して女性になった男というんですか、女というんですか、その証人に、「あなた幸せですか」と検事が言うんです。すると証人は「私は今のままで幸せだ」と言うんです。検事は一生懸命「いやそんなことはない。あなたは本当の女性になってないんだから、本当に幸せであるはずがない。女の幸せっていうものを知っ

ているはずがない」と言うんです。「じゃあ女の幸せって何さ」、「あなたは戸籍上夫婦にはなれない。」そうすると、証人は、「戸籍上結婚している人は皆んな幸せなんでしょうか」そこで「あなたは子供が産めないんだ。いくらその男を愛しても、子供は産まれないんだ、それでも幸せか」と検事は言います。すると、「世の中の子供のいない夫婦は、不幸だから別れなければいけないんでしょうか」って言うんですね。私はその時の検事の発言が女性観、女性の幸福観を非常によく表していたと思いました。私はそのことを思い出します。また、私は登校拒否の子供を診ますが、子供はあっけらかんとしているんです。「学校どうして行かないの」「だってつまらないからさ」、ところが母親がおろおろして「子供が学校に行かなくなっちゃいました」と泣き出すんですね。母親はこういう外れた子供を育てちゃったという意識で、つぶされそうなんですね。それを見るたびに私は「母親のイメージを引きずるな」ともう一度繰り返して言います。

菅原真理子　子育てと仕事の調和とか、ついそういう図式でもって、母親の役割を見てしまう固定観念があるということが、今日はからずもここで露見して、大変恥ずかしい気がいたしますけれど、こういう自分が何気なしに思い込んでいることが、別の視点から「それ可笑しいんじゃないの」というふうに突き崩される、これがこう言う会話の醍醐味、知的刺激なんじゃないかという気がいたします。秋川リサさんはこの問題についてどうお思いになられますか。

秋川リサ　私ね、確かに私は仕事もしています。それから子供もいます。夫もいます。お姑さんもお舅さんもいます。大家族の家庭も持っています。必ず仕事場に行くと「両立させるのは大変ですよね」って聞くのは女性です。男性の方はほとんど聞かないですね。男の人も両立していると思うんです、家庭と仕事と。だってお父さんであり、亭主であり、仕事をしている訳ですから。だからまだまだ女性が仕事をするということは、ある意味でかばって見てもらえるということかも知れません、女性同士から。今の男性の中で働いていると、かなり努力しないと、男性社会の中で生き残っていくということは、難しいことも現実だと思います。でも、私はなだ先生と同じように、うちの子が不良になった時に考えます。お母さんが働いているから、不良になったと言う人もいると思います。だけど、じゃあ働いていなかったら不良にならなかったのかと。両方の道を私は歩けないから。いつも言うんですが、うちはまして血のつながらない娘もいます。継母の私がきた訳ですから。最初に言いました。「あんた今がチャンスよ、継母がきたから不良になるチャンスよ。だからね、なりたければ不良になりなさい」なりませんでしたこの子は。先手、先手を打ってやったという感じなんですね。それはまあそれぞれ子供達との相性もありますから、うちの子はわりとあっけらかんとしていて、たまにはどこか抜けているんじゃないのかしらと、心配になることもあるんですけど。よく、ＰＴＡとか行くと、皆さん「自分の子ですらうまく行かないのに、何であなたの所、他人の子でうまくいくの」と聞かれるんです。もしかしたら私は、子供をふっと引いて見ているからかもしれない。だから自分の子供の欠点も良い所もよく分かります。でもべったりになっちゃうと、その欠点が長所に見えたり、長所が欠点に見えたりするんじゃないかと思います。仕事が忙しい時には、いいじゃないですか保育園に預けるのも、そこでまた子供は社会を知ると思います。あるいはおばあちゃんに預ければ、そこでは優しいおばあちゃん、甘いおばあちゃん、怖いおばあちゃんを知ることですから、それを子供は消化していくと思います。母親だけがくっついて愛情を振りまく、愛情をかけたからって、良い子になるって保障はないですよね、なだ先生。私だってどうしていいか分からない事たくさんあります。今でも帰りたい気持ちですもの。今いないことが不良化の始まりなんて言われたらね。(笑い)だからお母さん方も、私は自分の人生が大事、自分のことがとても大事、そしてパパのことも大事、そして私あなたと一緒に対等に人生を生きたい、そうすると結構子供はお母さんの働く後姿見て、まあ忙しそうで大変だわと、家事も手伝ってくれるし、それからまた反対に私が帰ると、忙しそうに弟妹の育児をしている娘を見て、まあこの子はとても家庭的な良い面も出てきたわと思ったり、その後姿がちょっと十四歳には大変だなあっていうのが見えたり、それで私は「勉強した?」っていうのをやめています。よく仕事をもっている両親が子供に「親の背中を見せて、わかってもらう。」って言う人がいますが、私は子供の背中を見て随分教えられます。

菅原真理子　下村さんいかがですか。下村さんからはセクシャリティーの話も聞きたいし、若い世代に贈る言葉でも、セクシャリティーでも色んな意味からどうぞお願いします。

下村満子　あの今のテーマですけどね、私はたまたま自分に子供がいないんで、そういう意味では、あなたは子供がいないから、そういうこと語る資格ないとか、そういう女性の声がすごくありまして、私憤然とするんですけども。逆に私は仕事を持った母親に育てられたんです。私の母親は医者でして、それも私が小さい時から医者でした。私の母は三人の子供を産んでかつ、医者をやっていた人なんですね。ですから私は学校から帰ってきて、親が家にいるなんてことなかったですし、それからよそ

のお母さんと全然違って、過保護にされなくて、今で言えば鍵っ子みたいだったですが、とっても母を誇りに思っておりましたね。寂しいとか感じなかった。とにかく何かあったら、いつでも親に話を聞いてもらえるという安心感がありましたし、夕飯の席だけは一家が、父も母も兄弟も集まってワイワイガヤガヤ、今日あったこと、映画の話、読んだ本の話、もう何でも議論する、それがすごく楽しくて。でも全然ベタベタしない状態でした。

母はそれでも「良かったわ。これで一人でも不良が出たら、私は何て言われたか分からない。幸いまあ三人共平均値に育ったからね」なんて言っています。いまだに、七十五歳ですが、一日八十人位の患者さんを診て頑張っています。私はそういう意味で先程おっしゃった、学校から帰ったら親がいないと何とかというのは、ものすごい既成概念だと思いますね。親がべったりしていても、不良になった例はたくさんありますよ。いなかったってことがなぜ科学的に結びつくんですかね、子供が駄目になる原因に。もうそういうことからふっ切らないとね。でも一つ言いたいことは、私は何も総ての女が職業持って、目つり上げてどうこうしろなんて言っているのではなく、人生の選択は個人の自由です、ということを言ってるんです。娘さんがそれをしたいなら、それは彼女の責任でやるべきだし、親が駄目だと言ったってやりますよ。実は親は私を医者にしたかったんですね。しかも母親が医者だったから、一番トクなんですよ医者になるのが。ちゃんとベースもあるし、女にとって医者というのは大変経済的にもトクな職業と思うんですね。にもかかわらず全く可能性のない、当時新聞社は女性記者を採らないような時代に、物を書く人間になりたいと思った。最も不利な道に進んでしまったんですね。それはやっぱり私の内面の欲求がそういうふうにさせたんですよ。本当にしたかったら人間はやる筈なんです。それでどうなったって後悔はしないし、それによって失敗しても私の選んだ人生だっていうことで納得するんですよ。だから、そんなに親が過保護にベタベタ、ああでもないこうでもないと心配することはないんです。本人が自分の人生を自分の意志で選択する、もちろん、失敗を含めて。私はそれは非常に大事なことで、自分の足で立ち、考えるそういう力を付けてやることだけが、親ができることだと思います。後はどうぞご自由にという、そういうことだと思うんですけど。

菅原真理子　まことにその通りだと思います。ただ私、多少疑問に思うのは、日本の社会では、女性はそういう内から自分は本当にこれをしたい、自分はやらなくちゃ、私は生きている甲斐がないと思うようなことを、自分で押しつぶしてしまう。自分で押し殺してしたいものが無

くなってしまう。目に見えない蜘蛛の糸みたいな雰囲気が、まだ少し残っているんじゃあないかなと思うのですが。

下村満子　少しどころかたくさん残っています。それからもう一つ、大事なことを忘れました。仕事を持つ女性は残念ながら今の現状においては、男女の役割分担は平等ではないですね。さっき言ったように、家事育児その他のものがどうしても女性にかかってくるという現実、良いとか悪いとか何とか言うのじゃあなく、そういう現実の中で、私は仕事を続けたいともし思うんなら、夫の選択が第一歩ですね。ものすごく格好良いこと言って、男女は平等であるべきだとか、女は自由に好きな仕事を続けるべきだ、そんなカッコいいことをいう男性がかえって危い。きれいごとをいう男性に限ってロクなのはいませんからね。そういうきれいごとに惑わされていけません。そんなのに限って結婚すると、ものすごい亭主関白になる訳なんですね。既成概念にとらわれない、自由で柔軟な男、それを私は選んでます。（拍手）

菅原真理子　もう拍手、拍手だけですが、もう一言何かありませんか、天野先生。

天野祐吉　さっきコマーシャルに外人が多いというご意見がありましたが、その理由を簡単に言っちゃうと、その方が新しい、目を引くからだと思いますね。なぜその方が目を引くのかと言ったら、日本では身の回りに外人がいないからです。いつも同じ顔した日本人ばかりの社会を作っていますから、他の国の人が出てくると目立つってことが単純にあるんじゃあないかと思う。

ラトナヤカ　欧米のモデルの方が多いでしょう。アジアのモデルが非常に少ないものですから。

天野祐吉　それはもう単純に、欧米の生活の方が、我々の生活のお手本だと思っている人が多いからじゃないでしょうか。善い悪いの問題じゃないんですよ。そういうふうに思い込んできている、歴史ってのを背負っちゃっていますから。それは先程おっしゃいましたように、我々の歴史というものはやっぱり欧米崇拝、欧米をお手本にして出来た。歴史が、そういう、あっちはカッコいい、海の向こうがカッコいいんだ、それも海の向こうの西の方がカッコいいというふうに、それはどうしようもない一つの思考を、我々の想像力を押さえ付けてしまう枠組が、僕らの中にあるからだと思うんですね。やっぱりそれはさっきお話しになったように、それを自覚しながらどうやって壊していくかということを、していかないと変っていかない問題だと思います。

僕は普通が一番良いと思うんですよね。普通ということはさっき自然体とおっしゃった、それから、さっきリサさんが下半身だけで考えるとおっしゃったですよね。

あれはすごく面白いテーマですね。上半身と下半身とはどっちが偉いか、というエッセー書きたいなあと、さっき話を聞きながら思ったんですけどね。なださんがお書きになられた「片目の哲学」とか「人間、この非人間的なもの」というエッセイ集を、僕は大好きで非常に愛読したんですけども、その中でなださんが終始おっしゃっているのは「普通に見ろ」ということだったような記憶があるんですね。いかに僕らが普通に見ているつもりで普通に見てないか。コマーシャルってどういうふうに見りゃいいの、とよくいわれる。どう見りゃいいのって普通に見りゃいい。じゃあ普通の人間だから大丈夫ですねというけど、そんなことはないですよね。普通の人なんていないですよ、めったに。俺は普通の人だといっている人は、一番普通じゃない人が多い。どうやって自分の普通じゃなさということに対する想像力を働かせるか、ということが大切だと思うんですね。僕がびっくりするのはビジネスの中の言葉ですね、ビジネスというのがいかに今駄目になっているかっていうのは、言葉が駄目になっているからだと思んですね。僕らの想像力を萎えさせたり、枠にはめているのは全部言葉ですからね。例えばビジネスの会議に出るとですね、「その件についての情報はまだ入手していません」なんて言うんです。いるんですよ、そういう人。「知らない」ということでしょう。

「知りません」て言やぁ済むことを「その件についての情報はまだ入手していません」。「その問題考えておきます」て言えば良いのに、「十分吟味して前向きに善処します」とかですね。その手の言葉で応酬されている世界なんてインチキですよね。それが今駄目になっている理由ですね。だから下半身と上半身を、一体化してる人が必要なんですよ。下半身と上半身を分けちゃいけない。分けちゃあおかしい、一緒なんですから。で、そういう言葉を、女の人は持っていると思うんです、下半身上半身を一体化している言葉を。で、その言葉を僕は社会にそのまま持ち込んで下さいと言うんですよね。ところが女の人でも社会化、こう社会に入ってきて何かやり始めると、「その件についての情報はまだ入手……」になっちゃう。もっと普通に自由に振る舞ってくれるということが、一番今女の人に期待されていることですから。男はその点がちょっとおかしくなっている、というふうに僕は思います。

菅原真理子　ちょうど日本の国際化が欧米化であった段階と同じように、女性の社会化が男性になることであるということは、そういう言葉遣いにも現れているかも知れませんね。それでちょっとまた元に戻りますが、アジアの件、さっき会場からご意見があった件についてですね、徐先生、例えば韓国では日本のように欧米に憧れる、

欧米並になりたいという気分が強いですか、それともアジアをもっと重視するような雰囲気が強いですか。欧米に憧れる、欧米のようになりたいというのが、日本の特徴だと良く言われるんですが、それは日本だけの特徴でしょうか。

徐明子　今の韓国ではあまり日本みたいに欧米に憧れるとか、そういうことよりは、韓国人の伝統的な女性像を基にして、だんだんと近代化していくということなんです。日本みたいにあまり先にコマーシャルとか、そういうことで欧米化が進むということはないんです。

菅原真理子　西欧化、近代化にも色々なやり方があるということですね。角田先生どうぞ。

角田房子　私は五、六回取材に行ったというだけで、少々近代史をかじったというわずかな知識で、物を申すのは間違いが多いでしょうけど、韓国の人々と私共日本人との個人は別として、民族的な差だと思うんですね。例えばあの明治の初期頃から、両方とも、向こうはすぐ開国はしておられませんけども、欧米からの早く国を開きなさい、条約を結びなさいという攻勢は受けておられます。日本は早々とこれを受けて開国しております。この時に日本からの使節が韓国へ行きますが、それが燕尾服とかモーニングとかそういうのを着て、とにかく欧米風な服装で出て行く。韓国の人はその頃の記録によりますと、そうした日本人の服装をあざ笑っておられるんです。日本は何だ、ちゃんと日本伝来の伝統のある正しい服装がある筈なのに、まあ猿真似みたいにすぐ「足が痛い、足が痛い」と怒りながら靴を履いて歩き回っている。何で欧米の真似をすることがあるかと、不思議な国だなあということを書いております。それは、どちらの国が善いか悪いかと簡単にいえることじゃないです。こちらは何でもかでも取り入れて、あれだけ早いテンポで近代化ができました。韓国の方は一つ一つ抵抗して、日本人も勿論チョンマゲを切る時に抵抗があって、切らないといった人があるんですけど、韓国で長い髪を切れと言われた時の抵抗はすごいもので、自分の個人の誇り、民族の誇りを奪われると命がけの抵抗でございました。そういうふうに一つ一つの例をあげても、民族によって対応の仕方が違うということが、わずかな私の知識の中でも驚くほど鮮明に出て参りました。

菅原真理子　日本人は本当に急いで効率的に、近代化しなければならないということで、色々なものを見過ごしすぎて、大事にしなかったと言うことがあるような気がしますね。どうもありがとうございました。高橋先生、この国際化の中で、女性が政策決定に参加するということが、大変大事だろうと思うんですが、発展途上国、アジアの国々で、女性達が政策決定の場に色々立合ってき

ているのに接せられたことがありますか。

高橋久子　発展途上国では、女性も非常に高いポストについている人がいる訳です。だからといって、その国の女性の地位が全体として高いか低いかということを、平均的にみるのはとても難しいと思うんですけども、発展途上国では、日本の場合より非常に高いポストの女性がいる。これは首相に女性がいるというようなことを見ても分かると思んですね。首相や大臣に女性がいる。そういう国々というのは、社会的に男女という差ではなくて、女性がそういう場に進出し得る条件があるんじゃないだろうかと思います。ところが日本の場合は非常にそのことが難かしいんですね。これはなぜだろうかと考えて見ますと、日本の固定的役割分担意識というのを、国際的に比較した資料がありますけれども、欧米に比べても強いというのは、まあ私共もそうであろうと思っていたんですが、発展途上国に比べても日本の場合強いんですね。

それからもう一つは、日本で政策決定の場に進出しにくいというのは、やはり年功で物を考えるという所がものすごく強いんではないでしょうか。したがって「国際婦人の十年」の間に打破しよう、打破しようといっても、まだそういうポストに女性が出てこないというのは、年功で考えているから、「いきなり小学生を大学に入れる訳にはいかないよ」というような所がありまして、徐々に徐々に女性を次第にあげていって、やがては到達する、もっと上のポストにも女性が出てくるよと言われているんですけど、まだそれが実現していない。しかしですね。日本はもはや経済大国と言われているんですね。国際社会の場で経済大国と言われて、国際機関の拠出金の分担は日本がアメリカに次いで多い。それから日本の経済はかなり世界に影響を与える。そういう立場になっていながらですね、日本では性の片方を差別しているというように、国際社会に思われるというのは、私は日本という国はいったい何て国だと言いたいんですね。まあ下村さんなどはよくご存知と思うんですけども、よく欧米から使節団がきましてね、日本で応対に出てくるのは、ドブねずみ色の服を着た男性ばかり。それじゃあ日本の女性はどこで一体接するかというと、日本は家庭に招待するほど住宅事情が良くないですから、料亭などに接待しますね。そこに出て来るホステス役というのが女性です。日本の女性というのはこういうことばっかりやっているのかと、そういうイメージしか持たないで帰る訳ですね。経済大国と言われた日本の女性の地位が、そういうことだというイメージを与えている。フランスの新聞が日本の女性は奴隷みたいだと書いたんですね。日本の女性は大変怒りまして、これはもう見下げられたものだ?て言ったんですけど、少なくとも外国の人に与えているイメージとはこういうことなんです。だから私共は差別撤廃条約の批准もできなければ、一体どういうことになるのかと思っていましたら、条約はやっと批准できましたけれども、やっぱり経済大国としての女性の地位を、国際社会においても一般の人に分りやすい方法で、世界に提示していくというのは、これから色んな所で、やっていかなければならないことではないかと思います。（拍手）

菅原真理子　本当にこれからですね。今高橋先生から年功序列と併せて、ちょっと問題提起があったんですけれども、若い方達にこれから何を期待するのか。特に若い女性達がこれからどういうふうな社会参加、生活設計を立てて行くのかということも含めてですね、先き程も下村さんに会場の方から質問もありましたので、一言いかがでしょうか。

下村満子　私がさっき若い世代に期待すると言いましたのは、むしろ何て言うのかしら、私の言う意味は非常に世代論的な意味でですね。若い世代がより良いということじゃあないんです。違う、という点が大切だといってるんです。異質という意味で良いと言うんです。異質ということにはネガティブな面もありますが、欠点と長所は常に裏腹なんですよ。だからなぜ若い世代を強調したかと言うと、女性の場合も同じなんですが、今日本の国を支配し、日本の指導的な役割を演じているのは男の、それも東大とか何とかを出た非常にワンパターンの、決まったパターンの男性なんですね。政治や経済やビジネスがなぜ駄目になりつつあるかというと、まさにワンパターンだからなんですね。それに官僚、今日は官界の女性の指導者も、この会場にいらして大変嬉しいことなんですけれども、しかし、まだまだ数からいったら圧倒的に大蔵省、通産省、外務省とまあほとんど男の城です。そういう中で考え方が非常に均一化している。東大を一番で出た人が一〇〇人集ってみてもですね、しょせん一つしか解答は出ないんです。東大が一〇〇人集って、同じようなメンタリティーで、会議を開いたって答は一つだということを、よくアメリカ人がからかうんです。アメリカのみならず他民族の国では、一〇人集って会議を開けば、だいたい一〇の違った意見が出る。そこでワアワアやるから色んな違う考え方が出て来る。そういう意味で、あまりにも日本の今の社会の指導層の構造が、一色になっているという意味でですね。まあ「新人類」とか何とか否定的な要素で言われていますが、そうした既成の構造から脱皮するための、一つのファクターとして若い世代に期待するんですね。よく実験をする時に、試験管に同じ薬をいくら入れても色は変わらないのに、違う薬を入れるとパッと色が変わる。昔よく実験でやらされましたね。ああいう役割を演じるという意味で、若い

方達の異質の面をうまく社会に取り込んでいく。だから若い人が皆さん立派で大変結構ですという話を、私はしたつもりじゃないんです。それからもう一つ、先程の先生のお話の中でも、私は具体的にお聞きしませんから分かりませんが、色々先生方にもご苦労があると思うんですが、その若い人の、折角持っているポテンシャリティを出せないようにしているのが、まさにこの既成の制度なんですね?たちなんです。親とか先生方とか文部省とか。そういう人達ががんじがらめに古めかしい過去の、我々がもうそろそろ転換を図らなければならない過去の価値観とか、過去の色んなルールとか秩序とかいうもので、若い人達をコントロールしようとするんで、若い人達がおかしくなっていくんですよね。私は先生方に是非お願いしたいんですけども、子供にもっと多様な見方を教えてほしい。私は去年から今年にかけて一年間、充電期間をいただきまして、アメリカのハーバード大学から招かれて、研究員のような形でいっておりました。自分の息子や娘と同じ位の若い学生さん達と、席を並べて勉強したんですけど、そこの授業の討論風景を見てまして、非常に面白いと思いましたのは、日本では先生の言うことを一方的に受け身で聞いてノートに取る。それがアメリカの大学では教授が一言言うとワアワア、ガヤガヤとそれに反論するんですね。大学もそうですし、高校もそうですけど、一つの答えにまとめようとしないんですね。何か問題提起して、それに反論して子供たちが色んなことを考えて、ああでもない、こうでもないと、そのプロセスを非常に重んじるんです。違うということを非常に大事にするんです。意見がAとBというふうに違う、それをどっちが正しいどっちが正しくないという判断を極力しないんです。それぞれ論理的に一つの考え方をなしていれば、なるほど君の考えも一つだ、しかしあなたの考えも面白いねと言って、色んな考え方を出してやる教育をするんでね。日本は先生の言う通りの答えでなければ試験もバツとかですね、そういう教育になっているんですよ。日本の若い人は駄目なんじゃなくて、そういうふうに教育している。私はこれからは一つのルールではなくて、違う子供たちが違うことを考える、一見無秩序のようになるかもしれませんが、そのことが素晴らしいことなんだという社会にしたいと思います。それから自分の頭で考えるという訓練を受けさせてほしいんです。おとなしく秩序通りにルールに従う子ではなくて、ルールを破るくらいの子でいいのです。そして自分の足で立って、自分の頭で考えて、自分の問題を自分で解いていく子供、その訓練を受けさせるべきなんです。そのためには何度も失敗していいんです。どん底まで行ってもいいんですよ。それを恐れて、もう皆んな過保護にして温室

みたいなところに入れて、肥しやって育てているからひ弱になるんですね。今先生方がおかしな子だといっている子がすごくいい子かもしれないんです。その辺をぜひ先生方にお願いしたいと思います。

菅原真理子　若い人達を伸ばしてあげたい希望は、本当皆んな同じだろうと思うんですけど、なだ先生、精神科医の先生の目からご覧になって、日本の社会のものすごい均一性、単一性への圧力の中で、おかしくなっている例がとても多いんじゃないかと思うんです。例えばアルコール中毒なんていうような話も含めまして、ちょっと何かコメントいただきたいんですが。

なだいなだ　ええ、少し医者に戻りまして、忠告めいたことを言わせてもらいます。多様な解決の方法を持っていれば、一つの解決が塞がれても、「東京が駄目なら大阪があるさ」という歌が流行りましたが、そういうふうに希望を持つことが出来る訳ですね。ところが若い時から画一的な価値観を追い求めて来た人達の場合に、挫折した今「もう駄目」そう思い込む人が多い訳ですね。思春期無気力症なんて、何故こんなものが増えちゃったんだろうと思いますけど、画一的な価値観が原因なんですね。これは学校教育が宿命的に持っている矛盾なんですね。世界的な問題だと思うんですね。だからイワン・イリイチなどという人は、メキシコのように、まだ義務教育が三年位しかない所で、すでに学校教育のもっている仕組みを批判している訳です。学校というのは非常に奇妙な画一的な価値観を我々に押しつけるものです。狂ったといわれる人を私は診てきた訳です。彼らは私達と違う価値観を持っているんですね。たまたまね。久里浜病院という病院に行った時、春日天皇（これは民社党とは関係ない）と称する患者さんがいたんです。でこの患者さんがボーナスをくれる、職員に。しかもそのくれ方が非常に優しい。その頃ボーナスはおしいただいてもらったものです。院長が出してくれる訳じゃないんだけれど。いつもけんかしている院長に頭を下げなければもらえない。ところがこの春日天皇は私が回診していると、ポケットの中にそーっと入れてくれるんですね。でもリクルートの株じゃないですよ、ただの紙切れなんです。こう新聞の端みたいなものに、三〇万とか二〇万と書いてあるんです。それを入れてくれる。何にも使えないお金ですけどね。しかしもらった人達は一喜一憂するんです。「先生いくらもらった」、「婦長さんあなたはいくらもらった」、「五〇万」、「私は三〇万」。そして若い若い女の子に「あんたいくらもらった」「一〇〇万」。私は口惜しがる「絶対にこれはおかしい。奴は狂っとる。」そしたら看護婦さんに言われたんです。「先生はこの患者さんに何をしてやったの。先生は精神病の薬だと、体がだるくなるような嫌

な薬を出して、飲みたくないと言っている患者さんに無理にその薬を飲ませている。治すためだと言うけれど、あの〝天皇〟という妄想をその薬でとることができますか」、と言うんです。なるほどそうです。「私はどうか。あの人が風邪引いて頭が痛くて食堂まで出て来れないと聞くと、枕元まで食事を運んで行くのは誰?私。氷枕を作ってやろうかとか言うのは誰?私。お腹こわしちゃった時に、ご飯をおかゆにして持って来てくれるの誰?私。」そう言われてね、やっぱりこの人に一〇〇万やった方が正しいと思った。(笑い)学歴社会というのに、私なんかもその地位に安住した方が、医者の方が給料が高いもんだから、便利ですから安住してる。しかしこれは非常にあやうい基盤の上に成り立つ価値観です。患者の立場になって考えるなんてよく言うんですけれどもね、本当に考えたら若い看護婦さんたちに一〇〇万やって、私達は三〇万で満足しなければいかん。しかし、そういう価値観を持つ人を、私達は〝狂った〟として疎外してきている。そして永い永い年代の間に、単一な価値観へと向かって動いてきた訳です。学校がそれを加速させた訳ですね。そのことを私達はいま考え直さなけりゃあいけない。これは私の意見じゃないですよ。イワン・イリイチと言う人の意見なんです。「人間が学ぶのはよろしい。しかし教えこむのはやめよう」と言うんですね、彼は。それは人間が一人一人自由に学べるようにネットワークを作り、先生と出会えるシステム。この学校に行ったらこの先生としか付き合えないという、相性の悪い先生に付き合ったらもう最後というようなね、そういう人間関係を強制するんではなくて、自由に先生と生徒が付き合える、自由な人間関係の中で授業を学べるようになれば、それが一番いいのだということを言っているので、私も同感ですね。私が極端なことを言っていると思わないで下さい。ほかにもちゃんと言っている人がいましてね。そしてこの人は世界でも耳を傾けられている人なんですね。私の言いたいことは、画一的価値観、秩序に、女性も組み込まれて、うめいているということ。そこのところを自覚してほしいですね。

菅原真理子　世の中の基準に組み込まれてしまうんじゃなしに、もう少し自由な自分というものを持った生活ができる、人生が生きれるというのは本当に羨ましい。そういうような人生を、自分で作り出していかなければならないと思うんですけども、秋川さんいかがですか。例えば秋川さんなんかは、普通の我々から見ると随分ユニークな、自分の行き方を大事にしていらっしゃるんじゃあないかと思いますが。

秋川リサ　私達から見ると、私達のが普通で、そちらの方が大変なことをしていると思うんですよ。そうでしょう、内閣総理大臣なんとか…ね。私達から見ると松田聖子さんの方が普通ですよ。(笑い)

私はちいさい時からすごくそういう好奇な目で見られました。私は日本人なんです。ですけれども父親が今ノールウェーに住んでいて、この父親は三人奥さんを各国に持ちまして、私が日本で生まれた後、今度はノールウェーに奥さんを見付けまして、そっちで弟が生まれて、あとアメリカに最初の奥さんの子供がいます。つまりアメリカとノールウェーに兄弟がいるんです。父とは疎遠のまま育ちました。今でも私は日本人と言っても「いや、でも違うでしょう」と言われます、必ず、絶対。「どこか外国で育ったでしょう」「いえ私日本の学校だから」「ああだから日本語うまいのね。」「私は日本人です。日本の学校を出て、日本の教育を受けて、日本で仕事をして…」「でも二世でしょ。英語出来るでしょ」「私は日本でしか育ってないから英語…」「どうして」これは本当に日本じゃうんざりするほどあるんです。三十六年、今三十六歳なりましたけど、なんでここで年齢言わなければならないのか知らないけど。(笑い)三十六年間これで本当に嫌な思いしました。その反対に芸能界なんかに入ると非常にある意味で、あのどなたもおっしゃらなかったけど、私はやっぱり日本人のどこかに戦後、つまり戦争に敗けた後の、白人コンプレックスというのがあるんじゃないかと思うんですよ。だから混血は格好良い。たぶんこいつは日本人じゃないぞ、カッコいいのは日本人じゃあなくて、アメリカ人だからカッコいいんだ。おかしいのは西欧人はみんなアメリカ人ときめているんですね、そして必ず「両親のどちらがアメリカ人ですか」と尋ねられ、「父がアメリカ人です」と答えると突然「お母さん商売なにやっていましたか」と聞く。(笑い)タクシーに乗っても聞かれる。「あの外人ですか」って言うからたまには、からかって「そうです外人です」「日本語うまいですね」「うまいでしょ」「じゃああのナニ人ですか」アメリカ人と答えて英語をベラベラしゃべられたらまずいとおもうから、「スペイン人」と言う。言葉を知っている人少ないと思うから。すると又必ず「スペイン人?どっちがですか」「お母さん」「偉い!日本の男もすごいでしょ。スペインの女を女房にできて」こうなんですよ。だから困っちゃうんです。子供の頃からこういう経験をしてきていますので、日本人は良い時には好奇心でものすごくあがめますが、たとえば、ニューハーフが出てきますと、あんまり陽の目を浴びなくなったり、外人の方がやっぱり素晴らしいっていうことになって、日本人の飽きっぽい性格というのが見えるんです。私は日本人なんですけども、こういう考え方すると、やっぱり西洋の血が入っているんで、考え方が違うと言われるんです。そうじゃないです。私は

絶対そうじゃないと思います。

芸能界は変わっている世界だとか、あの人は混血の子だから違うとか、あの人はこう言うユニークな生き方でと言われますが、私はただ自分の価値観の中で、自分の生き方を責任持って選んだと思ってます。責任持って亭主も選んだ。それがなかなか家事労働にも向いていた人で良かったと思ってます。何事も自分の考えで選ぼうとしたから、正直言って精神科の先生のお世話になったこともあります。何とかかんとか言っても、精神も疲れてくると、自分の価値観が間違っているんじゃないかと思う時期がいっぱいあった。明日このシンポジュームにいらっしゃる精神科医の北山先生の所に随分私通っていまして、まだ二万円借金があると思うんですが。(笑い)私も精神が萎えてしまう時があって、どんな価値観が正しいのか、正しくないのか、自分にも分からなくなってしまう。ただ特殊な世界に育ったために、特殊な価値観を持っているかも知れません。それに対して私はとても嫌だと思ったこともあります。そういう立場の中で出産なんかをすると、興味本位に見られることもあります。自分の精神にもろい所もあるという事も含めてだけども、今はこれは私の生き方だと思っております。

菅原真理子　そういうのを持てるっていうのは、やっぱりとっても素晴らしいし、皆もお互いにそういう生き方を、認め合う寛容さを持つことが、これからとっても大事になるんじゃあないかなという気がします。その時に、例えば私今も感じたんですけど、言葉がとても貧しいというか、表現力に乏しいというか、日本の人達が色々の生き方を認める時に、それを自分で表現できないし、人が表現するのを認めるということも、まだちよっと上手じゃないなという気がします。例えば天野先生なんか言葉の波及効果について、どんなふうにお思いになられますか。

天野祐吉　僕自身、さっきあんな偉そうなこと言いましたけど、「その件についての情報はまだ入手していません。」と言いかねないところがあるんですよね。どうやって、そういう時にそう言わないで「知らない」って言えるか。そういう意味じゃあ言葉ってものに対しては、自覚的になっていないと、どんどん言葉が窒息してくる。で、自分自身が窒息していくんですね。だから普通の言葉でもっと色んなことをしゃべりあう、話しあう、言いあうような〝場〟が、昔は多分井戸端というのがそういう意味があったんだろうと思うんですけど、今はそういう場が少なくなっているような気もする。そういうのを色んな形で、作っていけたらいいなと僕は思っていて、例えば雑誌を作るということも、井戸端を作るということなんですね、僕にとっては。そういうふうなつもりなんです。

特に言葉、表現の問題なんて、たった一つの正解というのはないんですよね。色んな考え方、表現の仕方があって、こういう表現の仕方が一番正しいんだなんてことはない訳ですよね。色んな表現があるから面白いというふうに見ないと、「これが正しい文章の書き方です」とかよくあるんです、その手のものがね。そういうものはやっぱりないんで、「子供の作文コンクール」を朝日新聞がやっているのを見ると、小学一、二年生まではすごく良いんですよ、それが上級生になると、どんどんつまらなくなって、大人はもう最悪になるというパターンをとっているんですね。あれはね、さっき、なださんもおっしゃった問題なんだけれども、画一的な方向に行かざるを得ない。そうすると言葉が窒息を始める。それを自覚しながら、どうやって窒息した言葉を使わないようにしていくかしかないなと僕は思いますね。特に単一の価値観というお話出たんですけど、単一の価値観では困るということはあるんだけど、単一の価値観で我々の世界が構成されているということ自体が、慣れで分からなくなっちゃうことの方がもっと恐い。慣れで分からなくなっちゃうってことは自分自身よくあるんですね。だいぶ前に「頭の良い子に育てよう」っていうドライミルクの広告のキャッチフレーズがあって、僕は頭に来たんですけどね。頭の良い子でないと、これからの世の中で損をすると言う、単一の価値観を植え付ける働きが、そういう広告にもある訳で、僕はその当時、家に帰って子供の寝顔を見て、こいつ頭悪いんだけど、世の中真っ暗になるんだなと思って、非常に悲しい思いをしました。まあそれは冗談で、頭なんか良くなくたって、面白い子になりゃあいいやと思いましたけども。しかし「頭の良い子に育てよう」みたいなコマーシャルを見ても、なんとも思わないというのも、感覚が慣れて働かなくなってるんじゃないかと思う。「違いがわかる男のコーヒー」で、コーダー伯爵とかルドルフ殿下が、インスタントコーヒー飲んでておかしいと思わないというのは、やっぱりどこか感覚がおかしくなってる。あれ普通に見ていたら、どうしたってヨーロッパの貴族が、インスタントコーヒー飲んでいるはずがない。あれはヨーロッパ貴族の没落ぶりを風刺的に描いたコマーシャルだ(笑い)というように思うのが普通だと思いますが。そう思わないで、なんとなくじゃあうちのだんなにもあれ買ってやろうかね、なんて、それはね、その単一な価値観ていうか感覚が、慣れでマヒしちゃってるんだと思います。そうならないためには、単一な価値観に誘導していくような言葉に対して、もっと気を付けないといけない。僕は家でテレビ見ている時、コマーシャルをよくやじるんですね。画面に向かって「嘘をつけ」とか、「バカ言え」とか言って、やじっていますけど

も、そういうふうにしていくと、けっこうコマーシャルに巻きこまれずに、おもしろく付き合っていける。

難しいことをきちっと勉強することも大事だけれども、家でごろごろテレビを見ている時でも、変なものは変だよと思う感覚を眠らせないように、いろいろ工夫はできると思うんですね。

菅原真理子　いきいきということですね。どうもありがとうございました。

だんだん、時間が過ぎていきますが、実は、もう一つ、会場からラブレターが届いております。高齢化社会についても、ちょっと、コメントをどなたかお願いしたい。

いままでの話とは、テーマが違うんですけれども、高齢化社会、いまどんどん進行している中で、女性達が、特に、三つの理由で、高齢化が大変重要な問題になってきている訳です。

一つは、女性の方が長生きするので、高齢者の中で、女性の割合、数が圧倒的に多くなる。

二つ目が、いままで女性が世話をするというのが、それこそ、固定的な役割分担で、女性がその世話役を一方的にやってきた。

ところが、三つ目、社会で女性の果たす役割、家庭で女性の果たす役割が大変、変化してきた中で、そうした社会のシステムを、全体としてもう一度見直しをして、これからの女性の生き方を考える時に、高齢化という視点を避けて通ることはできない。そういうことで、午前中にも、分科会でトークセッションがあった訳なんですが、私、非常に今日感心しましたのは、特に角田先生に高齢化問題をというのは、あれなんですけれども、なぜ、大変感心したかと申しますと、これからの日本、高齢化社会の一人一人の私達、男性もですが、女性も特に必要だと思うのは、物理的な年齢とは関わりなく、新しい問題意識を常に持ち続ける。そしてその問題について、非常に真剣にきちんと取り組んでいく。これは、天野さんがさっきおっしゃった、感性をいつまでもいきいきさせておく、一つの価値観の中に、すっぽりはまりこんでしまわないと言うことをとも、関係あるのかも知れないんですけれども、ちょっと、角田先生に、私よくそういうお仕事を、次から次と問題意識を持たれてされているということに、大変感銘を受けているのですが、ちょっと、ご自分のことをお話いただけないでしょうか。

角田房子　大正三年生まれ、七十四歳でございますから、お答えする資格が歳だけでも十分と思いますけれども、生まれつきたいそう楽天的で、何か次から次にやりたいと思うことがでてきて、一生懸命になるたちなもんですから、自分で努めて自分の年齢を忘れようという努力より、むしろちゃんと覚えてなくちゃと思うのに、忘れて

しまっているようなたちなんでございます。

私の周囲の同年齢から、またもっと上の方々とお話をして感じますことは、まったく同じ条件を持っていても、それから健康な状態が同じくらいでも、その人の気持ちの持ち方で「自分はつまらない、生きているかいもない」と暗くなっている人、そして、周囲にもその暗さをまき散らしている人と、慎ましい喜びを自分で見いだしている人との差は、とても大きいと思います。

自分は歳とってるんだから力も弱いし、能力もないんだからという態度で家族に求めていくということ、これはあまり私幸せにならないような気がしております。もし私が若い女でこれを言ったら、とても意地悪に聞こえるでしょうけれども、私自身この歳になっていて、なお、それはあまり幸せを生まないような気がするんです。もちろん、日本の福祉事業とか施設、それから政策、それらは、どんどん進んでいかなければならないのですし、それらを求める声は、聞かれるべきですけれども、自分個人の態度としては、自分であまり肉親家族に求めないで、向こうから温かい心づかいを与えてくれたら嬉しいという、喜びをできるだけ表現して有り難く受け取る。だけど、若い人達はその人々の生活で忙しいのだからと思ってあまり期待してなかったら、与えられなくてもそんなに失望することはないと思うんです。

自分が何かすること、まだまだ少しぐらい箒を持って動ければ、自分の家の前だけはきちんと掃除をして、人が気持ちよく通れるようにしておくとか、もう自分は車椅子になったけれども、文字はまだ読める。それで、自分と同年輩で視力が落ちたため、字が読めない人がいたら、「私のところへいらっしゃい、新聞でもあなたが読みたいと思うところを読んであげますよ」とその人なりに何か少しでも人にしてあげて、喜んで頂けることはできるのではないかという気がします。自分自身のことを申しますと、まだ韓国関係の歴史を二冊、三冊と書いていこうと思っておりますので、何時そういうおとなしい心境になるかわかりませんけれども、肉体的に衰えて肉体的な行動で積極性が持てなくても、精神の積極性は持てると思います。それから、感謝とか、その人の幸せ、安定した精神状態がでるのではないかというように考えております。

菅原真理子　どうもありがとうございました。歳をとるというのは、失うことではなしにいろいろなものを得ていくんだ、その積み重ねのプロセスなんだというお話で、大変力づけられます。

本当に、今日は七人のパネラーの方々に自然のことばで話して頂いたのではないかと思います。お話しているうちに、もう三時間以上アッ！という間に過ぎて

しまいました。そろそろ最後に移らなければいけないのですが、最後、二十一世紀へのメッセージ、ぜひ、これだけは北九州の女性に、日本の女性に、二十一世紀の女性に伝えたいと思うことを一分から二分の間で、お話していただきたいと思います。

それでは、秋川さんよろしくお願いします。

秋川リサ　二十一世紀のメッセージ、私も二十一世紀に一緒に行くもんですから、まず自分自身に対して思っていること、それをしゃべることによって、自分自身を確認していきたいと思います。やはり、自分の責任で自分の人生を送りたい。そして、自分の幸せは自分の力で作るものだと思っています。高齢化社会の話も出ましたけれども、私も歳をとる訳です。そのときに子供は、後二十年も経てば家を出ていくか、たとえ出ていきたくなくても、なるべく早く追い出したいと思っています。後は、主人と仲よく暮らせればいいものだと思っています。そのために、男女、夫婦というものを、今は子供がいるからとかではなく、大事にした関係にもっていきたいと思っています。また、仕事をすること自体も、非常に、私にとっては自分の人生にとって大切なことと思っています。

私が、まず女性として思うことは、母親になって改めて思った、自分の息子を戦争に送り込まないということ、そういったことを母親が子供に教えられたら、それから自然の美しさを大事にすること、あと命を大事にすることを教えられたら、もうほかのことはしなくていいようなものだと言えば変ですが、それが親としてしなくてはいけないことだと思います。

そして男の方にわかっていただきたいのは、家庭の平和を作れない男性、また作ろうとしない男性、お願いだからそれをさしおいて世界の平和だけを語らないで！（拍手）

菅原真理子　どうもありがとうございました。

では、天野さんどうぞ。

天野祐吉　人間は、面白おかしく生きていければ一番いい。そういう意味で女性は、いままで面白くなかったのかなと思ったりしています。実際、そういう面があったことは確かなんですが、これからはそういうことはなくして、それぞれみんな面白いという生き方をしなくては損をする。どんなものでも自分が面白いと思えば面白くなる訳で、面白くなくても面白くするのが、その人の能力ではないかと思います。

それから、ぼくは、二十一世紀は生きているでしょうが、いまから力を蓄えて、絶対、不良老年になってやろうと思っています。いまの老人に対する社会の冷たさを見返すためにも、素晴らしい不良老年なって悪いことをいっぱいしてやろうと、楽しみに老後の計画を練っている。物は、国境を越えて世界を駆け巡る。情報も駆け巡り、人間も駆け巡る。唯一、政治だけが、国境線をかたくなに守っている。そこに、非常なギャップができているんですね。しかし、必ずや地球が一つの単位として、機能せざるを得ない時がくると私は信じています。なにか単一の独裁国家ができるというのではなくて、ちょうど日本列島が、たくさんの国に分かれて戦争していた戦国時代の人が、関所が自由に通れなかった時代の人が、今の日本の状況を見ると、信じられないような日本列島になっている訳なんです。だから、いま不可能だと思われるようなことも必ずや可能になる。そう言う技術的な条件は揃っています。

二十一世紀は、そういう時代になると信じています。そのために、過去の古めかしい固定観念にしがみついている人と、そうでない人との間に、非常に見方の違いができてきますが、私は是非とも女性にお願いしたいのは、男中心のいま支配している層というのは、既得権を持っているので自分では降りられない。つまりそこから降りることは、自分たちの権力を奪われることになるから損なのです。だから落城寸前の城の中で殿を囲んで、みんなおかしいと思いながらそのままじっとしている。

女性はこれまで非常に受け身の存在だったのですが、参画していなかった女性達が受け身をやめて、是非ともるところです。

菅原真理子　下村さん、どうぞ。

下村満子　みなさんがおっしゃったことと同じです。私、先程申し上げた話のなかで二十一世紀、ほんとに私、生きているかわかりませんが、私自身の一つの時代認識というのは、正しいかどうかわかりませんが、いま世界中がいろいろなところでガタガタしています。これは、一見非常に危険な信号だ！世紀末だ！と言う方もいますが、私はあまり世紀末的発想をしないんです。これは、いわゆる地殻変動が行われているということで、二十一世紀に移行するための地殻変動の過程にあると、もっとポジティブに見ているんです。たとえば、男と女の関係、夫婦の関係、家族の関係すべてが変化しています。家庭崩壊とよくいいますが、私は、家庭崩壊とは考えない、家庭再構築、家族の再構築、過去の固定した家族の有り方から、新しい家族の関係へ再編成されつつあるために、ガタガタしてますが、決して私は、家族とか家庭を否定するものではないんです。ソビエトとアメリカとの間でも、色々な変化が起こっている。これも一つの大きな歴史の変革が、うねりの中で起こっていることです。経済もガタガタしています。いまや、お金は国境を越えて世界を駆け巡っている。日本やアメリカでも自分のところのお金をコントロールできないぐらい、自由自在に駆け

行動する女になってほしい。国際化の第一歩は自分の国を良くすることです。自分の国が恥ずかしくないということです。さきほど角田先生がおっしゃったように、やはり自らの国をまず良くするということで。いま一つは、戦争のない世界にしたい、それからクリーンな政治をどうしても実現したい。政治家が、そういうことを言うと少女趣味だ、リクルートなにがいけない、違法ではないと平然と言われていること自体がおかしいと思う。少女趣味でもなんでも結構なんで、私達は、あおくさいといわれても、どんどん言うべきことを言っていかなければならないと思います。それができるのは、女性だと思う。

女性の方は受け身ではなく、大きなことでなくてよいから、是非とも行動してほしい。

優等生は、やめましょう。冒険しましょう。（拍手）

菅原真理子　次は、徐先生お願い致します。

徐民子　一言で表現すれば、あらゆる面で積極的な姿勢で色々なことに熱心に、そして誠実に生活しながら女性達が実力を養成する時、女性の地位は向上すると思っています。

菅原真理子　次ぎは、高橋先生お願い致します。

高橋久子　この間、あるテレビを見て感動しました。それは、名前は忘れてしまいましたが、ある虫の幼虫が水中にいるんです。そして、川の流れが強くなると一生懸命、川底にしがみついているんですけれども、流されてしまうんです。その虫が流されて幼虫から成虫になるまでに2キロ流されます。こんなことを繰り返していたら、しまいには、その虫は川から海にいくのではないかと心配していましたら、その成虫は、卵を生む段階になると、或る日、突然、その川の川上に飛び始めるのです。ちょうど二キロ飛ぶそうです。ですから、幼虫が流される分だけその成虫は川上に飛んで、そして、卵を生むのです。虫も自分の種族を維持し、発展させるためにどうすればよいか、自分の子供のことをきちんと考えている訳です。私達、人間、いまに生きるものは、やはり二十一世紀に生きる私達の子供、孫たちがどういうふうに生きるか、その環境を作るという責任を負っていると思うのです。水、空気そういう環境の問題と共に、社会体制をどうするかという問題があります。先程から、単一の価値観の問題がでましたが、そういう中で生きていると人の痛みがわからない。一つの価値観で、その価値観に押しひしがれるものの、痛みがわからないということが起こります。イタイイタイ病というのは、怖い病気ですけれども、イタクナイイタクナイ病というのも怖いと思います。他の人の痛みに無感動になってしまう。だから、私たちは今の社会がおかしいと思ったら、これを直して次の世代に引き継ぐ、その努力をしなければならないと思います。

そのためには、やはり身近かな一つ一つのことを、男女差別の問題は、これほど本音と建前の違う問題はないと思いますから、ここにお集まりの方は、ご家庭にお帰りになって、まず自らの家庭から直していく、自らの職場の周りから直していく、そういうささやかな努力が、次の世代に良い二十一世紀をもたらす、その原動力になると思います。

菅原真理子　角田先生、お願い致します。

角田房子　七十年以上生きて参りました私が、過去の苦い反省、後悔それをもとにして、若い方に一言申し上げます。

これは、女性ばかりではございません、男性もそうでしたが、戦争中に、なぜ、すべて権力者の言うとおりに、ただおとなしく羊の大群のようにおとなしく指示された方向について行ったのか。

声を上げるべき政治家も黙っていましたし、軍部が押さえていたから、殺されるというでしょうけれども、殺されてもなお言っていただきたかったし、私たち大衆に至っては、唯々諾々とついていった。本当に私を含めて大衆もだらしなかった思います。それは、まずはじめに社会に対し、政治に対して、ちゃんと関心を持ち、知識を持っていなかった。そして、それについて自分で考えようとしなかった。考えなかったから、上からこうだと言われると、信じてもいないのに、そうかなとついていった結果が、あの無言になりました。

私は、終戦の時、まだ歩けない赤ん坊と、その上の男の子を持っていましたが、終戦があと一月遅れていたら、少なくとも栄養失調になっていた次男は、死んでいると医者が言っておりました。

そこまでの極限状態にきているのに、なお、子供二人を飢えから守ろうというだけが精一杯で、なんにも考えもせず、ただ食べ物を捜していたという哀れな状態におりました。どうぞこのようなみじめな生き方をしないで、自分の頭で考えて、これでいいと思ったらそのとおり従っていただきたい。決して国策、政策のすべてに反対しましょうといっている訳ではないのです。

いまの税金問題にしろ、防衛費にしろ、これで良いとお思いになるか、これは危い方向に進んでいるとお思いになるか、それについてまず、大衆の間から声が上り、それが一つになって初めて強い力になる、そういう時代であるように願っております。これはだらしなく生きた年代の私からの言葉でございます。

菅原真理子　なだ先生、お願い致します。

なだいなだ　一つは、「なんとかの母親の会」、「なになにを守る母親の会」とかよくあるのですが、あれは、母をとって「親の会」ぐらいにしてもらいたいと思います。

私は古い記憶をもっていますから、新しい記憶の人にはわからないかもしれませんが、「靖国の母」という記憶が鮮烈に浮かび上がるので、母から抜け出してほしい。

それからもう一つは、学校で行われている清潔教育です。きれい、きたない、あれです。日本の清潔教育では、きれいは　きれい、きたないは　きたない。それでは、シェークスピアのマクベスの芝居のなかの魔女のセリフ、「きれいは　きたない、きたないは　きれい」は分からない。日本の教育では、きたないは　きたない、きれいは　きれい。そして、差別に向いていく。私は「人間、この非人間的なもの」という本のなかに、きれい好きの殺人者を、ナチズムにおける不潔恐怖症的なきれい好きと、残酷さを観察しながら書いたのですけれども、これは意外と忘れられていることです。みんな、きれい好きというのは、文化の象徴のように思っています。しかし、私は医者をしてきましたから考えるのですが、癩病の患者さんをみて、きれいは　きれい、きたないは　きたない、と言っていたら救うことはできません。私達は、きたないは　きれい、きれいは　きたない、という価値の転換をしなければ、そういう仕事につくことはできない訳です。

看護婦さんという仕事に携わる人が、少なくなっているとしたら、それは、きたないは　きたない、きれいは　きれい、と教えた結果だと思います。

これは、高齢化社会の問題にも重なり合うことだと思いますので、一言、二十一世紀の人にアピールしておきたいと思います。

菅原真理子　本当にありがとうございました。（拍手）

「日本女性会議'88北九州」のシンポジウム、ここに、多様な生き方、多様な価値観を、多様な情熱で先生方が一言一言語りかけていただいたことを大事にして、二十一世紀の女性はどうするか、皆さんと一緒に考え、そして生きていきたいと思います。（拍手）

どうも、今日は本当に皆様、ありがとうございました。

吉永小百合　「華の乱」を語る

吉 永 小百合

末吉市長　「日本女性会議'88北九州」の主催者を代表いたしまして、吉永小百合さんをお迎えするに当たり、一言ご挨拶を申し上げます。私、今吉永さんにお会いして非常に緊張いたしております。

この会議も、「女性21世紀展」の開会から始まり、昨日はドナルド・キーン先生をお迎えしての「日本文学と女性」の記念講演、本日は先程までの活気溢れる「シンポジウム」、これからの「小百合さんのトーク」、明日は「国際女流映画祭」、「カップルズプラザ25」とたくさんの皆様をお迎えして盛況のうちに進んでおります。

私は女性の能力や意欲を高く評価し、今後の北九州の、いや世界の発展のために、女性に大いに期待を寄せております。人の能力にはさまざまな能力がございます。それは、政治、経済、社会、文化等でございます。本日はその文化の中でも女優として、幾多の後世に残る作品の主演を演じられ、多くのファンの憧れの的であります吉永小百合さんをお迎えすることができました。これも実行委員会の皆様方の熱意と、ご努力のおかげと感謝致しております。

私自身、本日は大変あがっておりまして（笑い）、私のご挨拶は短く切り上げて、皆さんお待ちかねの吉永さんに早速お話しいただくことにいたしましょう。それでは小百合さんどうぞステージの方へお越し下さい。（拍手）

吉永小百合　ありがとうございます。今日は「日本女性会議」に呼んでいただいて大変光栄に思っております。私が映画の世界に入りましてから、もう三十年近く経っておりますけれども、今日は私の生きてきた道と、今日「華の乱」という映画を皆様に観ていただくんですが、その映画で与謝野晶子さんを演じて学んだことなどを、皆様にいろいろ聞いていただきたいと思います。短い時間ですが、どうぞ私と一緒に楽しく過ごしていただきますよう、よろしくお願いいたします。

司会　それでは、吉永さんにお話を伺っていただく方をご紹介いたします。オフィスヌーベルバーグ代表で、映画の上映活動など幅広い活動をしていらっしゃる前田秀一郎さんです。どうぞよろしくお願いします。

前田秀一郎　小百合さん、こんにちは。よくいらっしゃって下さいました。まず、この北九州のご感想からちょっとお伺いしたいと思います。

吉永小百合　三年前に「玄海つれづれ節」という映画でこちらに参りまして、一ヵ月位こちらで撮影をしていたんですけれども、とても人情味のあるところで、今日もどっと懐かしさがこみ上げて参りました。

前田秀一郎　「玄海つれづれ節」の撮影はちょうど今くらいの寒い時期でしたね。

吉永小百合　そうです。今日も雪がチラチラ降っていて、

また独特のムードがありますね。

前田秀一郎　それではここで、吉永小百合さんのこれまでの主な作品をスライドで見ながら、女優としての軌跡、生きてこられた道を簡単に見たいと思います。スライドをお願いします。

ええ、これは「キューポラのある街」ですね。

吉永小百合　ええ、これは私にとって二十八本目の映画になるんです。私がなぜ映画の世界に入ったかと言いますと、中学を卒業して高校に行こうと思っていたんですけれど、家がちょっと事業に失敗したりして、経済的にひどい状態になってしまって、アルバイトをしなければ行けないということで、勧められて撮影所に入ったんです。たまたまこの「キューポラのある街」のジュンという主人公も、同じように家の状態が悪くって、高校の進学について悩むんですよね。私がこれを演じたのは十六歳の時だったんですけれども、この映画の主人公のジュンと同じように、悩みながら仕事をして夢中で生きていた時代で、とても印象が深いんです。

前田秀一郎　これは「泥だらけの純情」ですね。

吉永小百合　当時はアクション映画の全盛だったんです。ですから青春映画っていうのは少なかったんですけど、この映画は純粋な愛を描いた私の大変好きな作品です。叶わぬ恋で最後は心中してしまうんですけども、とても素敵な作品だったと思います。

前田秀一郎　続きましてこちらは「愛と死をみつめて」。

吉永小百合　私、高校に行くために撮影所の門をくぐったんですが、どんどん映画のほうが忙しくなってしまいまして、それでとうとう高校に通うことができなくなってしまったんですね。で、とても悩みまして、このままでは中途半端でどういうふうに生きていったらいいか分からない、なんて考えていました。この時、この「愛と死をみつめて」の原作者大島みち子さんの日記を読ませていただきました。彼女は不治の病でもう長く生きられないと医者に宣告されるんです。それなのに前向きに自分の生と死を見つめて、最後までしっかり生きられたということで大変感銘を受けまして、撮影中もみち子さんに対して恥ずかしくない仕事をしたいという思いでいっぱいでした。

前田秀一郎　こちらは早稲田大学で写した写真なんですけれど、高校を出て、大学へ行くっていうのは、この時期の吉永さんの映画の撮影とか、その他のスケジュールからすると、ちょっと人間業とは思えないくらいだったんですね。

吉永小百合　そうですね、たまたまちょうどその時期に撮影所に組合が出来たんです。それまではほとんど寝ずに、一日に二時間か、三時間くらいの睡眠で次から次ぎ

へと映画を撮っていたんですが、組合の規定で夜中の仕事はしないとか、そういうことがきちんと決められたんです。それで比較的夜の時間が空くようになりました。で、空いてしまうと今度はどうしてよいか分からないという部分もありますし、私はプロ野球が好きなもんですから、ついついテレビばかり見ちゃうんですね。これではやっぱり自分でも駄目だなと思って、出来れば夜の学校に行って、勉強したいというふうに思うようになって、それで自分でこつこつとやりまして、大学を受けるための資格試験を受けて、まあなんとか受かって、今度は本当の受験をした訳なんです。

少女時代、十代の頃というのは本当に夢中で仕事をしていたもんですから、自分の置かれている立場とか、この仕事が私にとってどうだとか、そういうことは考えないで来てしまったんですよね。それが二十歳近くなって来まして、このまま自分はずっと行けるんだろうかと思うようになったんです。ちょうど少女から大人になっていく時期に、こういう撮影所だけにいると何かとっても怖いなあ、というようなことがありましたし、映画界自体もひところのようなものすごい隆盛から、少しづつ陰りが見えてきたような時期でもあったんですね。ですから、どうしても仕事の方に完全に埋没することが出来なくて、学校に行きました。学校ではたくさん友達が出来て、山に登ったり、スキーをしたり、そういう楽しみを覚えました。

前田秀一郎　あの、ちなみに学部は何学部だったんですか。

吉永小百合　文学部なんですけれども。

前田秀一郎　今、女優さんとか、歌手の人とかいうのは、大学へ行くよりも働いた方がいいみたいなことで、行かない人も結構いるんですけども、検定試験まで受けて大学に入って、学ぶっていうのは大変なことだと思うんですよね。そこまでして学ぼうというのはどういう……

吉永小百合　学ぼうというほどの強いものはなかったんですが、自分でいろんなことを決める前に、職業として俳優というものをやらざるを得なくなったっていうことで、何か違う場所で生活することが大事なんじゃあないかなと思ったんです。高校を自分としてとっても残念な形で、止めざるを得なかったことへの反発もあったと思います。

前田秀一郎　そして次は岡田太郎さんとの結婚の写真なんですけれども、やはり女優をやっていての結婚というのは、大きな一つの問題だと思うんですが。

吉永小百合　そうですね、二十代の半ばくらいで仕事に対して大変悩みまして、何をやってもうまく行かない時期があって。とにかく周りからは大人の演技をしなさい、

脱皮しなさいというふうなことを言われたんですけれども、私自身もう一つそれに乗り切らなかったし、それにやはり遮に無に働いてきましたから、非常にストレスがたまってしまったんですね。で、ある時疲労とストレスから声が出なくなったんです。声が出ないということは、俳優にとって致命的なことなんですね。で、毎日撮影所へ行くのが怖くて、つらくて泣いてばかりいたんですけれども、それでもじゃあこの仕事を降りますということが、言えない訳ですよね、約束していたから。だからできる限りの小さな声で、仕事をせざるを得なくなって、それが一年続いたら段々限界にきまして、もうどうにもならない状態になったんです。

その時、私のひどい状態を見て、渥美清さんがお話をして下さったんです。その頃アフリカに行かれて、アフリカの広い大地でテントを張って寝ていらして、夜中に用を足される訳ですね。そしてひょっと空を見上げたら、星が降るように輝いていて、とても素敵だったんですよって、渥美さん独特の語り口で話していただいたんです。その時、私は初めて決心したんです、私は休まなくてはいけないなって。やっぱり人間らしい生活をまずしなけりゃあいけないと思ったんです。たまたまそういう時期に恋愛をしまして、その相手が人間らしく生きるということを、大変強く思っている相手だったものですから、じゃあ、とにかく仕事を休んで、一度全部今までのあかみたいなものを捨てて、人間として、女性として生きてみようというふうに思ったんです。それで結婚しまして、親に反対されまして駆け落ち結婚みたいな形だったんですけれど、一年間一生懸命、八百屋に行ったり、お肉屋さんに行ったりして、それまでの自分の仕事と全く縁の無い所で生きたんです。銀行なんかもそれまでどうやって、貸し出ししたりするのか分からなかったんですけど、そういう勉強もできましたし、何かこれまでの疲れというのか、精神的な疲れがあの時期にどんどん洗われていったような気がしました。

前田秀一郎　そして一年間の後、また新しく映画への炎が燃えてきたのは、この「動乱」ですね。

吉永小百合　そうです。結婚しました後は、これまでみたいな人間としての生活を、否定するような仕事の仕方はしたくない、もう自分自身のために慎ましやかに仕事をしていこうということで、非常に押さえてやっていたんですけども、一九八〇年に「動乱」という映画に出させていただいて、自分の仕事への思いというのが変わったんです。どういうふうに変わったかと言いますと、十代の時は映画というものが、自分にとっての全てだったんですが、二十代になってテレビが普及してくると、テレビにちょくちょく出るようになって、一方、映画のほ

うはポルノ全盛みたいになって、私の出る幕がなくなっていたんですね。だから映画に対する情熱というのが失せていたんです。ところが、この「動乱」という映画で、本当にもう映画の虫みたいなスタッフの方と、それから高倉健さんに初めてお会いしまして、一年間、本当に丁寧な映画作りをしました。その中で映画ってなんて素敵な仕事なんだろうと思ったんです。こういう本当に手作りの素朴な仕事に、もう一回私は地に足をつけて参加してみたい、と思いました。そういう意味で「動乱」は、私にとってターニングポイントになった映画なんです。

前田秀一郎　それから毎年、「細雪」、「天国の駅」、そして北九州でロケをした「玄海つれづれ節」と続くんですね。

吉永小百合　それぞれ、どれもバラエティーに富んだ仕事をさせていただきました。

前田秀一郎　そして百本目を記念して「つる」をお撮りになったんですね。

吉永小百合　これは人間でなくて、鶴を演じたので、やはりとても大変だったんです。女性の情念を鶴に託して、動作なんかも研究して、鶴になりきるように私なりに努力したんです。

前田秀一郎　そしていよいよ「華の乱」ですね。この「華の乱」は与謝野晶子さんの人生を描いた映画なんですけれど、皆様これからご覧になるので、ストーリーに関しては詳しく申し上げませんが、この撮影をなさってお感じになられたことを伺いたいのですが。

吉永小百合　とても感動いたしました。与謝野晶子さんというのは不世出の歌人で、私達も教科書で彼女の歌とか詩に触れたことがあったので、とても緊張しました。どうやったらいいのかと思いまして、撮影に入る前に、与謝野晶子さんに関する色んな本とか、与謝野晶子さん自身の評論などを読ませていただいて、今まで知らなかった部分が見えてきて大変興味を持ちました。皆さんご存知ない方がいらっしゃるかもしれないんですけれども、与謝野晶子さんという方は、十一人のお子さんを育てられた方なんですね。十二人お産みになって、一人は早く亡くなってしまったんですけど、とにかく十一人のお子さんを育てて、しかも一家の経済を支えてバリバリ仕事をなさった。そういうのがとても興味がありました。というのは私自身は仕事と家庭というものを切り離して考えておりましたけれども、もし子供を持って子供が熱を出したりしたら、私は仕事に行かないんじゃないかなんて思ったんですね。それと、十代の頃は自分自身のために仕事をするということじゃなくて、ただ経済的に頑張らなきゃいけないという状態だったものですから。結婚後はとにかく自分のために仕事をしようということで、

子供も作らずに、そういう意味ではのんきにやってきたんです。与謝野晶子さんの生きてこられた道っていうのは、そんな生優しいものではないんですよね。彼女が二日でも三日でも寝込んだら、子供たちの食べる物がなくなってしまう、そんな状態の中での仕事だったと思うんですね。それなのに五万首以上の素晴らしい歌を詠まれて、また評論もたくさん出されておられます。私が一番好きなのは、「君死にたまふことなかれ」という素晴らしい詩なのですが、社会の中で女性がどう生きたらいいか、また戦争に対しどういう思いを持っているかについて、心の底から考えていらっしゃるんですね。私、とても尊敬してこの撮影に入りました。

また、撮影の方も大変な撮影だったんです。今年の四月から八月の半ばまでかかったんですけれども、私は全シーンに顔を出していて、大正時代に生きて死んでいった伊藤野枝さんとか、松井須磨子さん、大杉栄さん、有島武郎さんたちの生き方をじっと見ているんですね。それで撮影の方はもうほとんど、朝から晩まで出ずっぱりだったんです。この映画の監督をなさった深作欣二さんという方は粘り強いっていうか、しつこいんで有名なんです。「仁義なき戦い」とか、「蒲田行進曲」という名作を作られた方なんですが、〝深作〟というのは〝深夜に作業〟をするから、というくらいに真夜中まで、毎日毎日撮影いたしまして、健康維持というのか、もちろん美容もそうなんですけれど、そういう面でも大変でした。

前田秀一郎　吉永さんの人生と与謝野晶子さんの生き方で、似ている部分と似ていない部分があると思うのですが、吉永さんの場合は女優という仕事、与謝野晶子さんの場合は文筆活動ですね、その辺を比べてどうですか。

吉永小百合　仕事の内容という点からしたら比べようがないのですが、与謝野晶子さんの場合には、常に彼女が一家を引っ張って行くという大変さを持ってらしたと思うんですね。彼女自身のための時間というのはほとんどなかったんじゃないかしら。例えば寝る時間を削らなければできないとか……。それに比べて私は自分の楽しみのためというか、自分のために映画をやっています。もちろん一人で生きている訳ではないので、仕事と家庭とのバランスについては夫と良く話し合って、どうやっていこうかということを決めました。その結果、子供を作らないでやっていこうというふうに思ったんですね。それで、今度与謝野晶子さんを演じて、彼女のたくましさというか、本当の意味の力強さに触れた思いがするんです。お子さんを産んで、十一人もきちんと育てて、良い仕事をなさったということが素晴らしいと思うんです。子供か仕事かなどと迷わない力強さを感じるんです。

今、育児と仕事の関係みたいなことで色々論争になっ

ていますけれども、あの当時、与謝野晶子さんと平塚雷鳥さんの間にも、とても大きな論争があったんですね。与謝野晶子さんは、あらゆる面で、経済的にも精神的にも男性から独立することが、本当の意味の女の自立につながるんだ、だから全ての女性が社会に出て仕事をすること、家庭だけに引っ込んでなくて仕事をすることを、覚えてほしいということを言われたんですね。あの当時としては相当思い切った発言だと思いますね。平塚雷鳥さんの方は、子供を産むということは女性にとって大変な仕事である、だからやはり国が保護すべきで、そうしなければ女性の地位の向上はあり得ないということで論争したんです。私は与謝野晶子さんを演じたから言う訳ではないんですが、私自身小さい頃から仕事をしていて、とにかく働くっていうことが、私にとってはごくごく自然なものですから、その意味がとてもよくわかりますし、今から六十年以上も前にそういう論争があったということは素晴らしいことだと思います。今、女性の地位は非常に上がっていますけれど、私はもっと真面目に、もう一回その論争を蒸し返してもいいのじゃないかという気もするんですよ。

前田秀一郎　「華の乱」の中に、与謝野晶子さんを中心にして、伊藤野枝さんとか、松井須磨子さんとか、色んな女性が出てきますね。彼女たちは皆それぞれに女性として自分の思いのままに生きていく、そういうところが共通しているような気がするんですが。

吉永小百合　そうですね。この映画の中には、大正時代に非常に進んだ考えを持って、生きた女性がたくさん出てきますけれども、その方たちは亡くなっていく方がとても多いんですね。伊藤野枝さんは殺されて、心中してしまう人もおりますし。だけれどもなぜ死んでいってしまうかというと、一生懸命生きたようとしたために死を選ぶみたいな気がしたんです。それらの人々と与謝野晶子が違っているのは、与謝野晶子は生きようとして生を選ぶ、常に前に向かって生きるということを、前提としてものを捕らえている。なんていうのかしら、頭でっかちじゃなくて、とても考え方が地に足がついている感じがするんですね。無理がない感じがする。それは、母親として十一人子供を育てたという現実の中から、生まれてきたことなのかもしれないと思います。

だから私なんかは、子供を一人も産まず育てもしなかったものですから、そういう意味では一番大事なことをしないで、逃げてしまったんじゃないかという思いがちょっとするんです、自分自身で。多分私が長い人生が終わるときに後悔するとしたら、そのことかなあという気がします。

前田秀一郎　今日は色々なお話をお伺いできてとてもよ

かったと思います。今日この「日本女性会議」に参加の皆さんの中には、自分で仕事を持ち経済的にも独立した、新しい女性も多いと思いますが、そういった方々へ、女性の地位向上ということに向けて何かメッセージがありませんか。

吉永小百合　与謝野晶子さんが大正時代の初めに、「たいがいの仕事を女性はやる能力があるんだけれども、今のところやる機会が与えられていない。チャンスを与えられないからできない。女性が堂々と男性に伍して仕事をしていくためには、これから五十年はかかるだろう」ということを言っていらっしゃるんですね。それからもう六十年以上経った今、彼女がそう言っていたように女性の地位も向上してきて、女性がいろんな分野で活躍していると思うんですね。ただ、その分、あの大正時代みたいな厳しさが無くなって、私たちの中に甘えみたいなものが、出てきているような気がするんです。ですから、私達はそういう先駆者たちの労に報いるためにも、もう一回、私達が頑張って良い仕事をやらなくてはと思うんです。私自身、この三十年間、百一人の女性を演じてきましたが、これからどれだけ演じられるか分かりませんけれども、これからも皆さんに納得していただけるような女性像を演じて、たくさんの方に見ていただきたいと思いますし、その歳、その歳なりの女性を演じられる存在でいたいですね。

それと同時に、映画の世界っていうのは、今までは本当に男性のスタッフが多くて、男性中心に作られてきたんですね。ですから、今日ここにおいでの皆様も、映画をお好きだと思うんですけれども、若い方で映画の世界に入って、監督さんとかプロデューサーとか、そういうスタッフになって下さる方がどんどん増えて、女性が皆で一つの映画を作り上げるみたいな、そういう時代になるといいなと思っているんです。

前田秀一郎　今日は吉永小百合さん、大変ありがとうございました。皆様、今から映画「華の乱」をご覧になって、その後でまた、色々とディスカッションをしていただければいいんじゃないかと思います。今日は本当にありがとうございました。

吉永小百合　こちらこそ、どうもありがとうございました。皆様ありがとうございました。（拍手）

カップルズプラザ25「男のホンネ、女のホンネ」

堀尾正明　カップルズプラザ！

北九州の女性の皆さんが、一年がかりで準備を進めてこられました「日本女性会議'88北九州」も、今日が最終日です。とにかく、この西日本総合展示場、たくさんの人がつめかけておりますが、今日、この「カップルズプラザ25」のイベントが最後のイベントになりますので、男と女の新しい二十一世紀に向けて、たくさんの方の参加のもとで色々な本音を話していただきたいと思います。よろしくお願いします。申し遅れました、私、ＮＨＫアナウンサーの堀尾正明でございます。そして隣りにいますのが私の伴侶です。

堀尾恵理子　よろしくお願いいたします。それでは、「カップルズプラザ25」に出演して下さる方々をご紹介いたしましょう。次々とこのステージに出て参りますので拍手でお迎え下さい。

（カップル登場、席につく）

堀尾正明　以上三十八組の、25に何らかの関係がある方々でいらっしゃいます。そして素敵なゲストをお迎えしましょう。昨日もパネルディスカッションで大活躍して下さいました、女優の秋川リサさん、そして精神科のお医者様でエッセイスト、またフォーククルセダースの元メンバーでいらっしゃいます、きたやまおさむさんです。

堀尾恵理子　さて、これから二十一世紀にあるべき男と女の姿を、皆さんの家庭の事情を全部吐露していただきながら話を進めていこうと思っております。秋川さんときたやまさん、アドバイスをよろしくお願いいたします。

堀尾正明　ご夫婦でいらっしゃっている方もケンカにならない程度に、本音をどんどんぶつけていただきたいと思います。あの、はっきり言ってケンカしてくださっても、かえってこちらにとっては盛り上がるんで、よろしくお願いします。（笑い）

秋川リサ　こんにちは。私の場合、昨日のシンポジウムでは、「女性とセクシャリティ」というテーマを持たされまして、二十一世紀に女性はどう生きるかというお話をしたんです。たとえば「女が二十一世紀をどう生きるか」とか「二十一世紀の男女のあり方」というふうに、大きなテーマをつけてお話をしなければ、まだ女性のことを語る時、特別なことを語るというふうに思われているようですね。女性も男性も、一人の人間です。性が別なだけであって、人間としてどう生きるかってことは、誰だって人から話を聞かなくたって真剣に生きてる訳です。その中で男女の関係は、二十一世紀にどうなるかを考えるのですが、本当のところそれはわかりませんよね。私自身も今、夫がいますけれどもその夫が蒸発するかもしれないし、また他に好きな人ができるっていうことだってあるかもしれないし。人間はどう生きるかなんて、きっ

●ゲスト

秋　川　リ　サ（俳優）

1952年、東京都生まれ。お茶の水文化学院英語科卒業。1967年、モデルとしてデビュー。ファッションショー、テレビドラマ、舞台、映画、エッセイなど幅広く活躍中。1986年、ラマーズ法による自宅出産を公開して話題となった。著書に「私のラマーズ法　出産と育児ノート」がある。

きたやまおさむ（エッセイスト、精神科医）

1946年、兵庫県淡路島生まれ。1965年、大学在学中に〝フォーククルセダース〟を結成、1967年、「帰ってきたヨッパライ」でデビュー。1972年、京都府立医科大学卒業。1974年から２年半、ロンドン大学医学研究所で研修を受ける。現在、精神科医として、医療に携わるかたわら講演、コンサートなどを年に数回行う。著書に「止まらない回転木馬」「うい・あー・のっと・ざ・わーるど」など。

と自分の人生の自分で考えた教科書の中から、自分で選んでいくしかないんだから、私がこの先どう生きるかっていうのは、わからない。ただ確かに昔の時代に比べれば、女性も職場に進出でき、女性の権利というものも男性と対等になってきたように思われます。でも、まだまだ難しい。自立っていう言葉が非常に流行語になりまして、あわてて女性が「じゃ、私も自立しなくちゃ」って言うので、「一体、自立って何なの」と聞くと、すぐ専業主婦の方は、「仕事に行くことね。でも、私は無理よ。働き口がないから」と、おっしゃる。なるほど自立の一つに経済的自立がある。でも、自立とは仕事を持つということなのか。たとえば、亭主の給料の中で自分の給料を換算すると、いくらくらいの給料をもらえる立場だと、考えたりすることありますよね。でもお金っていうものは、色んな方法でそれなりに手に入れることは、さほど難しいことではないと思います。それより自立っていうのを、もっとつきつめて考えてほしいと思います。結局、最終的に人間は、自分自身との戦いというか、自分の心の中で自分が、たとえ、たった独りになっても、夫が去り、子が去り、また妻が去り、子が去っても自分自身が独りで生きていけるかどうかということのように思う。その時に「私淋しいわ、かわいそうだわ」と思わずに、楽しい趣味なり、何か自分がこれなら生きがいだというものを、持って生きていけるかどうかということだと思うんですね。

そうすると、今、女性は八十五年生きます。だいたい男性の方が十年くらい早く死ぬんですね。夫婦の年齢差が二、三歳から、うちの場合は九歳ありますから、主人が死んだあと約二十年近く私は独りで生きる訳です。その時ハタと困る。自分の息子が、自分の気に入る嫁さんをもらっているかどうかわかりませんからね。それから息子、娘が面倒を見てくれるか。だいたい面倒見てもらおうなんて方が、私は違うんじゃないかと思うんですけど。今、赤ちゃん抱えてるお母様にしても、あと二十年くらいたつと、赤ちゃんは立派に一人の人間として巣立っていく訳で、それの足を引っ張る親になっても困る。そうすると、老後の生活はどうするか。夫が死んでから再婚するもよし、また仲間集めて何か趣味をするもよし、精神的に自立するもよし。多分私の場合も、あと二十年たつと子供が巣立っていく。その後の何十年かは夫と共に生きる訳ですよね。その時に自分のパンツがどこにあるかわからないお父ちゃんなんて私の場合には困るし、それからうちの亭主から見ても、私が魅力のない女っていうふうに見られては困るから、私なんか仕事をちょっと頑張って続けてるところもあるんです。男女の生き方っていうと、若いカップルのことを考えると思うんですけ

ど、これからの世の中の問題っていうのは、老年になってからのカップルがどう生きてくかっていうことが、すごく大事なことになってくるんじゃないかなと思います。

堀尾正明　では、きたやまおさむさん、どうぞよろしくお願いいたします。

きたやまおさむ　私は女の人の生き方を描いた昔話に関心がありまして、代表的な物語で「夕鶴」という話がありますね。この「夕鶴」では、美しいところばかり見せて、自分の正体というのを隠している女の人がやってくるんです。昔話全部に共通するのはみんな〝押し掛け女房〟なんですね。向こうから勝手にやってくる。それで一生懸命尽くしてくれて、しかし正体がばれたところで、去っていくという女の話ですね。これは全国的に散らばってまして、正体が鶴だったり、猿だったり、蛇だったり、一番古いパターンは蛇なんですが、あぁ猿はないか。(笑い)あっ、でも男の話ではあるんですよ。猿が婿としてやってきて、最後には殺されてしまうという「猿の婿入り」って話があるんですね。〝のぞいてみたら猿だった〟っていうのは男なんです。(笑い)世界中にこの種の物語があるんです。土地土地によって動物は違いますが、日本の場合は、きれいだから鶴だとか、嫌われるから蛇だったとかなんだけども、アフリカではヒョウだったとか、中国へ行ったら虎の話、エスキモーへ行くと〝カモだった〟とか、ヨーロッパへ行くと〝人魚だった〟とか、色々な話があります。これを世界中で比較検討しますと、日本の物語には極だった特徴がある。のぞいて見たらみんな逃げて行く、これが日本の昔話に共通するんです。落ちが全部別れ話で終わるのが、日本の昔話に共通するパターンなんですね。これは現実を反映してるんでしょうかね、昔の女の生き方っていうのは、自己犠牲をして、尽くして尽くしていいところだけ見せて、そして本当の姿を見られると、捨てられるという……、そういった物語が、つい最近まで語り継がれてきた訳です。でも時代が変わって女の人が変わるとしたら、のぞかれて自分が蛇だとばれても、あるいは〝蛇〟呼ばわれされても、居続けることができるかどうかなんですよね。僕はそういった物語が、当然日本でも発想されていいと思って、そういう書き方をしている物語がないかと探したんですけれど、一編もないんですね。ほとんど最後は見られて去る。

これはね、ものすごい大きな影響力だと思います。ひょっとしたら女性の一人ひとりに、こういう生き方を押しつけているのかもしれない。文化というものが。のぞかれて自分のみっともないところを見られたら、死んだ方がいいんだ。リクルート問題で「本当のこと話すくらいだったら死んだ方がいい」と言った人がいますけどね、(笑い)こういうプレッシャーはすごいと思います。格好の悪い

ところを見られたら、死んだ方がいい。あるいは去っていかなきゃいけない、スキャンダルが公開されたら逃げなきゃいけない、だから格好よくやっていかなきゃいけない。今日、カップルの方がたくさんいらっしゃるからお分りでしょうけど、格好のいいカップルをやってなきゃいけないって大変なことですよね、みんなからうらやましがられる夫婦でいなければいけない。夫婦の中でも女の人は一生懸命夫に尽くして、いいところばっかり見せて、みっともないとこ見せると、去っていかなくちゃいけないという不安を持ちながら、今でも結婚をし続けていらっしゃるかもしれない。もし日本の女が変わるとしたら、あの物語が変わるのと同じことだと思います。つまり、みっとも悪いところを見られても去っていかない女が、果たして登場するかどうか。これは日本の文化が変わるかどうかにも、かかってくる問題じゃないかと思います。

先日、吉永小百合さんが百本記念に「鶴」を取り上げられたそうで、僕は期待していたんですけど、やっぱり最後は見られて去っていったんです。あれは非常に残念だった。日本の女の姿を変える話にしてほしかった。あそこで追い掛けていかない男も男だし。エスキモーの話では〝のぞいてみたらカモだった〟で、女がカモの国へ去っていくと、それを追い掛けていく男が登場するんですね。最後はカモの国へ行って、カモのお母さんの許可をもらって、その女を連れて帰って来るという物語になります。

この前ディズニーが作った物語は、人魚と恋をするんだけども、最後女が去っていかなくちゃならないところで、男も一緒に海に飛び込む、するとなんと男も人魚になっていたという落ちです。そういった物語を果たして日本の女の人で書けるでしょうか。

文化の力というのは、根強いからこんなところで自立、自立と言っていても、意外とのぞかれたら去っていくのではないか。自立したような女をやっていなきゃ格好よくないというんで、自立をやってるというのでは、やっぱり、本物じゃないと思うんですね。それで、この物語、もし女が変わるとしたら、どういうことが言えるかっていうと、自分の醜い姿をさらけだして、それが見られたという時に、相手の人に、どこまで受け入れてもらえるかという信頼度が、どこまであるかですね。

うちの夫は私のこれこれこういう部分を見ると、嫌いだろうということで隠し続けるのか。それを夫が受け入れてくれるかどうかという、そこの信頼感を持てるかどうかによって、長続きするかしないか決まると思う。

結婚生活の話に結びつけるとすれば、僕は、結婚が長続きするというのは、相手の醜いところをどこまで受け

入れられるかということもあるけれど、相手に自分の醜いところを、どこまで見せられるかっていうこともあると思います。結婚は、どちらかというと愛情ばかりが表現されやすいけれども、自分の怒りや憎しみや殺意までも相手にぶつけながら、しかしながら、互いに生き残っていく夫婦の方が意外と長続きする。逆に言うと、ケンカしない夫婦よりもケンカする夫婦の方が長続きする。私は精神科医ですから、夫婦の混乱に立ち合った時にいつも思うんだけど、自分の怒りや憎しみを相手にぶつけられる夫婦ほど、安定感があるなっていうのが最近の実感です。

最後に、二十一世紀には、どうなるかっていう話ですが、二十一世紀になると何が起きるかというと、私達の次の世代が圧倒的に少なくなるということ、この世代が持て余された老人達になっていくということです。僕なんか団塊の世代ですけれど、ものすごい人数がいます。これが次の世代に面倒を見れるかってことですよね。妻に見てもらおうというのが甘いとなると、私たちが相互に、また誰が先に死ぬかわからないとなってくると、赤の他人にもかかわらず、同じ世代同士がどこまで互いの面倒を見れるかということが、問われる社会がやってくると思う。その時になって、またみんな「夕鶴」のように、醜いところをさらけ出すくらいなら死んでしまいたいっていうことで、みんな自殺し始めるんでしょうか。僕は日本人が変わるとしたら、二十世紀にもし変わるとしたら、私たちの年の取り方も変わるってことだと思う。老人問題は、下の世話を誰にしてもらうかっていう問題なんですよね。私たちが年をとって、自分の排泄物も処理できなくなった時に、自分の子供とか女房とかでなくて、赤の他人にどこまで面倒見てもらえるのか、自分の体を他人に任すことができるかによって、僕は本当に自立しているかどうかが試されると思うんです。その時に、自分の女房じゃないとダメ、子供じゃないとダメ、お母ちゃんじゃないとダメってことじゃあ、将来、おそらく我々は、自立した老人にはなれないだろうという感じがする。自立するっていうのは、誰々から独立するっていう意味もあるけれど、それともう一つ、同時に赤の他人にどこまで依存できるか、任せることができるか、病気になったり、年老いた時に試されるんだということと、裏表になってるんだという感じがいたします。じゃあ、どうすれば良いのか。若いうちから、まだ元気なうちに相当の心構えを持ってないと、イザっていう時に、やっぱり、またみんな逃げだしてしまうかもしれないっていうことなんですね。

堀尾正明　素晴らしいお話、ありがとうございました。見られるくらいだったら、恥ずかしいから死にたいって

いうようなお話から、皆さんに伺っていきたいと思うんですが、特に、若い男女は、だいたいあまり相手に見せたくないってのがありますよね。秋川さんは夫婦関係の中で、この辺までは許すけど、これ以上はダメだっていうようなところがありますか。

秋川リサ　私、醜いところを見せ合いましてね、主人と、お互いに見せ合いこして、先生のごやっかいになったことありましたもんね、悩んじゃって。（笑い）私は二度、結婚してますから言う訳ではありませんが、結婚をすることは、むしろ簡単なんですね。好きだわ、惚れたわで結婚できる訳ですね。ところが、一つの作った形を壊すという作業は、非常に大変で、離婚するエネルギーっていうのは、結婚する時の情熱よりも、はるかに大変でシビアなエネルギーが必要だったものですから、二度目に結婚する時は、絶対に離婚をしないようにありたいと思った。それは何かっていうと、相手に欠点があって当たり前だと思って、結婚しようと思ったんですね。恋愛中っていうのはあばたもエクボで、欠点も長所に見えてくる時があるんですが、二度目の結婚の時は、私はお見合いで一週間で結婚しましたから、あばたもエクボも何もない、全く知らない人と結婚したようなものだった。そこで、まず、私が主人に対して一番いやだと思ったのは、朝、コーヒーを〝ズズズズズ、アーッ〟と飲むこと。（笑い）こういう男性は嫌いだなと思っていた男が、私の主人になりました。「お願いだから、そのズーッアーッはやめてくれない」と言うんですけど、四十何年間その生活をしてきた男が、女の一言で直る訳がない。最初のうちは、「そうかい」なんてお互いまだ気を使うんですが、一カ月経ち二カ月経ち一年も経つと、〝ズズズッ、アーッ〟は、もうごく当たり前、こちらも言うのがいやになって、ケンカになるからあきらめる。あきらめの境地になる訳ですね。そうこうしているうちに私が生んだ子供がですね、私のオッパイを飲みながら、〝チュチュチュ、アーッ〟とやった時には、ほとんど私は、亭主にも子供にも裏切られたーっという気分になりました。（笑い）坊主憎けりゃ袈裟まで憎い、いやになったら箸のあげおろしまでいやだって言いますでしょう。その箸のあげおろしじゃないけど、最初に主人の〝ズルルル、アーッ〟を見た時に「あぁ良かった。この人、最初から欠点見せてくれて」と、私は二度目の結婚の時には思うようにしましたね。だから、さぁ、この次はどんな欠点が出てくるかなぁと。そしたら、酒飲んで言いたいこと言ってくれるじゃないのっていう欠点が出てきまして、これは私も同じことを負けじとやりましたが。ですから、主人は、私のことをまさか鶴とは思ってないでしょう。ゴリラだったと思っているかもしれません。ケンカすると強いんですよ、私は。で

すから、びっくりしたと思うんですけど私は二度目の時は、そういうの見せられるくらいなら、死んだ方がいいと思わないようにしました。でも、やっぱり、日本人ですし日本で育ちましたし、おばあちゃんに育てられたもんで美しく去りたい願望ってありますよね。特に、若い時はそうだった。でも、三十過ぎたら開き直りました。（笑い）

堀尾正明　それでは、ご夫婦の方に不満っていうのを一言ずつお話しいただきましょうか、はっきり言って、〝満足してます。一〇〇%の相手です〟っていうのは、絶対ないと思いますので、ご安心してお話し下さい。どうぞ。

A：（男性）　特に、もってません。

堀尾正明　それは、期待していないという意味ですか？（笑い）

A：（男性）　いや、そうじゃありませんけど。

堀尾正明　そうでしょう。もっと前向きに見ていただいて、ここは直してほしいとか。

秋川リサ　うっかり言ったら大変かもよ。（笑い）

A：（女性）　主人がタバコを吸いますので、タバコの灰が灰皿からポロポロッと落ちる。あれが神経に障りますけれども、もう気にしないようにしております。

堀尾正明　と言いながら気にしてるようですね。お宅は？

B：（男性）　女の人は、しつこいですね。同じことを何回も繰り返す。

堀尾正明　例えば？

B：（男性）　お酒を飲んだ時、グズグズ言われたりすると、お酒がおいしくないですよ。

堀尾正明　最近、何かあったみたいですね。奥様は？

C：（女性）　お酒を飲んだ時に、だらしなーくなる人ですよ。

堀尾正明　例えば、どんなふうになるんですか。

C：（女性）　もう、自分で何もできなくなるんですよ。お風呂に入ったら入ったまんまで出てこない。

堀尾正明　ほっといたら、死んじゃうって状態なんですか？（笑い）お酒って多いみたいですね。お宅は？

D：（男性）　別にとりたててないんですけど、ただ、気が強いっていう面はありますね。

D：（女性）　あの、気が強くなる環境に置かれてるっていうことを、理解して欲しいと思います。

堀尾正明　それは、どういう環境なんですか。

D：（女性）　あまり詳しく言うと夫婦喧嘩のもとになりますので、今のところは、控えておきます。

堀尾正明　今日は、皆さんが会場で話して、道すがらケンカして帰るというのが主催者の意図ですから、ぜひ、本音でお話し下さい。

E：（男性）　何でも、妻が自分勝手に決めるんです。

今日、ここに来るのも（笑い）

E：（女性）　いや、そんなことないんですよ。あらかじめ、ちゃんと話はしてあるんですよ。ただ、こういう性格ですから私がリードした方が話が早い（笑い）

堀尾正明　共働きの方々で、ご主人が全然手伝ってくれないっていう方、いらっしゃると思いますが、ちょっと、共働きの方、手を上げていただけますか。（手が上がる）、じゃ、こちらにお伺いしましょう。ご主人は何かされますか。

F：（女性）　すごく口は、優しいんです。お弁当を持っていく時は、必ず、〝ママ、お弁当ありがとう〟とか、女の人を喜ばす言葉を、よく知ってるんです。だから、すぐ、乗せられるんです。

堀尾正明　じゃあ、結婚も、それで。（笑い）

F：（女性）　共働きしているので「あんたも、きついだろうから洗濯の加勢をしてやるよ」、「お茶わん洗ってやるよ」と言うのは言います。

堀尾正明　で、実際にされるんですか。

F：（女性）　いいえ、実際にはしないんです。（笑い）「きついだろうからもう、お休み、後しておいてやるから」って言うけど、朝、起きたらそのままなんです。（笑い）

堀尾正明　奥さんは、やって欲しいと思うんだけど、ご主人にうまく言いくるめられて、あきらめてる訳ですね。

F：（女性）　そうです。（笑い）

堀尾正明　だんな様、どうですか、今、お話し聞いて。

F：（男性）　そうですね。気持ちのうえでは、やってやろうかなぁと思うんですけど、なかなか体がついていかないんです。「男子、厨房に入らず」って言うから、やっぱり、したらいけないのかなぁと思ってですね。きついなら、明日の朝、したらいいじゃないかと、そんな気持ちです。

堀尾正明　厨房に男子が入ってはいけないと思ってらっしゃる方、手を上げて下さい。男は、掃除、洗濯とか、飯なんか作るもんじゃないと思う方、手を上げて下さい。多いですね。秋川さんのだんな様は、色々なことやってくれますか？

秋川リサ　夫は、子供二人抱えて、独身生活というか、仕事してた時期があります。前の奥さんと別れた時から五年間、子供と一緒に夕飯を食べたいという気持ちがあれば、自分で作る。だから母親業というのを、主人はやってたことがある。

私は反対に二十五歳の時に、一回目の離婚をした後、自分の母親と夫婦のように、私が主人で母が妻のような状態で、家を切り盛りしてきたので、主人の私が、酒を飲んで夜中に家に帰って、〝おーい帰ったぞ。ちょっと、

飯あるか〟ってことをやっていたことがある。夫は、母親と女房の立場をやったことがあり、私は、亭主という立場をやったことがあるために、役割とか分担っていうことじゃなくて、ごく自然に共働きですから、時間のあいている方が家事をするようになった。最初から決めた訳でもなく、ルールだとか、分担だとか、男のくせにどうだこうだという訳ではなく、スムーズにこうなった訳です。ですけど、主人もお酒を飲んでグダグダ言う時もありますし、私も言う時が一杯あります。夫に言わせると、〝なんで、俺がしなきゃいけないんだろうなぁ〟っていうことになりますし、決して心の底から好き好んでやってるのとは、違うでしょうけども。かといって主人が料理を作る時なんか、もう俺の腕の見せ所、お前より俺の方がうまいんだぞと、いうふうに板前さんのように頑張っているところを見ると、決して、根っから嫌いではないと思いますね。ただ、私が家事をするのも、夫が家事をするのも、どちらも必要に迫られてやったことから慣れて、だんだん好きになっていったということで、奥様が専業主婦で、ご主人がお勤めをしている方では必要に迫られることとっていうのは、単身赴任とか、そういう場合しかない訳ですよね。だから、必要に迫られないと、ついついやらないという現実があるのかもしれないなという気はしますね。

堀尾正明　でも、必要に迫られていても、妻に全部担わせるっていうタイプの男性も、まだいらっしゃいますね。

秋川リサ　そういう歴史が長いですからねえ。きたやま先生、男の人は、女っていうものは生まれた時から家事労働が好きだと思いたいんでしょうかね。

きたやまおさむ　どうなんでしょうね。お子さんを生むっていう事実、生物学的事実がありますよね、女性の場合。で、生んで育てるという部分においては、男にはできないってことはありますよね。子供を生み育てるという部分においては、男にはできないってことはありますよね。子供を生み育てる、少なくともオッパイを与えるというところまでは、男にはできない。その辺の有り様みたいなのを女性の原形とするならば、女の方が育てていくとか、面倒を見るとかが、うまいと言えるんじゃないでしょうか。つまり、共感したり、相手の心を思いやったりするってことは、男の方はどうしても行き届かない。これは、原形という形ではあるかも知れませんね。でも、男だってやればできるわけですよね。いまのところ、そういった必然性がないもんだから、あるいは、機会に恵まれないもんだから、そういった能力が発達しないっていうことだけかもしれませんね。

堀尾正明　Gさん、今のお話を伺って思い当ったような感じですけどもどうですか。

G：（男性）　そうですね、基本的には男も女も感情とかは一緒だと思うんですけどね。育った環境っていいますか、幼い時から、女は控えめで忍べだとか、そういう違いがあったと思います。

堀尾正明　では、共働きの方、手を上げて下さい。お宅のだんな様はどうですか、いろいろなことをされますか。

H：（女性）　心の中では、一〇〇％手伝ってくれてると思います。（笑い）私がこうして二十五年間一緒に勤めができますのも、その中で、やはり子供を共に育てながらやってきたからですね。夫も子供も、みんなで家族の役割と思って、単なるお手伝いではなく、役割だと思ってやるからではないでしょうか。私が夕ご飯を作らない時は娘が作ります。夫は汚いのが嫌いなものですからお掃除をしてくれます。今日、色々な男性の方がいらっしゃって、私は、いい人と結婚したなぁとしみじみと思いました。（笑い）

堀尾恵理子　共働きの方は、だいたいうまくいってらっしゃるから、共働きができるという感じですね。

堀尾正明　ここに若いお嬢様がいらっしゃいます。ご自分のタイプとして、将来結婚しても自分の仕事を持っていたいですか。

I：（女性）　理想としては、自分のだんな様になる人のお給料で食べていければ、それにこしたことはないですけど、今、日本は経済的には豊かになってますけども、自分たちの生活というところでは、かなり厳しい状況に置かれてますので、共働きしないとやっていけないと思っています。でも、共働きをしてても、できれば家事とか家の周りのかたづけとかいうのは、自分でやっていきたいなと思ってます。どっちかというと自分で仕切りたいタイプですから、でも、手伝ってくれるとか、それが自然にやってくれるような方だったら理想的ですけども。

J：（女性）　若い時から、ずっと仕事を持って共働きをやって参りました。今、定年になりまして二人とも自由になりました。大変、気の短い主人でございますけれども「若い時からお前は、よく頑張ってくれた、お前の苦労を考えたら本当は俺が助けなきゃいけない」ということで、目覚めてくれました。今の私達を子供達が見ると「お母さんの方がよっぽどわがままで、お父さんがよく辛抱してるね」なんてことを感じるんじゃないかと思います。その一つに私の方がずっと外に出る機会が多い、主人の方は割りと出る機会が少ない。そうしたら、自ら、洗濯はするわ、ご飯は炊くわ、おかずも結構「お母さんよりおいしい」と言われるくらいできます。ご飯などは「あっ、ご飯がたらない」と思ってたら、ちゃんと炊いてくれてるんですね。いつも二人で、お互いの可能性はお互いが発揮しよう、時間がない時は、時間のある者が

家事をしようと話し合っています。で、だいたい、私が出てることの方が多いので、主人は、ちゃんとご飯を炊いて洗濯をする、ということになっています。（笑い）今日は大変よく協力してくれるお父さんを、ぜひ知っていただきたいと思って出てきました。

堀尾正明　では、お父さんに何が起こって、一体こうなったのか伺いましょう、（笑い）ずいぶん違ったようですけど。

J：（男性）　昔は、なかなかワンマンだったのですが、これでは、いかんな女房に孝行しなければいけないと思って、気持ちを改めました。

堀尾正明　それは、仕事をやめられてですか。

J：（男性）　はい。

堀尾正明　やめるまでは、そういうことは思わなかった？

J：（男性）　はい、（笑い）炊事は好きでしたけどね、今後も大いに仲良くやっていこうと思います。（拍手）

堀尾正明　ここで、「男性自立度チェック」をやってみたいと思います。男性の方は、青いカードと赤いカードでご協力ください。

まずは、「生活の基本的テクニック」についてです。「質問①　日頃、食後の後片付けをする。」、する人は青、しない人は赤を上げて下さい。やっぱり赤が多いですよ。

続いての質問です。「質問②　健康保険証やハンコがどこにあるかわかっている。」

堀尾恵理子　半々くらいですね。

堀尾正明　はい、続いて、「質問③　ご飯が炊ける。」炊けない方がいらっしゃいますねぇ、Kさん、炊けませんか。

K：（男性）　炊けません、全く。

堀尾正明　炊飯器ですよ。

K：（女性）　転勤で単身赴任したんですけど、ご飯だけは炊きませんでした。後のことは全部したんですけどね。

堀尾正明　じゃあ、どうするんですか、〝ほかほか〟かなんかで買ってくるんですか。

K：（女性）　ええ、そうなんです。（笑い）

堀尾正明　じゃあ、若いLさん、ご飯炊けないの？

L：（男性）　まぁ、やればできると思いますけど、やったことないから。

堀尾正明　やればできるという人に限って、だいたいできないんですよね（笑い）

堀尾恵理子　「質問④　ゴミを出す。」

堀尾正明　出さない人が多いみたいですね、若いカップルのMさん、ほとんどそういうことはしない。

M：（男性）　全然しません。

堀尾正明　ゴミはどうしてるんですか。

M：（男性）ゴミは玄関の横に放っときます。そしたら、誰か出してくれます。

堀尾恵理子　ゴミ出し日は、一応御存知じなんですか。

M：（男性）　知りません。

堀尾正明　しまいには、自分がゴミとして出されちゃったりして（笑い）

　はい、続いて、「質問⑤　自分の脱いだ洋服は自分でしまう」、相変わらずやりませんねえ。皆さん、自分のものは、奥さんにやってもらうんですか。

　はい、続いて、「家族関係」ですね、「質問⑥　妻が外出して遅くなってもイヤミを言わない。」あっNさん、イヤミを言うんですか。

N：（男性）　ええ、言うと思います。

堀尾正明　奥さん遅くなるんですか。

N：（男性）　いや、めったにありませんけど。

堀尾正明　どうして、イヤミを言うんですか。自分だって遅くなることあるんでしょう。

N：（男性）　男女関係が気になるし、子供のこともありますから。

堀尾正明　他に言う方、いらっしゃいますか。なぜ、おっしゃるんですか

O：（男性）　なぜ、言うのかというとわかりませんけど、気になりますね。女は、夜、出歩くもんじゃないと思うから。（えーっという会場の声）

堀尾正明　イヤミを言わないと答えた方、はい、どうぞ。

P：（男性）　結婚して、もう二十五年にもなりますので、ある程度、自主性をもってやっています。だから、イヤミは言いません。私も言われません。

Q：（男性）　お互いに、やはり付き合いがありますので。私は、だいたい付き合いが不得手で早く帰りますけど、家内は、朝帰りをすることもあります。まぁ、お互いに子供も大きくなってることですし、別に、遅くなっても何もないということですね。

堀尾正明　奥様よろしかったら、その朝帰りの理由を。

Q：（女性）　私は、もともとお酒が強い方なんです。連れ合いは、全く飲めない方なんです。だから、その雰囲気が好きなもんでつい。でも、最近は心を改めてますから、十二時までには帰るようにしてます。（笑い）

堀尾正明　相当ですね。どなたと一緒に飲んでるんですか。

Q：（女性）　男女あわせての私達の楽しい仲間です。仲間が十人くらいいます。ついつい時間が経つのを忘れてしまうんです。

堀尾正明　例えば、だんな様は、その楽しい仲間に入らないんですか。

Q：（女性）　お酒が飲めないから、そういう楽しい雰囲気が味わえないんです。だから、文句も言わないんだと思います。

堀尾正明　でも、何か心配になりません？例えば、失礼ですけど、そのグループの中には素敵な男性もいらっしゃるでしょう。

Q：（女性）　はい、いますよ（笑い）いますけど、連れ合いとお友達は、全然、別の問題です。

堀尾正明　そこらへん、ご主人、正直なご感想を。

Q：（男性）　別に気になりません、私の方がずっといい男ですから（笑い）

堀尾正明　なるほどねぇ。

堀尾恵理子　恐れ入りました。

堀尾正明　では、続いての質問にいきましょう。「質問⑦　夫婦喧嘩をしても自分から折れることができる。」折れない人が多いですね。

　じつは、ある生命保険会社がアンケートをとったところ、夫婦喧嘩の一番の原因というのは、二十代の人は、夫の帰宅時間というのが一番目なんです。二番目は、子供のいる人は、子供のことについて。

　四十代の夫婦になりますと、妻の帰宅時間が、ケンカの原因のNo.1になるんです。やっぱり四十代、五十代になりますと、妻の活動範囲が広がって地域社会とか仕事なんかで遅くなって、それに対してだんなが、だんだん文句を言うようになるという図式が、結構出てくるようなんですよねぇ。

堀尾恵理子　なんか、今の話を裏付けてますねぇ。

堀尾正明　さぁ、続いての質問にいきましょうか、「質問⑧　夫婦の会話が一日三十分以上ある。」

きたやまおさむ　三十分以上！ないでしょ、三十分なんて話してる夫婦がいるんですか。

堀尾正明　さぁ、どうでしょう、話してない人が多いですね。

堀尾恵理子　きたやま先生のお宅では、お話にならない？

きたやまおさむ　仕事柄、私、育児の相談を受けたりとか、女性の色んな生き方について、ある程度、研究したりしているから、すぐ、妻の話にコメントをするので、妻にいやがられる。仕事を家庭に持ち込み過ぎる人ですね、僕は。

堀尾正明　それでは、続いての質問、「質問⑨　子供の友達の名前を三人以上知っている。」きたやまさん、青ですね、こちらは、皆さん、青ですね。

　では、続いての質問、「会社での生き方」は。「質問⑨　常識にとらわれない人が好きだ。」あなたは、どうですか。

R：（男性）　気にしない方がいい。生き方は、様々あると思いますけれども、あまり無理にどちらと決めつけ

ない方がいいと思います。

堀尾正明　はい、ありがとうございました。続いての質問にいきましょうか。「質問⑩　女性に何か教えてもらうのが、いっこうに、苦にならない。」あぁ、苦になる人が多いですね。例えば、自分の部下の女性から「これはこうじゃないんですか」と言われたときにどう思いますか。

S：（男性）　そうですね。あまりいい気はしませんけども。

堀尾正明　それが正しいと思っても、やっぱり、いい気持ちはしないんですか。

T：（男性）　自分が知らないことは、素直に聞くべきだと思うし、教えてもらいたい。男尊女卑というのか、これは絶対、男性が知っていないといけないんだ。絶対、男性の方が優位に立つべきというのは、おかしいですね。

堀尾正明　秋川さん、どうですか。仕事仲間の男性にも、〝あなた、ここが足りないわよ〟とか言うでしょ。

秋川リサ　結局、言い方のルールってあると思うんですよ仕事の場合は。私たちの場合には、上司とかっていう関係で成り立ってる仕事とは、ちょっと違うんですけども、例えば、自分より年配の人にポンポンものを言えないんじゃないかな。ただ、残念なのは、同じことを言われるんでも、男に言われると聞くけども、女に言われると聞きたくないという考え方の男性が、現実には多い。言ったって聞いてもらえないなら、こっちも言わないってこともありますよねぇ。それは、女性蔑視だというふうに女が受け止めるのか、それとも、そういう性格の男性なんだと受け止めるかでも違うと思うんですけども、でも、やっぱり男は、本質的には、女には言われたくない、まして、自分の女房には本当のことを言われたくないってとこはある。それを教えていきたいですね。

堀尾正明　じゃあ、その辺、もう一度聞きます。男性の方、秋川さんが言われたように、「男には言われてもいいけど、女には言われたくない」というふうなことを思うことがあるっていう人、青のカードを上げてみて下さい。うーん、やっぱり青が多いですね。

秋川リサ　女性だってあるんじゃないですか。同じことを同性から言われたら「そうよ、あなた、わかってくれるわね」って言えるけど、男から言われると妙に「何があなたにわかるのよ」って気分になることがあります。

堀尾恵理子　あまり、こだわりません？

U：（女性）　家庭では、どうかわかりませんけど、職場なんかはですね、やっぱり、良いこととか、より良くするためとかいうことでは、女性の意見を、きちんと聞けない男性は、これから困るんじゃないかなと思います。聞いていただかないと女性の方も困ってくると思うんですよね。

堀尾正明　女性が管理職になったとして、年下の男性が、いろいろ命令されるのが、なんかやなんだよっていう声はよく聞きますよね。なぜなんだろうか、つきつめて考えていくと、あの人は有能なんだけれども、女性から言われるのは、いやだよな、っていう若い人いるんじゃないでしょうかね。

堀尾恵理子　そうですね、こだわらないで欲しいですけどね。これから変わっていくかもしれませんけどね、女性も社会進出してますから。

堀尾正明　さて、じゃあ、続いての質問に参りましょうか。それは、老後に非常に密接な関わりがある。「質問⑪　これからも続けられる趣味を持っている。」

堀尾恵理子　持ってらっしゃる方、多いですね。

堀尾正明　これで、すべて終わりました、ありがとうございました。秋川さん、ご感想をどうぞ。

秋川リサ　はい、うちは、私がこういう職業で、主人は鉄鋼業界ですので、全然職種が違う訳ですね。そうすると、「芸能人の奥さんをもらったから、あんたはかわいそうね」っていう見られ方を、まだまだされますね。また、主人は魚をさばくのが好きで、趣味なんですけど、マーケットに男が買物に行くと、女性が好奇の目で見ます。ですから、反対に言うと、世間では、まだまだ、奥さんが買物をする人、だんな様は夕飯を食べる人という図式は、意外と女の方でも作ってますよね。

堀尾正明　それが、二十一世紀とか、ずいぶん先を見越した場合、我々が、高齢者になった時に変わると思いますか。

秋川リサ　日本のシステムが変わるのは、難しいかもしれない。変わるとしたら女性側の意識の方が、どんどん変わっていく。けど、男性の方は変えろって言ったって大変ですよ。だって、男性はそういう図式の中で、ずっと代々生活をしてきた訳ですから。中には専業主夫という、夫が家庭のことをするカップルもいますが、まだ、興味本位で見られている。そういうことも、その人が好きならいいじゃないかっていうふうには、まだ、見られない現実、それから、反対に言うと、そういう人たちは、男性社会からはずされたみたいに扱われていく現実っていうのは、ある訳だから。男性社会が今まで日本の経済をはじめ、全部作ってきた訳だから、そこから、急に変わっていくってことには、無理があるような気がする。

堀尾正明　だけど、逆に女性の方から「変わってくれないと、私は、あなたと一緒にいたくないのよ」というような意思表示ができるでしょう。

秋川リサ　専業主婦ですと、私は主人に台所に立たれたり、お洗濯なんかされちゃうと、仕事がなくなるので困ります、って言う方もいらっしゃるんですからね。です

から、人間同士として男性であろうが女性であろうが、その人を人間として、どう尊重するか、人格をどう認めるかが大切だと思う。あんまり、男だから女だからってことを強調しちゃうと、反対に、うまくいくものも、うまく行かなくなっちゃうんじゃないかなぁ。

堀尾正明　男女の区別にこだわらないことが大切ということでしょうか、きたやまさん、いかがですか。

きたやまおさむ　今までは、男が役割分担の内容を決定していて、女はそれに口出しできなかった。変わるんだったら女の方から変わるんであって、男の方からは変わらない、確かにそうだと思う。もともと夫婦っていうのは、契りを結ぶっていう言葉があるように、日本人は契約の精神がないというけど、夫婦は、契約みたいなものであって、give and take の関係なんですよね。それぞれの分担がどうであれ、自立した関係とか、あるいは対等の夫婦生活っていうのは、その契約の精神をお互いがどのように尊重し合っているか、ってことだと思うんですよね。専業主婦をやっていて、片方は一生懸命、金を稼いでくるっていうのも契約のうちの一つ。ただ、契約不履行があった場合に、片方が文句が言えるかどうか、女の方が、契約不履行に対して、どの程度、主張ができるか、ここに、それが本当の契約だったかどうかが、かかってるんじゃないでしょうか。それが、夫婦の関係の具体的な自立をおしはかる尺度なんじゃないかなと思う。

　さっきの「夕鶴」の話をたどると、「古事記」の中のイザナギとイザナミの話になるんですが、のぞかれると、どうのこうのっていう話なんだけど、その時、イザナミ（女性）のお母さんが、怒ってるんですよね、つまり、契約に違反したって。見ないでくれって頼んだのに、どうして見たんだって怒るんです。だから、昔から女が主張をしなかったというよりは、昔、女も結構主張してたと思うんですよ、それが、ある時期、封建制度なんかが持ち込まれて主張しなくなった。今は、また、本来の形に戻りつつあるんじゃないでしょうか、夫婦関係が。

堀尾正明　ということは、我々が相当年をとる頃には、また、夫婦の関係は変わっている。

きたやまおさむ　ええ、女も主張し、男も主張し、そして、どちらが正しいかとせめぎあうような夫婦関係が、すぐ来るだろうと思いますよ。女性の方に一言申し上げたいんですが、女性は家族のことを思って、家族のためにという生活をされていらっしゃる方が多いんですが、その場合、人の世話をすることが生きがいになりやすいんです。それは、最初のうちは親切であるし、思いやりであるし、いつでも自分は元に戻れる、つまり、する必要がなくなればすぐに、元に戻ることができると思ってスタートするんですけど、そのうちこれがやめられなくなるんです。そうすると、だんなが死んだり、だんなが ほとんど自分のことを顧みなくなったり、あるいは、子供が自立したりすると、自分の生きがいがなくなっちゃう。だから、そんなふうにならないように気をつけて下さい。そういうふうに、やっていくのは、確かに美しいし、その人の自由だけれども、人の面倒を見れなくなってしまうと、見て欲しいということさえ、期待されなくなると、自分のすることがなくなってしまって、うつ病なんかにかかりやすくなりますんで注意して下さい。

堀尾正明　今まで、いろいろ愛情を注いでいた対象がなくなるんですからねぇ。それでは、ここで男性の自立度、女性の自立度ゲームでテストします。男性は、リンゴの皮むき、（笑い）女性は、プラグつなぎをやってもらいましょう。もちろん、秋川さんときたやまさんにも参加していただきます。ぜひ、出たいという方いらっしゃいますか。はい、五人の方に上がっていただきましょう。

堀尾恵理子　後で、このリンゴは、皆さんに召し上がっていただきますので、きれいに手を拭いてから始めて下さい。

堀尾正明　そして、その伴侶の女性の方は、あちらで、プラグをつないでいただきます。それでは、よーい、スタート！

堀尾恵理子　うーん、おもしろいですね。手際の良い方、悪い方、いろいろいらっしゃいますよ。

堀尾正明　はい、そろそろ皆さん、できあがったようですね。秋川さん、感想はいかがですか。

秋川リサ　私、ステレオのうしろの配線とか好きなんですよ。子供の時から理科が好きだったんで。手先を使うの好きだから、縫い物とか好きなの。リンゴの皮むきは、へたですけど。

堀尾正明　逆に、そっちをしてもらった方が、おもしろかったかもしれませんね。

堀尾正明　ありがとうございました。そして秋川リサさん、先程言われたようにこういう方が得意?

秋川リサ　私が育った環境は男親がいない母子家庭でしたから、母も祖母も家の中のことは両面できなきゃいけなかったんで、それは必要に応じて仕方なかったですね。おばあちゃんなんかは、洗濯機を買うと、どうやって使うんだろうねって私に聞くから、私は小さい時から、説明書を読んで「多分ここが、スイッチじゃないか」ってやってました。これは、できるのがいいとか、悪いとかじゃなくて育った環境もあるんですね。お料理の細かい作業なんか、主人のほうがはるかに上手ですもん。私は大胆で、大盛のボンとした料理を作ります。主人はどちらかというと、寿司屋に行って板前さんがやってる手つきとかを見ては、帰ってきてマネして、お正月なんか竹

の子で亀とか作るんです。大根で鳳凰みたいなものを切って、俺はなかなか芸術的にセンスがいいんじゃないかと言いながらやるからいいんですね。イヤだと思ったら何でもイヤなんだけど、楽しくやれば家事の分担なども楽しくなると思うんですね。できる、できないよりも、やり始めて楽しいと思ったら、結構人間でできるようになっていくような気がします。でも、実際に家事を毎日、毎日ってことになると、正直言ったらめんどうくさいってことありますよね。

堀尾正明　いいですね、この会議をきっかけに、ひょっとしたらやればできるってことはたくさんあるのかもしれませんね。

さて、きたやまさんは皆さんの話をお聞きになって、どういう感想を持たれましたか。

きたやまおさむ　皆さんのコメントに出てると思うんですけど、夫と妻がお互いにできることと、できないことがあっても構わないんじゃないかな。皆お互いの伴侶が死んだ時のために、自立してなきゃいけないというのはちょっとおかしい。何のために結婚したかっていうと、自分に限界があって、自分にできないことがあるからこそ、家族の中でもう一人必要だということで一緒にいるんです。だから両方同じことができる必要はないんじゃないかと思います。でもね、夫婦の間は契約なんだから、一方だけが不利益をおしつけられるのはおかしいんです。互いにできることを無理なくやるのが良い関係だと思うんです。

堀尾正明　それでは最後にお金について聞きたいと思います。あなたは、一番、最初に妻に全部お金を渡して、その中からおこづかいをもらう、二番、完全に折半にして生活費もその中から折半で出す、三番、完全に夫が掌握して必要な生活費を渡す、のうちどれですか。はい、どうぞ。ああ、やっぱり一番が多いですね。

秋川さんはどうですか。

秋川リサ　私の場合はお金があれば全部使うタイプなので、主人が金庫番をしてくれます。税金のことなんか、非常にマメな人で、全部やってくれるんです。ですから、どちらかと言うと主人がサイフの紐を握っているというふうにも見えるんですけど、私は自分のものは自分で使っちゃう訳ですから、結局折半みたいですね。

堀尾正明　それでは、今までご夫婦の間で、金銭面のトラブル、言い合い、ケンカ等があったという方は青のカード、なかったという方は赤のカードを上げて下さい。皆さん赤ということは、なかったんですね。

きたやまさん、今の日本ではサラリーは全部女性に渡して、その中からこづかいをもらうという形が多いようなんですが、外国ではどうなんですか。

きたやまおさむ　さあ、そんな調査が行われたことはめったにないだろうと思います。でも類型化できないのが実情じゃないですか。さっき三つのパターンに分けてお聞きになられた時に、どれにも該当しなかったのが、皆さんのご家庭の実情じゃないでしょうか。というのは、収入の入り方が皆違うわけですし、額も違うし、予算も違うし、それぞれの工夫でおやりになっているのが実情じゃないでしょうか。奥さんが完全に掌握してるといっても、ご主人もある程度口を出してるでしょうし。もう一つ大事なのは、計算というのは得手と不得手がありますしね。学校の数学の出来がいい人と悪い人がいる訳でしょ。お金のこととか、計画性とかはある人とない人がいると思います。やっぱりこれは得意な人がやるべきだと思います。

そういう意味で、それぞれのご家庭で、得意な方がおやりになっているというのが実情ではないでしょうか。

堀尾正明　先生のところに相談される方の中に、金銭問題で夫婦関係が壊れていくというのはありますか。

きたやまおさむ　それ以前に日本人はお金のことについて話し合うのがタブーですね。でも逆にお金のことって、根に持ちやすいということがあって、お金のことでもめてるんだけども、話し合えないということが起きやすいのは事実じゃないですか。

秋川リサ　そういうことありますね。日本人はお金の話と性の話は不得意ですね。私もお金のことは考えたくないなと思い始めた頃から、ほとんど計算能力というのは劣ってきましたね。

堀尾正明　我々が歳をとった時に、お金のことを考えなくていいくらいの年金制度ができてるんでしょうかねえ。

秋川リサ　今、いやなコマーシャルがあるじゃない。「あら、歳をとるって大変なのね。三〇〇〇万円も必要なので。」っていう。あれ見るとほとんど生きていけないって話みたいですよね。（笑い）

堀尾正明　ここで一人、ゲストの方をご紹介したいと思います。北九州市でエプロン先生と呼ばれている牧山小学校の中西護先生です。先生どうぞ。先生に今の家庭科教育についてのお話を伺いたいと思います。

中西護　私は牧山小学校の教員ですが、去年、家庭科の大会がありまして、家庭科だからよく女性の先生と言われるけれど、今年は男の先生もしてみないかということで、私が授業をしたところ、エプロン先生というニックネームが広まってしまいました。

小学校では五年生から家庭科がありますが、五年生の男子は家庭科が大好きで、特に食べるのが大好きで、「先生、家庭科しよう、家庭科しよう。」と言うくらいなんです。でも学校を出ると、なかなか男の子は料理しない。なぜ

かって言うと、皆さんのおうちでもそうだと思いますが、まず親がさせないんですね。男の子だけではなくて、女の子もそうなんです。最近は昔と違って、小刀なども使ったことがないので、きれいにむけないわけです。また、あぶなっかしいんですね。私たちも最初、調理実習をする時は、とにかくケガをさせないようにするのが精一杯で、「包丁を持って動くときは、〝包丁が通る〟と大きい声で言いなさい」と言ってるくらいなんです。家庭科は本当はもっと楽しく勉強させたいですね。楽しくできるように、創意工夫ということで考えるならば、エプロンでもポケットの位置ひとつにもあれこれ知恵を絞るなり、楽しい模様をつけたりして楽しい学習になるようにしたいな、と考えております。（拍手）

堀尾正明　どうもありがとうございました。

それではもうそろそろ時間がなくなってきましたね。最後のまとめを秋川リサさんからお願いします。

秋川リサ　それぞれの人が、それぞれ自分の生き方に責任を持って、自由な発想で生きていければ私はいいなあと思うんです。それは、男が頑張る、女が頑張るというよりも、お互いに尊重し合い、認め合って生きていくっていうことが大事なんじゃないかと思います。だから、自立という言葉だけにとらわれて、自立ができてるできてないってことばかり考えるんじゃなくて、自然に生きていくということを考えたら、それでいいんじゃないかなあという気がします。

　わたし自身もまだまだ生きる訳ですから、そうやって人間って悩んだり、将来が楽しみになったりして、その繰り返しをしながら生きていくからきっといいんで、どのように生きるかの教科書はないと思います。それぞれ自分で作るものなんだと思います。自分の幸せも自分で作るものだと思います。

堀尾正明　「日本女性会議」というのが、いつの日か「日本男性会議」が開かれる時代がくるかもしれませんね。

秋川リサ　とんでもない。なぜ「日本女性会議」になったかというと、永年女性は男社会の中で、虐げられてきたという現実があったからですよね。男性会議は昔からやってる訳でしょう。国会なんか、ほとんど男ばかりがやってるんだから。（拍手）でもそれで、今度は女性がっていうのはおかしいと思う。世の中には男が半分いて、女が半分いるんだから、男女がバランスよく交わって仕事をするとか、物事を考えるという場ができればいいと思っています。女だけになるとしたら、それも怖い。男も女も一緒に歩めればいいんで、男だけの会議ができてくると女は困るでしょう?女はそうはしないわよ。大丈夫、女はそこまでバカじゃないわよ。（拍手）

堀尾正明　はい。どうもありがとうございました。じゃ

あ、きたやまさんお願いします。

きたやまおさむ　いろいろ申し上げたいことはあるけれども、今日の結論として申し上げるならば、今は皆似たようなものかもしれませんが、二十一世紀になった時の我々の状態を考えると、歳をとるっていうことは皆の事情がさまざまに変わるということなんですね。これから離婚される方もいらっしゃるかもしれないし、大変なご不幸を経験される方もいらっしゃるかもしれない。あるいは、今日のお話はほとんどご夫婦が中心でしたけども、結婚しない女の人もいるわけだし、結婚してる女の人もいるし、お子さんがいない家庭もあるし、逆にたくさんのお子さんに恵まれる方もいらっしゃる。そうすると、人生のスタート時点は似ていたのに、歳をとってくるというのは、皆が違ってくるということですよね。

　さて、我々が二十一世紀を迎えるに当たって、私たちが皆と結構うまくやっていくうえで問われる点は、皆があまりにも違うのに、どれだけ付き合えるかということだと思うんです。例えば、結婚していない女の人は違うわねえ、子供を産んでない人はやっぱり違うわねえという言い方によってすぐ人を区別する、それは女にだって男にだってある訳ですよね。これから歳をとった時に皆の事情が随分違って、経済状態も随分違って、そういった事態になった時に、どこまで我々がこんな会をもって、こうやって話し合えるか、歳をとってもみんなこうやって集えるのか、その時になって初めて我々がどこまで連帯できるのか問われると思う。今元気なうちは皆、心も豊かだけれど、歳をとるってことは度量が狭くなるってことかもしれない。母子家庭のうちもあるんだし、お父さんしかいない家庭もできていく。そういったいろんな違いの中で、どこまで相手を受け入れられるかというのは、二十一世紀にかかっているんだと思います。

　もうひとつ、気をつけないといけないのは、日本人は例えばセキセイインコ一羽飼っても二羽いないとかわいそう、お人形さん一つ置いても、もう一つ置いてあげないとかわいそうだって言うんですね。独身女性が独りでいるとかわいそうだって言う。でもかわいそうでもなんでもない独身女性だっているんですよね。なんか、すぐ対にしたがるというか、ペアにしたがる。夫婦がいつまでも円満で、仲良くしているとめでたいと言うんです。それじゃ、独りになってしまったら不幸なのかというと、不幸でない独身女性はいっぱいいる訳です。だから、結構、女たちの間でも女同士を差別し合うっていうのがあるんで、僕は「女性会議」がそのうち、「人間会議」になればいいなと思いますけどね。

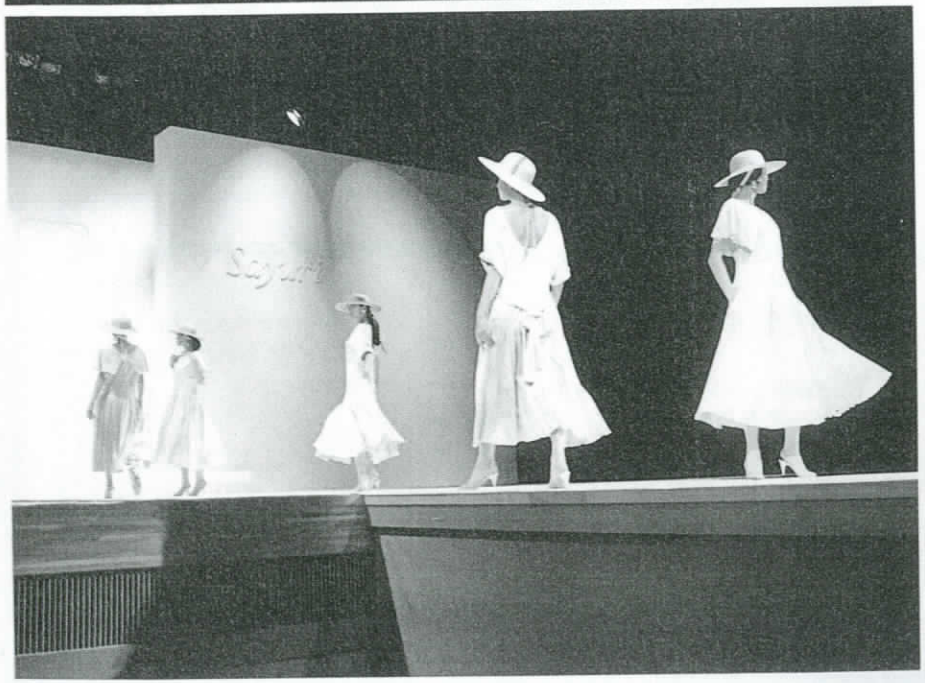
堀尾正明　男女が人間同士、いかに良い関係を築くかということで、この「カップルズプラザ25」を開催した訳

ですが、皆さん、それぞれに何かきっと心に留めていただいたことがあったと思います。今日ご参加の皆さん、本当にありがとうございました。そして、三十数組の方もありがとうございました。

以上をもちまして、西日本地域で初めて開催した「日本女性会議'88北九州」を終わります。来年は沖縄県の那覇市で開催されるそうです。皆さんお元気で、さようなら。

ファッションショー　さゆり'89春夏コレクション

協賛
✿ 井筒屋
三共生興
三共生興ファッションサービス㈱



女性21世紀展

いのちと愛のメッセージ

国際女流映画祭

とき　昭和63年11月27日(日)　10時～14時

ところ　小倉北区中央公民館

入場無料

16㎜映画の部

☆声なき叫び《10：00～11：35》

「強姦」という根元的な問題を女の側から告発した作品

☆若人よ《12：15～14：00》

“人間の生と性”について，本当に大切なのは何か、を問う作品

ビデオの部

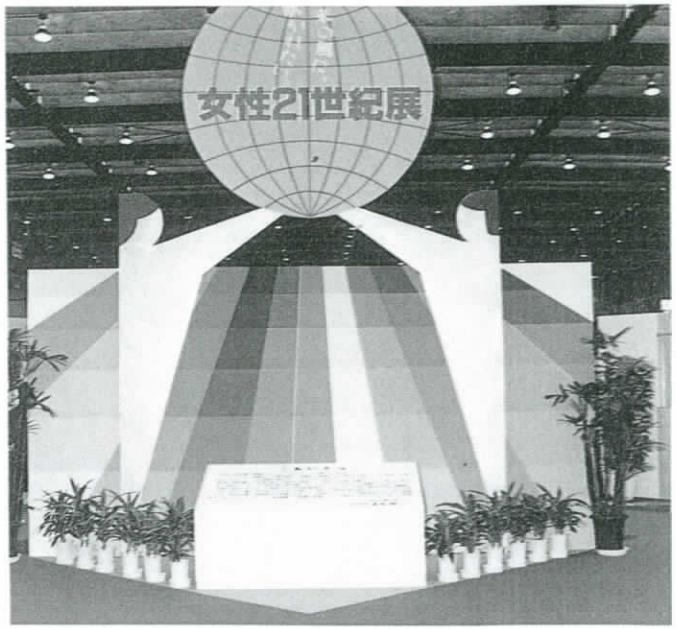
ワンダ・ヤクボフスカ監督が訴える「戦争への道」を再び歩まないための作品二つ

☆アウシュビッツの女囚《10：00～11：50》

☆招　待《12：25～14：00》

民族衣装ファッションショー

民族衣装展



シンボルゾーン

女性21世紀展開会式

〝女流俳句の先駆者たち〟

〝北九州の女性の歴史〟

スペースワールド

世界のアクセサリーショップ

会場一覧表

●広がる女性の生活空間
①㈱松下電工
②㈱ミサワホーム
③九州電力㈱
④西部ガス㈱
⑤西日本電信電話㈱NTT北九州支社
⑥東陶機器㈱
⑦北九州ナショナル通信特機㈱
⑧OA喫茶室
北九州ナショナル通信特機㈱
北九州市母親クラブ連絡協議会
ONO

●可能性にチャレンジ
⑨メイド・バイ・ウーマン展
コニカ㈱
三洋電機㈱
シャープ㈱
タイガー魔法瓶
㈱東芝
日本ビクター㈱
㈱ハチハチ化学
富士通㈱
ブラザー工業㈱
松下電器産業㈱
三菱電機㈱
⑩女性の発明工夫展
全国発明婦人協会西部支部
⑪レディスカレッジ"Promise"
⑫相談コーナー
東邦生命保険相互会社(セーフティーライフ)
福岡銀行(財テク)
近畿日本ツーリスト㈱(女性の旅行)

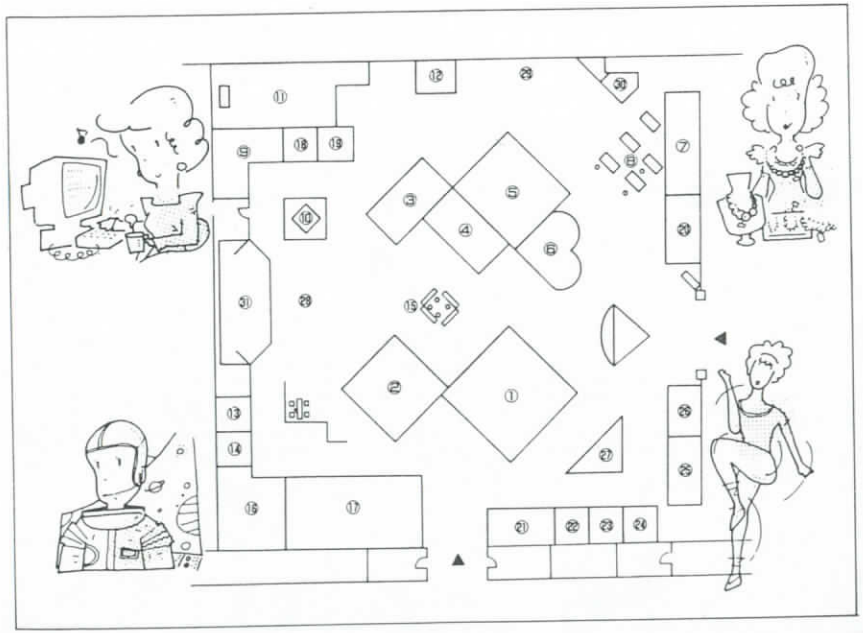
●生きがい実感
⑬㈱有薗製作所
⑭フランスベッドメディカルサービス㈱
⑮北九州女性会議ワゴンコレクション

●より美しく、より力強く
⑯㈱小倉スポーツ
⑰㈱スペースワールド
⑱触媒化成工業㈱
⑲三共生興ファッションサービス㈱
㈱井筒屋
⑳花王㈱

●レディー of the ワールド
㉑日印国際貿易㈲
㉒ギリシャショップグレカ
㉓ミッドトレーディング
㉔㈱三明貿易
㉕㈲あらき書店
㉖有吉画材工業㈱
㉗世界の民族衣装展
香蘭女学院

●おたのしみコーナー
㉘カップルズプラザ25
㉙女流俳句の先駆者たち
㉚ビデオシアター
㈱東芝
㉛イベントステージ

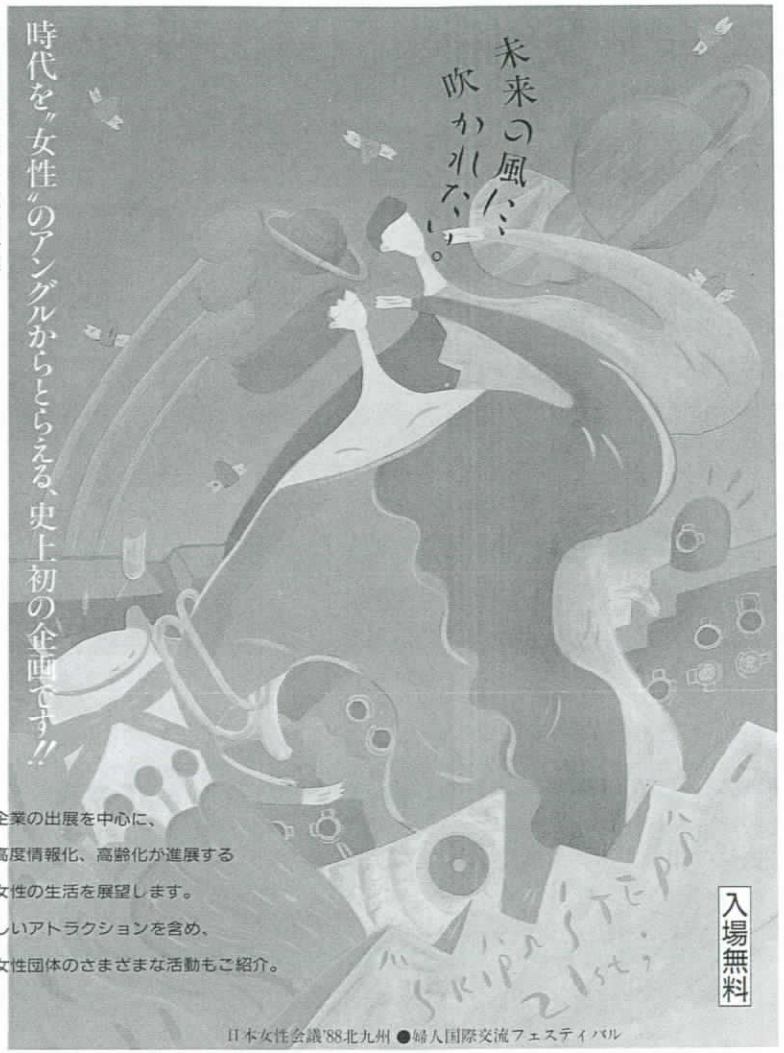
●生け花
坂田正月、作間洋甫、田島春晃
土居光麗、笠春　麗



北九州市制25周年記念事業

女性21世紀展

日時■'88 11月24日(木)～27日(日) 10:00AM～5:00PM
場所■西日本総合展示場 JR小倉駅北口より徒歩5分



女性関連企業の出展を中心に、
国際化、高度情報化、高齢化が進展する
21世紀の女性の生活を展望します。
また、楽しいアトラクションを含め、
市内の各女性団体のさまざまな活動もご紹介。

入場無料

日本女性会議'88北九州 ●婦人国際交流フェスティバル

沖縄旅行券プレゼント!
2泊3日(抽選で2名様)
当会場"女性の旅行相談コーナー"(近畿日本ツーリスト)へ本券をご持参ください。

おなまえ
ところ
TEL　(　)

切り取ってご持参ください。

未来の夢だって、あなたの胸から出発します。

内容

■広がる女性の生活空間
インテリジェント・ハウス／ホーム・オートメーション／キャプテンシステム／オフィス・オートメーション／ヤングミセスのキッチン／OA喫茶室
■可能性にチャレンジ
メイド・バイ・ウーマン商品／女性発明工夫展／レディス・カレッジ"Promise"開催／セーフティーライフ・財テク・女性の旅行相談コーナー
■生きがい実感
介護・福祉機器／北九州女性会議ワゴンコレクション(即売)
■より美しく、より力強く
健康・美容・スポーツ機器／夢はスペースワールド／ファッション・化粧品・装身具
■レディース of the ワールド
世界のアクセサリー・雑貨／女性のための絵本展／民族衣装展
■カップルズプラザ25
■女流俳句の先駆者たち
■ビデオシアター
■イベントステージ

主催／北九州市・北九州市教育委員会・日本女性会議'88北九州実行委員会・婦人国際交流フェスティバル実行委員会

●レディスカレッジ"Promise"スケジュール

時間	11月24日(木)	11月25日(金)	11月26日(土)	11月27日(日)
10	Falk フラワースペース 「花束・アレンジメントの デモンストレーション」 指導 Falk フラワースペース代表 橋本 朗		(株)池田ビジネス 「わーぷろ したい?」 パソコンで家計管理、 ワープロで素敵なクリスマス カードと年賀状を! 指導 池田ビジネススクール講師 池田 サユ子	北九州YMCA 「サバイバルイン グリッシュ」 指導 北九州YMCA総主事 藤本 新二 他
11		「贈り物が楽しくなる ラッピング教室」 指導 ラッピングコーディネーター 和気 寿美子		(株)オフィスタカハシ 「顔の個性に合わせた メークアップアーツ」 指導 メークアップスペースインストラクター 高橋 瑞(みず)
12				
13	北九州市衛生局 「おとしより介護教室」 指導 市衛生局保健予防課	(株)オフィスタカハシ 「オフィス用から アフター5まで、 顔の個性に合わせた メークアップアーツ」 指導 メークアップスペースインストラクター 高橋 瑞(みず)		北九州YMCA 「サバイバルイン グリッシュ」 Part 1 外国人の…日英語(日本語) 北九州の生活習慣、北九州の旅、 北九州の買物 Part 2 日本人の国際理解 アメリカの子供の遊び、 世界の料理 指導 北九州YMCA総主事 藤本 新二 他
14				
15		NTT北九州市外電話局 「あなたも電話美人に なりましょう」 指導 電話応待実践特訓教室講師 麻生 敏子		
16				
17				

●イベントステージ スケジュール

時間	11月24日(木)	11月25日(金)	11月26日(土)	11月27日(日)
10	「消防局音楽隊オープニングコンサート」			「民族衣装ファッションショー」 香蘭女学院
11	ギネスブックに挑戦! 「各区対抗女性大縄飛び競争」 北九州市家庭婦人バレーボール連盟	「大正琴演奏会」 黒崎公民館大正琴の会 代表者 古森 由利子	「黒田バレースクール創作ダンス」 「踊り、手品、アトラクションショー」 北九州市婦人会連絡協議会	メークアップアーツデモンストレーション 「女性ボディービルダーのショーと エクササイズの実演」 ~これが、これからの女のフィットネス~ ミス西日本選手権チャンピオン 早川由美 ミス福岡選手権大会第3位 執行美子 他
12		メークアップアーツデモンストレーション		「民族衣装ファッションショー」 香蘭女学院
13	「踊り、手品、アトラクションショー」 北九州市婦人連絡協議会	テレフォンカード抽選会	「ブラジルサンバショー」	
14	「琴と尺八の調べ」 三曲同好会有志 代表者 岡田 恵子	「観世流仕舞、謡曲」 レディスやはた"芙蓉会"	メークアップアーツデモンストレーション	
15	「踊り、手品、アトラクションショー」 北九州市婦人会連絡協議会	「踊り、手品、アトラクションショー」 北九州市婦人会連絡協議会	「ブラジルサンバショー」 「エアロビクスダンス」 レディスもじ"ピーナッ"	「カップルズプラザ25」 テーマ「男のホンネ、女のホンネ」 ゲスト 秋川リサ きたやまおさむ 司会 堀尾正明 参加者 "25"にちなむカップル 50組
16	「三味線民謡演奏会」 藤本秀希代社中			
17				閉会式

企業からの感想文

21世紀を背負う女性たちへ

午後六時、会社帰りの女性たちのキーボードをたたく音が教室に響いている。彼女たちがここにいる理由は様々である。今いる職場ですぐにワープロを扱うことが必要となった人、転職のためのパスポート、つまり資格を手に入れるために習いにきた人など。いずれにしても、もはやOA機器抜きには仕事ができないと感じて積極的に動き出した人たちである。特別な技術を必要としない簡単な仕事をする人はだんだんオフィスの隅に追いやられ、OAを扱うことに抵抗のない人たちが歓迎されてきたのである。

しかし、現実は意欲的に技術の習得に励んでいる当スクールの女性たちのようにはいかず、「私なんかとても・・・」と尻込みしている人たちもいる。その差はほんの少しのきっかけによって解消できるものである。まずは怖々でもいいからキーボードをさわってみて、ワープロもパソコンもこんなに便利でおもしろいものだということを知ってほしいという気持ちから、この「女性21世紀展」でワープロ、パソコンの指導をしようということになったのである。

今回、私たちはこの催しで十二月ということもあり、身近かな年賀状、クリスマスカードの作成とコンピューターで新しい年の運勢を占い、多数の参加者の方々にOA機器に興味を持ってもらえた。

すでに十分普及しているOA機器をなぜ私たちがもっと広めたいのか？　というのは、これからの女性には、ワープロ、パソコンが使えることを目的とするのではなく、単なる道具として使用し、機械にまかせられるものは任せてしまい、その舞台の上でに活躍の場を見つけてほしいと願うからである。

つまり、主婦たちがこれまで家庭で、洗濯機、掃除機等の電気製品を使って家事を能率的に行い、自分の時間を捻出し、新しい活躍の場を求めて動き始めているように、オフィスでも時間を合理的に使ってほしい。そして、OAという波が来てそのために職場を追いやられてしまうというのではなく、その波に乗り、また新しい波が来たら乗る、という柔軟さと好奇心をいつも持ち続ける女性たちに二十一世紀を背負ってほしいという期待を持って毎日、指導に励んでいる。

最後に、このような盛大な行事の企画運営を手がけられた皆様方の大変なご苦労をまのあたりにし、ねぎらいの言葉をお送りしたいという気持ち、とこういう意義ある行事をさらに続けて発展させていただきたく、今後のご活躍に期待いたします。

株式会社　池田ビジネス

女性の声に注目

「女性21世紀展」の松下電工ブースの企画・制作担当者の一人としての雑感を述べます。

当社は「家一軒分の快適システムの提案」をテーマに、キッチン・リビング・寝室・サニタリーなどの関連商品を紹介。限られたスペースの中で、当社の〝住まいづくりの総合メーカー〟としてのイメージづくりに心掛けました。

予想どおり、お客様はキッチンや水まわりコーナーに集中しましたが、女性だけでなく男性も負けず劣らず来場されていたのが印象的でした。

少し以外だったのが、今回の展示商品の中で、先端のHA（ホームオートメーション）商品などの紹介に対する反応が、「ほう」、「なるほど」とかいうものだったのに対し、システムキッチンなどの商品そのものへの反応は、「カウンターの位置が高い」、「扉の柄は、汚れが目立ち易い」など、非常に具体的かつ真面目なものが多かったということです。

このことを通して、人々が快適さを感じるのは、こうしたごく基本的な事が鍵になっているのではないかと感じました。そうしてHAや先端技術もこうした事が解消されてはじめて生きるし、快適を充実させるためのルールと成り得るのだと感じました。

当社では、昨年はじめより「快適を科学します」をスローガンに、快適（アメニティ）を切り口として商品づくりに取り組んでいますが、一口に快適といってもその尺度は各人各様です。さらに男性・女性の尺度も様々です。そうしてそれら各人に対応した快適空間づくりを考える上で、前述の〝基本的な快適〟というものが、大きなヒントになると思います。

また、依然として家事労働の大半は女性が受け持っているのが現状です。しかし女性の社会進出が著しくなるに従って、男性・女性の家事分担は大きく変化し、特に女性の住まい商品に対する考え方は変わっていくでしょ

う。
そういう意味でも、今後の女性の声に注目していきたいと思います。

松下電工株式会社

女性の創造性を生かす

この度の「女性21世紀展」の出展につきましては、当社が創業以来お世話になってきました女性の方々へのお礼と、二十一世紀に向けての期待を商品を通じて表現してゆきたいという思いから参加させて戴きました。

いま、人は二十一世紀に向けて「より豊かな暮し」や「より人間的な成長」を目指して歩み始めた訳ですが、そのためには先ず女性が従来の家庭における家事並びに職場における家事的な仕事から、今後どのように女性の創造性を活かせる生活や仕事に組み替えていくかが肝要ではないでしょうか。

最近の電機業界、特に商品開発の分野においては、その導入期の労働節約タイプから時間節約タイプへ移行し、更に心労やわずらわしさの節約へとニーズが高まり、それらのニーズを商品に的確に反映していくために「女性による、女性のための商品開発」が盛んに取り入れられるようになってきています。

このように、女性が活躍できる分野は今後益々拡大していくと思われますので、自己の研鑽と生活の組替えを積極的に行い、来るべき二十一世紀に備えて下さい。

松下電器産業株式会社

レディスパワーを重視

「21世紀女性展」に出展して

二十一世紀へ向けて、社会で活躍する女性のために北九州市制二十五周年を記念して開催された「女性21世紀展」にNTTとしては、未来に向けてますます発展するであろう電気通信分野の企業として、現在、また近い将来の女性の生活を家庭の側から手助けできる新通信機器、新サービスを中心に展示し、照会させていただくことにしました。

具体的には、ファッショナブルで便利な機能が満載されたカクテルホンシリーズ、各部屋に電話機をおいて、

どの電話機からも話せ、部屋同志でインターホン替りのホームテレホン、留守をしっかりと守りしかもいたずら電話撃退機能もついた留守番電話、外出がちな方にすぐ連絡のとれるポケットベル、どこへでも持ち運び自由なコードレスホン、携帯電話、生活情報が盛り沢山のキャプテン……。そして、外出先の電話から家の施錠の開閉、カーテンの開閉、エアコンの作動等のできるホームセキュリティ装置の実演、他にも多数展示しました。また、イベント企画として、電話機等をモチーフにファッションショーやクイズを行いました。

展示ブースの作成にあたっては、男性では得られない繊細かつ大胆な力を事業に活かすため、NTT北九州管内の女性社員で組織している「レディース・パワー・クリエイティブ」が、企画参加しアイデアを出し合いながら協議のうえ決定しました。例えば、狭いスペース（6m×9m）を有効活用するため立体的構成とし、しかも広く、未来的感じを持たすため金属パイプを使ったり、色鮮かな照明を配したり、また、ブースのキャッチフレーズを出し合う等、かつてない程の中身の充実したものができたと自画自賛しております。お客様のアンケートも好評をいただきました。期間中の運営も女性中心で行い主旨に沿えたと思います。

これからも、より女性が社会進出する時代となるでしょう。もちろん、当NTTにおいてもレディースパワーが多数活躍しており、企業の活性化へ向けてその役割は重要視されています。これはNTTばかりでなく社会の趨勢であると思います。

今後は、女性進出のための器づくりが、自治体及び各企業に課せられた使命ではないでしょうか。

NTT北九州支社　広報室　大木壮一郎

「女性21世紀展」に出展して

このたび「女性21世紀展」に介護用品を出展しました。我が国の高齢化問題は今や国民的課題となっており、期間中女性の介護用品に対する関心は年々高まりつつあるのが感じられました。今回当社は出展に当りテーマを「ほっとコミュニケーション」とし、思いやりのある介護用品にしぼり、これらを通して女性の「やさしさ」と「いたわり」を強調すべく、パネル展示や商品展示を計画しました。

パネル展示では「看護者の心がまえ」・「寝たきり病人にならないために」・「患者をらくにするためには」・

「からだの清潔」等のパネルを展示し、来場者の質問には専門の立場から市立病院等の看護婦さんから懇切丁寧に回答をして頂きました。参加者の中にはパネルの内容をメモしたり、写真に撮ったりする熱心な人も見受けられました。寝たきり老人を抱えて少しでも参考になる情報をと、はるばる遠方より来られた女性もおられました。中には地元でもこのような展示会を開き、是非とも遅れているリハビリテーションを進めてゆきたいので協力して欲しいとの依頼も受けました。

商品展示では床ずれ防止マット・エアーマット・防水シーツ・エアークッション・ワンタッチ肌着・改良ねまき等を展示し、カタログ上では知りつつも実物を手にし納得される女性もおられました。又持ちやすいスプーン・フォーク・ナイフ・すくいやすい皿・飲みやすいコップ等の自助具や各種の車椅子・ヘルシーカー・シャワーチェア・ステッキ等も展示し来場者に見て頂きました。特に来場者に興味をもたれたのは「リヒーター」の実演でありました。これはくりかえし使える温熱パッドで、体のどの部分にもフィットするよう作られており、実際に身体に当てられ湯タンポの代りになると喜ばれる方もありました。

今回の「女性21世紀展」のスタンドに寄られた方々は熱心な方々が多く、理解を深めて帰られたものと思います。最後にこのようなイベントの機会を与えていただきました北九州市民生局婦人対策室の方々に厚く御礼を申し上げます。

㈱有薗製作所

ネットワークづくりに成功

「女性21世紀展」の中で、高齢者の住宅相談をさせて戴きました。この「21世紀展」への参加で最もうれしかった大きな収穫があります。

それは以前から、北九州における女性建築士の情報交換の場をと、望んでおりましたが、なかなか結成のチャンスがありませんでした。この「21世紀展」のお陰で結成することができ、住宅相談を通じて、お互いの親睦を深めることができました。あれ以来、毎月一回の会合を行い、より一層の充実を計っております。これからは高齢者の増加により、住宅事情もずいぶん様変わりする事と思います。私たち、女性建築士がお手伝いができ、少しでもお役に立てればと願っています。

又、「日本女性会議88北九州」の記念講演、トークセッション等、沢山の催しに参加して、本当に良い勉強になったと思います。出来れば、このような催しにもっと多くの参加ができるように企業での御理解を戴けたら良いと思います。

建築士　杉原良子

商品開発は女性の手で

「日本女性会議88北九州」における「女性21世紀展」に弊社（ＹＵＩＴ）２　ユイット・ツー企画室による商品を出展させていただき厚く御礼申しあげます。弊社ユイット・ツー企画室は、二年程前に設立された女性を中心としたチームです。女性が日常使用している洗剤や化粧品を、自分が欲しくなり、続けて使用してみようと思えるような商品に、仕上げられないだろうかと考え発足いたしました。基本を次の四点におきました。デザイン性、機能性、経済性、安全性。商品の外側から中身へ向かう視点です。現在ボディ＆ヘアーシャンプー、台所用固形洗剤の二品種を商品化し、八十九年五月には衣料用パック洗剤、以降トリートメント、バスリーブとユイット・ツー商品の拡充をはかります。二十代後半から三十代の三名の女性スタッフが中心となり、商品の開発を行っていますが、商品開発にとどまらず、その商品をいかに販売するかという企画にまで今後は発展させる予定です。洗剤や化粧品に限らず、多くの商品は女性が中心となって消費しています。自分たちが使うものは自分たちの手で造りあげる、という単純な発想を具体化することで、女性の社会なり企業への進出はわざわざ声を大にしなくとも行われるはずですが、その環境を生みだす手段として、これからも「日本女性会議」の果たす役割を大きくしていただきたく思います。

㈱ハチハチ化学

メッセージ

セシリア・ファンクハウザー
（タコマ市サウスサウンド女性会議理事）

シンポジウム

「日本女性会議'88北九州」にお招きいただきまして、ありがとうございます。

私は今、国際的な視野で物を考えることの意義について思いを巡らせております。

日本に参りまして、私は今までより深く皆様の文化の価値が理解できるようになりました。アメリカにも多様な文化が集まっています。しかし、アメリカにやってきた人々は、暮らしているうちに次第に自分たち本来の文化の価値観や行動様式を、色々な国の様々なやり方が溶け合った、いわゆるアメリカ式ともいえるものに変えています。私はここに参りまして初めてアメリカにいる日本人の友達を、より深く理解することができたような気がしますし、日本に対する関心もより深くなりました。

女性である私たちは、国際関係に対して大きな影響力を持っています。なぜなら、女性は女性たち自身と家族の生活の質を左右することができるからです。社会の様々な問題に対する考え方について充分な情報交換をすることによってそれが可能となり、やがて問題を解決する道へと我々を導いてくれるでしょう。

国際的な諸課題の解決を進めるには、私たちがそれぞれの価値や文化を認め合わなければなりま

せん。

「日本女性会議'88北九州」のような会議がたびたび開催され、各国から多くの女性たちが集うことはとても大切なことです。私たちは、これから開催されるだろう会議の準備に役立てるために、我々自身の問題を研究し、各文化の間で充分論議して、問題の解決に到達するように協力し合わなければなりません。

皆さんとご一緒に、例えば不当労働行為、非人間的な差別問題などの国際的な諸課題、紛争を考えていきましょう。お互いが日々、文化的な交流を積み重ねることによって、私たちは効果的に諸紛争を解決へと導くことができると思います。

また、ぜひすぐに次回の会議を開きましょう！

レセプション

私はセシリア・ファンクハウザーと申します。私は姉妹都市タコマ市からやって参りました。タコマ市長、ダグ・サザランドもぜひ皆様によろしくお伝えしてくれとのことでした。

皆様のお国はとても素晴らしく、私や私の家族は大変ご親切にしていただいて、心から感謝しています。「日本女性会議'88北九州」にお招きをいただいたことをとてもうれしく思っています。日本とアメリカの女性たちは、互いに共有できるものをたくさん持っていると思います。

タコマ市は、レニエ山の近く、ピュゲットサウンド湾に望む港湾都市です。ご存じのように、日本との有数な貿易都市です。工業が盛んで林業も行われています。ワシントン女性の雇用と教育を考える会は、市立の非営利団体です。私はそのタコマの事務所で働いております。事務所は、また、シアトルにもあります。ワシントン女性の雇用と教育を考える会は、タコマ市の繁華街にあります。本会の目標は、雇用と教育を行うことによって低賃金の人々を支援することで、恵まれないシングルマザーを雇用と教育によって自立に導くことにあります。

毎年、タコマ市では二百人、シアトル市では百五十人の女性たちを援助しています。彼女たちの二五％は黒人、一〇％はスペイン系、四％はアメリカインデアン、そして、四％がアジア系アメリ

カ人、あと残りが白人です。参加者の二五%がハイスクール中退者、六五%が六歳以下の子供を持っています。

私たちの国では、福祉の援助を受けているシングルマザーが四百万人います。福祉保護を受けている人がワシントン州では七万三千人、うちタコマ市では一万二千五百人います。

私たちの援助を申し込みにきた人は、審査を経て受け入れが決まります。彼女は三週間の職業訓練の集中講座に入ります。そこでは、履歴書の書き方、経理、職場での服装、求職時の面談方法等を学びます。私たちは、彼女の将来計画を支援します。我々の過程の焦点は、彼女らが自立できるように援助することです。このクラスを終えると、彼女はジョブディベロッパー（仕事を一緒に探してくれる人）と共に働き始めます。彼らは、彼女らが正式に雇用されるまで、彼女と一緒に働いてくれます。

このプログラムの非常にユニークで効果的なところは、最低一年間の間受講者のために様々な支援サービスを行うことです。例えば、毎月スタッフによる面会、毎月ニュースレターを届ける、毎月の同窓会、それから国際トーストマスターズクラブの開催などです。

ワシントン女性の雇用と教育を考える会は、シングルマザーが福祉の援助を受けなくても暮せるために、とても役立ってきました。常に八〇%の人々が雇用されています。彼女たちの主な就職先は、コンピューターオペレーター、プログラマー、秘書、その他の事務職などです。また、その他に医療分野、自動車修理、林業、船舶業、サービス業などにも進出しています。

CONFERENCE

Thank you for inviting me to Japan '88 Women's Conference.

I am developing an understanding of what it means to begin thinking in international process.

My time in Japan has helped me to understand the values of your culture. In America there are many cultures represented, but when someone comes to America to live their values and practices of culture become emerged in the "American way" which is a combination of many waysand many countries. Being here will helps me to better understand my Japanese friends in America and to improve our relationships with Japan.

As women we hold the power to make a great impact on international relations, because we can influence the quality of life for families and women. We can do this by sharing information about how we deal with problems in our society, and coming to an understanding of how to resolve the problems.

To use the power that we have to solve international challenges, we need to appreciate our individual values and our individual cultural influence.

Conferences such as Japan Women's Conference '88 need to happen frequently and we need to include our sisters from other countries. We need to study our problems in preparation for the conferences and we need to help each other come to resolution of that problems within the contest of a particular culture.

Together we can understand the many international conflicts and challenges such as unfair labor practices, discrimination inhuman treatment, day care and cultural exchanges and together we can begin to develop resolution in effectively changing the conflict.

Lets have conference again soon.

RECEPTION

My name in Cecilia Funkhouser and I come from your sister city Tacoma.

I bring best wishes from Mayor Doug Sutherland and the city of Tacoma. Your country is so beautiful, and your people have been so gracious to
myself and my family members. Thank you. I thank you also for inviting me to "Japan Women's Confelence'88". Women in Japan and the United States have many things to share.

Tacoma, Washington is located near mt. Raenier and is a part on Puget Sound. As you know Tacoma is a major part for trading with Japan. Its chief industries also include lumber.
Washington Women's Employment and Education is the private non-profit organization that I work for in Tacoma. We also have an office in Seattle. Washington Women's Employment and Education is located in
downtown Tacoma and its goal is to assist very low income and welfare single parents in becoming self-sufficient through employment and education.

We assist about 200 women in Tacoma and 150 women in Settle each year,
of those, about 25% are black, 10% are Hispanic,4% American Indian and
4% are Asian American,remaining are white. about 25% of the participants are high school drop out, 65% have children under 6 years of age.

In our country, there are 4,000,000 single parents who are on welfare. In Washington State, there are 73,000 and in Tacoma, 12,500 welfare
recipients.

Once a person requests services, she is screened and accepted. She then attends a 3 weeks long intensive job readiness training

class, where she learns how to write a resume, do budgeting finance, learn how to dress for work, and interview for a job. We help them plan for the future. The focus of the program is to help the participants help themselves.

Once she has completed the class, she works with the job developer,whowill work with her until she becomes employed. A unique and very effective aspect of our program is the follow up support services that are provide to the participants for at least one year. That follow up includes : monthly staff contact , a monthly newsletter, a monthly alumni meeting and a international toastmasters club.

Washington Women's Employment and Education was been very successful in helping single parents get off welfare. They have maintained an average placement rate of 80%. The participants are placed in jobs, primarily in office positions such as computer processors and programmers, secretaries, and other office workers, participants have also been placed in jobs in the medical field, automotive repair, lumber industries, shipping and service jobs.

あいさつ

日本女性会議'88北九州実行委員会
会長　石田ヒロノ

市制二十五周年の記念すべき年に、山形市さんからバトンを受けて「日本女性会議'88北九州」を北九州市で開催できましたことを、心から喜んでおります。

「国際婦人年」とそれに続く「国連婦人の十年」の間に、女性の地位は、かつてない程大きく進展しました。

「日本女性会議」は、この「国連婦人の十年」を記念して、日本における女性問題の取り組みをさらに進めるために、各都市の連携のもとに開催されるものです。西暦二〇〇〇年に向けて、固定的性別役割分担意識を見直し、女性の社会参加を進め、男女共同参加型社会の形成を目指すために、大変重要な事業であると思います。

北九州市では、各種婦人団体や学級・グループが連携して、自らの手づくりで「北九州女性会議」を区ごとに開催してきました。五回目を迎えた今では、広く市民に根づいた集会となりました。また、全市的啓発集会として「北九州女性カンファレンス」も開催しています。

これからは、全国から参加いただきました皆様と共に、あらゆる分野に男女が共に参加する新しい時代の実現へ向けて、確かな歩みを進めていきたいと思っております。

資料

■市制25周年記念事業　「日本女性会議'88北九州」開催要領

1　名称
　日本女性会議'88北九州

2　日本女性会議とは
　日本女性会議とは、「国連婦人の十年」を記念して、日本における女性問題への取組みを進めるために、各都市の連携のもとで、毎年、全国的規模で開催されているもので、昭和63年度は、本市の市制25周年記念事業の一環として、北九州市で開催されることになりました。（昭和59年度は名古屋市、昭和60・61年度は川崎市、昭和62年度は山形市で開催。平成元年度は那覇市で開催の予定。）
　西日本地域では始めての開催であり、さまざまな分野の講師、パネリストの方々による講演、ディスカッションを通じ、21世紀に向けて女性のエネルギーが結集され、明日の住み良いまちづくりにつながっていくことが期待されます。同時に、参加者の方々が、この出会いの場でより豊かな新しい交流を深めていただくことを心から願っています。

3　主催者
　日本女性会議'88北九州実行委員会、婦人国際交流フェスティバル実行委員会
　北九州市
　北九州市教育委員会

4　開催概要
　21世紀に向けて生きる女性について、国際的、全国的規模の交流促進と情報のネットワーク化を図り、本市の女性問題への取り組みを進め、市民活動の活性化に資するために、昭和63年中に次の要領で開催します。

名称	内容	会期	場所
開催記念講演会	男女雇用機会均等推進月間の6月に、西武セゾングループ代表堤清二氏による、日本女性会議開催記念講演会を開きます。	6月16日（木）	九州厚生年金会館 大ホール
トークセッション （分科会）	女性問題及び女性の国際交流についてテーマごとに著名な講師を招いて、パネルディスカッションを開きます。	11月26日（土） 午前	市内各会場
講演とシンポジウム （全体会）	21世紀に向けて女性の連帯と交流を深めるために、全国的なレベルの講師による基調講演とシンポジウムを行います。 前夜には講師を含めたレセプションパーティーを開きます。	11月26日（土）午後 （11月25日レセプション）	九州厚生年金会館
女性21世紀展	国際化、高度情報化、高齢化の進む21世紀における女性の生活を展望する展示及びアトラクションを行います。	11月24日～27日 （木～日）	西日本総合展示場

■日本女性会議'88北九州実行委員会会則

（名称）
第1条　本会は、「日本女性会議'88北九州実行委員会」という。
（事務所）
第2条　本会の事務所は、北九州市小倉北区城内1番1号　北九州市民生局内に置く。
（目的）
第3条　本会は、北九州市と共催で日本女性会議'88北九州（以下「会議」という。）を開催することを目的とする。
（事業）
第4条　本会は、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事業を行う。
(1)会議運営に必要な総合計画に関する事項
(2)その他本会の目的を達成するために必要な事項
（会員）
第5条　本会は、別表に掲げる委員をもって構成する。
（役員）
第6条　本会を運営するために次の役員を置く。
(1)会長　1名
(2)副会長　1名
(3)常任委員　若干名
(4)監事　若干名
2　前項に掲げる者のほか、本会に顧問を置く。

（役員選出）
第7条　会長は、総会において選出する。
2　副会長、常任委員、監事は、会長が総会にはかり選任する。
3　顧問は、会長が委嘱する。
（任期）
第8条　役員の任期は、本会の目的が達成されるまでとする。
（役員の任務）
第9条　会長は、会務を総理し、本会を代表する。
2　副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代理する。
3　常任委員は、総会から委任を受けた事項、その他緊急な事項について審議し決定する。
4　監事は、本会の会計の監査にあたる。
（総会）
第10条　総会は、会長、副会長及び委員をもって構成する。
2　総会は、会議運営の総合計画、予算の審議、決算の承認、その他本会事業の重要な事項を審議する。
3　総会は、会長が必要に応じ召集し、会長が議長となる。
4　総会の議事は、出席者の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
（常任委員会）
第11条　常任委員会は、会長、副会長及び常任委員をもって組織する。
2　常任委員会は、総会から委任を受けた事項及び総会を召集するいとまがない緊急な事項について審議し決定する。
3　常任委員会は、前項の規定により審議し決定したときは、これを次の総会に報告しなければならない。
4　前条第3項及び第4項の規定は、常任委員会について準用する。
（部会）

第12条　本会の円滑なる事業推進を図るため、部会を置くことができる。
2　部会に属すべき委員は、本会の委員のうちから会長が指名する。
3　部会に関して必要な事項は、常任委員会に諮って会長が別に定める。
（会長の専決処分）
第13条　会長は、総会または常任委員会を召集するいとまがない緊急な事項については、これを専決処分することができる。
2　会長は、前項の規定により専決処分したときは、これを次の総会又は常任委員会に報告し、その承認を求めなければならない。
（会計年度）
第14条　本会の会計年度は、63年4月1日に始まり64年3月31日に終わるものとする。
（経費）
第15条　本会の経費は、寄付金その他の収入をもってあてる。
（事務局）
第16条　本会の事務を処理するため、事務局を置く。
2　事務局に関し必要な事項は、会長が別に定める。
（解散）
第17条　本会は、その目的が達成されたときに解散する。
2　解散した場合において、その残余財産の処分については、あらためて協議する。
（補則）
第18条　この会則に定めるもののほか、本会の運営に関し必要な事項は会長が別に定める。
付　則
この会則は昭和63年4月26日から施行する。

日本女性会議'88北九州実行委員会名簿

役職名	氏名	団体名・補職名
会長	石田ヒロノ	北九州女性会議わかまつ代表
副会長	寺坂カタエ	北九州市婦人問題推進会議会長
常任委員	山崎與	北九州市婦人問題推進会議副会長
〃	冨安兆子	北九州市婦人問題推進会議委員
〃	藤岡佐規子	北九州市婦人問題推進会議委員
〃	安藤アサ子	北九州女性会議もじ代表
〃	泰松芳子	北九州女性会議こくら北代表
〃	山口律子	北九州女性会議こくら南代表
〃	岡崎隆子	北九州女性会議わかまつ代表
〃	蔵野ツシ	北九州女性会議やはた東代表
〃	清水照子	北九州女性会議やはた西代表
〃	毛利昭子	北九州女性会議とばた代表
〃	白井昭典	北九州商工会議所事務局長
〃	高島順子	北九州青年会議所代表
〃	田中博臣	北九州市民生局長
〃	篠木幹夫	北九州市民生局福祉部長
〃	近藤英利	北九州市教育委員会社会教育部長
監事	半羽カズエ	北九州市母親クラブ連絡協議会会長
〃	品川洋子	北九州市公立小中学校女性管理職の会会長
〃	藤本新二	北九州YMCA総主事
顧問	安川寛	北九州商工会議所会頭

氏　名	団体名・補職名
仰木道枝	北九州市婦人問題推進会議委員
京　稔子	〃
兒嶋かよ子	〃
鹿田美世子	〃
杉原良子	〃
田中寿磨子	〃
久塚純一	〃
広沢元彦	〃
保田井進	〃
村上佐代子	〃
山内久子	〃
卯野久子	北九州市女性会議各区代表 (北九州市婦人問題推進会議委員を除く)
山田雪子	〃
木部八千代	〃
森山昌子	〃
登本タケミ	〃
中林和子	〃
三上智恵子	〃
安永定子	〃
野村ノブエ	〃
原田恵美子	〃
田川綾子	北九州市婦人懇話会会長 北九州市民生委員婦人部部長
岡田黎子	北九州市母の会連絡協議会会長
緒方ユリ	小倉小中高母の会会長
亀田トキエ	八幡東区小中学校母の会会長

氏　名	団体名・補職名
古賀アツ子	八幡西区小中学校母の会会長
矢永小百合	若松母の会会長
佐伯薫	国際ソロプチミスト北九州会長
芳野由以	ガールスカウト北九州地区委員会会長
松村佐和子	福岡県女子体育連盟北部支部支部長
刀根庸子	北九州市婦人体操クラブ会長
中島蔓枝	北九州市家庭婦人バレーボール連盟会長
垣原洋子	北九州友の会会長
安永敏江	北九州市教育研究会女子部会会長
吉田節子	北九州市幼稚園会会長
川端ハヅエ	北九州市助産婦連絡協議会会長
堀田綾子	福岡県食生活改善推進協議会北九州支部長
中山ハツ子	北九州市消費者学級連絡協議会会長
沢辺ハツ	財団法人北九州市母子寡婦福祉会理事長
井上恭子	北九州市曽根農業共同組合婦人部部長
野口愛子	北九州市農業共同組合婦人部部長
迎田美恵子	日本看護協会福岡支部北九州地区会長
百枝ヤスエ	北九州市看護婦総婦長協議会会長
桑原知子	福岡県栄養士会北九州支部長
吉本后子	北九州市ＰＴＡ協議会母親部会会長

氏　名	団体名・補職名
森下順子	北九州母親大会連絡会実行委員長
大石富美代	新日本婦人の会北九州代表
梶山　眞	北九州市町内自治会総連合会会長
大迫　忍	北九州中小企業経営者協会会長
坂本富子	北九州地区労働組合評議会代表
室元竹美	北九州民間労組協議会代表
柳井イチ子	福岡県労働総同盟北九州地区同盟代表
倉方茂子	福岡県中立労働組合連絡会議代表
武智義一	北九州市社会福祉協議会会長
乗富一雄	北九州職業訓練短期大学校学長
中谷哲郎	北九州大学学長
山田　博	九州歯科大学学長
中村金事	九州電機短期大学学長
高橋さやか	前西南女学院短期大学学長
宇城力子	東筑紫短期大学学長
増田　孝	折尾女子学園経済短期大学学長
手島廣海	九州共立大学学長
平松日吉	九州女子大学学長 九州女子短期大学学長
土屋健三郎	産業医科大学学長 産業医療技術短期大学学長
合力　栄	八幡大学学長
迎　静雄	九州工業大学学長
眞武友一	北九州工業高等専門学校学長
豊川裕子	北九州ミズ21委員会委員長
田中和子	北九州ミズ21委員会副委員長
三村保子	〃

氏　名	団体名・補職名
岡部宏輔	北九州観光協会会長
水野　勲	北九州国際研修協会理事長
久保田誠一	朝日新聞西部本社社会部長
谷村寿重	毎日新聞西部本社報道部長
今野奎介	読売新聞西部本社社会部長
松尾良彦	西日本新聞北九州支社編集長
斉藤清一郎	日本経済新聞北九州支局長
弓削信夫	フクニチ新聞北九州支社長代行
矢野二一	時事通信北九州支局長
布引知弥	共同通信北九州支局長
八田　昂	ＮＨＫ(日本放送協会)北九州放送局放送部長
樺島守利	ＲＫＢ毎日放送北九州支社長
桑田勝三郎	ＫＢＣ九州朝日放送北九州支社長
井上　透	ＴＮＣテレビ西日本北九州支社長
深沢英雄	ＦＢＳ福岡放送北九州支社長
末吉興一	北九州市長
崎谷康文	北九州市教育長
石橋忠雄	北九州市婦人問題推進協議会会長(民生担当助役)
山野岳義	〃 委員(企画局長)
村上一義	〃 委員(総務局長)
森崎禎治	〃 委員(財政局長)
折田勝郎	〃 委員(衛生局長)
京谷　隆	〃 委員(経済局長)

■実行委員会開催経過報告

63・4・12　準備委員会
　実行委員会委員及び委員会付議事項の検討
4・18　委員依頼
4・26　第1回実行委員会総会
　日本女性会議'88北九州設立趣意書の採択について
　実行委員会会則の制定について
　会長の選出について
　委員の選任について
　顧問の委嘱について
　日本女性会議'88北九州開催概要について
　常任委員会への委任事項について
　日本女性会議'88北九州開催記念　堤清二氏講演会の開催について
5・16　常任委員会
　堤清二氏講演会について（参加券販売、プログラム）
　女性が働くための体験交流会について
6・13　常任委員会
　日本女性会議'88北九州分科会、全体会等の骨子について
　中国・四国・九州地区婦人問題推進地域会議の後援について
6・16　堤清二氏講演会開催
6・25　女性が働くための体験交流会開催
6・29　常任委員会
　日本女性会議'88北九州事業に係る部会構成について

7・5　会計監査
　堤清二氏講演会に係る入金状況の確認及び支出予定項目の確認について
7・11　第2回実行委員会総会
　日本女性会議'88北九州事業総合計画について
　日本女性会議'88北九州事業予算について
　部会の設置及び部会委員の指名について
　第1～10部会
7・14　第6部会
7・15　講師交渉開始
7・21　第3、10部会
7・22　第2、9部会
7・23　第4部会
7・26　第5部会
7・27　第7、8部会
8・1　第5部会
8・5　第4、10部会
8・6　「女性21世紀展」出展要請開始
8・17　第2、3部会
8・19　常任委員会
　各部会の進捗状況について
　女性21世紀展について
　テレホンカードの販売及び広告について
　ポスター、チラシ等について
8・24　第10部会
8・26　各都市案内状送付
8・30　第6部会

9・1　第2部会
9・3　第4部会
9・7　第5部会
9・21　タコマ市長へタコマ市女性の派遣を要請
9・27　第9部会
9・29　第10部会
9・30　市政記者への協力依頼
10・1　市政だよりに日本女性会議'88北九州を掲載
10・3　メイドバイウーマン商品出展要請開始
10・4　第3部会
10・11　テレホンカード販売開始
10・14　第9部会
10・19　女性21世紀展出展者会議
10・20　女性21世紀展セミナー会場、イベント出場者依頼開始
10・24　北九州女性会議ワゴンコレクション出展者会議
10・27　第5部会
10・29　第6部会
10・31　第2、4部会
11・1　女性21世紀展記者発表
　第8、9部会
　北九州女性会議ワゴンコレクション出展者会議
11・9　常任委員会
　各部会の進捗状況について
　女性21世紀展アトラクション当日の運営について
　テレホンカード販売とプログラム広告について
11・13　第10部会

11・14　第3部会
11・15　市政だよりに女性21世紀展を掲載
11・16　第3回実行委員会総会
　日本女性会議'88北九州の開催に当たって
　女性21世紀展の開催に当たって
　開会式、閉会式について
11・16　第1部会
　市政テレビTNC放映
11・17　市政テレビNHK放映
11・18　第7部会
　北九州女性会議ワゴンコレクション出展者会議
11・21　第2、10部会
11・24～27　中国・四国・九州地区婦人問題推進地域会議
　日本女性会議'88北九州
11・24　市政テレビKBC放映
　RKBラジオ放送
12・19　常任委員会
　各事業の実績報告について
　実行委員会の収支について
　実行委員会の解散時期について
12・26　第4回実行委員会総会
　各事業の実績報告について
　実行委員会の収支について
　実行委員会の解散時期について
　懇談会

日本女性会議'88北九州 記録集

「女性がひらく未来」

発行日　平成元年３月

発　行　日本女性会議'88北九州実行委員会

北　九　州　市